

を後世に至るまで傳へた人々である。

二十四日

壇ノ浦の合戦(文治元年)

鳥の羽音にまで驚いて京都を逃れたのは壽永二年の七月のことであつたが、一ノ谷の合戦に脆くも破られ、道盛を初め忠度、經正等一門の諸將を並べて討死を遂げ、續く屋島の浦の戦に重ねて破られたが、この時源氏の大將範頼は大兵を擁して豊後にあり、義經又戦捷に勇む幾多の勇將を率ゐて前に控へてゐるので、さすがの平家も西へ進むことも出来ず、さりとて東へ逃れることも出来ず、こゝに一門船に乗じて壇ノ浦の海上に浮ぶことゝなつた。この時平家の總勢僅かに五百餘騎に過ぎなかつた。一方義經は三月といふのに七百餘艘の軍船を率ゐて壇ノ浦目指して攻め寄せたのであるが平家の一門も多分これが最後の戦とならうといふので死力を盡して戦つたが、大厦の覆らんとするやよく一木の支ふる所にあらずといふ諺の通り、先づ田口成長が叛いて源氏に走つたので、さらでだに數次の敗戦に怯え立つてゐる平家の諸將の浮足立つて、戦が始ると共に先づ新中納言知盛討死し、次いで教盛、經盛、資盛、行盛等の諸將が枕を並べて討死した。この時平家の一門中の名だゝる武將平頼盛は宗盛と共に

のある名刺の見物に行つたところ、その寺の案内の小坊主が例の仁王様の前へ立つて誠にやかに「これなる仁王尊は右が運慶、左は淇慶」とやり出したので思はず噴き出したさうであるが、これなどは「頼朝公十七歳の懺悔」と共に確かに笑話の中の秀逸ものであるが、さてこの運慶は一名備中法師ともいつた。その父はやはり佛師であつた。運慶は彫技に秀でてをつたばかりでなく、常に佛像彫刻の上に新機軸を生み出した人で、佛像の眼に玉を刻み込んだのもこの人の創始であるといふことである。運慶の作と傳へられる佛像は全國到處に傳へられてをるが、殊に名作と讃へられるのは曾つて東大寺の佛師の職に補された時刻んだ蓮華王院の二十八部衆及び左右千躰中の二百體は殊に傑作であるといふ。又東大寺の四天王、辰巳の方の多門、祇園の獅子駒子、大津の千躰、能登の千躰、石垣の千躰などは有名な作品である。

建保四年には時の將軍源頼朝の佛持堂に納める釋迦像を刻み、同じく六年には新堂の薬師を、同じく七年には勝長院の五大尊等を刻んだが、これらの作品には鎌倉時代の雄大な刀技の跡をまざまと見ることが出来る。

運慶は初め京都に住んでゐたが、後鎌倉に移り、今でも正宗の邸跡と傳へらるゝ土地の西側に運慶邸跡といふのがあゝる。運慶には數々の優れた門人があつたが、殊にその子の淇慶、康運、康辨、康勝、運賀、運助等は最もよく運慶の刀技

平家物語、源平盛衰記等の物語によつて永く物のあはれを喫つて止まぬ合戦であつた。

二十五日

各學校卒業式

三月二十五日、この日こそは永年師に盡きぬ名残を惜しみつゝ、慕しき學窓に別れを告げつゝ、廣き社會に巣立つて行く日である。或はこのまゝ社會の勞役に就く兒童もあるだらうし、又前途に幾多の希望を懐きつゝ、上級の學校に進み行く兒童もあるであらう。さもあらばあれ、御身等の永年に亘る螢雪の功は今日遂に酬はれたのである。「螢の光窓の雪」見送る教師の目にも露の玉が宿る。さらば愛しき兒童達よ。御身等の上に人生の幸福の光りの輝かんとを。――次に参考として小學校卒業式の調話を掲げることとしよう。

卒業式

門出に際して

卒業兒童諸子よ、諸子は學齡と共に小さい狭い家庭に於ける父母の膝下を離れて此の學校に移つたのであります。學校は名は學校とこそいへ實に大した廣い一種の家庭であります。此の家庭内には親子兄弟のやうに温い空氣が満されてをるのであります。然るに諸子は今卒業と同時に更に廣い大き

一時囚はれの身となつて宗盛は斬られたが、頼盛獨りは頼朝に舊恩があるといふので命を全うし、一門の亡び行くも知らず顔に源氏の扶助を得て一生を安逸の間に送つたといふが、これなどは華やかなるべき源平の繪物語に一片の汚濁を印したものと云ふべきであらう。又この時の戦ひについて永久に一抹の哀れを喫つて止まぬものは御幼少の御身を以つて亂世の犠牲となり給うた安徳天皇の御身の上であらう。この時天皇には清盛の妻二位尼が御前に侍り奉つて御座船にましましたのであるが、戦ひがいよゝゝ迫つて平家の運命も遂に窮つたと見て取つた二位の尼は、畏くも天皇を抱き奉つて寶劍と神璽と共に壇ノ浦の底深く消え給うたのであつた。この時神鏡は御座船に残されてゐたのであるが、帝御入水と見るや源氏の將卒共は狼籍にも御座船に押入り、神鏡を納め奉つた御櫃の蓋に手をかけようとすると御櫃の中から激しき御光が射出して並居る將卒共は思はず慄伏してしまつたさうである。その後神璽は幸ひにも海上に浮び出たけれども、神劍は遂に浮び出なかつたので亂治つて後朝廷に於かせられては屢々人を遣して海底を御探し遊され又七社に奉幣して祈らしめ給うたけれども遂に深し當ることが出来なかつたので、止むなく伊勢神宮の寶劍を以つてこれに代へ給ふことゝなつたさうである。

壇ノ浦の合戦は史上に幾多の興味ある物語を残したのみか



な社會に移るべき機會に接したのであります。社會に出てからの活動は勇しい楽しいこともあるが、社會は小學校のやうな温かな風ばかりが吹いてをるのではありません。冷い烈しい風が諸子を吹き倒さうとするやうなことが時々起るのであります。決して楽しい嬉しいことばかりありません。悲しいこと苦しいことが皆さんを泣かせることが度々起るのであります。それに對する覺悟が必要であります。諸子にはその覺悟の用意が十分あります。幾ら覺悟をしてをつても諸子は幾度でも倒されます。倒されても又起上る度胸の用意はあります。此の度胸が無くては眞に名譽ある成功者となることは出来ぬ。世の成功者と言はれる人は何れも度胸の用意の無い人はありません。七顛び八起きは成功の秘訣であります。一たび顛ぶ、再び起上る又顛ぶ、又起る。七たび顛ぶも尚起上る度胸があればきつと成功するに相違ありません。度胸といふのは體力智力氣力で練上げた腹の底力であります。誰でも最初から此の底力を自然にもつてをる人はありません。幾度も顛ぶ間に鍛錬するのであります。「失敗は成功の基」といふことは此の意味であります。恐るべきは落膽と自暴自棄で之が人生墮落の淵に陥れて浮ぶ潮もなからしめるものであります。

諸子よ、予は諸子を今此の温い春風の家庭から木枯の風吹きさすさむ荒き社會に送らんとするのであります。

諸子の卒業を喜ぶと同時に諸子と別ればならぬ悲しみを促がす今日の式、更に諸子を社會に送つて最後の成功を祈る勇しい此の利那に於て一層念を入れて諸子の腹に藏めておいていたゞきたいことがあります。諸子よ體を大事にし給へ、大事にするといふよりは倍々健全に練り給へ、起き上る時の武器は自己の體より外はありません。これに加ふるに氣力を以てすれば「窮すれば通ず」といふ諺の通り、修養せる知識は智力となつて諸子の前途に光明を與へるのであります。行けよ諸子、行きて體力を鍛へ、氣力を練り智力を増せよ。諸子よ行け、勇しく行け。予も亦別れの涙を拭うて勇しく送ります。(講話資料)

皇軍澎湖島を占領す (明治二十八年) 臺灣の澎湖

つても有力なる根據地であつたのみならず、わが國にとつても南清方面に兵を進むべき唯一の策源地であつたので、清國と兵を交へるや威海衛と澎湖島との占領はわが海軍にとつて唯一の目標であつた。威海衛占領の目的を達したわが海軍はこゝに澎湖島に向つて漸次作戦の移動を開始することとなつた。即ち軍艦高千穂、浪速、秋津島の三艦は重大なる任務を帯びて三月二十三日といふに早くも島外數十哩の地點に達し光づ島の東南端砲臺に向つて強撃を加へ、歩兵大佐比志島義輝は勇敢にも一隊の混成聯隊を率ゐて上陸し見事に敵の首府

瑪公城の占領を遂げた。續いて二十五日には漁翁島の守備に迫り、將に占領せんとする敵兵はわれに不利なるを知つて逸早く火薬庫に火を放つて自爆してわが軍に降つたので各地の守備軍も或は營を焼き壘を捨て、本國に走つた。こゝに澎湖島は全くわが軍の手に歸し、戦局全班に對して好影響を與へることゝなつたのである。

二十六日

白縫姫

(久壽元年 紀一八一四年)

白縫姫と爲朝との物語は草紙などに盛んに綴られて廣く人口に膾炙されたものだが今の人には餘り持て囃さなくなつてしまつた。

このやうな古めかしき物語よりは米國映畫などのスピード的な戀愛物語の方が餘程現代人の口にあふのだらうが、しかしかういふ物語もあるといふことを知つて置いても決して損にはなるまいと思ふから次にそのあらましを物語ることゝする。

それは扱て措いて話は久壽元年の昔に溯る。その頃肥後國は阿蘇郡に阿曾三郎平忠國といふ武士がをつた。この武士の娘に白縫姫といふ一人の娘があつた。年の頃漸く十八ばかりであつたらうか。ある日のことこの白縫姫が侍女の若葉といふのを連れて折からの春色を賞でつゝ庭先を散歩してゐると

ふと庭の彼方に咲いてゐる遅櫻に目がついてこれを侍女の若葉に手折らせようとする、折柄物蔭に身を潜ませてゐた白縫姫が日頃寵愛する一頭の老猿が躍り出て来て若葉に弄れかかつたので若葉は白縫姫共々老猿を懲しめて事なきを得たがその日も暮れてその夜のことであつた。若葉が自分の部屋に退つて穩かな夢路を辿つてゐるとどこから忍び込んだのか件の老猿は、何も知らぬ若葉の上に馬乗りに跨つたと見るや若葉の咽喉首噛み切つて何處となく逃げ去つてしまつた。主の白縫姫の愾きは固よりの事父の忠國の怒りは非常なものであつた。夜が明けて家中一同の者を出して彼の老猿の行方を探させると、豈圖らんや庭先の櫛の木の梢高き處に取籠つて恰も阿曾の一家を嘲弄する如く赤い尻をこちらに振向けて梢の枝を飛び廻つてゐる。この時忠國は「憎ツクき老猿め、たゞ一射」とばかり矢を番へて見たが何しろ梢は數十丈の高さなので残念ながら打取ることが出来ない。そこで領内に廣く囂を出して「もし彼の老猿を打取つたものには白縫姫を與へよう」といつて射手を募つたところ、何處からともなく身の丈七尺にも餘りさうな筋骨逞しい若者が出て来て、「某が打取つてお目にかかせよう」といつて、九人張十八束の強弓を以つて物の見事に彼の老猿を打取つてしまつた。姫は彼の若者を一目見るより忘れ難く思つたのだが、こゝに父の許を得て終生の契を結ぶことゝなつた。この若者こそ誰あらう。父



爲義の怒りを買つて遠く鎮西に追はれた爲朝その人であつた。かうした不思議な縁によつて結ばれた白縫姫と爲朝とはその後幾年か鴛鴦も嘗ならざる契を結んでゐたが、こゝに端なくも保元の亂が起り、父爲義の一大事と聞くや爲朝は取るもの取り敢へず都に馳せ上つた。ところが爲義は武運拙く待賢門の一戦に破れ、爲朝は伊豆の大島へ流されてしまつた。正史によるとこゝで爲朝は伊豆介に討取られたことになつてゐるのだが白縫物語によるとさうではない。やがて爲朝は無事に大島を抜け出して白縫姫を慕つて肥後國へ馳せ下り、ここで暫く時期を窺つてゐたが安元二年八月十五日といふに時こそ満つればかり妻の白縫と郎黨三十餘人を率ゐて肥後國水股ノ浦に船出したところがこの時一天遽かに掻き曇り、盆を覆すやうな大暴風雨となつたので船は今にも浪に吞まれようとする折柄、楚々たる姿を船に現した白縫姫は「夫のためどうか雨風を鎮め給へ」と水神に祈つたかと思ふ利那身を翻して逆捲く怒濤の中へ没してしまつた。やがて水神の怒りも収つて、一路平穩爲朝は目的の港へ着くことが出来たといふのが白縫物語の一片の梗概である。史實の詮索はいらぬこと、物語は荒唐無稽であればある程面白いのである。

二十七日

聯合艦隊ハ去ル二十六日再ビ旅順港ニ向ヒ同二十七日午前三時三十分敵港閉塞ヲ決行セリ、四隻ノ閉塞隊ハ驅逐隊及ビ水雷艇掩護ノ下ニ旅順口港外ニ達シ敵ノ探照燈ノ照射ヲ冒シテ港口ニ直進シ、約二海里ニ達スルノ頃敵ノ発見スル所トナリ、兩岸ノ要塞及ビ哨艇ヨリ猛烈ナル砲火ヲ受シモ是ニ屈セズ四隻相次イデ港口水道ニ闖入シ、第一ノ千代丸ハ黄金山ノ西側ニ於テ海岸ヨリ約半チエーンノ所ニ投錨爆沈シ、第二福井丸ハ千代丸ノ左側ヲ過ギテ少シク前方ニ進ンデ投錨セントスル時、敵驅逐艦ノ魚形水雷命中シ次デ其ノ位置ニ爆發沈没シ、第三ノ彌彦丸ハ福井丸左側ニ出デ投錨爆沈セリ、第四米山丸ハ稍後レテ此處ニ達シ、敵ノ一驅逐艦ノ艦尾ト衝突シナガラ即チ沈没セル千代丸ト福井丸トノ間ヲ通過シ、水道ノ中央ニ投錨セルトキ敵ノ魚形水雷一發ヲ受ケ爆發シ、墜力ノ爲左岸ニ近ク船首ヲ左ニシテ横ニ沈没セリ、敵ノ猛烈ナル砲火ノ下ニ於テ斯ノ如ク閉塞船ガ勇敢沈着其ノ任務ヲ遂行シタルハ、事業トシテ間然スル所ナク、實ニ賞讃スルニ餘リアリ、只遺憾ナルハ彌彦丸ト米山丸トノ間ニ尙空隙ヲ存シ、完全ニ通路ヲ閉塞シ得ザリシ一事ナリトス、此ノ壯烈ナル閉塞ノ再舉ハ、前回之ニ從軍シタリシ勇士ノ切願ヲ容レ、將校及機關士ハ主トシテ前回ノ者ヲシテ是ニ任ゼシメ、下士以下ノミハ新志願者ヲ以テ交替セシメタリ、閉塞隊員中戦死者中佐廣瀬武夫、兵曹杉

軍神廣瀬中佐

(明治三十七年)

軍神廣瀬中佐が旅順港口の花と散つた

のは明治三十七年の今月今日のことである。これより先旅順港口の壯烈なる第一戦が行はれたのは二月二十四日のことであつた。ところが第一回に於ては十分に成績を擧げることが出来なかつたので、こゝに第二回の閉塞戦が決行されることゝなつた。思へば明治三十七年三月二十七日のことである。一度この壯學が發表されるや一死報國の一念に凝つてゐるが勇士達は悉く血書して閉塞隊に編入さるべく數願書を提出した。この時數ある勇士の中より選ばれた人々は先づ千代丸の指揮官有馬中佐、山縣機關士以下十五名福井丸の指揮官廣瀬中佐以下十七名、米山丸の指揮官並木大尉、島田中尉以下十四名、彌彦丸の指揮官森中尉、小川機關士以下十四名、總計六十六名の勇士達であつた。この千代丸以下の運送船は壯烈なる本艦の見送りを受けつゝ白雲以下十隻の驅逐艦、雁その他の水雷艇隊掩護の下に、一死國に報ずべく根據地を抜錨して一路旅順港口目指して突進したのである。當時わが決死隊の勇士達が如何に壯烈なる武勇を現したか、殊に鬼神をあさむく軍神廣瀬中佐の最期こそは最もよくこれを當時の公報の中に彷彿として餘すところなく描き出されてゐるので、今こゝにその一文を抜萃して廣く参考に資することとする。

野孫七、外士卒二名、重傷者中尉島田初藏、輕傷者大尉正木義太、機關士栗田富太郎、外下士卒六名ニシテ、其他ハ悉ク無事我水雷艇隊、驅逐隊ニ救助サレタリ。戦死者中福井丸ノ廣瀬中佐及ビ杉野兵曹長ノ最期ハ頗ル壯烈ニシテ、同船ノ投錨セントスルヤ杉野兵曹長ハ爆發藥ニ點火スル爲メ船艙ニ下リシ時、敵ノ魚形水雷命中シタルヲ以テ遂ニ戦死セルモノノ如シ、廣瀬中佐ハ乗員ヲ舁舟ニ乘リ移ランメ、杉野兵曹長ノ見當ラザル爲メ自ラ三度船内ヲ探索シタルモ船體次第ニ沈降シ、海水上甲板ニ達セルヲ以テ已ムヲ得ズボートニ入り、本船ヲ離レ敵彈ノ下ヲ退却セル際、一巨彈中佐ノ頭部ヲ搏チ、中佐ノ體ハ一片ノ肉塊ヲ艇内ニ殘シテ海中ニ墜落シタルモノナリ、中佐ハ平時ニ於テモ軍人ノ龜鑑タルノミナラス、其ノ最期ニ於テモ前世不滅ノ好範ヲ殘セルモノト云フベシ。(下略)

諸法令公布さる (明治二十三年) この日、時の山財產編及び財産取得編の一部並びに債權擔保編、證據編等の諸法令を發布し、明治二十六年一月一日より實施すべきことを命じた。又この日同時に民事訴訟法及び商法を發布し、明治二十四年一月一日より實施すべきことを命じたが、本令の發布は國會開設の前年に當り、諸般の政治に亘つて大改正をなすべき必要があつたのでこの新法令の發布を見たものであ



らう。尙この年發布された諸法令及國家の重大事件は次のやうである。

同年二月裁判所構成法公布、同金鷄勳章創設、同四月民事訴訟法公布、同五月府縣制郡制公布、同七月には第一回全國衆議員の選舉あり、この年十月には教育勅語下り、同十一月には第一回帝國議會が開會される等實に内外多事の年であつた。

二十八日

士民の佩刀を嚴禁す

(明治九年 皇紀二五三六年)

斬捨御免は永い間の

武士の特權であつたと同時に一面刀劍は武士の魂でもあつた。ところが時勢は急頓直下して明治御一新となり、徳川三百年の夢が醒めて見ると四民平等、士農工商の階級差別は撤廢せられ悉く皇恩の下に愛育さるゝ日本臣民となつたのである。こゝに於て早くも明治三年十二月以後佩刀罷りならぬといふ御布達があり、これより先九月には庶人稱氏御許可の御沙汰があつたのだが、永年腰に兩刀をたばさんだ武士にとつては實に晴天の霹靂同様の御布達であつた。そこで中にはまだ密かに禁を冒す不心得者もあつたので明治九年三月二十八日には重ねて帯刀禁止令を出だし、軍務官及び警察官吏の外は一切佩刀を許さぬこととしたのである。

て町奉行に訴へ出た。これが密事露顯の原因だつたが、この時天野屋利兵衛は妻子共々捕へられて直ちに揚屋入を命ぜられ夜を日に繼いでの責苦にもいつかな實を吐かうともしなかつた。取調の町奉行も利兵衛の義侠に心打られたのかそれとも事實罪がないと断定したのか、ともかくも間もなく許されて歸宅したのであつた。

かくする程に元禄十五年師走十四日の夜は遂に來た。千辛萬苦の四十七士の赤誠はこゝに酬はれて目出度くも仇討の本懐は遂げられた。この快報を遠く大阪の地にゐる天にも昇る如き心地して聞いたのは他ならない天野屋利兵衛その人であつた。清廉潔白の彼は今は何も思ひ残すことはなかつたので直ちに町奉行に自訴して罪の一切を自白したけれども、町奉行も利兵衛の義心に感じて特に罪一等を減じて郷長を免じてその子利右衛門に譲らした上隠居を命じたので、こゝに利兵衛は世を捨て、一介の僧となり名も松永土齋と改めて瑞光院といふ寺に住んで内匠頭及び義士の冥福を祈つてゐたが享保十二年の正月年六十六歳で歿したといふことである。

志波彦神社

宮城縣宮城郡鹽竈町鎮座、志波彦神を祀る。延喜式内の名神大社である。古來

鹽竈の末社として岩切村岩切川の北にあつたが、明治七年十二月鹽竈神社の境内に遷祀し國幣中社に列した。貞觀元年正五位下勳四等を昇せて従四位下に叙し給ひし由國史に見え

二十九日

天野屋利兵衛は

(元禄十五年 皇紀二三六二年)

俠勇天野屋利兵衛が大坂町奉行に召出され嚴

しい詮議に會つても頑として口を開かず、結局「天野屋利兵衛は男でござんす」の一語に固く口を閉ぢて一世の俠勇を天に鳴らしたのは元禄十五年三月二十九日のことであつた。これより先淺野内匠頭が殿中松の廊下に吉良上野介を斬つてより家は斷絶身は切腹の儚ない最期を遂げてしまつたので赤穂五萬三千石家中の面々は思ひ／＼の方面に散つて行つたが、こゝに大石内蔵助を中心とする四十七士は飽くまで結束を固めて主君の仇を報すべくそれ／＼身を瘦して各所に潜んで時の到るを待つてゐた。この頃天野屋利兵衛は大坂北組の郷長だつたが、彼の家は代々赤穂邸に出入りして一方ならぬ恩顧を蒙つてゐたので大石等の密策を密かに聞いた天野屋は日頃の恩顧に酬ゆるは今日であると思ひ何がな一役買つて出たいと思つてゐたところ、恰もよし大石良雄は天野屋の日頃の義侠を見込んで討入に使ふ武器の製造方を依頼して來た。天野屋は二つ返事でこれを引受け、直ちに鍛冶神力なる者に命じて各種の武器を製造させたがこの神力といふ者が極めて小膽者だつたので、泰平の世に使ふまじき武器に不審を感じ

る。降つて延享五年には正一位を授け奉つた。祭日は毎年三月二十九日である。

三十日

大久保彦左衛門卒す

(寛永十六年 皇紀二二九九年)

天下の御

つて任じてゐた大久保彦左衛門は水戸黃門にも増して奇行の多い人であつた。大久保彦左といへば天下の大名は固よりのこと、將軍家に於てさへも一目も二目も措いてゐたのだから彦左の權方も大したものであつた。

大久保彦左衛門忠彦は三州大久保の城主大久保忠員の第八子で幼な名を忠雄といひ、後年に至つて彦左衛門と改めたものである。家康がまだ世に現れない頃からその麾下に從つて何回ともなく死生の間を彷徨したもので、十七歳の時早くも兄の忠世に從つて遠州乾城及び高天神に戰つて偉功を樹て、その後の大役小役に從はなかつたといふことはない。關ヶ原の一戰に家康は天下の霸權を握り、功勞ある諸侯にそれ／＼封を別ち位を定めて論功行賞を定めた時、勿論彦左にも相當の封を與へて厚く賞しようと思つたのだが、この時彦左は固く辭して受けようと思せず「いや彦左は何萬石の大名になりたいとは思ひませぬ。それよりは天下の御意見役になりたうござります」といつたので、さすがの家康も笑ひながら「で



は彦左の思ふやうにせよ」といつて僅かに三千石の祿を賜ひそれからといふものは旗本三千騎の肝煎役を以つて自ら任じ常に二三萬人の食客を養つて我儘御免で通つてゐた。その上家康が歿する時、その子の秀忠に向つて、「このわしが死んだら彦左を父と思つてその命に背かぬやうに」と遺言したので彦左はいよ／＼我儘御免振りを發揮して常に登城しては將軍家初め數ある諸侯に苦言を呈しては士氣の弛むのを戒めてゐた。

二代將軍秀忠が歿して三代將軍家光が將軍家を嗣ぐ頃になると世は次第に天下泰平に馴れて、諸侯の中には漸く奢侈柔弱に陥る者も出初めて來たので、こゝに彦左一代の眞面目を發揮する日が來た。彦左衛門は城中にあつても常に戦場で用ひた長刀を佩いて老中その他の面々に對してこれ見よがしに誇つてゐたが、ある日例の長刀を振廻して諸侯を揶揄つたことが家光の耳に入り、彦左衛門は御前に召されて家光からいはれるには、「どうぢや彦左、刀の鞘をも少し短くしたら」といはれた。さすがの彦左も將軍家のこの一言には閉口したと思ひきや、翌日となると刀の鞘のみ切つて平然として登城したのはよいが所もあらうに大奥の玄關脇に控へて諸侯の登城を今や遅しと待ち構へてゐる。そこへ登城したのは百萬石の加賀侯彦左見るより早く加賀侯の側につくと近付いて行き様「や、加賀様御苦勞々々」といつて腰を捻つたので刀の切先

が玄關の襖に觸れて一尺程切裂いてしまつた。やがて又登城して來たのは、他ならぬ小松黄門である。黄門は彦左の顔を見るや否や、苦虫を噛み潰したやうな顔をして避けて通らうとすると、又もやすり寄つて行つた彦左は「や、小松殿御苦勞に存する」といつて腰を捻つたので今度は小松侯の袴を五寸程も引裂いてしまつた。これを聞いた家光公は「彦左にも困つたものぢや」といつて二尺三寸の長光の刀を與へ以後殿中に於てはこの刀以外指すことはならぬといつて遂に戒められたといふことだが、このやうに大久保彦左衛門といふ人は一見非常に奇を衒ふ人のやうにも見えるが、實は清静潔白の人で曲事と見ればたとひ將軍と雖も憚るところなく直言し、大いに時弊を正すに與つて力ある人であつたが寛永十六年三月晦日、八十歳の高齡を以つて遂に歿した。

三十一日

傑僧文覺と袈裟御前(保延三年 皇)

傑僧文覺上人が出家した

動機は血みどろな袈裟御前との戀愛にあつた。事の起りはかうである。文覺上人が俗名遠藤遠盛といつた頃のある日のこと京の渡邊橋の橋供養の祭りがあつた。此日若武者の遠盛も亦そとろに心を喰かされて橋供養見物の雑沓に交つて歩いてゐる中ふと一人の女性を見染めてしまつた。この女性こそ誰

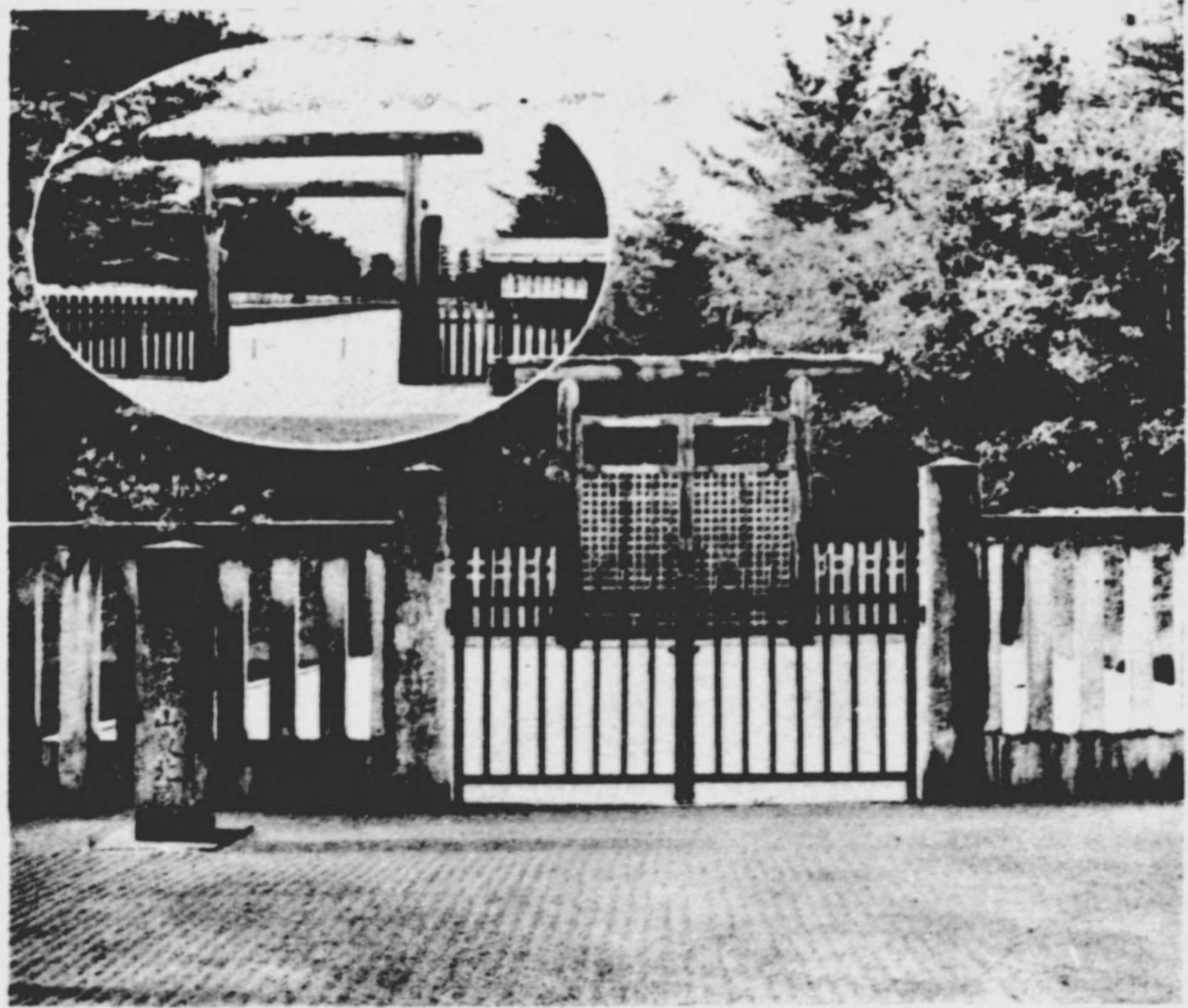
あらう遠盛にとつては幼な馴染の袈裟で、今では渡邊黨の武士左衛門尉渡邊渡の妻である袈裟その人であつた。それからといふもの盛遠の心は人妻故に一層物狂しいものがあつた。日頃のたしなみに似ず、盛遠は寝ても醒めても袈裟のことが忘れなかつた。そこである日のことわが伯母なる衣川に燃ゆる思ひをかくと打明けると伯母なる衣川も道ならぬことゝは思つたけれども餘り切なさうな盛遠の心の中を推量つて、ではいつ／＼の日に忍んで來るがよい、袈裟には自分からよくいひ聞せて一夜の契りを結ばせて上げようと、してはならぬ約束をしてしまつたのだつた。

一方袈裟は衣川から一伍一什の話聞かされて一時は魂切るばかり驚いたが、かうなることもわが身に備つた深い因縁だらうと思ひ「ではかういたしませう。丁度今宵は折もよろしうございますので夫の渡に酒を進めて酔ひ伏させてしまふことにいたしませう。豫ねての目印に渡の髪を洗うて置きますからそれを目印に忍んで來て下さいませうやうに」と答へたけれども勿論この時既に深い決心を胸の奥に秘めてゐたのである。

一方盛遠は伯母の衣川から袈裟の快い返事聞いて天へも昇る心地がして一刻千秋の思ひで日の暮るゝを待つてゐたが漸く約束の時間が來たので轟く胸を押へて渡の邸に忍び入つた。豫ねての手筈の如く渡の部屋と覺しき部屋に忍び込めば

袈裟がいつた通り渡は洗つたばかりの濡髪を枕に押つけて眠つてゐる。そこで盛遠は物をもいはず渡を刺し殺してその首を折柄庭の木の間を洩れ初めた臘月の光りにすかして見ればこは如何に渡の首と思つたのは袈裟その人の首ではなかつたか。さすがの盛遠も一時は魂も消え悶絶するばかりに驚いて返へす双で己れも自害して果てようと思つたけれども、再び思ひ返してその双で髪を切り、遂に佛門に入つて永く袈裟の菩提を弔ふことゝなつた。これこそ保元三年の此の月の出來事である。





陵北東山傍畝 皇天武神

四  
月



# 四月

ウヅキ（卯月）卯の花が咲く月の意味で異名には仲呂、立夏、耕種、小満、余月、乾月、正陽月、巳月、夏首、初夏、孟夏、花残月、得鳥羽月、清和、維夏、純陽等があるが皆陰曆による呼名である。  
 外國の April はラテン語の Apris（開く）から来たもので、ローマに於てはこの月の四月はシイピア諸神の母といはれる競技があり、二十一日にはローマ建設日と見做されて葡萄酒をジュピター神に捧げ、又二十八日以後の四日間花神祭といつて盛大な祭を営むことになつてゐる。

四月の御陵式年祭（一九一頁）

應神天皇、神武天皇、後鳥羽天皇、後村上天皇、桓武天皇、推古天皇、履仲天皇

四月月訓 夫婦相和し（一九三頁）

①弟橘媛夫の身代りとなる  
 ②紫式部遺児を教育す  
 ③静御前義経を慕ふ  
 ④勝頼夫妻最期の日  
 ⑤瓜生岩病夫に仕ふ  
 ⑥乃木静子夫人の貞節

四月の衛生と運動（一九七頁）

扁桃腺炎 アデノイド 四月の運動

## 四月の日訓及び行事と歴史

日	日訓 (明治天皇製)	宮中行事	学校行事	今日の歴史	民間行事	頁
一	親も子も うちつどひてや いくさん ことしは家の花を 見るらむ	應神天皇惠我... 藻伏崗院 即位四十一年崩御	各學校學年始	親鸞上人生る... 神武天皇三十一年始めて 秋津洲の號あり 明治二十五年小學校令實施	禁酒禁煙遵法 週間 (七日まで) 大和神社祭	一九一 一九二 一九三 一九四 一九五



日	二	三	四	五	日
なすたけは すなほなるらむ うつせみの 世にぬけいでむ 力ありとも	民草の しげりそふこそ 葦原の 國のさかゆく もとゐなりけれ	神武天皇祭 神武天皇 山東北陵 天皇即位七十六年 崩御 觀櫻御會	後鳥羽天皇大 原陵 延應元年崩御	いつはりの 世をまだしらぬ 幼子が 心や清き かぎりなるらむ	たらちねの にはの教は せばけれど ひろき世にたつ もとゐとぞなる
英雄 勝海舟 明治元年 慶長十五年幕府武家法度 三條を頒つ 明治四年米國桑港博覽會 開催につき商民に令して 製造品を送らしむ	神武天皇祭	聖德太子十七條憲法を 編み給ふ 推古十二年 元弘元年楠木正成赤坂城 を復し和泉河内を徇ふ	和氣清麿の忠誠 延暦十八年薨去(六十七才) 弘安七年執權北條時宗歿 す 年三十四 延喜九年左大臣藤原時平 薨す	巴 御前 慶安元年幕府切支丹宗の 禁令を發す 文政十年高田屋嘉兵衛歿 す、年五十九	太田蜀山人歿す 文政六年(七十五才) 文化九年松平定信隱居し て樂翁と稱す
松尾神社祭 平野神社祭	植樹祭 梅宮神社祭 氣多神社祭	廣瀬神社祭 龍田神社祭 護王神社祭	美保神社祭	太田道灌江戸城を築く 長祿元年 光仁天皇寶龜三年僧道鏡 寂す 仁明天皇承和七年始めて 清涼殿に於て灌佛會を行 ふ	淺野長政卒す 慶長十六年(六十五才) 明治十四年農商務省を置 く 明治十五年板垣退助岐阜 遊説中遭難す
二〇四 二〇五	二〇六 二〇七 二〇八 二〇九	二〇八 二〇九 二一〇	二一一	二一二 二一三 二一四 二一五	二一六 二一七 二一八 二一九

日	六	七	八	九	日
早苗とる こゑぞ賑ふ たゝかひに いでにし民も 里にかへりて	むらぎもの 心をたねの をしへ草 おひしげらせよ 大和しまねに	しるべする 人をたよりに わけいらば いかなる道か ふみ迷ふべき	踏み分くる ひとなかりせば 末つひに わかすやならむ ちよのふる道	早苗とる こゑぞ賑ふ たゝかひに いでにし民も 里にかへりて	後村上天皇 尾陵 正平二十三年崩御
太田蜀山人歿す 文政六年(七十五才) 文化九年松平定信隱居し て樂翁と稱す	淺野長政卒す 慶長十六年(六十五才) 明治十四年農商務省を置 く 明治十五年板垣退助岐阜 遊説中遭難す	太田道灌江戸城を築く 長祿元年 光仁天皇寶龜三年僧道鏡 寂す 仁明天皇承和七年始めて 清涼殿に於て灌佛會を行 ふ	以仁王令旨を下す 治承四年 孝謙天皇天平勝寶四年天 皇東大寺大佛開眼供養に 行幸あり 天正十二年長久手の戦あ り 明治十九年師範學校、小 學、中學校令を公布す	早苗とる こゑぞ賑ふ たゝかひに いでにし民も 里にかへりて	後村上天皇 尾陵 正平二十三年崩御
美保神社祭	大原野神社祭	灌佛會	稻荷神社祭 大神神社祭	早苗とる こゑぞ賑ふ たゝかひに いでにし民も 里にかへりて	後村上天皇 尾陵 正平二十三年崩御
二一一	二一二 二一三 二一四 二一五	二一六 二一七 二一八 二一九	二二〇 二二一 二二二 二二三	二二四 二二五 二二六 二二七	二二八 二二九 二三〇 二三一







日 十 二	日 九 十	日 八 十	日 七 十
<p>すゝみゆく 世におくれなば かひあらじ 文の林は わけつくすとも</p>	<p>國のため 身のほど／＼に 盡さなむ 心のすゝむ 道を學びて</p>	<p>わけのぼる 道のしをりと なる松は 位なくとも うやまはれけり</p>	<p>いさをある 人を教の おやにして おほしたてなむ やまとなでしこ</p>
		<p>推古天皇 山田陵 即位三十六年崩御</p>	
<p>徳川家光薨す 慶安四年(四十八才) 名工左甚五郎歿す 寛永十一年(四十二才) 延長元年故右大臣菅原道真の本官を復し、正二位を贈位さる 弘治元年織田信長清州城に移る</p>	<p>賤ヶ岳七本鎗 天正十一年 元祿十四年播磨赤穂城を開城す 明治二十九年第二師團長乃木希典東京に凱旋す</p>	<p>古今和歌集成る 延喜五年 明治三十四年札幌に大火有り二百餘戸焼く</p>	<p>徳川家康薨す 元和二年(七十五才) 日清講和條約成る 明治二十八年 應神天皇六十九年神功皇后崩御 天平十二年光明皇后施樂院を設立さる</p>
		<p>吉田神社祭 小國神社祭 須佐神社祭</p>	<p>東照宮祭</p>
		<p>二二 二二 二二 二二 二二</p>	<p>二二 二二 二二 二二 二二</p>

日 四 十 二	日 三 十 二	日 二 十 二	日 一 十 二
<p>おくりにし 若木のまつ しげりあひて 老の千歳の 友とならなむ</p>	<p>よきたねを えらび／＼て 教草 うゑひろめなむ のにもやまにも</p>	<p>なすことの なくて終らば 世に長き よはひをたもつ かひやなからむ</p>	<p>おもふこと 思ひ定めて 後こそ 人にはかくと いふべかりけれ</p>
<p>柴田勝家亡ぶ 天正十一年(五十四才) 元和六年三浦安針(ウイリアム・アダムス)歿す。 年五十七才 天平十一年四月申駄馬一匹の荷付量を改め百五十斤限とす</p>	<p>寺田屋騒動 文久二年 承暦四年白河天皇關白藤原師實の堀河第に行幸有り 天正十四年羽柴秀吉聚落第の造營を始む</p>	<p>紀之國屋文左衛門歿す 享保十九年(六十六才) 白雉三年四月戸籍を造り五十戸を里とし五戸を保となす 明治六年四月中東京上野公園を設置す</p>	<p>天一坊天下を騒す 享保十四年(二十四才) 天文十八年繪師野正信歿す、年九十七才 天正十一年賤岳の戦</p>
<p>籠神社祭 中山神社祭</p>	<p>射水神社祭 度津神社祭</p>	<p>伊弉諾神社祭 多賀神社祭 靈山神社祭 大山西神社祭 眞清田神社祭</p>	<p>宇倍神社祭</p>
<p>二二 二二 二二</p>	<p>二二 二二 二二</p>	<p>二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二</p>	<p>二二 二二</p>



日八十二	日七十二	日六十二	日五十二
老人を つどへてけふも きゝてけり 弓矢とりにし 昔がたりを	をりくくに おもひぞいづる 國のため 心くだきし 人のむかしを	國のため ながかれと思ふ 老人に しなぬ薬を さづけてしがな	世の爲に いさをたてし 老人は 千年の山も こえよとぞ思ふ
足利尊氏の一生 正平十三年(五十四才) 吉田寅次郎捕へらる 樞密院を設置す 明治二十一年	毛利輝元卒す 寛永二年(七十二才) 明治二十四年露國皇太子 ニコラス親王來朝す	高杉晋作歿す 慶應三年(二十九才) 貞應元年幕府承久役後の 守護地頭の所務を定む 延元二年僧天目寂す、年 八十一才	市町村制發布さる 明治二十一年 明治元年近藤勇江戸下板 橋に斬らる、年三十五才
孔子祭	尾山神社祭	結核豫防週間 五月二日まで	
二四一	二四二	二四三	二四四

日十三	日九十二		
わが爲に 心つくして 老人が をしへしことは 今もわすれず	年高き 老木の松は いにしへの あととふ道の しをりなりけり	履中天皇百舌 鳥原南陵 即位六年崩御	天長節
		靖國神社例祭	天長節
義經衣川の館に滅ぶ 文治五年 日露戦役凱旋大觀兵式 明治三十九年	笠置御潜行 元弘元年 明治八年四月中、郵便貯 金規則を定む	靖國神社例祭	小御門神社祭 上杉神社祭
二四八	二四七	二四六	二四五



## 四月の御陵式年祭

### 一 日 (皇紀九三〇年即位)

應神天皇(十五代) 惠我藻伏丘陵(大阪府南河内郡古市町)即位四十一年二月十五日陽曆にて四月一日に豊明宮(大和高市郡白樺村大輕)にて崩す、壽百十一歳。天皇は人民を愛撫し、文化の發達を圖られた。百濟の弓月君が百二十餘縣の民を率ゐて歸化し、阿知使臣等が十七縣の人民を率ゐて歸化したのも天皇の御寛仁の大御心よりであつた。百濟王はその子阿直岐をして來朝せしめ論語、易經、山海經を上つたのも天皇の御代である。又天皇は王仁を徵し給ふや王仁は鍛工、縫工、釀酒工等を率ゐて來朝、論語十卷、千字文一卷を獻するや天皇は諸皇子に學ばしめた。陵は三段に築いた前方後圓の大陵で、その前後の徑は二百二十五間、後圓の徑百三十三間、前方の幅は百六十間で高さ前方四十二尺、後圓六十四尺、周圍の濠は二重で中堤は埴輪多く露出して松の大木鬱蒼としてゐる。外濠は今田畑のまゝで残り數多の陪塚がある。陵の後方即ち南方には府社譽田神社がある。舊幕時代には陵の後圓の頂に六角の寶殿を建て、廻

りには六角の塗塀を作り八幡宮の奥の院として道の左右に櫻を植ゑ、石階石燈籠を並べ濠には橋を架け下に宣命場、中門があり、門から中は雜人の昇降を禁じてゐたが毎年八幡宮の大祭の時は八幡の神輿を陵の後まで引き入れたものである。

### 三 日 (皇紀一年即位)

神武天皇(一代) 畝傍山東北陵(奈良縣高市郡白樺村)即位七十六年三月十一日陽曆にて四月三日に橿原宮に崩御、壽百三十七歳。翌年(皇紀七十七年)九月畝傍山東北陵に葬り奉つた。陵は小圓墳で周圍には東西七十三間、南北六十四間の土壘を廻らし、その外に又濠を廻らしてある。近年大いに修築擴張されて南畝傍山の北麓を取入れ規模いやが上にも擴張され、御陵の森殿はいよゝ／＼加つた。御拜所は土壘の内にあり、御拜門は神明門でその上に白砂を敷いた廣場がある。外廓としては東西百二十五間、南北九十五間の石の玉垣がある。御外門の前南方には禁番所や勅使館がある。(二月十一日の條參照)



四 日 (皇紀一八四五年即位)

後鳥羽天皇(八十二代)大原陵(京都府愛宕郡大原村)延應元年二月二十二日陽曆四月四日に隱岐國刈田郷で崩御、御歳六十歳。同二十五日火葬に附し奉り、能茂といふ北面の法師が御骨を頸に掛け奉り、都に上つて大原の西林寺の御堂に納め奉つた。仁治二年二月八日(二年の後)大原の法華堂の供養、同日御骨を西林寺の御堂から法華堂に移し奉つた。今順徳天皇の陵と御同域にある。

承久の亂に北條義時、天皇を隱岐に遷し奉つた。天皇敏達多能で特に和歌をよくし給ふ。其の隱岐に在るや次の如く御詠歌し給うた。

われこそは新島守よ隱岐の海の

あらし波風心して吹け

同じ世にまた住の江の月やみて

今日こそよそに隱岐の島守

六 日 (皇紀一九九九年即位)

後村上天皇(九十七代)檜尾陵(大阪府南河内郡川上村)正平二十三年三月十一日陽曆四月六日に河内住吉の御所で崩御、御歳四十一歳。四月二十日河内錦部郡觀心寺の後山である檜尾の御陵に葬り奉つた。陵は極めて小さい御塚で古

くは石柵をも廻らしてあつたが外に新しい石柵をも廻らしてある。御所在地が深山の傍があつて崇嚴の氣が身に迫るのを感じる。御醍醐天皇の第八皇子にましまし建武二年足利尊氏が叛するや、或は兵を率ゐて難に赴き、時には陸奥靈山の城を保ち、義詮を鎌倉に討伐し、又奈良に敗れ吉野の行宮に入り即位し給ふまでの御苦心は非常なものであつた。

十三 日 (皇紀一四四一年即位)

桓武天皇(五十代)柏原陵(奈良縣高市郡堀内村)延暦二十五年三月十七日陽曆四月十三日に正寝に崩御、御歳七十歳。天皇御位につくや、奈良の宮城は規模が小さいので、國運の發展に副はない事をお察になり、和氣清麿の建議を容れ先づ長岡に遷り、尋で葛野の地に新京を經營し給ひ、十年を経て始めて完成され、延暦十三年十月天皇は群臣を率ゐて此の地に遷らせ給ひしより京都は一千有餘年の都であつた。

天皇崩じ給ふや天下の諸國に命じて皆素服して哀を舉げしめ給うた。文永十一年の諸陵寮の實験言上書によると陵は登り十餘丈、壇の廻り八十餘丈であつたが、豊臣秀吉が伏見築城の際毀つたため今は丘形が失はれてゐる。

十八 日 (皇紀二二五二年即位)

推古天皇(三十三代)磯長山田陵(大阪府南河内郡山田村)即位三十六年三月七日陽曆四月十八日に崩す。御歳七十五歳。南庭に殯し九月初めて天皇の哀禮を起し、遺詔して「陵を興して厚く葬ることなく、竹田の皇子(皇兄にして皇夫たる敏達天皇の皇子)の墓に葬らむよつて竹田皇子の墓に合葬し奉つた。古事記には、陵は初め大野丘上にあり後科長大陵に遷し奉るとある。この頃合葬の風が漸く盛んとなつた。陵は四角に三段を築いた南面の形式で、陵上を葺き覆うた砂礫は今も尙まばらに残つてゐる。この方形墳は甚だ珍しいもので、類例極めて乏しいが瓢形墳、圓墳と共にわが國古墳形式の三様式の一をなしてゐる。陵の前幅三十三間餘、高さ四十三尺ある。

天皇の十五年七月小野妹子隋に赴く。翌年九月妹子再び大使となり、學生高向玄理、南淵請安等が隨行した。

三十 日 (皇紀一〇六〇年即位)

履仲天皇(十七代)百舌鳥耳原南陵(大阪府泉北郡神石村)即位六年三月十五日陽曆四月三十日に稚櫻宮(大和磯城郡安部村)に崩御、壽七十七歳。十月百舌鳥耳原の南陵に葬り奉る。陵は前方後圓で圓壇に築き上げた大なる山作りで前後の徑は二百二間、後圓の徑は百九間、前方の幅百十八間、高さ後圓部で八十六尺、前方七十七尺、周圍九百七十四間、四圍に大なる濠があり、東側に數個の陪塚がある。帝陵中仁徳、應神兩帝陵についての帝陵で第三位の大きさである。

四月々訓 夫婦相和し

弟橘媛夫の身代りとなる

夫婦は一體である。二體合一しての一體不二である事は、伊邪那岐、伊邪那美命の國土經營の當初より、文化の進んだ現在でも又將來に於ても變ることのない國徳である。

第十二代景行天皇の御代日本武尊が東國平定の時、今の浦賀海峡を通過し大風浪になやまされ給うた。その時弟橘媛は難を一身に引受けられ、荒狂ふ波の上に喜んで御身を投じ、夫君の身代りとなり、死を恐れなかつた。誠に夫婦愛の最高靈の合一と云はねばならぬ。この御事を古事記に次の様に記



してある。  
「其より入り幸でまして走水海（浦賀海峡）を渡ります時に其の渡の神浪を興て、船廻ひて得進み渡りませず、雨に其の後、名は弟橘比賣の命白したまはく『妾御子（尊）に易りて海中に入りなむ、御子は所遺之政遂げて、覆奏したまふべし』とまをして海に入りましき。是於其の暴浪自ら伏き御船得進みき。』

### 紫式部遺児を教育す

婉曲流麗、古今の名文として名高い源氏物語の著者紫式部は、博識のほまれ高い女性であつたが、又世にまれなる貞淑な女性であつた。式部は越前守藤原時房の女で、左衛門佐藤原宣孝に嫁いたが、不幸にも夫に先だたれた。美貌で才媛のほまれ高き式部のことゝ再縁を進める者多く、かの、

この世をば我世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

の歌を讀んだ、權政ならびなき道長ですら、式部の美貌に魅せられて、渡殿の戸を敲いて幾度か挑んだといふことである。然し式部は是等の誘惑に少しも動かされず、常に身を謹しみ、ひたすら遺児の教養につとめた。大貳三位、辨の局の文學的才能豊かな二人の姉妹は式部の娘で、式部の深き母性愛によつて成長した女性である。

清少納言が鋭敏な才能を持てども驕慢で操行を謹みせず、和泉式部が戀より戀に移り歩いた如く、節操の乏しい當時の女性の中にあつて、常に行を謹んで放恣な生活をせず、深い才識を内部に湛へて、あへて外に表現しようとしなかつた式部は優しくも強い女性であつた。

### 靜御前義経を慕ふ

靜御前が鶴ヶ岡八幡の剝廊で頼朝夫妻を初め、關東の大名小名きら星の如く居並ぶ前をものはからず、  
「しづやしづ、しづのをだまきくりかへし」  
と歌つてのけたことは一世一代の美談として有名である。今左に東鏡によつて其の有様を記してみよう。

義経、京都を去るに及び、從ひて吉野に匿れしに、山僧將に之を攻めんとしければ、義経、靜に金寶を賜ひて別れ、雜色をして護送せしめたるに、雜色等、金寶を奪ひ、靜を棄て、去りぬ。山僧、捕へて京師に送りしに、北條時政、具に狀して之を報じければ、頼朝、鎌倉に召致して、義経が所在を、審問するに、靜、固く知らざることを陳す、然れども、猶其の身めることあるを以つて、之を留めたり。頼朝が妻政子、靜が歌舞を善くするを聞き、召して之を觀んと欲すれども、疾と稱して至らず、哀訴して曰く、妾は、本、賤流なれば自ら惜しむに足らず、然れども豫州の

にして、我は即ち其の侍妾なり、卿は已に其の家人たれば豫州若し居まされば、卿等豈我を見ることを得んやと、景茂媿屈せり……と。

### 勝頼夫妻 最期の日

武田勝頼は武田信玄の嗣子である、天性勇猛で必ず天下に覇業をなし、父の遺志を遂げようと思つてゐた。然し一族の精銳を集めた長篠の戦に利あらず、天正十年家康、北條氏政等の攻撃に逢つて、一族の離散如何ともしがたく、天目山に遁れんとし、遂に山麓田野に於て敵と奮戦し遂に自刃した。勝頼夫人は千軍萬馬の間に日夜狂奔する夫を思ひ、八幡大菩薩に願文を奉つて、夫の武運を祈り、又勝頼が最後にのぞみ、「我身は如何になりても御身を故郷に送りまらせんとは思ひたり」と云へば「こは、如何なる仰せぞや、たとへば人ゆるし、輿車にてふるさと相模に送るとも、歸らんと思ひもよらず、一つはちすのうてな縁と思ひ染めたる、紫の雪の上まで變らじと、契を結ぶたまの緒のあらんかぎり、もとより絶えての後も別れめ」と答へて十九歳を最後に勇しくも自刃してはてた。夫人は誠に貞烈の女性と云ふべきである。（三月十一日参照）

### 瓜生岩病夫に仕ふ

後房に充てられたれば、今豈恥を彌人に示さんやと。政子頻りに請ひて止まず、既にして頼朝、政子と鶴ヶ岡剝廊に詣で、靜を召して之を命ぜしに、靜固辭して曰く、妾今日離別の悲しみに堪へず、寧ろ歌舞に意あらんやと、頼朝之を強ること再三、乃ち舞ふ、工藤祐経鼓を過ち、高山重忠、銅拍子を撃つ、靜先づ和歌を唱へて曰く、吉野山みねの白雪ふみわけて、入りにし人の跡ぞこひしきと、次に離別の曲を歌ひ、又唱へて曰く、しづやしづ賤のをだまき繰り返し、昔を今になすよしもがたと、聲態絶妙なりければ、衆皆感愴せり、頼朝憐れずして曰く、咄哉、此の子女、神前に歌舞を奏すれば、應に關東の萬歳を頌すべきに、反て叛人を慕ひ、離別の曲を歌ふとは何ぞやと、政子曰く、君昔流人たりし日、密に終身の約を結びしに、妾が父時勢を憚り、爲に之を防禁したれども、妾暗夜、雨を冒して君の所に奔れり、君義旗を石橋に擧げらるゝに及び、妾獨り伊豆に留りて、其の存亡を知らざりしに、日夜思念したりき、今彼、若し豫州の恩を忘れて戀慕せずば固より貞女の操にあらず、情中に動きて外にあらはれたり、公宜しく矜恕せらるべしと、頼朝乃ち衣を簾外に推して、以て纏頭となせり、工藤祐経、梶原景茂等、靜が僞舎に就きて食燕しけるに靜が母磯禪師も亦酒を佐けるが、景茂醉に乗じ微辭を以て靜を挑みしが靜涕を垂れて曰く、豫州は鎌倉殿の連枝



岩は福島の人で代々油商を営んでゐたが、不幸の中に成人し、若松の呉服店に嫁入し、よく家業にはげみ、夫を助けたので次第に商賣も繁昌したが、どこまでも不幸な岩は結婚十年の後夫は病の床に伏してしまつた。それから七年と云ふ長い年月を誠心誠意夫を看護し、子供の養育から家事のこと、さては一家の生計に至るまで一手に引き受け日夜よく勉めた。だが岩が三十四歳の時岩の心づくしの甲斐もなく病夫はつひに妻子を置いて死んでしまつた。

それからの岩は養める人があつても他家に嫁ぐの念更になく、一心に遺児の養育につくした。その頃戊辰の役があつて若松は悲惨な戦場となり、家なく飢と寒さに苦しむ孤兒が澤山出来た。岩は女の細腕による家計であつたにもかゝらずそれ等の孤兒を我が家に連れ歸り、自ら資財を投じ又は有志と相談して、孤兒を養育し、貧しい老人を慰めてやつた。それから藩主の許可を得て幼學所と云ふ學校を建て九歳から十三歳までの兒童を六十名も集めて教育した。中には父兄を失つた全くの孤兒も居たがそれ等には學用品を與へて養育教授をした。その他養育院慈善事業に終身關係し、遂に明治大帝より藍綬褒章を賜はり、明治三十年六十九歳で病歿した。大正十三年に従五位を贈られた。今淺草觀音堂の右側にある慈愛に満ちたおばあさんの銅像は貧人、孤兒の母、貞婦岩の像である。

### 乃木靜子夫人の貞節

乃木靜子夫人は明治の楠公といはれた、忠烈無比の乃木將軍夫人である。大將が清廉質素な人であつたことは有名な話であるが夫人も亦夫の心を心とし清廉質素であつて數々の逸話を残してゐる。

明治三十七八年戦役のことである。夫人は大將と共に伊勢神宮に参拜しようと思ひ、大將に命ぜられた名古屋某旅館に禮服を持つて大將を待ち合せた。其の時夫人の服装があまり質素であつたので、旅館ではうす暗い部屋へ夫人を案内した。まもなく大將が來られて先程の婦人が大將夫人であつたことを知り、宿の者が恐縮したといふことである。又常に綿服を着て少しも氣にせず、自分から臺所に出て炊事に當つて居られた爲女中にまぢがへられた話も有名な逸話である。

忠烈無比な大將が二兒を旅順の激戦になくなしても、死所を得たりと喜べば、夫人も亦愛兒が御國の爲に名譽の戦死を遂げたことを喜び、

大將が、  
うつし世を神さりました大君の

みあとしたひて我はゆくなり

の辭世を残して明治大帝の御あとに従ひ奉り、大帝の御登

遐に殉すれば、夫人も亦、

出でましてかへります日になしときき

今日の御幸に逢ふぞかなしき

と辭世の歌を残し、大將に向つて端座し、少しも取り紊さず

## 四月の衛生と運動

今月は扁桃腺炎とアデノイドについて述べたいと思ふ。扁桃腺もアデノイドも四月に限つて多いといふわけではなくむしろ咽喉の病氣なのだから冬季に多いわけなのだが慢性になると年中胃され易いからそれだけ注意せねばならぬ病氣である。殊に最近コンクリート建築の校舎が多くなり、遠距離から電車等を利用して通學する兒童が多くなつた結果、自然この病氣も殖えて來たので、小學校に於ても常に適當の注意と處置とを講ずるやうにしていただきたいと思ふ。

### 扁桃腺炎

口腔をあけて咽喉を覗いて見るとその突出した肉塊が見えるがこれが口蓋扁桃腺、つまり普通單に扁桃腺と稱されてゐるものである。しかし扁桃腺は素人の目で見られるものほこれだけであるが、この他に鼻腔の奥にも咽頭の後壁にもあるもので、即ち呼吸器の入口はこの扁桃腺によ

大將の最期を見届け心靜かに懐劍を以つて自刃に伏した。かく常に夫の心を心としよく夫に事へ、二兒を教育し、家政を整へたのは誠に婦人の鑑千古の美談といふべきである。

つて取圍れてゐるのである。扁桃腺には非常に多くの白血球がつて、人體に有害な作用を與へる微菌が襲來するとこの白血球が活動してその微菌を食べてしまふのである。この際もし病原菌の攻撃力が強く扁桃腺がそれに耐へられなかつた場合は病氣を惹起するのである。扁桃腺が病的に肥大してゐるやうな場合は細菌に對する抵抗力がなくなり、殊に扁桃腺肥大の子供は鼻で呼吸することが多いため冷たい空氣は遠慮なく扁桃腺にあたり、肥大した扁桃腺は抵抗力が減るところへ病原菌が附着するので忽ち扁桃腺炎を起し高熱を出すのである。扁桃腺炎の第一の原因はこの病的扁桃腺肥大から來るのであつて、又この扁桃腺肥大は滲出性體質や神經質の子供に多いのであるが、これはむしろ扁桃腺肥大のために神經質になつたといつてもよい。 **症状** 扁桃腺炎を起すと突然三十九度以上の高熱を發する。そして頭痛、頸痛を訴へ、



飲食物の嚥下が困難となる。發熱と同時に嘔吐、下痢等の消化不良症を伴ふことがあるが、その他の合併症としては顎下腺が腫れて来る場合が多いが、早く適當な治療を加へ十分安静にしてゐないと遂に化膿して切開しなければならぬやうなことになるので注意せねばならない。次に多いのは中耳炎で、もしこの疑ひのある場合は速に醫師の治療を受ねばならない。又往々にして腎臓炎を併發することがある。この他扁桃腺を胃して来るものにデフテリ、猩紅熱、流行性腦脊髄膜炎、ハイネ・メチン氏病、小兒麻痺等の恐しい傳染病があるが、これらは扁桃腺を侵入門戸として襲ふものである。

**手當法** 絶對安静を守り、熱の高い時には氷枕をさせ、食物は非刺激性のもの（たとへば牛乳、重湯、葛湯等）を與へ、局所療法としては頸部を冷濕布又は氷嚢で冷すこと。常に含嗽させることが必要だが含嗽の出來ぬ幼兒は吸入をかけさせること。咽喉塗布液としてはルゴール液、トリパフラビン、硝酸銀、プロタルゴール等いろ／＼あるが何れも醫師の指圖を待つてそれに従つてなすべきである。**豫防法** 先づ扁桃腺を丈夫にすることが必要であるがそれには努めて鼻腔より呼吸する習慣をつけ、戸外から歸つて來た時には必ず硼酸水か食鹽水で含嗽させること。通學なり、外出なりの時にはマスクをかけさせるやうにすると餘程違ふものである。病的扁桃腺肥大をもつてゐる子供は成るべく早く扁桃腺を摘出する方

がよい。手術後は神経質や記憶の悪かつたのがよくなり、學校の成績にも好影響を及ぼすことが間々あるものである。

**アデノイド**

アデノイドとは扁桃腺の肥大してゐるものゝことをいふのであるが、アデノイド

は一種の遺傳病だともいはれてゐる。殊に學齡兒童と密接な關係があつて、統計によつて見ると十歳が最も多く十六七歳になれば急に減少するのだが、小學校の兒童の三分の一はアデノイド（輕症も含めて）をもつてゐると見てよい程である。**症狀** アデノイドに罹つてゐる子供は鼻から呼吸することが困難のため、口を開いて呼吸し、睡眠中も口をあけて寝るので鼻をかき、中にはうなされて夜中に突然飛び起きたり小便をしたりすることもある。又時々鼻血を出したり耳が遠くなつたりするが、時とすると聲に近くなることもある。従つて中耳炎に罹り易く、その他鼻、咽喉、氣管枝等の病氣に罹り易く、發育も著しく阻害される。そして注意力を一ヶ所に集中することが出來ず、非常に物事に飽つてく根氣がなくなつて學校の成績が悪くなり、殊に數學が著しく出來なくなる。この病氣が進むとアデノイド顔貌といつて一種特別の顔付となり、いつも口を半分開けてをり、鼻唇溝が無くなり、下顎が垂下つて歯並が不正、出歯となり、縮りのない間の抜けた顔となる。**手當法** これは専門醫による手術の他はない。早期に發見してなるべく早く手術しないと取

へしつかぬことゝなるから小學校に於ける體格検査の時等に發見したら嚴重に家庭に向つて警告を發し、一日も早く兒童を病魔から救ひ出してやるべきである。

**四月の運動**

四月はなんといつても先づお花見に指屈するだらう。お花見が果して運動の部に數へられるかどうか知らないけれど、とにかく春の行樂としては随一なものだから、これを巧みに利用して行へば又よい運動の一つには相違ない。但お花見につきものは酒はぜひ止めたいものである。花の下で狂歌亂舞することなど以つての外で、折角の遊覽地が臺なしにされるばかりでなく、婦人や子供などは落着いて花さへ楽しむことが出來ない。又四月五日頃は大潮に當るから家族一同で潮干狩をするのもよいだらう。四月といふ月は祭日が重なる月で、三日の神武天皇祭、二十九日の天長節、三十日の靖國神社祭、これはお休

日ではないが八日の花まつりなどがあるから、都會地の人達はこの祭日を利用して大いに郊外の春色を味ふのもよいだらう。

少し艶つばいところでは京都祇園の都踊、それから大阪の葦原踊、浪花踊、それから東京の都踊の始るのもこの月の中旬からである。と同時に野球ファンに取つてはお待ちかねの六大學野球リーグ戦がやはりこの月中旬から開始され、神宮球場で何萬の人々の熱血を沸かせることは今更こゝにいふまでもない。

**櫻の名所** (東京附近) 三里塚御料牧場(中旬) 新小金井

- (上旬) 武笠城趾(上旬) 江戸川堤(中旬) 幸行堤(中旬) 荒川堤(下旬) 熊ヶ谷堤(上旬より下旬) 高尾山參道(上旬) 小金井(上旬) 長瀬(中旬) 柏尾川堤(上旬から中旬) 稻田堤(上旬から中旬) 箱根小涌谷(下旬)

**四月の行事と歴史**

**各學校學年始め**

各小學校では本日一齊に始業式を舉行する。殊に本年始めて學齡

に達した新入學生は新しい洋服に新しいランドセルを背負つてお母さんやお姉さんに伴はれて嬉々として校門を漕るのである。廣い社會に向つてその第一歩を踏み出した幼き者達に對して前途の幸福を祈らずにはゐられない。次を參考として



始業式の挨拶を掲げよう。

### 始業式（心の家の建築）

今から一年間、皆さんは又、一人々々すき／＼の心の家を建てることになりました。一年から二年に進級した人は、すばらしい二年の家を、二年から三年に及第した人は立派な三年の家を、それから尋常科から高等科に入學した人たちは眞に高等科らしい丈夫な家を建築することになりました。

皆さんは一體どんな家を立てようと思ひますか、小さい者はもう先生から聞いたと思ひますが、三匹の豚の子供が話し合つて、山の下の廣つばに家を建てる事にしました。黒吉は草の家、茶め助は土の家、そして一番末の白つ子はレンガの家……ところがどうでした。遊び半分にこしらへた草の家はいち悪の狼にふう／＼吹き倒されて、黒吉は忽ち狼の餌食になつてしまひました。良い加減にぬり上げた土の家も、草の家と同じ悪魔の狼に吹き倒されて、茶め助もばくと一口に喰はれて了ひました。ところが幾日か幾日か自分の汗と膏で築き上げた白つ子のレンガの家はどうでせう。恐しい狼の牙も、火のやうな眼も、このがつしりした家をどうすることも出来ず、かへつて白つ子の智慧の深さから、にえくりかへつた蹄の中に落ちて死んでしまつたではありませんか。豚の建てた家さへこの通りです。まして心の家を建てるに

は餘程氣をひきしめて力一杯、精一杯自分の力の有る限りをつくして取りかゝらなければ、自分の満足なそして人々のほめそやしてくれる立派な建築は出来ません。心の家……その家を建てる相談相手は勿論先生です、お友達です。又お父さんや、お母さん、それから皆さんをとりまいてゐるすべての人達です。けれどその人等が皆さんにくらよゝい家を建てさせてやりたいと、心から案じて下さつても、大事な皆さんが先づしつかりして居なければ、ろくな家は建ちません。すこしの風でぐら／＼ひつくりかへつたり少しの雨でだら／＼雨もりのする様な家を建て、すましこんでゐる子供は、日の丸の旗を高くかゝげてゐる日本の子供のこの上ない恥辱です。

しつかりやりませう。

一心になりませう。

毎日々々皆さんが、なまけることなく、遊ぶことなく、しつかり仕事にとりかゝり、一心に課業にはげむ時、立派な心の建築は次ぎ／＼にと打ち建てられてゆきます。其の日を最もよく生きる……それがとりもなほさず、よき建築となりよき結果をもたらしてくれませう。うるはしい山も、土くれの一本／＼の蓄積です。千丈の堤も蟻の小穴からくづれます。

なまけては駄目……それだけ穴があきますから。休んでも駄目……それだけ仕事がおくれますから。なまけず、休まず

皆さんが一せいに日本の勇ましい子供として心の建築にとりかゝりませう。

バラツク、平家、二階建、鐵筋、同じ建築でも、心にきめた家の種類によつて覺悟がちがふ。私等はどうな風にもまゐらず、雨にもまけず、地震にもゆるがない立派な鐵筋コンクリートの心の家を空高く建てることにきめ合ひませう。そのため鐵のやうにどつしりした覺悟に、今日から建築の第一歩を踏み出させう。

一人のこらす平和な戦士として。（小學校行事の研究）

### 入學式の挨拶（校長の訓話）

皆さん今日から御大事の坊ちやんや、お嬢さんの教育をお引受けすることになりました。さて教育といふことは申す迄もなく、大工や左官の受負仕事といふやうな單純な仕事ではありません。従つて、今日皆さんと豫め十分の打合せをしておく必要があります。

先づ第一に御承知を願つておかなければならぬ事は、教育は子供と先生との間に情の流れがあつて行はれます。以心傳心といふ言葉がありますが教育の可能性は此の中に存するものであります。情の中で、最も親しく濃いものは親子の情でありませう。随つて皆さんの教育を引き受けるに當つて何事

はさて置いても、親子の縁を結びたいと思ひます。皆さんがこの事を心の底から御諒解下さらねば、御子様の教育をお引き受けすることが出来ない譯であります。どうか御入學と同時に、お子様は學校の養子に貰つたのである事を御承知願ひます。随つて學校と家庭とは、養子をやつた貰つたといふ間柄、即ち親類であります。親類は互に打解けて、心安く交際する必要があります。遠慮をしあつて、秘密があるやうでは圓滿な交際は出来ません。交際を圓滿にするには度々お會ひするのが最も近道でありますが學校から千以上の親類に對し、一々家庭を訪問する暇もありませんから、家庭會といふ簡便法を取りたいと思ひます。家庭會といふのは父兄會であります。親類會であります。年に幾度かの此の會合によつて顔を合せ、談話を取りかはすといふ事にしたいと思ひます。

これは親類の交際だと思つて、幾ら家業が忙しくても御出席願ひます。露骨に申しますと、家庭會には忙しいといつて出席が出来ないが、お花見などは萬障差繰つて、家内そろつて遠方までも出かける熱心家もあります。そんな親類の交際を知らぬ人は、子供よりも、花の方を大事と思つて居ることでありませうから、學校に於ても誠心誠意を打込んだ教育を施すことが出来なくなるのであります。

尙一つお願ひいたして置きたいことが有ります。それは子供に向つて、先生を恐いものと思はせないやうにして頂きた



い。途中で時々耳にすることがありますが「そんなに言ふ事を聞かないと先生にいひつけるぞ」といふやうな親等の崇高い聲を聞きます。かりそめにも養家の親を恐いと云ふやうな事が有つては、眞の親子の情が通ふやうにはなれません。今一つは學校や校長の非難は決して子供の前ではなさらぬ様に願ひます。「學校は日本一のよい學校だ、校長先生は日本一の偉い校長先生だ」と言つて頂きたい。そこに貴い教育は生れるのであります。最も修養の足りないこの私、不行届の點も數々ありませうが、左様な點をお氣付の場合には、子供の留守の時の内證話にしておいて、學校に向つて直接に打解けてお洩しを願ひます。

此の外に色々申し上げたい事がありますが第一に學校と家庭とは親類、第二に子供の前で學校や校長をほめること、此の二つを御承知願つておけば、それで今日の會合は最も教育上意義ある價値を認めることが出来ると思ひます。

尙最後に願つておきます。此の話を皆さんが獨り合點で秘密にして頂いて頂いては價値が少くなりません。夕飯の時にでも、御家族一同で御得心の行くやうにお話し願ひたいのであります。(講話資料)

### 禁酒禁煙遵法週間(自一日至七日)

この週間は國民に廣く禁酒禁

煙を實行させたいといふ趣旨の下に起された運動であつて、その始めは昭和五年八月九日に日本國民禁酒同盟内に禁酒禁煙遵法運動中央委員會なるものが設けられ、先づ最初この委員會が主唱者となり、文部省、内務省、司法省、各府縣、社會事業團、男女青少年團、教育會方面が協力して全國に禁酒會が設けられて以來、未成年者喫煙禁止法及び未成年者飲酒禁止法の實施記念日たる四月一日を第一日として全國に「遵法週間」と名付けて年中行事として實行されることとなつた。この週間の設けられた趣旨はいふまでもなく兩法の履行徹底を圖り、且つその實踐を通じて尊法精神の啓發宣揚に資するにあり、毎年四月一日から七日まで官民協力の下に行はれるもので、この週間中は講演、講習會、ポスター、パンフレット等による宣傳が行はれる。

### 親鸞上人生る(承安三年(紀一八三三年))

彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせ

て往生をば遂ぐるなり」と信じて「念佛まをさん」とおもひたつころの發る時、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり、彌陀の本願には、老少、善惡の人をえらばれずたと信心を要とすと知るべし、その故は、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんため願ひまします、しかれば本願を信ぜんに他の善も要にあらず、念佛にまざる善なきが故に、惡をもおそるべからず彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきが

故にと、云々(歌集鈔)

この文章にも見える通り親鸞上人こそは法然上人の他力唯本の信仰を更に絶對他力にまで深めた人であつた。上人は弘安三年四月一日京都に生れ、幼名を松若丸又は鶴涌丸といつたが九歳の時早くも僧慈鎮に養はれ範安といひ、二十歳の時法然上人の門に入つて深く淨土宗に歸依して粹空といつた。上人は早くから弱き人間が厳しい戒律を保ち難いことを知つて自ら率先して肉食妻帯を實行し、日本佛教に對して一大改革を加へたが、法然上人が法難に遭ふと同時に越後國に流され、その後大赦に遭うても京都に歸らず、諸國を漂流して淨土眞宗の信仰を傳へて歩いてゐたが、晩年に及んで京都に還り、本願寺の開宗を定めて年九十歳で入寂した。

親鸞上人によつて説かれた淨土眞宗の教へが漸く盛となるや宮廷の御歸依殊に篤く、文永九年十一月五日には大谷坊舎を勅殿寺に陞せ、又寺院を建立する際に紫宸殿に型取ることをも許され、この時長くも本願寺の號を賜つた。この後明治九年には明治天皇より眞眞大師の勅號を賜り、今尙多くの信徒を擁して法燈の絶ゆる時はないのである。

### 大和神社(大倭神社)

奈良縣大和國山邊郡朝和村新泉鎮座、祭神三座、倭ノ大

國魂ノ神、八千矛ノ神、御年ノ神、古くは大國魂神社といつた。初め天照大神と共に皇居の内に祀られ給ひしを、崇神天

皇、神威を讀さんことを畏れ、皇女淳名城入姫ノ命をして大和國磯市邑に祭らしめ給ふ。これを本社起源とする。延喜式内の名神大社で、四度の官幣及び相嘗、祈雨兩祭に預り、又十六社、二十二社の一に數へられる。天平勝寶元年神封三百戸を奉り、次いで二十七戸を増し、後十戸を加ふ。位階は累進して貞觀元年從一位に進み、寛平九年正一位に陞り給ふ。明治四年官幣大社に列し、四月一日を以つて祭日とする。神事は大祭の外、御弓始祭(一月四日)御田植祭(二月十日)神幸祭(四月一日)神樂祭(五月一日)等あり、神饌に舌餅、一名御戸落ノ餅とて神幸祭の日、大字、成願寺區より奉納する習あり、疫病を患ふ者に効驗があると請ふものが多い。

### 英雄勝海舟(明治元年(紀二五三八年))

片や薩南の英雄西郷南洲、片や江戸の英雄勝海

舟が品川の館に胸襟を開いて江戸城明渡の大芝居を打つたのは三月の末であつた。この時官軍の先鋒は品川を發して將に江戸に入らんとし、江戸には幕府の遺臣が血を流してゐたのだから、たとひ西郷、勝の兩英雄の間にかなる默契が成立してゐようと事と場合によつては如何なる大事が突發せぬとも限らなかつたので、こゝに征東大總督有栖川宮殿下には



明治元年四月二日、殊に勝の誠忠を御親任遊されて江戸鎮撫の  
大命を下し給うた。翌三日には慶喜から勝の身邊を擁護する  
ために五名の護衛士を賜つたが、これは徳川幕府譜代の士  
の中には慶喜の恭順納城を喜ばず、従つて慶喜を輔佐する勝  
等を暗殺しようといふ虞れがあつたからである。翌四日、勝  
は萬難を排して江戸城明渡を決行しようとした。この日勅使  
柳原、橋本の二卿は危険を冒して千代田城に乘込み、勅旨を  
以つて江戸城を朝廷に明渡すべき旨を傳へた。これに勝等  
は慶喜を代表してありがたく御受けする旨申上げたので、豫  
想してゐたやうな波瀾もなく江戸城は徳川氏の手を離れて朝  
廷に奉還されることとなつたのである。

勝海舟は明治維新史上にあつては特に重要な役目を果した  
人であることはいふまでもなく、のみならず一個の人物とし  
てこれを見ても確に後世に傳ふるに足るべき人傑であつた。

勝安房は幼名を麟太郎といひ、その父は男谷太郎といふ人  
だつた。七歳の時旗本小普請組勝家に養はれ、最初は學者と  
して立たうとして和漢の學を學んだが間もなく性格がこれに  
適さないことを知つて學問を捨て、次いで馬術劍道を習つた  
がこれは彼の性格に適したのか非常な上達を見た。勝の劍道  
といへば幕末に於ても殊に鳴つたものである。天保十二年五  
月徳丸ヶ原で大砲の試射を初めて見た彼の頭には世界の大勢  
がびんと來た。そこで彼は直ちに劍道を捨て、蘭學を學ぼう

と志し、筑前の藩士永井春崖の門に入つた。これは彼の十九  
歳の時のことである。安政元年九月には早くも海防意見書を  
作つて幕府に上書し、翌二年正月には蕃書翻譯勤務を命ぜら  
れ、同二年七月には長崎海軍傳習生となり、元治元年五月に  
は軍艦奉行兼作事奉行となり、同六月には公武合體を斡旋し  
て幕府の樞機に與つたが明治元年三月には海軍總裁となつ  
た。この時征東軍が品川に來たので勝は幕府の運命を一身に  
負つて西郷と江戸城明渡の大談判を打ち、やがて明治維新と  
なるや朝廷に用ひられて外務大臣、兵部大臣等に歴任し、同  
六月参議兼海軍卿となり、廿一年には樞密顧問官となり、常  
に天皇の側近に侍して輔弼の大任に任じてゐたが明治三十二  
年一月二十一日歳七十七歳を以つて遂に薨じた。

### 松尾神社

京都府山城國葛野郡松尾村山田鎮座、大  
山咋ノ命、中津島姫ノ命を祀る。二座並に  
式内の名神大社で四度の官幣及び相嘗の祭事に預り、二十二  
社の一である。祭神大山咋ノ命は即ち日枝大神で古事記に、  
此の神近淡海國日枝に坐し、又葛野の松尾に坐すと見えたの  
はこの神である。大寶元年秦忌寸都理が社殿を造營し、同族  
知麻留女が齋女として仕へ奉つた。秦氏はもと蕃別歸化の民  
で葛野郡の地に蕃行したので松尾神を以つてその氏神とした  
後世に至つても秦氏が世々神職の任にあつて祭祀を奉じたの  
はこれがためである。桓武天皇長岡遷都の事あるや、延暦三

年十一月使を當社に遣はして從五位下を授け、告ぐるにこの  
事を以つてし給ふ。その後屢々加階あり、貞觀八年遂に正一  
位に上せ奉つた。京都の守護神として歴代の崇敬殊に厚く、  
所謂賀茂社を東の嚴神と稱したのに對し、西の猛靈と仰ぎ奉  
つた。一條天皇以來しばしば行幸の事あり、徳川幕府の時朱  
印神領九百三十三石あつた。明治四年官幣大社に列し、古來  
祭儀の盛んなこと賀茂、石清水に次ぐといはれる。四月下卯  
の日の神幸祭、五月上旬の日の還御祭は、今も洛西第一の祭  
事として、神輿を初め、供奉のもの皆葵を飾ること賀茂と同  
じである。よつて又葵祭ともいふ。七月吉日を選んで行はれ  
る御田植祭は、又甚だ古風を存してゐる。その造酒の神とし  
て酒造家の崇信高きは、年々遠國より参詣に來るものゝ多い  
のによつても知られる。當社の本殿は特別保護建造物に指定  
され、神寶中、木造神像（男神坐像二、女神坐像一）三軀は  
國寶に指定されてゐる。

### 平野神社

京都府山城國葛野郡衣笠村小北山鎮座、  
祭神四座、第一殿今木ノ神、第二殿久度ノ  
神、第三殿古閑ノ神、第四殿比咩ノ神とする。並に延喜式内  
の名神大社で、四度の官幣に預り、又二十二社の一に數へら  
れる。大和國に鎮齋あらせられたが、桓武天皇平安京に奠都  
さるゝに際し、此の地に遷し奉つた。神階は延暦元年今木ノ  
大神に從四位上、承和三年久度、古閑兩神並に從五位下を授

け奉り、嘉祥元年、比咩ノ神に從五位下を授け奉つてより  
以來、仁壽、貞觀の隆叙を経て、貞觀五年久度、古閑兩神並  
に正三位、比咩ノ神に從四位上を加へ、同六年今木ノ神に正  
一位を加へ給ひし事が國史に見えてゐる。同融天皇初めて行  
幸せられ、その後歴朝の行幸啓、御幸等枚舉に遺あらず、花  
山天皇が寛和元年に初めて東遊、走馬を奉つた。後世朝廷の  
式微に伴ひ官祭のことも衰へ、社殿の興廢も甚しきに至つ  
た。昔時は方境八町餘、四所の前には唐門二棟、葵を列べ、  
樓門、拜殿、舞殿、神饌殿等壯麗を極め、鳥居の中で東に面  
するもの三ヶ所、南に面するもの二ヶ所あつたといふ。西洞  
院時慶が當社の廢絶を慨き、寛永三年第一殿、第二殿を改造  
し、次いで同九年第三殿、第四殿を改造した。四殿共に比翼  
春日造、屋根檜皮葺で今特別保護建造物に指定されてゐる。  
慶安年中東福門院（後水尾天皇皇后）が拜殿、玉垣、鳥居並  
に諸門を建立し、次いで明治十二年社殿を修造し、漸く昔時  
の壯麗に復するに至つた。攝社を縣社といひ、本社と共に五  
字相並んでゐる。その拜殿は接木を用ひ、建築家の模範とす  
るところであるといふ。

境内に櫻樹多く、奇種異辨その數八十種に及び平野の夜櫻  
とて有名である。當社は古來鎮火、竈厄除等の守護神として  
世の信仰殊に高く、明治四年官幣大社に列せられた。



### 神武天皇祭

天皇の崩御は陰曆の三月十一日であるが明治年代改曆後太陽曆に換算して四月三日に改めたものである。詳しくは三月十一日『神武天皇崩御遊さる』の項参照)

この日宮中に於ては、皇靈殿に於て皇室祭祀令第九條の定むる式によつて陛下が御親祭遊される。また特に大和國畝傍山東北陵に勅使を御差遣になり、諸陵寮出張所官員によつて御陵前の舗設をなし、神饌を奉り、幣帛を供へて莊嚴に御陵前祭が行はせられる。宮中に於ては、式部職官員の御模様に承るに、午前八時御殿の裝飾を終り、式部職官員は皇靈殿の御扉を開扉、御饌を奉り、掌典長は祝詞を奏して朝の御祭典を終る。九時から再び御開扉あり、神饌幣物供奠の後、親王以下錦鶏間祇候者迄着床あり、十時陛下御参進遊され、御玉串、御拜、御告文の奏上あつて入御、この間参列の諸員は起立である。次に皇后陛下御玉串を奉られ、御拜あり御退下の後、皇族方より係り判任官まで拜禮を捧げ、撤饌撤幣の後、閉扉となつて御親祭の儀は終り、正午十二時三度御開扉、伯子男より判任官待遇の者に至るまで参拜を許され、二時閉扉、午後五時更に御開扉献饌、掌典長祝詞奏上、同三十分陛下出御あり、終つて入御、次いで舞樂東遊の奏行

がある。實に前後四回の御祭典が行はせられるのである。又伊勢神宮を初め全国の各官幣社以下各神社各官公衙公署に於ても御陵遙拜の式を行ふことに制定せられてゐる。

この祭典は孝明天皇の萬延年中に、徳大寺實則卿を勅使として櫻原に差遣し給ひ、御陵前祭を行はしめられ、天皇は清涼殿の東庭に出御御遙拜あらせられたことに始り、爾來恒例となり毎年行はせらるゝ事となつた。これが明治維新に至つて明治元年三月十一日には、愛宕通祐を宣命使として御陵に御差遣あらせられ、明治四年三月七日に『神武天皇御祭典ノ儀、海内一同遵行被仰出候條、毎年三月十一日、各地方官ニ於テ遙拜式可執行事』と布告あらせられたが、太陰曆改正と同時に太陽曆の四月三日となつたものである。

### 觀櫻御會

此の月中旬若くは下旬を期して觀櫻御會が催される。この起源は明治十四年四月、吹上御苑に於て内外の臣僚を召されて兩陛下臨御の下に櫻花を賞せられたのに始り、翌々年よりは濱離宮に變更せられ大正五年に及んだが大正六年以來新宿御苑に御變更され今日に及んでゐる。但宮中喪等の場合にはお取止めとなることがある。

### 植樹祭

大正十二年九月一日の大震災は東京市を一時の燒野ヶ原と化してしまつた。そこで大正十五年に林學博士本多靜六氏等によつて設立せられた都市美協會

に親近し奉るべきである。

### 聖德太子十七條憲法

- 第一條 上和下睦、忤ふことなきを宗とすべき事。
- 第二條 佛教は普遍的のもので、且能く教ふれば枉れる者も直となるから、篤く三寶を敬すべき事。
- 第三條 君命を承くれば必ず謹むべき事。
- 第四條 治國の本は禮にある、群卿百寮より下人民に至るまで禮を重んずべき事。
- 第五條 訴訟を決するには、利欲を棄て、公明に裁判すべき事。
- 第六條 惡を見ては必ず匡し、諂詐佞媚の者を遠ざくべき事。
- 第七條 官の任掌共宜しきを得せしむべき事。
- 第八條 群卿百寮早く朝し晏く退くべき事。
- 第九條 君臣共に信義を重んずべき事。
- 第十條 是非は比較的のものだから忿を絶ち瞋を棄つべき事。
- 第十一條 賞罰を明にすべき事。
- 第十二條 國司、國造は百姓に賦斂せざるべき事。
- 第十三條 官に任ずる者は職掌を自覺すべき事。
- 第十四條 群臣百寮互に嫉妬すべからざる事。
- 第十五條 私あれば上下の和諧を缺く、私に背いて公に向

主唱の下に同年四月三日を以て第一回大會が東京に行はれてから毎年行はれるやうになつたのである。その趣旨は都會の緑化といふことにあり、市民の健康増進、併せて樹木愛護の思想を涵養するにある。

### 聖德太子十七條の

憲法を編み給ふ (推古帝十二年 聖德太子 憲法を編み給ふ (皇紀一二六四年) が十七條の

て畏くもわが國皇道政治の根本を示させ給うたのは推古帝の十二年今月今日のことである。申上げるまでもなく聖德太子は用明天皇の第一王子にましまし厩戸皇子と申上げ奉り、早くより推古天皇の攝政となり給うて數々の御治績を擧げ給うたのであるが、就中十七條憲法はその中の尤なるものである。

聖德太子に於ては早くより蘇我氏の權勢を容易に倒し難きを察し給ひ、これを武力によつて制するよりは精神の力を以つて挽めんにかかずと思召され、こゝに佛教と儒教を以つて道徳的政治の根本準則と定められたものである。十七條憲法を一貫して流るゝ佛教思想及儒教思想は取も直さず太子の御人格の輝きのほどばしりであつて、國民たるもの須く十七條憲法を常に拜誦し奉り、太子の深奥幽玄なる大御心



氣多神社

(國幣大社)は石川縣能美國羽咋郡一宮村鎮座、御祭神は大己貴命である。

四 日

和氣清麿の忠誠

(延暦十八年二月二十一日)

今日は

四月四日護王神社祭(舊去陰曆皇紀一四五九年) 和氣清麿公を祭る護王神社の例祭日に當るので些か公の忠誠を偲び奉りたいと思ふ。

和氣清麿は備前國藤原野郡の人で、天平神護年中に従五位下近衛將監に陞り、姓を吉備藤野和氣真人と賜つた。神護景雲三年に筑紫太宰府の主神で中臣習宜阿曾麿といふ奸人があつて、宇佐八幡宮の神宣と詐り奏して恐多くも僧道鏡を帝位に即かしめんことを謀つた。この時天皇に於かせられては非常に震慄を懐し奏り、清麿を召して仰せらるゝには「朕は昨夜夢に八幡大神の御使を拜して道鏡に皇位を讓つてよいかどうかといふことをお前の法均尼に託宣ある旨告げられた。そこでお前は姉に代つて急ぎ筑紫に赴いて神宣を拜して來るやうに。」といふ詔であつたので、清麿は驚いて取るものも取り敢へず筑紫國に馳せ下らうとすると、道鏡は清麿に向つて脅迫していふには「お前が筑紫に行つて神勅を承つて自分の希望の通りにすればお前を太政大臣にしてやらう。もし自分の望みに反するならば重き刑罰に處すからさう思へ。」といつた

ふべき事。

第十六條 民を使ふに時を以つてすべき事。

第十七條 大事を決するに當りては衆論によるべき事。

梅宮神社

京都府山城國葛野郡梅津村西梅津鎮座、祭神四座、酒解ノ神、大若子ノ神、小若子ノ神、酒解ノ神を祀る、延喜式内の明神大社で、四度の官幣に預り、又二十二社の一に列してゐる。橘諸兄の母三千代が之を創祀し、後聖武天皇の皇后藤原安宿媛、藤原武智麻呂の妻幸瀧女王(共に三千代の女)が相繼いで之を祀り、屢々鎮座地を變へたが、仁明天皇の朝母后橘嘉智子とその氏神たるの故を以て、詞を今の地に移して祭り奉つた。梅ノ宮祭は毎年四月、十一月の上ノ西の日にこれを行ひ、橘氏必ず祭事に與つたが、中世以降その族統衰微して後は藤原氏又は源氏の長者が宣旨を蒙つて橘氏の是定となり、代つて本社に幣帛神馬等を奉獻する例であつた。往時より安産を立願する者は當社殿の砂を受けて襟に帯ぶる習俗があり、壇林皇后(橘嘉智子)に於かれては太子なきを歎かれ、當社に祈願せられたところ、神驗忽ち現はれ、御懷胎遊され、臨月に及んで神殿の砂を御座の下に敷いて生まれ給ひし古事に基くといひ傳へられる。明治四年官幣中社に列した。別殿の若宮社には橘諸兄を祭つてゐる。

けれど、どうしてこの位の脅迫が清麿の誠忠に動搖を來すことがあらう。彼は斷乎として跳ね付けて名鏡の如き心を以つて筑紫に下り、直ちに宇佐八幡宮に詣で、神託を受けると習宜阿曾や道鏡のいふところは眞赤な偽りだつたので清麿は喜び勇んで都に取つて還し、天皇に傳奏し奉つていふには「我國開闢以來君臣の分定りて洵に明瞭なり。臣下を以つて君とすること未嘗つてその例なし。天日嗣には必ず皇胤を立つべし。もし無道の者あらば速かに除くべしといふ神勅を承つてまゐりました。」とおめす隠せず申上げたので道鏡烈火の如く憤り、直ちに清麿の官位を奪ひ、その上名も別部磯麿と改めて姉の法均尼と共に遠く大隅國に流してしまつた。

神護景雲四年稱徳天皇崩じ給ひ光仁天皇位に即き給ふや道鏡を下野國藥師寺別當に移し給ひ、清麿と法均尼とは都に呼び返され、間もなく清麿は攝津大夫に任ぜられ、次いで民部大輔、中宮大夫を兼ねしめ從三位を授け給うたが、延暦十八年二月二十一日年六十七歳を以つて遂に薨去した。

孝明天皇に於かせられては清麿の偉勳を追賞し給ひ、正一位を贈り更に護王大明神の神號を贈り給うたが、明治天皇に於かせられては明治十九年今の社地に神社を建て、特に別格官幣社に昇せて永く清麿の靈を祭り給うた。

廣瀬神社

奈良縣大和國北葛城郡河合村鎮座、祭神若宇迦乃賣ノ命、一に大忌ノ神、廣瀬河合

ノ神といふ、掃玉ノ命、穗雷ノ命を配祀し、延喜式内の名神大社で四度の官幣及び祈雨祭に預り、又二十二社の一に列してゐる。龍田ノ風ノ神と相並んで沱風を防退し、穀物の成熟を守り給ふ神として歴代の崇敬實に厚かつた。天武天皇四年小紫美濃王を遣して風ノ神を龍田ノ立野に、小錦中間人連大蓋を遣はして大忌ノ神を廣瀬ノ河曲に祭らしめ給うた。爾來この兩祭は大忌祭、風ノ神祭と稱し、毎年四月、七月の四日同時に行ふこと古來の例として、この外臨時奉幣又屢々行はれた。神階は又龍田ノ神と並び授けらるゝ例で、弘仁十三年以來屢々加階あり貞觀元年正三位に陞り給ふ。神事に大祭の外御田植祭(二月十二日)大忌祭(八月二十一日)秋季祭(十月十六、十七日)あり。攝末社多く、境内に祖靈社あり、境外攝社に水分神社あり、末社に稻荷、八神殿、饑速日の諸社があり、明治四年官幣大社に列した。

龍田神社

奈良縣大和國生駒郡三郷村立野鎮座、祭神二座、天御柱ノ神、國御柱ノ神を祀る。

延喜式内の名神大社で四度の官幣に預り、又十六社、二十二社の一に列してゐる。この神は沱風を防退し穀物を成熟せしめ給ふを以て廣瀬神社と相並んで歴代の崇敬殊に深く、廣瀬の大忌祭と當社の風ノ神祭とは古來毎年四月、七月の四日兩度と定め、同日にこれを行ひ、恒祭以下臨時の奉幣の如きも亦すべて同日に行ふを例とした。崇神天皇の御宇天下の公民



が悪風、荒水に苦しんだ時、この神が天皇の御夢に現はれ給ひ、わが宮を朝日の日向ふ處夕日の日隠るゝ處、龍田立野小野に齋き祀れと感悟せられ、即ち此處に祀り給うた。これが本社の起源である。天武天皇四年、小紫美濃王、小錦下佐伯連廣足を遣して風神を龍田立野に祀り、小錦中間大蓋、大山中曾彌連韓犬を遣して大忌ノ神を廣瀬の河曲に祀らしめた。爾來兩祭儀は歴代の殊に重んじ給ふ所となつた。天平二年神戶租稻四百四十束を以て祭料及び雜用に充てた。弘仁十三年從五位下に叙し、後累進して貞觀元年正三位に陞り給ふ。代々奉幣叙位必ず廣瀬ノ神と共にせられ、當社の御神祭、廣瀬の大忌祭は又當時に行はれた。明治四年官幣大社に列した。現今神事は例祭（四月四日）の外に秋祭（十月二十五日）攝社新宮（大正十一年十月獨立して縣社龍田神社と稱す）に神輿の渡御がある。

**護王神社**

山城國京都市上京區櫻鶴岡町鎮座、和氣清曆同じく廣瀨の靈を祀る。孝明天皇に於かせられては嘉永四年清曆の功を追賞せられ、護王大明神の神號を宣下せられ正一位の神階を授け給うた。明治七年別格官幣社に列した。初め高尾山神護寺の境内に祀られてあつたのを明治十九年今の地に奉遷した。清曆は神護雲年中妖僧道鏡非望を抱くに際し勅を奉じ死を誓つて宇佐八幡宮に詣で神勅を奉じて終にその無道を懲した。後世永く妖雲を排し天

日を拜するを得しめたる誠忠は史上に明かな所である。祭神廣瀨は清曆の姉である。初め藤原百川、藤原永手と共に本社に配祀せられたけれども、大正四年その功績を追賞せられ、特に祭神の列に加へ給うた。例祭は毎年四月四日である。

**五 日**

**巴御前** (壽永三年 皇)

木曾義仲の妻の巴は中原權頭兼遠を父とし、義仲の股肱の臣であつた樋口兼光、今井兼平を兄として育つた婦人だけであつて才色兼備、殊に女ながら衆に優れた武勇の持主であつた。常に夫義仲に従つて各所の戦に武勇の譽を樹てたが、壽永三年四月義仲が宇治川の戦に脆くも打破られ、粟津原の深田に敢ない最期を遂げるや巴はこの時限り丈なす黒髪を下して尼御前となり、永く亡き夫の跡を弔つたといふことである。

**六 日**

**太田蜀山人歿す** (文政六年 皇)

いきなり太田直つてゐるかと思はれて、即座に「あゝそれは蜀山人の本名だよ。」と答へ得る人は少いだらう。それ程この人は蜀山人を以つて知られ、又蜀山人といへばそれこそ誰でも狂歌を思ひ出

さすにはゐられない程有名な人だつた。

蜀山人は元れつきとした幕府の士であつたが生れ付非常に文筆の才に長じてゐたのでいつの間にか内職が本職となつてしまひ、當時獨りで江戸文壇の人氣を凌つてしまつたかの觀があつた。狂歌に巧みであつたばかりでなく詩才にも長じ、『明詩權材』『一話一言』『群言一觀』『酒上呵筆』『蜀山餘談』等數十種の著書があるが文政六年四月年七十五歳で江戸に歿した。

**七 日**

**淺野長政卒す** (慶長十六年 皇)

淺野長政は幼名を臣秀吉とは若い頃からの友人であつたので早くから秀吉を接けて辛苦し、遂に秀吉をして天下を統一する機運を造らしめた。秀吉が天下統一の大事業を完成するや先づ近江國坂下大津二萬石の城主に封ぜられ、同十三年に秀吉が關白となるや長政は選ばれて五奉行の一人となり、同十五年には若狭一國を與へられて小濱の城主となり從五位下彈正少弼に任ぜられた。文祿元年に朝鮮征伐が起るや長政は黒田幸高と共に軍艦職を勤め、役が終つて内地に凱旋すると共に甲斐國二十一萬石を與へられた。話は遡つて朝鮮の役が起るや短氣の秀吉は親ら兵を率ゐて朝鮮に押渡るといひ張つて聞かなかつたがこ

の時長政は死を以つて思ひ止まらせた。

慶長三年、秀吉の病革つて死期の近きを知るや秀吉は長政と石田三成に後事を託して朝鮮の兵を内地に呼び返へさせた。同五年天下は二分して關ヶ原の役起るや長政は秀忠に従つて東山道を上り大阪方を備した功によつて紀伊和歌山三十萬石を與へられたがその後隱居するや常陸真壁の五萬石を養育料として賜り、常に江戸にゐて家康と親しく交つてゐたが慶長十六年四月七日年六十五歳を以つて遂に江戸に歿した。

**美保神社**

島根縣出雲國八東郡美保關村美保鎮座 事代主ノ命を祭り、相殿に三穗須須美ノ命を配祀する古來一ノ宮と二ノ宮とあつて併せて三保兩關大明神といふ。その創建は孝靈天皇の御宇にあり、當社本殿は一棟だつたものを後世元龜、文祿の頃の造營により爾來二棟の制になつたもので、今の社殿は文化二年の造營であるといふ。天照大神が勅使を大國主ノ命の許に遣された時事代主ノ命は恰もこの地に出漁せられた際だつたので、歸つて大神に勤めて一意恭順の意を表せしめ給ひ、わが國建國の基礎と君臣の大義とを確立し給うたことは正史に明記せる所である。當社が今に至るまで五穀豊熟、海上安全、魚獲饒贍等の祈請に効驗ありとして世人の信仰殊に深きは、蓋祭神が産業を經營し、蒼生安居の基を建て給ひしに因るものである。世俗に惠比須と稱しまつるのはこの神で鯛魚を釣り給へる御神像は



この美保關に漁獵し給ひし故事に因ると傳へられる。明治十八年縣社より進んで國幣中社に列した。例祭(四月七日)當日の青柴垣神事、新嘗祭當日の諸手船神事は當社の古傳祭として有名である。その他神迎(五月五日は拂曉美保碕の沖、御前島より大后神二柱、御子神二柱の四柱の神靈を迎へ奉る神事)虫拂(八月七日早旦寶物の古面を案上に安じ、神職が寶物の樂器を打鳴らし、巫子一人この古面を被つて四方を拜する儀である。社傳にいふ、古面は天正年中近江國堅田の漁夫が琵琶湖に網を曳き、願なき翁面を得、翌年同月同日その願を得、密かに奇瑞としたるを夢のお告によつて天正八年二月二十四日當社に納め奉つた)等の神事があり、神職の上首を横山氏といひ神代以來奉仕して連綿として今に至つてゐる。

八 日

太田道灌江戸城を築く(長祿元年(皇) 紀二一七年) 『わが庵は松原遠く海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る』——この歌は誰でも知つてゐる通り太田道灌の詠んだ歌だけれども、一面又この歌によつて當時の草茫々たる武藏野の大平野を想像することが出来る。武藏野の月は草から出て草に入ると謳はれてゐるが恐らく太田道灌が江戸に初めて城を築いた頃は一面の大平野で

たゞ隅田川の都島と野末の涯に仰ぐ富士の高嶺とが唯一の添景であつたかも知れない。今東京府廳へ行くと正面の大玄關に道灌の像が立つてゐるが、この像にしてもし魂があるならば今日の大東京の發展を眺めて如何なる感慨を懐くであらうか。それはそれとしてともかくも太田道灌はこの大東京にとつては生みの恩人である。では一體太田道灌といふ人は如何なる人であつたであらうか。

道灌はその名を持資といひ、幼名を鶴千代といつたがやゝ長じて源九郎といつた。早くより父の資清と共に扇ヶ谷上杉定正を扶けて戦つたが敵する者もなかつたので、長祿元年に武藏野に地をトしてこゝに城を築いた。これが抑も江戸城の初めであつた。同二年には髪を剃つてこの時初めて道灌の名を用ひた。寛正五年には京都に上つて將軍義政に謁し、又後土御門天皇にも拜謁の榮を得た。文明五年には駿河の亂を治めて功を樹て、同九年には上杉顯定、長尾景春等と戦つてこれを破つたが、文明十八年七月に上杉顯定が扇ヶ谷定正と共に謀して道灌を精屋の邸へ迎へ偽つて浴室の中で刺し殺してしまつた。この時道灌は次の辭世を詠んで敵の膽を寒からしめた。

きのふまでまゝ安執をいれおきし  
へむなし袋今破りなん

この時僅か五十五歳だつたが、思へば惜しいことをしたも

のである。

灌佛會

四月八日といへばお釋迦様を思ひ出す。若下げた村童や老幼男女が三々伍々檀那寺へお詣りに行く風景は春にはなくてはならぬ長閑なものであつたが今日では次第にそれが見られなくなつてしまつた。今の都會はいふまでもなく田舎の子供達でさへ甘茶など、いつても知つてゐる子供は少ないかも知れない。第一、四月八日にお寺へ行つてゐるいろの花で飾られた天蓋の下に右手を舉げて立つてゐらつしやる裸のお釋迦様に甘茶をかけて進せようなど、いふ殊勝な考へを起す子供はゐないだらう。花祭といへば寺院の日曜學校などでオペラを真似たやうな兒童劇に打興するか、或は又鳴物入の稚兒行列を見物する位が關の山だらう。灌佛會は佛家で營む行事であるばかりではなく、古くからわが國の國民生活の中に浸み込んでゐるのだからかうした床しい行事は今後共永く保存したいものである。

餘談はさておき灌佛會は別は佛生會、浴佛會、龍華命など、いはれて釋尊の誕生を祝ふ日であるが、これが日本に傳つて來たのはいつ頃かといふと勿論佛敎の傳來と同時で、推古天皇の承和七年四月八日には盛大に行はれ、この時既に今日行はれてゐるやうな形式が整つたといふことである。

大原野神社

京都府山城國乙訓郡大原野村大原野鎮座、祭神四座、建甕槌ノ命、伊波比主ノ命、天之子屋根ノ命、比賣ノ神を祀り、二十二社の一に列してゐる。桓武天皇が平安發都の後藤原乙牟婁が、藤原氏出の皇后の參拜に資せんがため、大和の春日神社を移したものである。一説に嘉祥三年藤原冬嗣の勸請する所であるともいふ貞觀三年皇太后藤原順子(仁明天皇の皇后)に至り、初めて當社に行啓あり、後永觀元年醍醐天皇亦行幸し給ひ、その後歷朝しばしば行幸啓あり、式外の神社といふけれども藤原氏の氏神なので氏人の崇敬春日神社に等しく、齋女を置きて奉仕せしめ、朝廷亦春日社に準じて、祈年、月次、新嘗四度の幣に預らしめ給うた。明治四年官幣中社に列した。

九 日

以仁王令旨を下す

(治承四年(皇) 紀一八四〇年)

平家に非ざれば人に非ざる如

き平清盛の横暴沙汰に對して密かに快く思つてゐない者は夥しくあつたが、中でも以仁王に於かせられては憤怨當ならざるものがあつた。又一方源三位頼政も亦宗家の敵であるのみならず、清盛が日頃以仁王に對し奉る御無禮の数々を憤ること甚しかつたが、治承四年四月九日の夜密かに高倉の御殿に參上し、親しく拜謁の上申上げるには、畏くも君に於かせら



れては太上天皇の第二皇子にましまし、世が世であるならば皇太子に立ち、帝位にも御即きあるべき御身を持ちながら、早や三十歳にもならせ給ふといふのに未だに親王の宣下さへも賜らないではございせんか。頼政日頃から君の御心中拜察して清盛入道を不倶戴天の敵とも思つてをります。今は早や頼政の勘忍の緒も切れませんでした。ついではこの頼政に平家追討の令旨を賜りますならば、すぐ様全国に散在する源氏の宗徒の者共呼び集め、上は法皇の宸慮を慰め給ふと共に下萬民の苦しみを除きいたすでございませう。』と赤誠面に現して申上げたので、こゝに以仁王も御決心遊され、遂に頼政に平家追討の令旨を興へ給うたのであつた。この時頼政は既に七十歳の老齢であつたが、令旨を賜ると同時に直ちに兵を擧げたが戦の結果はあのやうな悲惨な有様となつて終つた。しかしこれより漸く諸國の源氏が騒起し、平家没落の動機を作つたのである。

**稻荷神社**

京都府山城國紀伊郡深草町福稻鎮座、祭神三座、倉稻魂(中央下社)猿田彦ノ命(北座中社)大宮女ノ命(南座上社)、相殿に攝社田中神、四大神を配祀する。延喜式内の名神大社で四度の官幣に預り、又十二社の一に列し、明治四年官幣大社に列した。社傳にいふ當社の創始は和銅四年秦ノ伊侶具の祀つたに起るといふ。社殿はもと山上にあつて上社は猿田彦ノ命(一説には素戔嗚ノ

尊又は土祖ノ神又太田ノ命)中社は倉稻魂ノ命、下社は大宮女ノ命(一説には大市姫)を祀り、後更に田中社(大己貴ノ命)四大神(五十猛ノ命、大屋姫、抓津姫事八十神)の二社を配祀し、合せて五社あつたものをその後今の地に遷座し奉れるものであるといふ。神階は天長四年從五位を授け奉つて以來歴進して貞觀十六年三座並に從三位を授け奉りしことが國史に見え、天慶五年には正一位に進み給ひしことが本朝世紀に出てゐる。神領は貞觀七年四月神田三段を充て奉り、延文二年將軍足利義詮立願により社領を寄進し、應永三年義滿の寄進、同十八年義持、寛正四年義政の寄進あり、天正十七年豊臣秀吉境内諸役を免除し、社領を寄進した。元和元年徳川家康亦社領を寄進し、境内の諸役を免除した。秀吉以來代々織目の朱印あり、その高百六十石と稱せられる。歴朝奉幣の事は貞觀九年五月大中臣有本を遣し幣帛を奉り霖雨を止むることを祈らしめ給ひしを初めとして、その後史上に屢々見える。行幸は後三條天皇が延久四年本社及び祇園に行幸せられたのを初めとするがこれを兩社行幸といふ。その後行幸、御幸十數回に及んだ。社殿は延喜八年藤原時代に初めて三箇の社を修造し、文治三年鎌倉將軍三社正殿諸神殿を造營した。寛元四年上下殿造宮、永享十年足利義教、三所の社を山下に遷し奉り、三ヶ峯に模して三箇別殿を造營した。應仁二年兵火に罹り山上山下の諸神殿焼失、明應八年本殿造營、此

の時より五社相殿となつた。天正十七年豊臣秀吉の沙汰を以て造營したのが今の本殿である。元祿七年十月修覆、正遷宮、文政五年本殿、若宮殿その他諸神殿修覆、明治十五年本殿、拜殿、樓門を初め攝末社等總て修覆を行ひ、社務所、集合所能樂殿等を新造し、同四十五年更に修覆正遷宮を行つた。本殿は今特別保護建造物に指定されてゐる。御旅所は京都市下京區九條町にあり、附屬社に奥宮あり、上御殿ともいひ、權殿又若宮ともいふ。攝社に相殿攝社の外大八島神社(境内)田中明神(境外)あり、末社に白狐社以下九社あり。年中の祭事は例祭(四月九日)その他大祭の外大山詣(一月五日)奉射祭(一月十二日)初午祭(二月四日)神幸祭(四月二日)遷幸祭(五月初卯日)藤尾祭(六月五日)長者祭(八月八日)玉山稻荷祭(八月十五日)輪祭(十一月八日)等がある。

**大神神社**

奈良縣大和國磯城郡三輪山鎮座、倭大物主櫛瓊玉命を祀る。後少彦名ノ命を配祀した。延喜式に大神大物主神社と見える名神大社で四度の官幣および相嘗、祈雨の二祭に預り、又二十二社の一に數へられ當國の一ノ宮である。天平神護元年神封百六十戸を奉り、後又五戸を加へられ、神位は累進して貞觀元年從一位に至り、幾もなくして正一位に陞り給うた。本社はその創祀遠く神代にあり、諸神社中最も舊く、日本書紀に、大己貴ノ神の幸

魂、奇魂出現して三諸山に住み給はんと申し給ひしかば即ち彼處に營造せしめ給ふと見えたとの初めとする。この社は神殿の設なきこと古來の特例なりとして之を傳へてゐたが、一説(本居宣長説)には、書紀神代卷に營宮と見え、同卷神卷に三輪の殿中の語があり、日本紀略に大神社寶殿鳴動とあるなどに徴して上古には宮殿があつたといふ説もある。蓋その後神殿傾壊したけれども之を修覆しなかつたのが例となり、中世以後遂に宮殿が設けられず、山を以て神靈鎮座の所となすに至つたものであらう。拜殿(今特別保護建造物たり)の位置は境内の東方にあり、更に靈山と拜殿との間に三つ鳥居があることも亦特異の例とする。本社はその由緒頗る古きが上に、神威靈驗又著しく、歴朝の崇敬比類なく、大神と書して「オホミワ」と調むのも、凡そ大和一國中大神といへば必ず大三輪神たることを示す義に他ならない。延喜式大神分身類社鈔を案するに、大神(美和、彌和、三輪又は神とも)を社名として、官祭に預るもの五畿、七道に二十餘社あり、その他同社名を稱するものが多からうけれども、一々之を擧ぐるに遑がない。本社は世に酒の神と稱し、古來酒造の尊信甚だ篤く俗に酒舖に往々この神社の神木、松の葉を用ひて商標となすのはこれが爲である。その他地鎮、方除、疫病等の祈願に効驗ありとして、崇敬者が頗る多い。明治四年官幣大社に列し、攝社に若宮大直彌子神社、率川坐大神御子神社、狹井坐



大神荒魂神社、神坐日向神社以下十社、末社に貴船神社、大  
行事神社以下十六社があり、大直彌子神社は大田々根子ノ命  
を祀る。その社殿は鎌倉末期の作にかゝると稱せられ特殊の  
形式を具へ、一見伽藍の如く、内部は總拭板敷鏡天井、その  
奥に内陣を設けてある。この社殿はもと同社の神宮寺大三輪  
寺の建物だつたものを維新の時神佛分離に際して神祠に引直  
した物である。今特別保護建造物に指定されてゐる。特殊神  
事に例祭當日(四月九日)流鏑馬走馬式を行ふ外、遠堂祭(一  
月一日)華鎮祭(四月十八日)三枝祭(六月十六日)等があ  
る。

十日

別當公曉

(建保五年 皇紀一八七七年)

源氏三代の歴史は一個の  
人生悲劇である。範頼、義

經先づ悲惨な末路を遂げ、二代將軍頼朝又害せられ三代將軍  
實朝も又頼朝の子公曉に害せられた。

公曉は源頼朝の子で、幼名を善哉といつた。父の頼朝が害  
された時には僅に四歳であつたので政子は實朝に命じて養は  
しめたが、間もなく僧定曉に従つて髪を剃り、園城寺に入つ  
て明王院公胤に従つて戒を受け、建保五年四月十日鶴ヶ岡八  
幡宮の別當に補された。ところが公曉は父頼朝が害せられた  
ことを深く憤り、出家の身にありながら常に髪を蓄へて心に

宿願があるといつて常に鶴ヶ岡の坊舎には歸らず、北條義時  
の邸に出入りして密に實朝を窺つてゐた。義時は早くから公  
曉の意中を知つてゐたが敢て止めようとしなかつた。建保  
七年正月二十七日公曉は將軍實朝が鶴ヶ岡八幡宮参賀の途を  
大銀杏の陰に擁して遂にこれを殺してしまつた。時に公曉は  
十九歳であつた。頼朝が千辛萬苦の末やうやく固めた源氏の  
礎も、血を血で洗ふ悲惨な内訌のため遂に三代實朝で滅んで  
しまつたのである。その原因は頼朝自身にあること勿論であ  
るが、政子などいふ女性の介在したことがどんなにかその  
末路を早めたか知れない。豊臣氏に於ける淀君然り、世に恐  
るべきは女である。婦人たるものはよく注意して常に修  
養すべきである。

十一日

聖德太子祭

太子祭の初めは大正十年四月十一日が  
恰も聖德太子の一千三百年祭に相當する  
ので久遠宮殿下を總裁に仰ぎ朝野の名士が主催して同年同日  
西は法隆寺、叡福寺、東は東京上野美術學校講堂で夫々嚴肅  
盛大裡に大法會が嚴修され、後引續いて舉行されてゐたが更  
に大正十三年十二月二十二日財團法人聖德太子奉讃會が組織  
され、その後益々奉讃の誠を至すこととなつたのである。こ  
の日小學校に於ても聖德太子の御聖德について一場の講話が

のりたきものである。

今日は太子の崩御遊された日故次に御陵の事を述べる。

聖德太子磯長墓は大坂府南河内郡磯長村にある。推古天皇  
の三十年正月二十二日聖德太子御病に罹らせ給ひ、同時に  
王后膳部菩岐岐郎女も亦御病床に就かせ給ひ、太子等身の  
釋迦像を造立して御惱御平癒の發願をなし給うたが二月二  
十一日に至り王后先づ薨去、翌二十二日陽曆の四月十一日  
太子も亦ついで薨去あらせられたが、この時國を擧げて御  
喪を悼み奉つた。この月太子を河内磯長の陵に葬り奉つた。  
陵は叡福寺の後背の丘腹にあつて御墓山といひ、太子の  
御母穴穂部間人皇后(用明天皇皇后で帝の異母妹)の御陵  
に太子を合葬し奉り、王后も亦ここに合葬し奉つた。世に  
三骨一廟の墓といふのはこの故である。墓は圓墳で周圍百  
五間、根廻りに結界石を廻らして二重に三部經石をもて建  
て廻らしてある。御石室内へは維新前までは參入參拜が出  
來た由であるが、今御入口に屋形を造り扉を設けて參入す  
ることは出来ない。

昭憲皇太后崩御遊さる

(大正三年 皇紀二五七四年) 明治天

せられては歴代稀に見る聖天子にましましたのだがこの聖天  
子の左右に侍り給うて内助の功を積ませ給へるは申上げるま  
でもなく昭憲皇太后に在りました。皇太后の御高德は數へ上

げること出来なほほどであるが、殊に明治天皇が神去りま  
してからは全くその喪に服せられ、御日常普門品などの御寫  
經たど遊されてひたすら先帝陛下の御冥福をお祈り遊されて  
をられたが大正二年十二月四日、侍醫のお勤めによつて沼津  
御用邸に御遊寒あらせられ、その年は無事に御越年遊された  
がその年の冬も漸く明けて桃源の春も將に甦ならうとする三  
月二十六日午後二時頃突然強烈な狭心症に襲はれ給ひ、侍醫  
の必死の御看病の甲斐もなく翌四月十日全く御危篤に陥らせ  
給うたのでそのまゝ青山御所に遷啓相成り、翌十一日御前二  
時崩御遊された旨御發表相成つたのである。(御歳六十五)

昭憲皇太后は故一條忠香公の第三女にましました。嘉永三年  
五月二十八日御生誕遊された。御幼少の頃より嚴しき御靈陶  
の下に御成人遊され、明治元年十二月十八日御入内、その日  
を以つて立皇后の御宣下あつてからと申すもの天皇の御治世  
四十五年間といふもの全く日夜御内助の功を積ませられたの  
であつた。昭憲皇太后の御遺徳は數々あるが、今その中の一二  
について申上げ奉れば、明治十八年には華族女學校を御創立  
あらせられ、女子教育の振興に大御心を注がせ給ひ特に『金  
剛石』の御歌を賜うて人格陶冶の標準を示し賜ひ、次いで屢  
々女子高等師範學校へも行啓相成り、又美術御獎勵の思召を  
以つて各種の展覽會へも行啓遊された。殊に日露戰爭當時は  
葉山御用邸に在りましたが、一度開戦と聞食し給ふや直ちに



宮城に遷啓相成り、宮城中に繻帶製作所を設けて女官を指揮し給ひ御手づから繻帶を御製作遊されてこれを戦地の傷兵に御下賜相成つた。尙赤十字病院にも屢々行啓遊されて親しく傷病兵を御慰問あらせられた。又赤十字社の活動を深く嘉せられ、赤十字社及び愛國婦人會の總會に親しく御臨場あらせられて令旨を賜り、又慈善事業に深く御心を傾けさせられて屢々御内帑金を下し賜ひ、又慈惠病院を設立遊されて貧しき者のために醫藥を賜ひ、明治二十年以來屢々同院に成らせられては哀れた貧兒等に美しき玩具等を賜り、又養育院、孤兒院等に對しては年々冬季になると衣類等を御下賜になるのが例であつた。

明治四十五年七月、明治天皇に於かせられては御不例となり給ふや、それ以來と申すもの皇太后に於かせられては御衣裳も更へさせられず晝夜の別ちなく御看護申上げ奉つたが、御痛しや遂に明治天皇には神去り給うたのであつたが、この時皇太后には豫ねて深き御覺悟のあらせ給ひしにや、御臨終の際の如きも御涙一つ洩し給ふことなく常の如く諸事御指揮あらせられたといふことである。尙昭憲皇太后に於かせられては、明治天皇と御共と御歌をよく遊され御詠歌實に三萬首に達せられたといふことである。明治天皇には御生前よく不意に御題を賜ひ、御詠進を御所望されたので皇太后に於かせられては少しも御油斷遊さるゝ折とてはなかつたといふこ

とであるが、左に御歌十首を選び奉り御高德を偲び奉ることとする。

御歌

新年海（明治三十六年）

軍ぶねいかりおろしてあだ波も昔せぬ御代の年祝ふらし  
苗代水（同年）

すきかへしなはしろ小田の水ひけば董の花ぞまづ浮びけ  
る  
折にふれて（同三十七年）

戦の友のかばねをふみこえてすゝむこゝろや苦しかるら

む  
孝（同三十八年）

はゝそばの惠の露をうけながら子の道はまだつくしかね  
つゝ  
靖國神社に詣で（同三十九年）

神垣に涙たむけてをがむらしかへるを待ちし親も妻子も  
立志（明治四十一年）

國のため一たびたてしこゝろざしひるがへさぬがたのもの  
しきかな  
夜木枯（明四十二年）

こがらしの音にねさめて御垣もる人の寒さを思ふよはか  
な

歌（明治四十三年）

世にひろくしげるも嬉し人みなのもことをたねのやまと  
言の葉

遅日（明治四十四年）

きこしめすこと多かれば春の日もなほ短しとおぼしめす  
らむ

惜落花（明治四十五年）

みいとまのあらむ日またで櫻花をししくも風にちりみだれ  
つゝ

十一日

武田信玄卒す（天正元年）

元龜、天正といへば群雄諸國に群り起り、戦争繪巻そのもの、如き華かに又勇しき歴史を繰り展げた。武田信玄も亦その中の名だゝる武將の一人である。

信玄は甲斐の人、潜かに三河に入つて牛久保の附近から身を起し、初め今川氏と結んで織田信長と好を通じて先づ信濃の村上氏、小笠原氏の城を奪ひ、次いで上杉謙信と兵を構へた。勢熾んとなるや織田、徳川を一蹴して甲斐一國を領し、進んで關東の一角に覇を稱へて小田原北條氏とも屢々争つた。天正元年三河に兵を出して佐々木氏を屠り京都に入つて天下に覇を稱へんとして先づ野田に家康を攻めたが、この時

の一戦に遂に立つことが出来なくならうとはさすがの英雄も覺ることが出来なかつた。信玄は折柄の春の朧月に誘れて陣中の樓によつて無心に笛を吹き鳴してゐたが、この時徳川方の一勇卒菅沼某といふものが潜かに樓の下に潜み寄り鐵砲を構へて、矢庭に信玄を狙撃した。樓上の笛聲は速かに杜絶え、これに代つて起つたのは陣中の激しい物具の音だつた。それから間もなく武田勢は兵を引いて甲斐に歸つて行つたがやがてその子勝頼が後を襲ひ、遂に天目山の嵐と散つたのはこれから間もなくの天正十年三月のことであつた。私達はここにも哀れ憐ない榮枯盛衰の移り代りの跡をまさしくと見ることが出来るのだ。

十三日

幡隨長兵衛

と水野の喧嘩

男伊達なら先づ幡隨長兵衛だ。講談に芝居に今尙盛んに謳れてゐる侠客といへばこの人と清水の次郎長親分、國定忠治哥兒の三人だらう。

長兵衛は元江戸淺草幡隨院の住職の弟分だつたが寺を飛び出して巷に名を賣り、晩年には唐犬權兵衛とか放駒四郎兵衛などいふ生命知らずの乾兒の他名だゝる乾兒數十名を養つてこの廣い江戸でも押も押されもしない大親分になつてしま



つた。一方この頃旗本崩れの水野十郎左衛門、加賀甲斐守、坂部三十等が大小神祇祖といつて不良の結社を結び、天下の御直参を量り着て江戸市街を横行して市民を苦しめてゐたが、こゝに端なくもこの神祇祖と幡隨とが引くに引かれぬ男伊達の大騒動を惹起することゝなつた。

時は恰も春芝居の眞最中、場内は割れるやうな大人氣であつた。この時例の神祇祖水野支配下の勇みの一人、四天王金時と町奴の雷十五郎といふのが、ふとしたことで喧嘩をおつ始めてしまつた。雷十五郎は満座の中で四天王のため袋叩きに會つてゐるとそこへ群衆を掻き別けて現れたのが他ならぬ大親分幡隨の長兵衛だつた。おつと待つておくんせえ。たかゞ知れた町奴の三下ぐれえを相手にしたんぢや四天王の名が汚れませうぜ。さあ／＼この喧嘩はおいらが預つたといふものだ。どいた／＼と兩人の中へ割つて入ると、四天王も日頃の経緯から退くに退かれなくなつて幡隨に食つてかゝつた。そこで幡隨は「何をしやあがるんでえ。」と許り四天王の頭に一撃を加へたのでさあ日頃神祇祖から散々虐められて反感を抱いてゐる市民はこの時と許り四天王を散々辱しめて追返してしまつたのだが一方虫の納らないのは水野十郎左衛門だ。それから間もなく言葉を偽つて幡隨を自宅に招いたが、この時幡隨死ぬを覺悟で水野の宅に向ひて行つた。果せる哉卑怯な水野は幡隨を風呂場に擁して槍を振つて刺殺してし

まつた。この時幡隨はまだやつと三十六歳であつた。これが慶安四年四月のこと、芝居や講談でやると中々勇しいところだが、さて水野は幡隨の死骸を荒蕪に包んで神田川に捨て、しまつた。それからいよ／＼親分が水野に殺されたといふので乾兒達は幡隨の遺骸を淺草文珠院源空寺に葬ると共に、水野の邸に乘込んで目出度く親分の仇を報ずるといふのだがその仔細は講談に譲ることゝしよう。

十四日

立憲政體の大詔下る (明治八年) 先に早くも

文を以つて宣はせられて申さるゝには「廣く會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ」と。この時早くもわが國は政體として立憲制度を御採用遊さるゝ大御心を示し給うたのであつたが、諸般の制度調はず、未だその運びに至らなかつたのである。ところが明治八年四月十四日遂に立憲政體の大詔は煥發せられ、こゝにいよ／＼天下の政治の大道は明かに宣布され、國民等しく萬機に參與することが出来るやうになつたのである。  
朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム、幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ頼リ以テ今日ノ小康ヲ得タリ、願フニ中興日淺ク、内治ノ事將ニ振作更張スベキ者少シトセス、朕今誓文ノ

意ヲ擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ、立法ノ源ヲ擴メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ掌シ、又地方官ヲ召集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ圖リ漸次ニ國家立憲ノ政體ヲ立テ汝衆庶ト共ニ其慶ニ頼ラント欲ス、汝衆庶或ハ舊ニ泥ミ故ニ慣ル、コト莫ク又或ハ進ムニ輕ク爲スニ急ナルコト莫ク、其レ能ク朕カ旨ヲ體シテ翼賛スル所アレ。

又この年には一月に郵便爲替法が施行され、同四月には元老院大審院を置き、大詔の煥發されたのはこの時のことである。同五月には上等裁判所を置き、千鳥權太交換の約成り、同六月には地方長官會議召集され、又新聞紙條例及び讒謗律が制定され、同九月には江華島事件起り、この年十月に招魂場が招魂社と改められたのである。

香取神宮

千葉縣下總國香取郡香取町鎮座、伊波比主ノ命を祀り、姫ノ大神、武甕槌ノ命、天兒屋根ノ命を配祀する。併せて世に香取四所明神といふ。延喜式内の明神大社で、四度の官幣に預る。當國の一ノ宮で祭神は神代の昔からこの地に降臨あらせられた。日本書紀に「齋主神號齋之大人、此神今在手東國揖取之國」と見えたのはこの神である。神武天皇御宇十八年創建、弘仁三年制を立て、毎年二十年式年造營せらるゝを例となし、保延年間より元祿十三年の現社殿までの造營數十七回に及ぶといふ。大同元年神封七十戸を寄せ奉り位階は累進して承和六年從一位に進み、

嘉祥三年正一位に陞り給うた。公家の崇敬篤く、藤原攝關家より神寶神戸を奉ることしばしば／＼であつた。鎌倉時代、幕府及び東國の將士鹿島ノ神と共にその威烈を仰いだことは正和五年大禰宣中臣ノ實長の上文中に「日域無雙の名社、異國征伐の軍神」の語があることによつても知れるだらう。徳川家康が社領千石を奉り、先蹤に従つて神戸の民には課役を免じた。明治四年官幣大社に列し、攝社に鹿島新宮、匝理神社以上境内)奥ノ宮、側高神社(郷社)返田神社(村社)大戸神社(縣社)忍男神社、膽男神社、又見神社(以上境外にあり)末社に櫻太刀自神社以下境内に八社、境外に十四社あり、境内廣淵、正面に拜殿、中殿、神殿あり、廻すに瑞籬を以てし神樂殿、神饌所、樓門、水屋あり、攝末社まで之に連る。所藏の寶物中銅製海馬葡萄鑑一面は國寶に指定せられてゐる。古來當社は香取、鹿島に併稱せられ、その儀式祭祀等大體鹿島神社と同じである。神職には香取氏がその上首として古來より聞えてゐる。祭祀は例祭(四月十四日)の外、特殊神事に神幸軍神祭(四月十五日)御田植祭(五月五日)大饗祭(十一月三十日)内陣御神樂(十二月四日)その他春季祭、秋季祭、星鎮祭、賀詞祭、團子祭等がある。



### 日吉神社

滋賀縣近江國坂本村坂本鎮座、祭神大山咋ノ命、世に山王といふ。延喜式内の名神大社で又二十二社の一に列してゐる。神代の昔より比叡山上に鎮座あつてこの國の地主神であつたが、延暦年中僧最澄が延暦寺を建つるに及んで大和國大三輪神を山上に勧請してその鎮守となし、これを大比叡、又は大宮といふのに對し、當社を山下に奉遷し、小比叡又は二ノ宮と稱するやうになつた。大同元年神封二戸を定め、後又十戸を加へた。神階は貞觀元年從五位下より從五位上に進み後屢々加階あつて承安二年從一位となり、壽永二年正一位に陞つた。後三條天皇が、延久三年十月初めて當社に行幸あり爾來歴代屢々行幸啓あり建久三年初めて臨時祭を行ひ、建保元年より臨時祭に殿上の使があつてこの頃より恒例の祭祀となつた。凡そ所管の神領の如きは往古は本國及び畿内、東海、東山等諸國にあるもの八十餘所に及んだといふ。神事には今も古式祭(一月一日)大戸開神事、三月一日神輿揚、四月三日大神渡御、同十二日午神事、同十三日神輿入、同十四日大神遷幸、同十五日酉ノ神事等の總稱なり)と稱して連日に亘る壯大な祭儀がある。例祭(四月十四日)が果て、後、七社神輿出御の次第の如きは就中壯觀を極め(ヒエマツリ)當社の所謂神輿振りは古來人心を聳動したもので甚だ有名である。所蔵の神輿三面は、今國寶に指定されてゐる。當社は攝社十二、末社二十八あり、

り、舊くは上七社、中七社、下七社の名あり、總稱して山王二十一社といふ。社殿の構造は所謂聖帝造りで天正十四年の建造にかゝる。今樓門及び攝社大神神社、樹下神社、宇佐宮、白山姫神社の本殿及び牛尾神社、三宮神社、末社東照宮の本殿、拜殿又日吉三橋(本宮橋、走井橋、太神橋)東照宮橋等と共に特別保護建造物に指定されてゐる。明治四年官幣大社に列せられた。

### 十 五日

#### 狩獵禁止

四月十五日から十月十五日まで狩獵が禁止される。この期間禁を犯したものは嚴重な罰則が適用される。

#### 徴兵検査

國民皆兵は日本の生命である。國民悉く天皇陛下の赤子である以上、一事ある場合はその任に堪へないものもある。徴兵検査といふものが施行され、體格操行とも優良なる者が選ばれて國家の壯丁となるのである。徴兵検査は毎年四月中旬より各師團管下に於て開始される。又徴兵令は明治五年に制定され、その後現行法の如く改正され今日に至つたものである。

#### 今日の出来事

明治三十八年の今日、皇軍通化を占領した。同四十年の今日は救

世軍大將ブリス、横濱着で來朝した。大正二年の今日は米國カリフォルニア州に排日的外人土地所有禁止問題が起つた。大正九年の今日は大學令により明治、法政、中央、日本、國學院、同志社の各大學が認可された。

### 平安神宮

京都府山城國京都市上京區岡崎町鎮座、桓武天皇を奉祀する。天皇平安京を定めたまひし以來、明治二十八年は實にその一千百年に相當するので京都市民は聖德を追慕し奉り鴻圖を欽仰して奠都記念祭を營み、同時に天皇を永遠に奉祀せんと企て、明治二十七年聽許を得て平安神宮と稱して官幣大社に列し、直ちに創建に著手したものである。二十八年社殿竣成、同年三月十五日勅使が參向して鎮座式を擧げた。

社殿は神殿を除く外往古の大内裏を模し、拜殿は大極殿、神門は應天門を模造し、更に歩廊あり、蒼龍、白虎の二樓あり、龍尾壇あつてその構造恰も當代にあつて平安城を拜するが如き觀あり、例祭は毎年四月十五日、その外五月四日武德祭を行ひ、十月二十五日神幸式を行ふ、時代祭と稱して有名である。

### 建部神社

滋賀縣近江國栗太郡瀬田村神領鎮座、祭神日本武尊、相殿に天明玉ノ命、權殿に大己貴ノ神を祀る。初め日本武尊が近淡海國野州國造の祖、意富多牟和氣の女布多遲比賣を娶つて生みたまへるみ子を稻依

別王といふ。その後王の裔近江國犬上君が武部君となつて此の地に蕃衍したので詞を設け祖神として永く奉祀したものが即ち建部神社であるといふ。延喜式内の明神大社で、また當國の一ノ宮である。神位は貞觀五年正六位より從五位下に進み、後屢々加階あり、應和二年正三位に進み、後延久四年正一位動一等に上り給ふ。古來武神として武門の崇敬篤く、源頼朝は東下の際、社頭に通夜して行路の祈を申したることなど平治物語に見えてゐる。明治十八年官幣中社に列し、三十二年大社に列した。攝社に聖宮神社、大政所宮神社、藤宮神社、若宮神社等あり、末社に行事神社、弓取神社、箭取神社、藏人頭神社等あり、神寶中女神坐像一軀並に小女神坐像二軀は國寶に編入せられた。祭祀は例祭(四月十五日)の外特殊神事の中に護國祭(二月四日)禰立祭(三月三十一日)挿秧祭(六月十五日)納涼祭(八月七日)納涼神幸式(八月十七日)拔穂祭(十月十五日)向火神事(十一月二十六日)等あり、納涼神幸式は神幸の前夕神輿出御、宵宮祭奉仕、當日午前御船祭、午後五時頃より神輿を昇き出し、瀬田川に至り豫め辨備の御神輿船(午前御船渡執行のもの)に移して神職、俗人世話方等各船に分乗する。下流約一里の御旅所に至り素盞奉獻(御旅所の氏子献備が古例となつてゐる)即夜還幸する。

### 熊野坐神社

和歌山縣紀伊國東牟婁郡本宮村鎮座、家津御子を祭る。延喜式内の名神大社で



崇神天皇の御宇の創建にかゝり、稱して熊野本宮といふ。新宮速玉神社、熊野夫須美神社（現稱熊野那智神社）と併せて熊野三所又は三山とも稱し中世以後末社若王子以下禪師宮、聖宮、兒宮、子守宮、一萬十萬宮、勸請十五所、飛行夜叉、米持金剛童子を加へて十二所權現ともいふ。神階は累進して延喜七年正二位に陞り給ふ。國內帳には正一位と見え、上皇古來靈驗最も著しく、皇室の御崇敬その極に達し、上皇女院等御幸の多かつたことは、史上に顯著なるところで、就中御白河上皇は御幸合せて二十三次に及び給うた。而して他の二山と共に紀伊國の田島、庄園等を屢々加増せられたことは史上に散見するところである。その他大臣以下庶民に至るまで争つて參詣し『蟻の熊野詣』の謠さへ出来るやうになつた。明治四年國幣中社に列し、大正四年官幣大社に進列した。當社の社殿は明治二十二年十津川の大洪水に流失し、一時舊態を一掃したが、二十四年造營成つて四殿（第一殿熊野牟須毘ノ神、第二殿速玉男ノ神、第三殿家津御子ノ神、第四殿伊勢大神）を建てた。往時は之を上四社とし、中四神、下四社と合せて所謂熊野十二神を祭つたものであるといふ。本社から發行する護符に牛王あり、これを鳥の牛王ともいふのは鳥は古來この社の神傳であるといはれ、今も一月七日八咫鳥の神事といふのを行ふ。

た。本社の上社には神殿なく、後方の石窟を以て神座とし、その四隅に御柱を立て、ある。これは他に例のない所である。御柱は七年毎に立て替るのを例としてその祭儀を式年御柱祭といふ。下諏訪社は毎年八月一日春宮より秋宮に還御（オフネマツリ）二月一日又春宮へ還御の例である。凡そ祭祀は上下兩社を通じて古來年中七十餘度と稱せられ、今も尚弼神事、御射山神事、蛙狩神事、御頭神事、田植神事、田遊神事等、農桑、田獵に關する特殊神事の多いのは、又以て祭神の遺徳を徵するに足りる。當社の祠官は往昔は七十餘人もあり、世々神氏（上社）金刺氏（下社）を以て大祝となす。神氏は即ち建御名方ノ命の神孫である。又上社に神長官、下社に武居祝を置き、別に上下社に各々彌宜、大夫、權祝、擬祝、副祝を置き、之を五官といつたけれども維新後何れも解職となつた。當社の社殿、祭祀、神異等を記したものに諏訪大明神繪詞といふものがあつて精細を極めてゐる。本社は上下社を通じて攝末社に大國主神社以下十六社あり、寶物夥多ある中に絲卷太刀（無銘社傳綱切太刀）一口、絲卷太刀（銘忠吉）一口は國寶に指定された。諏訪神社の分祀は古來全國に亘つて最も多く縣社以下の全國諏訪神社は四千八百五十九社の多きに達するといふ。

### 金鑽神社

埼玉縣武藏國兒玉郡青柳村二ノ宮鎮座  
祭神天照大神、素盞鳴ノ命、相殿に日本

長野縣信濃國諏訪郡中洲村、下  
諏訪町鎮座、中洲村にあるの上  
社といひ本宮、前宮、同郡宮川村にあり）の二殿に分れ、建御名方ノ命を祀る、下諏訪にあるのを下社といひ、春宮、秋宮の二殿に別れ、八坂刀賣ノ命を祀り、併せて諏訪神社といふ。延喜式内による明神大社で當國の一ノ宮である。その創記は詳ではないが、持統天皇の御宇御使を遣して須波ノ神を祀らしめ、初めて神樂の儀あり、大同元年神封七戸を寄せ、承和九年無位勳八等、南方刀美ノ神に従五位下を奉じ、次いで八坂刀賣ノ神に従五位下を奉り、爾來累進して天慶三年建御名方ノ命を正一位に、永保元年八坂刀賣ノ命を正一位に叙し奉つた。古來武事の守護神として尊崇篤く、日本第一大軍神の稱あり、神功皇后征韓の役に際し、當社と住吉神とを御船に祭り給ひ、坂上田村麿は東夷征伐の時靈驗があつたので凱旋の後天聽に達し、即ち諏訪郡の田島、山野各千町及び毎年稻八萬四千束を祭料に充て奉つた。源義家も亦寄進するところあり、治承四年甲斐の武田信義、源頼朝に黨し平家と信濃に戦ひ、諏訪ノ神の加護によつて利を得たので上社に平出宮所、下社に龍市、岡仁谷の二卿を寄進し、承久三年將軍家より越前國宇津目保を寄進した。降つて徳川幕府の時上社に千石、下社に五百石の社領を寄進した。明治四年國幣中社に列し、二十九年官幣中社に陞り、大正五年更に大社に進列し

### 諏訪神社（上社）

長野縣信濃國諏訪郡中洲村、下  
諏訪町鎮座、中洲村にあるの上  
社といひ本宮、前宮、同郡宮川村にあり）の二殿に分れ、建御名方ノ命を祀る、下諏訪にあるのを下社といひ、春宮、秋宮の二殿に別れ、八坂刀賣ノ命を祀り、併せて諏訪神社といふ。延喜式内による明神大社で當國の一ノ宮である。その創記は詳ではないが、持統天皇の御宇御使を遣して須波ノ神を祀らしめ、初めて神樂の儀あり、大同元年神封七戸を寄せ、承和九年無位勳八等、南方刀美ノ神に従五位下を奉じ、次いで八坂刀賣ノ神に従五位下を奉り、爾來累進して天慶三年建御名方ノ命を正一位に、永保元年八坂刀賣ノ命を正一位に叙し奉つた。古來武事の守護神として尊崇篤く、日本第一大軍神の稱あり、神功皇后征韓の役に際し、當社と住吉神とを御船に祭り給ひ、坂上田村麿は東夷征伐の時靈驗があつたので凱旋の後天聽に達し、即ち諏訪郡の田島、山野各千町及び毎年稻八萬四千束を祭料に充て奉つた。源義家も亦寄進するところあり、治承四年甲斐の武田信義、源頼朝に黨し平家と信濃に戦ひ、諏訪ノ神の加護によつて利を得たので上社に平出宮所、下社に龍市、岡仁谷の二卿を寄進し、承久三年將軍家より越前國宇津目保を寄進した。降つて徳川幕府の時上社に千石、下社に五百石の社領を寄進した。明治四年國幣中社に列し、二十九年官幣中社に陞り、大正五年更に大社に進列し

武ノ尊を配祀す。延喜式内の名神大社であり、社傳にいふには當社の創立は景行天皇の朝にあり、日本武尊御東征の際、伊勢神宮に詣り、御叔母倭姫ノ命より草薙ノ御劍に副へて賜つた火鑽袋を後になつてこの地の御室獄に藏めたの由來するといふ。故に本社は御室獄を以つて靈代とし、別に神殿を設けないことが古例であるといふ。貞觀四年官社に預り從五位上に進み明治十八年縣社より昇格して官幣中社に列した。例祭（四月十五日）の外に福迎（一月三日）といつて歳首に庶民參拜して家運長久、福徳圓滿を祈念する神事、又筒粥神事（一月十五日）火鑽神事（十一月二十五日）等があり、多寶塔は一乘院の遺物で今特別保護建造物に指定されてゐる。

### 生田神社

兵庫縣攝津國神戸市下山手通鎮座、稚日女ノ尊を祀る。式内の名神大社に列し月次、

相嘗、新嘗の三祭に預り、神階は貞觀十年從三位に進んだ。本社の由來は神功皇后が韓國より御凱旋の時神託に従ひ稚日女ノ尊を活田ノ長狭國に祀り給ふに初るといふ。日本書紀によると、神功皇后新羅を討ち給ひ、明年春二月穴門豊浦宮に移り、難波に向はせらるゝ時、海中を廻りて進む能はず、更に務古ノ水門に還りて之を卜ひ給ふ、稚日女ノ尊誨へて宜く、われは活田、長狭ノ國に坐さんと、因りて海上五十狹茅をして祭らしめ給ひし由が見えてゐる。稚日女ノ尊は舊事記に天照大神の御妹と見えてゐるが活田ノ長狭ノ國とは即ち今の鎮



座地を指したものであらう。明治十八年縣社より進んで官幣  
小社に列し、二十九年更に官幣中社に昇格した。社殿の背後  
の森林は所謂生田ノ森で神社の境内に属してゐるが社地が廣  
く舊蹟が多い。籬の梅は源平合戦の時梶原景秀が手折つて籬  
に挿したもので、その他に梶原ノ井、執盛の萩、辨慶竹、神  
功皇后釣竿の竹、八丁梅などあり、攝末社に住吉、八幡、諏  
訪、日吉その他の諸社があり、特殊神事中千燈祭(八月十五  
日)には本殿透扉前に燈架を設け、千箇の燈燭を列ね、參拜  
者に隨意に點火せしめる舊儀があり、又當社は往古より新年  
の注連繩に一切門松を用ふることなく總て葉付竹を用ひ且本  
殿と拜殿との中間に杉山を築く風習がある。例祭(四月十五  
日)の神饌に鱒子<sup>マス</sup>を献ずることは他に例を見ない。陰曆八  
月二十日には神輿和田岬に渡御の儀がある。

### 浅間神社

山梨縣甲斐國東八代郡一宮村一宮鎮座、  
社で又當國の一ノ宮である。垂仁天皇御宇八年初めて神山の  
麓に祀り貞觀七年今の地に遷座したといふ。徳川時代に朱印  
社領二百三十四石を有した。明治四年國幣中社に列し、攝社  
山宮神社本殿は今特別保護建造物に指定されてゐる。又所藏  
の紺紙金泥般若心經一卷(天文十九年武田晴信甲斐の國土安  
穩萬民和樂のため後奈良天皇の宸翰を請うて奉納したもの)  
國寶に入つてゐる。特殊神事に毎年四月十五日例祭を舉へて

後、行程五里に亘る大神幸式(カワヨケマツリ)がある。

### 伊佐須神社

兵庫縣淡路國津名郡多賀村鎮座、伊邪  
諾ノ尊を祀る。多賀大明神又天地大明神  
といつて延喜式内の明神大社で當國の一ノ宮である。日本書  
紀に『幽宮を淡路之洲に構へ、寂然長く隠れ給ふ』由記され  
てゐる。即ち本社の起源であつて、その鎮座は遠く神代の時  
にある。大同元年神封十三戸を定め、後又五戸を加へ、貞觀  
元年一品を授け奉りしことが國史に見えてゐる。明治十八年  
四月二十二日、國幣中社から官幣大社に進み、その日を以つ  
て例祭日と定めた。特殊神事中に粥占祭(陰曆正月十五日)  
田植祭(六月芒種日)除虫祭(半夏生の日)は共にその年の  
豊凶を卜し、蝗蛾の害を攘ふ神事である。その他夏祭(七月  
望日より望日まで)秋祭(十月九日、十日)等がある。

### 十六日

### 大阪市の大火

(明治四十五年)

今から二十餘年前

の今日今日は大阪市  
に大火があつた日で、この日午前一時二十分南區難波新地五  
番地から發火し折柄の西南風に煽られて四方に燃え擴がり全  
大阪市の警察消防隊の出動は固よりのこと、同市憲兵隊より  
第八聯隊の出動を求めた程であつたが火は瞬く間に阪町、南  
坂町、河原町二番町、下寺町、松屋町、谷町、平野町を焦土

と化して尙も燃え續けらうとしたのでこの時更に歩兵第三十  
七聯隊より一個中隊の出動を乞うて鎮火に努めたのでさしも  
の猛火も十時頃火勢次第に衰へ始め、十一時頃に至つて全く  
鎮火した。この大火の損害實に一千五百萬圓、燒失戸數四千  
五十五戸、燒失區域十八ヶ町、死者行方不明者各數名を出し  
負傷者の數は夥しいものであつた。一方府及び市に於ては直  
ちに救護班を組織して罹災者の救護に努め、住友の五千圓若  
下の一千圓を初め多くの義捐金が集つた。大阪市大火の報一  
度び天聽に達するや、畏くも天皇陛下には罹災者の上を御軫  
念遊され、御救恤金を御下賜あらせらるゝと同時に特に侍從  
を御差遣遊され實況を調査せしめると共に罹災者に對して御  
慰問の御言葉を賜つた。

### 十七日

### 徳川家康薨す

(元和二年 同日東照宮)

徳川家康に

對しては古今  
の歴史家がとかくの評をなすが、家康の如きは實に古今不世  
出の英雄といつても過言ではなからう。身を微賤の間に立て  
あらゆる辛苦を嘗めて遂に天下を統一した彼の如きは一武將  
として見るには餘りに器が大き過ぎる。彼は武將と見るより  
政治家として見た方がその眞面目を捉へることが出来るかも知  
れない。又一面彼は『人の一生は重荷を負うて遠き道を行く

が如し、急ぐべからず。』といふやうなことをさへいふ苦勞人  
であつた。こゝに家康の價値がある。

家康は三州岡崎城主徳川廣忠の第一子で、天文十一年十二  
月二十六日に生れた。この頃廣忠の勢力は微弱なもので駿府  
には今川あり清洲には織田があつて折を窺つては三河を吞ま  
んとして待構へてをつた。そこで廣忠は今川氏に援を求めて  
織田氏の勢を防いでゐたがこの時未だ六歳にしかならぬ家康  
は諸將士の質子として駿府に捕はれの身となつてゐた。永祿  
三年に義元が桶狭間の一戦に戦死するや、家康は信長と誼を  
通じて甲斐の武田信玄と兵を合せその名が次第に知られるや  
うになつた。次いで信長が本能寺に滅んで秀吉が崛起する頃  
になると家康も亦駿、遠、參の三州を領して既に昔日の家康  
ではなかつた。天正十二年四月には信雄と兵を合せて秀吉と  
戦つた。この時秀吉の軍は犬山にあり、この數十二萬五千、  
家康は一萬八千の兵を率ゐて小牧山に陣してゐた。この時秀  
吉は遙かに小牧山を望み見て歎じていふには、『あゝ我遅れ  
たり。』といつたさうである。秀吉は戦はざるに早くも家康の  
ために膽を吞まれてしまつたのだが、この時池田信輝がいふ  
には『家康は精兵をすぐつてこゝへ來てゐることだから、三  
河は必ず空虚があらうからその隙に三河を衝くことにしたら  
よいでせう。』といつたので秀吉も大いに賛成し、直ちに信輝  
に森長可、堀秀政、長谷川秀一の諸將と兵三萬を授け三州岡



崎に向はせたがこの時家康は早くも敵の作戦を知つて、自ら兵四千を率ゐて信輝の後を追ひ、稻葉に於て遂に追ひ付いて一戦を交へ、秀政、秀一を先づ走らせ更に勝川に進み長湫に出で、信輝と雌雄を決したが、この時勝つた家康勢は敵勢を蹴散してその將信輝を永井直勝が倒し、續いて安藤直次がその首を取つた。こゝに勢付いた軍兵共は一舉にして秀吉の旗本を衝かうとしたがこの時家康は諸將を制して小幡に退いて守を固めた。秀吉は信輝等の敗戦を見て自ら乗り出し一戦を交へようとして来て見ると早くも家康は小幡の守りを固めてゐるのでこゝにさすがの秀吉も家康の智謀に舌を捲き、遂に和を講じて兵を還した。慶長三年八月十八日秀吉薨するや家康の勢益々盛となり、殊に石田三成、小西行長等は家康を憎むこと甚しく慶長五年遂に會津の上杉景勝と謀つて兵を擧げたが關ヶ原の一戦に脆くも大阪方の大敗となり、こゝに天下は全く徳川氏によつて統一されてしまつたのである。これが即ち慶長五年九月のことである。同八年には征夷大將軍に任ぜられ、元和元年には大阪城を屠つて秀頼を滅し、同二年三月には太政大臣となり、この年四月十九日年七十五歳を以つて駿府城に薨じたのである。遺骸は一時久能山に葬つたが同三年日光山に改葬し、東照大権現といふ神號を上つた。今の日光東照宮がそれである。

れを見ても彼が如何に休戦を焦つてゐたか判るだらう。二十一日はわが國より休戦條約に對する要求條件を提出したがこの時李鴻章はその餘りに愾烈なのに驚愕し暫く熟考の餘地を與へられんことを乞ひ、二十四日の第三回會見を約束した。

二十四日、李鴻章が會見を終つて旅館に當て、ある引接寺に歸らうとするや、その途上に於て暴漢のために狙撃されて顔面に負傷する等の不祥事が出来したのでこのためわが國でも大いに讓歩し、無條件休戦を約して三十日に至つて遂に休戦條約を締結したのである。

これより先參謀總長有栖川宮熾仁親王殿下には薨去あらせられ、御後任として近衛師團長小松宮彰仁親王殿下が御就任あらせられ、新に征清大總督として金州に向つて御進發あらせられ、講話談判の眞最中たる四月十四日には運送船三十艘に陸海軍幕僚を満載して雄姿堂々馬關海峡を壓して通過した。この有様を春帆樓のガラス越に眺めてゐた李鴻章は膽を潰し、こゝにわが要求を容れて和議全く成立したのである。時に明治二十七年四月十七日のことであつた。因に日清講和條約の要旨は次のやうである。

- 一、清國は朝鮮の獨立を承認すること
- 一、遼東半島及び其の屬島と臺灣及び其の屬島澎湖列島を永遠に日本に割讓すること

### 日清講和條約成る (明治二十八年)

國力を磨し  
て戦つた日清  
皇紀二五五五年  
戦争は、清國側の豫想に反して皇軍の連戦連勝、遂に威海衛の一戦によつて完全に死命を制せられてしまつたので早くも天津海關稅務司獨逸人デツドリグをわが國に遣はして講和談判を開かせようとしたけれどもこの時わが國に於ては彼の無責任極まる對度を難詰してこれに應じなかつた。次いで李鴻章は更に駐清米國公使デンビーを仲介者として米國に仲裁を乞ひ、一方談判委員として總理衙門大臣戶部左侍郎張蔭桓、兵部右侍郎署湖南巡撫邵右濂を命じて我國に派遣して来た。そこでわが國に於ては明治二十八年一月二十八日大本營に於て御前會議を開き、越えて三十日に至つて内閣總理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光を特命全權大臣に任命し、二月二日彼我全權大臣が委任狀査問の交換をした結果、清國全權はその資格を缺除してをることを發見したのでこゝに再び斷然談判の開始を拒絶してしまつた。

これより先旅順は既にわが手に歸し今又威海衛を屠られ提督丁汝昌が自殺してしまつたので清國は大いに焦り出し、遂に直隸總督内閣大學士李鴻章自ら出馬し、三月十九日馬關に到着した。この時わが國に於ては伊藤博文及び陸奥宗光をして同じく二十日馬關の春帆樓に於て會見せしめたがこの日李鴻章は先づ何を措いても休戦を承諾せんことを求めたが、こ

- 一、軍費賠償金として庫平銀二億兩を支拂ふこと
- 一、新に通商航海條約及び陸路交通貿易に關する約定を締結し更に日本の爲に沙市、重慶、蘇州府、杭州府を開き揚子江の上流及び吳淞運河に日本汽船の航行を許すこと

### 東照宮(久能山)

靜岡縣駿河國安部郡久能村根古屋鎮座、徳川家康の靈を祀り相殿に織田信長、豊臣秀吉を配祀する。家康の駿府に薨するや、大内記榊原照久、遺命を奉じて久能山に葬つた。乃ち神龍院梵舜の考案によつて社殿を造り、本殿、拜殿、巫女屋、神供所、舞殿、神庫、玉垣、樓門を完成した。元和三年參議萬里小路孝房、勅使として東照大権現の號を賜ひ正一位を贈る。次いで廟所を下野國日光山に移すの議があつたが、本社は舊によつて日光と並んで祭祀を營み、元和六年將軍秀忠當國有渡郡に於て社領三千石を寄進した。初め榊原照久が社職であつたがその子照清の時辭して總門衛となり、子孫世々その職を奉じ、與力八騎、同心三十人これに附屬してこの地を護つた。社殿の結構日光に比すれば固より遜色があること勿論であるけれども、金碧燦爛、東海の一靈所たるを失はず、社殿



に廟所があり、圓塔方蓋の石造（高さ一丈五尺）で西に面したのは家康の遺命に基くといふことである。廻すに石欄（長さ二十五間）を以てしその前方に並列せる銅石の燈籠六十七基は當時諸侯伯の献進せる所のものである。社殿中、本殿、拜殿、唐門、渡廊、玉垣等は今特別保護建造物に指定されてゐる。寶物館には種々の寶物を藏する中に、東照公の遺品二百數十點、歴代將軍の武具、その他書畫太刀類等國寶に指定されてゐる。明治六年縣社に列し二十一年別格官幣社に昇格した。

十八日

古今和歌集成

（延喜五年） 卷二十卷あつて、

勅選和歌集である。收むるところ淳仁天皇天平寶字三年萬葉集選定後より延喜五年四月まで殆んど百五十三年間の和歌を集録し、千百十二首の歌を収め、巻頭に紀貫之の序文があり一に續萬葉集ともいふ。

吉田神社

京都府山城國京都市上京區吉田町鎮座、祭神四座、建御賀豆智ノ命、伊波比主ノ命、天之子八根ノ命、比賣ノ神を祭る。神殿四宇、第一殿より順次に四柱を鎮祭し奉る。創建は貞觀元年、藤原山陰の大原野神社を奉遷せるに起る。春日神社と同體である。蓋平城京に

小國神社

靜岡縣遠江國周智郡一宮村五川鎮座、祭神小國ノ神、小國天神と稱す、延喜式内の

明神大社で當國の一ノ宮である。もと本宮山に鎮座せられたが、欽明天皇御宇十六年、奇瑞によつて勅幣を遣されこの地に遷された由である。神階は承和七年從五位下を授け、貞觀十六年從四位上に進め奉る。徳川氏に至り慶長八年社領五百九十石の朱印を付し、その他本殿、末社、廻廊、樓門等數次の造營があつたといふ。明治六年國幣小社に列した。例祭四月十八日、神輿渡御あつて還幸の後十二段の舞樂を奏す。大寶元年以來の恒例だといふ。その他新始祭、弓始祭等の古式あり、末社に宗像社、八王子社等あり、奥宮警中神社は本社を距る一里半、本宮山（標高一八〇八尺）の頂にある。

十九日

賤ヶ岳の七本鎗

（天正十一年） 賤ヶ岳の七本鎗

中でも殊に勇しい一枚である。では七本鎗、三太刀の人々の名はと問れてすぐに答辯が出来たら偉いものだ。先づ常識試験にでも早速出さうな題だから先つその名から擧げて置かう。曰く加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、臨坂安治、片桐且元、精谷武則の七人、三太刀とは石川貞友、櫻井左吉、伊木遠雄の三人である。

須佐神社

鳥根縣出雲國飯石郡東須佐村宮内字清地鎮座、須佐能袁ノ命を祭る。もと須佐大宮と稱し、延喜式内の神社である。社地は出雲風土記の所謂須佐能袁ノ命の御魂を鎮め置き給ひし處で、この神を祭つた神社中最も古き由緒を傳ふと稱せられる。明治六年縣社に列し三十二年國幣小社に列した。攝末社に天照神社、東末神社、西末神社、稻荷神社、三保神社（以上境内）嚴島神社、須賀神社（以上境外）あり。尼子晴久奉納の兵庫鎮の太刀（中身無銘）一口は今國寶に指定されてゐる。特殊の神事に、朝勤祭四月十八、十九日、造酒會神事（九月九日）飛馬神事（九月十九日）切明神事（八月十五日）等あり、神裔須佐氏は歴世相承けて當社に奉仕し、始祖八鳥篠命以來實に當代に至るまで

七十六代の久しきに及ぶといふことである。あつては春日に祭り長岡京にあつては大原野に祭り平安京にあつては吉田に祭る。皆以て帝都の鎮護となし給ひしに基く當社は皇室の外藤原氏の祖神たるを以て、中世以來甚だ殷盛を極め、祭祀には勅使を差遣し、幣帛を奉獻すること歴代絶えず、嘉承元年に至り、式内社に準じて四度の官幣に預らしめ二十二社の一に列した。吉田氏社内に齋場所並に八神殿を設くるに及んで益々衆庶の信仰するところとなつた。社領は徳川時代朱印を以て高五百九十石と定められ、明治四年官幣中社に列した。攝社に若宮神社、神樂岡社あり、末社に今宮社須賀社、太元宮、東神明社、西神明社、東諸神社、西諸神社神龍社、三社社、稻荷社、天満宮、小稻荷社あり。太元宮は所謂齋場所であつて伊勢兩宮を始め式内三千一百三十二座に天神地祇八百萬の神を祭り、この社一度の參詣は日本六十餘州の神祇に賽したると同一の効驗ありと唱へたものである。もと卜部家の邸内にあつたものを文明十六年兼俱の奏請によつて現今の地に遷座したもので神祇官の八神殿をもこの社内に移し祭りしことあり、毎年節分の夜には除厄の祈禱を請はんとして數萬の男女群集し、頗る雜沓する。この神殿は茅葺八角造、比類なき構造として今特別保護建造物に指定されてゐる。



再び兵を擧げて勝家に呼應する旨の注進があつたのでこの月十七日秀吉は兵を別つて自ら大將となり再び信孝を大垣に攻めた。ところが近江に於ては大將秀吉の不在と見て取るや佐久間玄蕃盛政は兵一萬五千を率ゐて長濱を襲ひ、散々守備を蹴散して清秀を殺した。時に天正十一年四月十九日の事であつた。翌二十日秀吉はいよ／＼岐阜城に攻めかゝらうとして勇躍してゐるところへ正午頃近江の敗戦の注進があつたので遽に兵を近江に還した。この時秀吉は途中大聲に叫んでいふには『われ大捷を得たり。佐久間柴田を捕虜にせよや。』と。ゆく／＼一萬五千餘騎を得てこの日の暮近く賤ヶ岳に到着した。この時勝家は不意を打たれて浮足立つたところを弓鐵砲など仕掛けて追撃すれば、この時例の七本鎗や三太刀の面々もこゝを先途と獅子奮迅の勢ひで斬り捲り衝き捲つたのでさすがの柴田勢も總崩れとなつて越前國北の庄へ向つて落延びて行つた。

## 二十一日

**徳川家光薨す**（慶安四年 皇） 三代將軍家光は徳川によつて築かれた徳川の礎を三百年泰平の大磐石に据ゑたのはこの人の人格と手腕の資であつた。『賣家と唐様に書く三代目』——三代目は事程左様に大切なものであるが、家光は生

れながらにして天下の大將軍たる資格を具へて第二代將軍秀忠の第二子と生れ、幼名を竹千代といひ、賢婦人春日局に養はれたのはこの人であつた。慶長九年三月十七日征夷大將軍に任ぜられ、内大臣從二位兼淳和寺學兩院の別當に補せられるや同月天下の諸侯を江戸城に集めて誓約をなさしめていふには『わが祖先の家康は卿等の力によつて天下を平定したので卿等を譜代の代名として待遇したのであるが、自分は生れながらにして將軍として生れたのであるから以來外藩譜代共君臣の禮を以つて遇することとする。もしこれに對して不平のあるものは三年の猶餘を遣はすから直ちに國へ歸つて戰の準備をなし家光が出向いて行くのを待つがよからう』といつたけれども諸侯は悉くその威に怖れをなして皆歸順を誓つた。そこで家光は改めて佩刀一口づゝ賜うたがこの時も亦家光は平服を着して刀を帯びず『さあ、予の前で遠慮なく中味を調べて見るがよい。』といつたので諸侯は再び度膽を抜かれてしまつた。家光はこのやうな剛腹の將軍であつたが一方又心を政治に用ひ、以後徳川氏に對して敢へて反抗する者も無かつたのである。

## 名工左甚五郎歿す

（寛永十一年 皇） 工といへば

かときへ思はるゝ程この人は世に有名な人である。この人は天正年中から寛永年間にかけて日本彫刻界に活動した人であ

つた。常に左手を使つて名彫刻を刻んだので左甚五郎の名があつた。甚五郎の父は伊丹正利といつて足利氏の臣であつたが、永祿年中の亂を避けて明石に住んでゐたがその妻が四十八歳の時麻耶山に祈つて生んだのが他ならぬこの甚五郎であつた。幼き頃の名を刀彌松といひ、十三歳の時父を失ひ、その後母に伴れて伏見に住んでゐたがやがて番匠與平次といふものゝ弟子となつて彫刻を學ぶやうになつた。早くからその天才を顯し、今日でも幾多の傳説を残してゐるが多くは後人の附會したものが少くない。天正年中聚樂第及び桃山城等の工事に携り、承應、欄間等の彫刻をなし、又日光東照宮に神技を發揮したことは有名な話であるが、この他にまた全国各地の神社佛閣に妙技を殘してゐる。甚五郎は極めて天才肌の人で性資寡慾、而も度量の潤達な人で彫技と共にその人格も讃へられたものが寛永十一年四月二十日年四十一歳で歿した。

## 二十一日

**天一坊天下を騒す**（享保十四年 皇） 講談で名高徳川天一坊が遂に處刑されたのは今から二百年程前の今月今日のことである。紀州和歌山に原田加傳次といふものがありその子に寶澤といふものがあつたがこの頃既に父の加傳次は歿し、城下の平澤村感應院の修験者に養はれてゐた。一方こ

の村にお三といふ取上げ婆があつたが、この婆の娘に澤の井といふ女があつて、曾つて殿中に女中奉行に上つてゐた時紀州公の次子徳太郎將監といふものが手をつけて妊娠した。そこで徳太郎は後日の證據として自筆の書及び短刀を澤の井に與へて自宅に歸らせたが不幸男兒を産み落すと共に母子共に死んでしまつた。話はこの間十數年經過して、ある日のこと寶澤がふとこのお三の家を訪ねて話が娘のことに及ぶと、お三は泣きながら右の次第を語つてからいふには『實は今八代將軍を繼いでおゐでなる吉宗公こそはその時の徳太郎君である』といつて例の證據の二品を取出して來て寶澤に見せたので、寶澤はこの時惡心を起してお三及び感應院を殺して己れも亦死んだことに装つて故郷平澤村を脱れ、熊本に出て暫く行方を晦し、やがて江戸に上つて一芝居打たうと決心した。この時、盜賊赤川大膳及び藤井左京といふものを共謀者にして先づ大阪に上つた。この頃美濃の谷汲のものと天忠といふ大賊があつたがこやつが又もや一味に加り、自分の弟子の天一といふものを殺して寶澤に天一を名乗らせこゝにいよつて盛んに諸侯を籠絡したが一人として彼の素性を看破するものもなかつた。こゝに味を占めた一味の徒黨は遂に將軍のお膝許たる江戸に押上つて大芝居を打つことゝなつたのだが、この時老中松平伊豆守は先づ天一の素性に極めを付けて



てその身を隠した所と稱し、今もその舊蹟を存してゐる。

二十一日

紀之國屋文左衛門歿す

(享保十九年 皇紀三三九四年)

『沖の暗いのに白

帆が見ゆる、あれは紀之國蜜柑船』と當時の俗語にまで諷ひ  
囃された紀之國屋文左衛門といふ人は如何なる人であつたら  
うか。その頃紀伊國加田浦に文吉といふ鼻垂し小僧があつ  
た。この文吉が十八歳の年のこと、熊野浦に大鰐が現れたの  
で沿岸の漁師はこの鰐を恐れて一ヶ月餘といふものは海へ出  
ることも出来なかつた。さりとてこの鰐を退治しようといふ  
ものもなかつた。この時文吉少年は一世一代の智慧を絞つて  
この大鰐の退治にとりかゝつた。どういふ方法で退治するの  
かと見てゐると毒藥人の大人形を作り、これを海に投げ入れ  
て例の鰐に食せて殺してしまはうといふのである。文吉の計  
畫は見事成功した。そこで文吉は海上に浮び上つた大鰐を引  
揚げて腹を割いて見ると豈圖らんや黄金一千兩が入つてゐ  
た。他分人を呑んだ時一緒に呑み込んだものだつたのだらう。  
文吉はこれを役所へ届け出たが役人はこの金の所有權は文吉  
にあるといふので文吉に與へたので文吉は一夜の中に千兩の  
大盡となつてしまつた。これが文吉の開運の緒口であつた。  
この年の秋の事であつた。紀の國から蜜柑船を出さうとした

宇倍神社

鳥取縣因幡國岩美郡宇倍野村宮ノ下鎮座  
武田宿彌を祭る。延喜式内の名神大社で當

國の一ノ宮である。因幡民談に『當國に武内大臣を祭り、殊  
に是を敬ひ一國の大社とすることは大臣當國の夷を平げ、初  
めて當國を靜謐せられし故、その功勞を顯し、一國柱礎の大  
神とし廟を宇部神社と號す』とあり。神階は嘉祥元年從五位  
を授けて官社に預らしめし以來屢々加階あり、元慶二年正三  
位に上せ奉つた。神主には世々伊福部氏が任ぜられた。伊福  
部氏は景行天皇皇子五百木之入彦ノ命の御名代の品部なれば  
當社は蓋その族の奉齋したものであらう。明治四年國幣中社  
に列した。當社の後丘龜金山は祭神當國下向の節變履を遺し

が連日海上が荒れてゐるので船の出し様もなかつた。一方江  
戸では蜜柑が荷薄になつたので暴騰するばかり、この事を聞  
いたのは例の文吉だつた。彼は命を的に一攫千金を夢みて命  
知らずの不良少年を募集して蜜柑を滿積した船を大暴風の紀  
州灘の眞ツ只中に漕出したが、幸ひにも一夜で江戸に到着す  
ることが出来てこの時も亦巨利を博すことが出来た。

その後江戸に住んで名も文左衛門と改め、京橋八丁堀に材  
木商を営んでゐたが享保十六年四月江戸に大火があつた。こ  
の時機を見るに敏な文左衛門は木曾山中に赴いて材木を買占  
めて巨利を博したが、このやうに文左衛門の一生は奇智と機  
敏の連続であつた。當時江戸で紀之國屋文左衛門といへば飛  
ぶ鳥落す勢であつたが、それだけに又吉原の遊女に大判小判  
を撒いてやつたとかいふ大盡遊びの愚にもつかぬ噂も残し、  
享保十九年四月二十二日(廿四日)年六十六歳で遂に歿した。

伊弉諾神社

兵庫縣淡路國津名郡多賀村鎮座伊弉諾

ともいふ。延喜式内の明神大社で當國の一ノ宮である。日本  
書紀に、幽宮を淡路之洲に構へ、寂然長く隠れ給へる由記さ  
れてあるのは、即ち本社の起原で、その鎮座は實に遠く神代  
にあり、大同元年神封十三戸を定め、後又五戸を加へ貞觀元  
年一品を授け奉られしこと國史に見えてゐる。明治十八年四  
月二十二日國幣中社より官幣大社に進列し、その日を以て例

祭日と定めた、特殊神事中、粥占祭(陰曆正月十五日)田植  
祭(六月芒種日)除蟲祭(半夏生の日)は共にその年の豊凶  
を卜し蝗蛾の害を攘ふ神事である。その他夏祭(七月望前よ  
り望ノ日まで)秋祭(十月九、十日)等がある。

多賀神社

滋賀縣近江國犬上郡多賀村多賀鎮座、伊

邪那岐ノ命、伊邪那美ノ命を祀る。この社  
の歴史に見えたのは古事記に『伊邪那岐大神者坐淡海之多賀  
也』とあるを初めとする。天平神護二年、神封六戸を寄せら  
れ、延喜式内の神社である。近江輿地志略に『御朱印社領三百  
五十石、外に百五十石、彦根城主井伊氏より寄附』と見え『多  
賀神社、本社大さ表二間五尺八寸、裏行二間三寸、御拜表一  
間二尺三寸五分、奥行二間二尺五寸、南向の社なり、本社總  
構、南北五十間許、東西百十間許、本社前玉垣平唐門、間七  
尺五寸、本殿の床下三方鏡馬の繪あり、狩野大學筆なり、舞  
臺三間四方、脇座三間に四尺、後座三間四尺に九尺、階がより  
幅一間に五間半、この舞臺にて正月二日翁あり、能はなし云  
々、廳屋桁行十九間四尺五寸、梁行四間四方、この廳屋は樓  
門の内に横に長く造れり、太々神樂のとき、神職のものこの  
ところにてつとむるなり、能のあるときはかくやとす、樓門  
桁行三間一尺四寸、梁行一間三尺九寸、樓門外の方の左右に  
隨身あり云々、神輿部屋四足門の南にあり云々、神馬屋神輿  
部屋の南にあり、桁行三間五尺五寸、梁行五間五尺、當社の



神馬秘訣あつて青も黒毛の外は用ひざることなり、拜殿桁行八間四尺八寸五分、梁行七尺」とあつて社殿の布置の大概を知ることが出来るであらう。末社に日向神社、山田神社、年神社、三宮、聖宮、熊野社、天神社、蛭兒社、竈神社、高松神社、伊勢兩大神宮、揖取神社、祖母神社等あり。古來本社に對する朝廷の尊崇異例を極め、伊勢への幣使は必ず多賀へも掛けて差遣せられたといふ。俗に「伊勢へは七度熊野へ三度、愛宕様へは月参り」といふ諺があるが、この國では「多賀様へは月参り」といふ由で伊勢大神宮とこの御社に詣でぬ人はないとこの國の人はいつてゐるといふ。明治十八年官幣中社に列し、大正三年大社に昇格した。特殊神事に大宮祭（十一月十五日）古例祭タガマツリ（四月二十二日）その他に中祭（六月三十日、九月九日）あり、神使に鳥があつて（先食とて神饌献備に當つて御供棚に就いて鳥まづこれを食す）神木に富ノ木あり（別宮調宮境内にあり）共に有名である。境内廣潤、雲居橋、萬代ノ池、千代ノ林等十二勝の名あり、神符の一到賀杓子あり、（世俗にオタマジヤクシといふはこの多賀杓子の轉訛なりといふ）元正天皇御不豫の時進献し御惱平癒し給ひし吉瑞によつて之を受くるものが多いといふ。

**靈山神社**

福島縣岩代國伊達郡靈山村鎮座、祭神四座、北島親房、同顯家、同顯信、同守親のを祀る。奥羽の地元は親房以來某代北島氏と深縁があり、

格して大社に列した。社殿の創建は遠く文武天皇の御代にあり、社傳によれば大寶年中宇摩大領越智玉澄が勅裁を経て造宮を始め、靈龜二年に至つて成つた。次いで保延元年本社、攝社、末社造宮の宣旨を賜ひ、その後貞保五年及び貞應元年の火災に本殿以下悉く焼失したので鎌倉幕府知下して國中段平均米を以つて新に宮殿を造宮し、正應元年に至つて成つた。應長二年幕府が命じて三島社造宮料段別米伊豫國中平均別納せしめた。元享二年亦兵火に罹つて大小社壇七十一社、三藏一切經藏、神宮寺以下悉く焼失したので本殿以下大小社殿を造宮した。即ち今存する所の本殿は是である。三間社流造、屋根松皮葺で特別保護建造物に指定されてゐる。當社の攝、末社は境内に攝社上津社、下津社、阿奈波神社、末社十七神社以下七神社あり、境外に攝社姫子鳴神社（郷社）末社嚴島社以下五社あり、所藏の寶物はその数千を以つて數へられ、國寶に指定せられたるものもみでも無慮百十餘點を有し、甲冑の如きは全國に於ける總點數の八割を占めてゐるといふ。源義經奉納緋緞一領、源頼朝奉納色々緞一領、源頼家奉納同鏡一領等その著明なるものである。是等は皆その神庫國寶館に藏されてゐる。祭祀は例祭四月二十二日（の他特殊神事に生土祭（一月五日）御田植祭神幸式（六月五日）氏神神幸式（九月二十二日）新穀祭神幸式（十月九日）御更衣祭（十一月二十二日）等があり、往古、櫻會、大頭會と稱して鹿の

殊に靈山はその本城として伊達郡の東端に聳え山容峻峭削りが如く、海拔二千七百尺あり、山中奇勝、名蹟に富み、顯家以下の墳墓も亦この地にあり、因つて縣民北島氏を追慕欽仰の餘り、明治十二年相謀つて神社をその西方山麓、元支城のあつた地に建てた。次いで十年別格官幣大社に列し、毎年四月二十二日を以て例祭日とする。

**大山祇神社**

愛媛縣伊豫國越智郡宮浦村宮浦字轉山鎮座、大山積ノ神を祭る。一に和志ノ大神三島大神、三島大明神等の稱がある、傳へていふ、この神は仁徳天皇の御宇百濟國より渡來し攝津國三島に坐す、後故あつて伊豫の三島に移し奉る。延喜式内の名神大社で當國の一ノ宮である。朝廷の尊崇他に異り、天平神護二年四月神戶五煙を充てられ、神階は從五位下より累進して貞觀十七年正二位に至つた。後一條天皇の御宇特に一代一度の大奉幣を奉り給ひし事あり、國主越智、河野氏一族の氏神たるを以て、國內上下の歸嚮殊に篤く、或ひは幣帛を奉り、或ひは神領を献する等、代々絶ゆることがなかつた。この地山陽、南海、山海の三道に於ける航海の要衝に當るので、古來海上守護神として渴仰され、又農神として將又武神として有名なので報賽するもの夥しく、今尙五社参りと唱へて年々本社及び安藝嚴島、讃岐金刀比羅、筑前太宰府、豊前宇佐の五社に参拜するもの群をなし甚大であるといふ。大正四年國幣中社より昇

犠牲を献る祭儀があつたけれども遠く圓融天皇の御宇停止となつた。當社祭神は全國に亘りて同一神を祀り、又はその神系に屬する神社はその數が頗る多い。即ち當神社の調査（大山祇神社御縁故神社記）によると、伊勢神宮に二十三社、官國幣社に九社、愛媛縣管内に三百八十四社あるを見る。

**眞清田神社**

愛知縣尾張國中島郡一宮市一宮鎮座、祭神大明ノ命、延喜式内の明神大社で當國の一ノ宮である。古へ熱田神宮御改造の時は必ず本社をも造宮せしめ給ふ例であつたといふ。眞清田の社號は神祇志料に神宮雜例集を案するに、「大明ノ命の御子香語山ノ命を以て鏡作りの遠祖となし、その裔孫世々尾張の國造たり。故に本國（尾張）の諸社多く、その族類神を祀る。眞清田の稱は、鏡作りの由縁あり、本國の一ノ宮となすも亦或ひはこの故なり」とあるに根據を置くべきだらう。承和十四年從五位下に叙し、仁壽元年官幣に列し、貞觀七年從四位上より正四位上に陞せ奉りしことが國史に見えてゐる。徳山氏は殊にこの社を崇敬し、朱印社領三百三十三石を寄せ奉つた。明治十八年縣社より進んで國幣小社に列し、大正十三年更に國幣中社に昇格した。境内末社に神明社、秋葉社、新嚴島社、稻荷社、天神社、犬飼社、愛鷹社、新稻荷社あり、境外には神明社以下二十八社あり、社寶中木造舞樂面十二面は國寶に指定されてゐる。就中陵王面は順徳天皇勅納の貴品であるといふ。そ



の他聖武天皇の扁額等が多い。年中の祭祀は例祭（四月二十  
二日）の他桃花祭、駒索神事が有名である。

## 二十三日

### 寺田屋騒動

（文久二年 皇紀二五二二年）

時は文久二年四月十二日の夜のことであつた。今や京都三十六峯の夜は静かに更けて、春甃の夢も圓かに結ばれようとする折柄、遽に大亂の物凄む響が伏見の方に起つた。寺田屋へ！ 寺田屋へ！ 入亂れて走る浪士の影、いづれが敵か何れが味方か。否何れも國を思ふ熱血の志士の血に狂つた姿である。

これより先薩藩の士有馬新七、柴山愛次郎、中山諸大夫、田中河内介以下七十餘人の人達は伏見の旅舎寺田屋へ會合してそれぞれ部署を定めて急に旗擧をなして尊王攘夷の素志を貫徹しようとして焦つてゐた。この時島津久光は彼等の過激の行動を戒めようとしてその臣奈良原喜八郎、大山格之助、岡善右衛門、江夏仲左衛門、鈴木勇右衛門、その子の昌之助、山口金之進、道島五郎兵衛等を遣して諭さしめ、もし聞かなければ君命を以つて斬り殺してしまへと嚴命を下した。當時久光としてはなるべく平和の裡に公武の合體を圖りたき希望を抱いてゐたので、寺田屋面々の過激の行動を非常に憂慮して

したので、それが今度のこの使となつて現れたものである。奈良原等八名は直ちに寺田屋に赴いて有馬新七郎等に面會して久光の意を傳へたが頑として聞き容れなかつたので、に於て先づ道島が立つて田中謙介を斬るや忽ち寺田屋は大亂の巷と化してしまつた。この時山口金之進は柴山愛次郎を倒し、有馬新七は道島五郎兵衛と戦つたが共に斃れ、この時有馬の弟子丸龍助、森山新五右衛門、西田直五郎、橋口傳藏等は有馬を助けようとして樓上より馳せ下り亂刃の裡に殺された。この時奈良原喜八郎は刀を投げ出して諸肌を脱いで他意なきを示していふには『有馬等は故あつて斬つたが他の諸士に對しては勿論怨みに思ふところはないから、潔く上意に服従するやうに』といつたので、こゝに過激組の士も刀を納めて奈良原等と薩藩の邸に赴いた。この時久光はこれ等の士を邸中に拘禁し、その後本藩に交附するところがあつたが、獨り田中河内介父子並に海賀宮門を鹿兒島に護送の途中斬らした。この時の騒動を寺田屋の騒動といひ、幕末劍刃の好話柄として芝居や映畫の材料として盛に使はれるのである。

### 射水神社

富山縣越中國高岡市定塚町本丸鎮座、祭神二上ノ神、或ひは伊弉諾頭國造の祖を祀る

といふ。社説には天牟羅雲ノ命を祀るとし、天孫降臨に際し命天上の水を持ち下つて皇太神並に皇孫の御料に供へ、八十伴の諸神にも給し功多かつた由を記す。蓋射水は忌水の義でこゝに勝家も籠城の敵せざるをことを知つて先づ妻子を殺し自分も亦自殺して亡んだのである。時に賤ヶ岳の戦を去ること僅かに六日、天正十一年四月二十四日、この時勝家年五十四歳であつた。

### 籠神社

京都市丹後國與謝郡府中村大垣鎮座、もと籠内の名神大社で四度の官幣に預り當國の一ノ宮である。神階は元慶元年從四位上に進み神領本郡にあるもの五十餘町に及んだといふ。明治四年國幣中社に列した。毎年四月二十四日を以て例祭を行ひ當日神輿供奉のものは藤花を冠に懸ける慣ひがある。社地は古の眞名井原に隣接してゐたので後世同所の御饗津神を配祀し遂に本末を轉じて豊受大神を主神とした事もあつたが、今は又當社の攝社となつた。社説の『コモリ』は『ミクマリ』（水分）の轉訛だといふ。一説には伊弉諾岐大神を祀り、大神が天に行き通ふ梯立の本に御舎を造りて隠り坐しました故に籠神社といひ、大神此處に坐して御子神等に事依さし給うたのでこゝの地名を與謝といふといふ。

### 中山神社

岡山縣美作國苦田郡一宮村西一宮鎮座、金山彦ノ命を祀る。延喜式内の名神大社で

又當國の一ノ宮である。俗に仲山大明神、又南宮といふ。祭神については古來諸説あり、社傳には鏡作ノ命であると定め一説には大己貴ノ命を祀るともいふ。大日本史には『その祀

あるといふ。延喜式内の名神大社である。寶龜十一年從五位下を奉り、後屢々加階のことあり、貞觀元年正三位に陞り、明治四年國幣中社に列した。初め二上村にあり、二上明神と稱したが、明治八年現地に奉還した。三十三年類火に遭ひ、三十五年再建された。舊社地二上村に攝社日吉社、愚王子社院内社、末社諏訪社がある。例祭は四月二十三日に行はれ、九月十六日に秋季祭がある。

### 度津神社

新潟縣佐渡國佐渡郡羽茂本郷村飯岡鎮座、祭神五十猛ノ神、延喜式内の神社で、當國

の一ノ宮である。明治四年國幣小社に列する。五十猛初め素盞鳴ノ命に従ひ新羅に抵り、還つて出雲を経て紀伊に渡り給ふ。度津の神號蓋し之に因るといふ。正和年中社殿を改修したが、文祿年中火害のため流失の厄に遭ひ、當村八幡の祠に合祀した。よつてその後舊地に復歸せられたけれども土俗尙一ノ宮八幡宮と申上げた。

## 二十四日

### 柴田勝家亡ぶ

（天正十一年 皇紀二二四三年）

賤ヶ岳の一戦に脆くも破れた勝家は兵を捲いて越前北ノ庄に逃げ還つて來た。（詳しくは十九日の項『賤ヶ岳の七本槍』参照）この時秀吉の追撃益々急であつて遂に彼得意の一手を以つて北ノ庄を包圍してしまつたので、



る所備中の吉備津彦神社と同神なり、もと三備並に吉備津宮を以つて一ノ宮となし、和銅六年初めて美作國を分置せらるるに及び吉備津神を分祀せしものにして中山の號又吉備中山の名稱に基きたるものなり」と書いてあるけれども古史傳には祭神を鏡作ノ命だといひ、一宮記には大己貴ノ命と書いてあるけれども、古歌に『眞金吹吉備中山』の詠もあり和銅六年に立てられた國だから金ノ神に坐すこと疑ひなく、美濃國の仲山神社又此處から移したので仲山といふのだらうと説いてあるので、今此れに従ふ。明治四年國幣中社に列した。當社の本殿は社記に『永正八年八月燒亡、爾後天文二年の春尼子經久の兵亂により再び燒失、永祿年中尼子經久造宮、同二年春竣成、現宇之なり』とある。今特別保護建造物に指定されてゐる。例祭は四月二十四日でその他に根本祭田植祭（四月二十四日）御注連祭、御柱祭（十二月二ノ午日）等があり、國家非常時の際には御銚祭といふのを行ふ。古式の神事で祭壇の四方及び中央に石基を置き、各々御銚を立てるのだが今境内に弘安當時に用ひたものを保存してゐる。

## 二十五日

市町村制發布さる（明治二十一年）  
（皇紀二五四八年）  
町村の自治制が發布されたのは明治二十一年の今月今日のことである。市

わが國に市

町村制は全文七章百三十九條より成り、現行市制は明治四十四年四月六日法律第六十八號を以つて發布され、十章百八十一條、町村制は同日法律第六十九號を以つて發布され、九章百六十一條より成つてゐる。自治制が發布されて早くも五十年、その間には幾多の見るべき治績は勿論擧げてゐるが、しかしわが國で最も遅れてゐるのは地方町村自治制度の運用かも知れない。幸ひこの日を期して兒童に對してわが郷土に對する正しい認識と愛郷心を喚起せしめ、郷土の自治に對してより以上の關心を持たせたいものである。

## 二十六日

高杉晋作歿す（慶應三年二十九歳）  
（皇紀二五二七年）  
明治維新には幾多の人材が輩出したが高杉晋作などはその中の随一人であらう。晋作は事志の半ばも成らず、慶應三年四月病を得て二十九歳の若さで死んだ人であるが惜みても餘りある。（十四日とも云ふ）

晋作は早くより吉田松陰の松下村塾に學び久坂玄瑞等と共に松陰門下の逸足である。奇兵隊の隊長として屢々功を樹てたが元治元年五月幕府に於ては再び兵を出して長州藩を膺懲しようとした。その時、將軍家茂は自ら中軍を統帥し、徳川茂徳同茂承等は兵を進めて將に品川を出發しようとした時長州の二藩士は進み出て、長藩の罪は既に定つた今日となつて討つ

のは實に無益の戦であるのみならず、本年は家康公の二百五十回の祭典にも相當することだからどうかこのまゝ軍を還していただきたい。』と切腹して願つたが遂に容れられず、九月には幕軍は進んで大阪に入り藩主を召して嚴命を下していふには『二十六日を過ぎて確答なき上は斷然長藩に兵を入るゝであらう。』といつた。この時藩主は晋作等を召して意見を訊いたが、清廉潔白の晋作は堂々大義を論じて先に死せる諸君等のため死を賭して戦ふべき旨を説いた。晋作等の強硬論は遂に一藩の大勢を指導し、こゝに幕軍と一戦を交へることゝなつたのだが、不幸晋作は病を得て春秋に富める身を幕末多事の際に逝いたのである。

## 二十七日

結核豫防週間  
四月二十七日より五月三日までは毎年結核豫防週間の名の下に各種の宣傳が行はれる。結核の恐るべき事はその原因たる結核菌が西曆千八百八十二年三月二十四日、我が明治十五年に獨逸のローベルト・コッホ氏が伯林生理學會の席上に於て發表されたことにより明にされた。この事が一度發表されて以來各國はその豫防に大いに努むるところあり、我國に於ても國民保健衛生上より重要なものとして政府では明治三十七年四月初めて肺結核豫防について考慮を拂ひ、公衆の集團生活に對

する豫防的注意を喚起し、病毒傳播の防止に關する行政的措置を講じてより同四十一年コッホ博士來朝するや故北里柴三郎博士を初め朝野の醫學者は結核豫防會開設の必要を痛感しその後協議を重ね、同四十年二月、畏くも明治大帝の聖旨に基く救療事業の行はるゝや、結核豫防の喫緊なることが一層明瞭となり、かくて本病豫防のための民間の輿論喚起となり、權威ある専門的團體設立の必要が強調され、朝野の學者爲政家の唱道により、大正二年二月十一日紀元節の佳辰を卜して伯爵荒川顯正、醫學博士男爵佐藤進、男爵澁澤榮一、醫學博士北里柴三郎男等官民協力の下に日本結核豫防協會が創立せられ、更にその目的を貫徹するため内務省、逓信省、鐵道省、文部省、警視廳、各府縣の協力援助の下に大正十四年四月二十七日を期し結核豫防デーなる名稱の下に全國一齊に大宣傳が試みられて以來、現在では各種教育團體、社會事業團體等もこれに参加し官民協力の大宣傳が年々行はれてゐるやうになつた。

毛利輝元卒す（寛永二年）  
（皇紀二三六五年）  
毛利輝元は元就の孫時父の隆元に死に別れた。この時祖父の元就に從つて尼子勝元を討ち、元龜二年六月には早くも出雲、伯耆、隱岐、因幡の四州を合せ、舊領、藝、備、防、長と共に八州の國主となるに至つた。同三年三月には右衛門督となり、天正元年右馬



頭と改めたが同年七月には將軍義昭が樺島に據つて織田信長と戦つたがこの時義昭は授けを輝元に求めて來たがそれを知つた信長は秀吉に命じて輝元を討せた。この時輝元は吉川元春、小早川隆景等と兵六萬を率ゐてこれを迎へ討つたが六月勝久先づ自殺して上月城が陥つた。同十年四月には秀吉は大兵を率ゐて備中に入り、清水宗治の高松城を圍んだが遂に城は陥り、宗治は自殺した。この時輝元は軍を督して來り秀吉と對峙しようとしたところ秀吉は安國寺慧惠をして和を講ぜしめたが輝元は聞かず、將に一戦を試みようとした時本能寺にて信長が討れた報知が來たので一時停戦を申込んだ時輝元はこれを厚く弔ひ、義を重んじて兵を引いて大いに度量を見せたが、この時から秀吉とは肝膽相照す仲となつた。

秀吉薨じて徳川家康が漸く覇を唱へるやうになり、遂に關ヶ原天下分け目の一戦起るや石田三成は秀頼の命と稱して輝元を誘つたので輝元は四萬の兵を率ゐて大阪城を守り、この一戦に見事關東方を打破つて大いに天下に雄飛しようとしたが關ヶ原の戦に大阪方は脆くも破れ、輝元も亦事志と違つたので急に家康と和を講じ、黒田長政、福島正則、伊井直政等の韓証によつてその領地八十餘萬石を削り取られて辛うじて防長二州三十六萬九千石を保つことが出來た。初め祖父の元就は輝元の剛毅を戒めていふには、「決して天下に覇を唱へようなどと思ふ忽れ。」といつたさうだが、或は祖父元就のこの戒

めは當つてゐたかも知れない。寛永二年四月年七十三歳で卒した。

### 尾山神社

石川縣石川郡加賀國金澤市西町鎮座、前田利家の靈を祀る。初め利家の薨去後同族子弟等靈を奉祀しようとしたけれども憚る所あつて果さずよつて越中國鳥帽子峰鎮座の八幡社の遷座と稱し秘かに利家の靈を卯辰山の麓に祀り卯辰八幡と呼び、前田家累代祭祀を怠らなかつたけれど、明治四年廢藩せらるゝに及び舊藩の士民之を卯辰山より遷して前田氏の邸址に祀つた。明治六年尾山神社と改稱し郷社に列し七年縣社となり、三十五年遂に別格官幣社に昇格し、同時に前田利長、同利常の靈位を攝社金谷神社に祭つた。所藏寶物中に蒔繪朱鞘大小刀二口あり、申身無銘前田利家佩用と傳へられ、今國寶に指定されてゐる。

### 二十八日

### 孔子祭

孔子祭は古くは釋典といひ訓し「オキマツリ」と稱し、孔子を

首めその門弟の顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏の孔門の十哲を合せ祀る祭典である。我國に於てこの孔子の教へが傳へられてから君臣父子の道

を普及するに孔子の教によつてその功績大なるものありとして我朝廷に於てせられては「天武天皇大寶元年丁巳初めて釋教を行ふ」と續日本紀に見え當時は春二月と秋八月の二回舉行され、稱徳天皇の神護景雲元年春二月には大臣吉備眞備に命じて盛大なる祭典が行はれ、これが桓武天皇の頃まで大凡九代九十五年間繼續されたやうであるが、其後中止せられ、應仁の亂以後全く中絶されてしまつた。

徳川時代に至つて儒教が大いに普及せられ、寛永九年に儒者林道春が武州忍ヶ陵(今の上野公園清水堂觀音附近)に書院を建て、これを弘文館と稱して孔子並に十哲像を安置し、降つて元祿四年五代將軍綱吉は幕府の儒官大學頭林信篤に命じて江戸本郷湯島臺に聖堂を官の社として造營した。この聖堂は明治以後特別保護建造物だつたが、大正十二年九月一日の大震災に燒失、昭和八年十二月二十七日再建造營が成つた。當時は規模頗る宏大壯麗を極め、毎年春秋二回大學寮をして祭典を行はしめられたが明治初年に至り中絶した。然るに明治四年嘉納治五郎氏等が發起人となり、孔子祭典會を組織し古式に倣ひ祭典を行ひ、各宮殿下、各大臣の參拜あり、降つて大正七年財團法人斯文會と合同し、斯文會祭典部が祭典を行ふやうになり今日に至つたものである。

### 足利尊氏の一生

(正平十三年(皇) 足利尊氏は遂に後世に至るまで逆

賊の汚名を残し、木像となつてまでもその頭を打れた人であるが、もしこの人をして正義を踐ましめたなら又幾多の功績を残したかも知れない。それ程にこの人の一面は異才に富んでゐたのである。

尊氏はその祖先を源義家に汲み、代々下野國足利を領して足利氏を名乗つてゐた。幼名を又太郎といひ、後尊氏と改めたものである。

元弘元年、後醍醐天皇に於てせられては鎌倉幕府を討たんと思召さるゝや、北條高時は尊氏を強ひて促して京都に上らせられたが、この時尊氏は足利氏は源氏の流を汲んでゐるので北條氏に驅使さるゝことを憤慨し尙かに歸順の志を懐いてゐたがともかくも役を終へて鎌倉へ歸るやこの時又も後醍醐天皇に於てせられては船上山に兵を擧げ給うたので高時は再び尊氏に出征を強ひた。この時尊氏は病氣だつたので暫の猶豫を請うたが高時は許してくれなかつたので、尊氏は怒つていふには「この前の出征の時は父の喪中に服してゐるに拘らず自分には命じ、今又病の癒さるに出征を強ひるとは何事ぞや。北條氏が自分にとつて何者であらう。」といふので一族を擧げて西に走り、海老名季行を船上山の行在所に遣して歸順を願つた。この時、天皇には大いに喜び給ひ尊氏を用ひること厚く尊氏も亦大いに功を樹て、遂に鎮守府將軍となり、尊氏の名を賜り、從四位下に叙され、建武年中には常陸、下總の守護



職を兼ねて従三位に叙され、こゝに建武の中興は全く成つて天下は統一されたが、圖らずも朝臣の中にはこれを機會として國郡兵馬の制を革めて古に復さんとして頻りに武臣を排斥するに至つたので、こゝに再び天下は亂れんとする兆を現出した。

この頃皇子護良親王は尊氏の聲望を惡まれ給ひ、これを早くに除かうとし給うたが却つて謀が破れて鎌倉に幽閉され給ひ尊氏も亦新田義貞と不和を生じたのでこゝに遂に東國に下つて鎌倉に據り、自ら征夷大將軍と稱し、明かに朝廷に對して反旗を翻し奉つたのである。

こゝに於て朝廷に於かせられては新田義貞に命じて尊氏を討たしめたが尊氏は箱根山に官軍を迎へて大いに破り、進んで京都に押上つて来た。時に延元元年正月の事であつた。この時後醍醐天皇は難を寂山に避け、次いで笠置山、吉野に避け給うたのであるが又同時に楠正成等の忠臣群り出で、各所に尊氏の軍と戦つた。正月二十九日拂曉、正成は尊氏の軍を京都に破り、これを丹波に走らしめた。

この年の二月、尊氏は兵庫に至り、熊野道有をして後伏見上皇の詔を請はしめ、自らは筑紫に下つて兵を集め、十月朔日大兵を率ゐて嚴島に至り、こゝに於て後伏見上皇の詔と錦旗とを拜して新銳の意氣物湊く都を指して押上つて来たので正成、義貞等これを攝津に向へ撃つたが脆くも破られ相次いで討死してしまつた。尊氏はやがて都に入るや、後伏見上皇の皇子豊仁親王を皇位に即かしめ奉つた。これより先後醍醐天皇には吉野の行在所にましまして粒さに辛酸を嘗め給うたのであるが、延元四年遂に崩御されましたのである。この年尊氏は京都に天龍寺を建て、夢窓國師によつて後醍醐天皇の尊靈を弔はしめ奉つた。かくてその後暫く二天皇併び存せられ、足利幕府の基が漸く開かれたのであつたがこれ皆尊氏等の順逆の道を謬つたことに起因する。尊氏はその性格確かに大將たるの器があつたのであるが大義名分を謬つたばかりに名を後世に汚したことは惜しみても尙餘りあることである。尊氏は亦平生畫を好んで、常に地藏尊菩薩、觀世音菩薩等を描いたといふことである。正平十三年四月二十九日（一説には三十日とあり）年五十四歳を以つて薨じた。

二十九日

天長節

今上天皇陛下は第二百二十四代の天皇にましまし、明治三十四年四月二十九日、大正天皇の第一皇子として御降誕あらせられ、迪宮と稱し奉つた。御幼少の頃よりいと御壯健にましまし、四十一年四月十一日學習院初等科に御入學、大正元年七月三十日皇太子に立たせ給ひ、同年九月海軍少尉に任じられ同時に大勳位に叙せられ、同年四月二日學習院初等科御卒業、同日御學問所御開始、同年

十月三十日陸海軍中尉に任ぜられ、同五年十一月三十一日陸海軍大尉に、同十一月三日立太子式を御舉行あらせられ、同八年五月七日御成年式御舉行、同九年十月三十一日陸海軍少佐に任ぜられ、同十年二月二十八日御學問所廢止、同十年三月三日御外遊、同年九月三日御歸朝あらせられ、同年十一月十五日攝政に御就任、同十三年十月三十一日陸海軍中佐に任ぜられ、同十三年一月二十六日故久邇宮邦彥王の第一王女良子女王殿下を妃宮となし給うた。同十四年十月三十一日陸海軍大佐に任ぜられ、同十五年十二月二十五日大正天皇崩御あらせられると同時に御踐祈遊され、昭和元年十二月二十八日朝見式を御舉行、越えて三年十一月十日御即位の大禮を擧げさせられ、同十四日には大嘗祭を御親祭遊された。

天長節當日の宮中の御模様を洩れ承るに、この日早朝先づ三殿の御裝飾を了し、式部官、宮内省勅奏任官總代着床、先づ賢所を奏樂裡に開扉し、神饌を供し掌典長祝詞を奏し終れば天皇陛下にはこの時出御ましまし、御玉串を捧げて御拜、次いで參列諸員の拜禮、終つて神饌を撤し、閉扉の儀があつて退下。次いで皇靈殿、神殿の順に御祭典があつて三殿の儀を終了あらせられるのである。又神宮以下全國の神社に於ては中祭式によつて天長節祭を執行する。又各官公衙學校に於ても御眞影を奉安して拜禮し、祝賀の式を擧げることになつてゐる。

尙ほ又この日、天皇陛下には陸軍大元帥の御盛裝にて宮城御出門、代々木練兵場に行幸親しく諸兵を閲せられる。還幸の後宮中風風ノ間に於て親王以下宮内省高等官一同の拜賀を受けさせられ、後豊明殿に出御あり、御前に於て親王以下錦鶏間祇候に至る諸臣並に外國大公使に酒饌を賜るのであるが御宴半にして陛下より優渥なる勅語を賜り、外國使臣の首班者が外臣を代表して祝辭を奉る。尙ほ皇后陛下に於かせられてはこの日恒例により各皇族妃殿下を宮中に召されて御内宴を御開催遊され、この佳き日を御祝ひあらせられるのである。しかし、時として宮中喪を仰せ出された場合とか、御不例、殊に觀兵式は荒天の場合とかには御取止めを仰せ出されることがある。

天長節は明治天皇御即位の初年から（明治元年八月二十六日）寶龜の舊例によつて定められた大節で、越えて三年九月七日には更に府縣藩に布告し、五年九月二十二日の天長節（陰曆）には陪宴の諸臣に優渥なる勅語を賜つたがこれが第一回の天長節であつた。

笠置御潜幸（元弘元年 皇紀一九九一年）

後醍醐天皇に於かせられたはいかにもして武家の專横を押へ、皇室の稜威を輝かし給はんと年久しく寂慮を惱し給ふ折柄時満ちてその實行に移らんとし給うた時早くも土岐頼兼といふものゝ密告によつて北條高時の知るところと



毘沙門天像一幅(絹本着色)空海筆繪藝種智院式一卷、その他刀剣六口、鏡十本、共に國寶の指定を受けた。大正八年五月類火に遭つて炎上したがその後國幣二十三萬餘圓の支出を受け、大正十一年新宮なつて輪奐の美舊に倍した。

三十日

靖國神社例祭

今日は靖國神社の例祭である。その後九段坂もいろ／＼に改造されたけれど、櫻の花が吹雪と散る中に花火が轟き、各種の見世物が境内所狭きまで並んでゐるところは、やはり昔ながらの招魂祭のなつかしき風景である。

靖國神社の例祭日は大正元年勅許によつて毎年春四月三十日、秋十月二十三日と定められ、この兩日は畏くも 天皇陛下には勅使を御差遣遊ばすのである。

この神社の終起は徳川幕府が倒潰し、王政維新の大業成るに至るまでの間、盡忠報國の赤誠に燃えた幾多の志士が或は捕はれて牢死し、或は戦ひに敗れて護國の露と消えてその名を止めないものばかりであつたのを、孝明天皇に於かせられては深く憐ませ給ひ、又王政復古に際して天下の賞罰を正し節義を表彰し天下の民心を發奮せしめ給ふ思召によつて豊臣秀吉、楠正成の精忠を御追賞あらせられ、社殿を修覆又は新たに建立せられたのであるが、特に文久二年十二月、安政五

なり間もなく足利尊氏が大兵を率ゐて征め上つて来たので天皇は無念の涙を吞ませられて高時に誓書を與へ一時は事なきを得たが逆鱗遂に押へ奉るべくもあらず、再び事を謀り給ふや又もや吉田定房なるもの、訴人によつて事は破れ給うた。この時高時大いに怒り、急ぎ天皇を移し奉れとばかり早馬を六波羅目掛けて急がせる一方、再び尊氏に命じて都に征め上らしめた。こゝに於て天皇は護良親王等の勤めを容れ給ひ、一時笠置山に難を脱れ給ふことゝなつたのである。時に元弘元年四月二十九日のことであつた。

小御門神社

千葉縣下總國香取郡小御門村名古屋鎮座、藤原師賢の靈を祀る。本社創建は明治十年にこの國の人澤田總右衛門が師賢卿の遺跡が荊棘の間に埋れてゐるのを歎き、村民等と圖つて社殿造營を請願し十二年允許を得、資金を下賜せられ、社號を賜つたのに起因する。十五年四月社殿竣功、次いで別格官幣社に列せられた。攝社十二代社はその北ノ方を祭る。本社は東方四町許りの所にあり、又南方二町の地に師賢卿居館の跡があり、世俗に十日屋敷といふ。

上杉神社

山形縣羽前國米澤市南端町鎮座。藩祖杉茂憲の創建するところである。同三十五年縣社より別格官幣社に昇格した。當社神寶中兩界曼陀羅圖二幅(紫綾金泥)

年以來國事に殉じた士を追慕するの大詔が出で、同年十二月

には津和野藩の福羽美靜、吉川躬行等六十餘名の勤王の士が京都愛宕山の靈山に會して志士の英魂慰靈祭を行ひ、更に翌三年京都祇園社境内に小祠を建立して弔祭を行つたのに始まり、次で元治元年には長州藩に於て招魂祭を行ひ、各藩も亦これに倣ひ招魂祭を行ふ様になつたのである。かくして王政維新の大業が成つて明治天皇の御代となるや明治元年には有栖川宮熾仁親王が東征大總督として關東東北鎮撫の大任を以て江戸に赴き、同年四月二十八日戦死者の爲め招魂祭を行ふとの令旨を賜ひ、同年六月二日江戸城内西丸大廣間に於て莊嚴なる招魂祭を行はせられて三條實美以下公卿、諸侯、諸藩士等をして參列せしめられた。又京都朝廷に於かせられては同年五月十二日付を以て、嘉永五年以來の殉難者の靈を京都東山に祭祀する旨を仰出され、同年七月十日、十一日の兩日加茂川の河東にあつた當時の陸軍操練場に於いて盛大なる招魂祭が執行せられた。翌二年三月には東京(江戸)に奠都あらせらるゝや、早くも招魂社建設の議が起り、軍督官知事伏見宮嘉彰王が勅命を奉じて大村益次郎、香川敬三、船越洋之助等が命を受けて社地を宮城の乾に當る田安臺(九段坂上)に選び、同二年六月十九日に假殿が竣成し、六月二十九日より七月三日まで祭典の儀が仰出され、同五年には本殿の落成を告げ年々例祭並に大祭を行はせられるやうになつたのであ

る。

招魂社とは招魂即ち神靈を特定の齋場に招き請する意より進んで其の招きたる神靈を永久に祭祀する祠社をいふのである。故に靖國神社には別に招魂場を設け先づ神靈を招魂場に招き奉る。而して後神殿に遷して合祀饗祭し奉るのが例である。所が明治十二年六月四日別格官幣社に列せられると共に現今の如く靖國神社と改稱せられたのである。

御祭神は申上げるまでもなく國家の爲に殊勳を樹てた人々を畏くも陛下の思召によりて御祭り申上ぐるのであつて、今や合祀總數十二萬五千餘柱に達し、中には朝鮮同胞も合祀せられてをるといふことである。

義經衣川の館に滅ぶ(紀一八四九年)

昨日の源九郎判官義經は

今日の落人、世の中の移り代りくらゐ判らぬものはない。義經は都より遙る／＼と奥州に落ちて来て藤原泰衡の許に一時身を潜めてゐたが鎌倉方の詮議厳しく、遂に泰衡も二心を示して刃を逆にして衣川の館に義經を圍んでしまつた。時に文治五年閏四月晦日のことであつた。この時寄手の軍勢一千餘、義經は辨慶その他僅かの手兵を力にこゝを先途と防ぎ戦つたが、敵は館内に火を仕掛けたので、折しも吹き來る五月嵐に、館の内外は瞬く間に火焰に包まれてしまつた。義經は今ほこれまでと覺悟をきめたのだらう、先づ夫人河越氏を引



抱へてその首を刺し、己も亦返す刃で自害して果てた。この時義経は僅かに三十一歳、辨慶その他の諸將もこの時悉く衣川の館の花と散つたのである。

### 日露戦役凱旋大觀兵式

(明治三十九年 皇紀二五六六年)

今から二十數年以前の今月今日は、東京市中はいふに及ば

ず全國に亙つて日露戦役大捷利の奉祝に酔ひ狂つた日である。朝から天も搖げとばかり祝砲が鳴り轟き天地は國民歡呼の聲で鳴りどよめいた。この日東京青山練兵場に於ては大元帥陛下御親臨の下に一大凱旋觀兵式が舉行されたのである。春は漸く老いて行かうとするけれども未だ梢には花の名残を止め、半蔵門から三宅坂、辨慶橋のあたりは折からの落花が吹雪とばかり散り敷いてゐた。

この日大元帥陛下に於かせられてはカーキ色の大元帥の御軍装も神々しく、功一級金鷄勳章を御佩用あらせられ、徳大寺侍從長の御陪乘にて鳳輦に召させられ、續いて岡澤侍從武官長以下鷹司、大城、白井等の侍從武官並に藤波主馬頭その他の供奉員を従へさせられ、この日皇太子殿下にはカーキ色陸軍少將の御軍服を召させられて村木武官長以下の侍從武官を従へ給ひて晴れの鹵簿に加はらせ給うた。續く御馬車には有栖川宮威仁親王殿下、同妃殿下、東伏見宮依仁親王殿下、同妃殿下、伏見若宮博恭王、同妃殿下、山階宮菊麿王殿

その後方には順次二十歩づゝの間隔を置いて元第一軍司令官黒木大將、元第二軍司令官奥大將、元第三軍司令官乃木大將、元第四軍司令官野津大將、元鴨綠江軍司令官川村大將並びに臺灣總督、韓國司令官、關東都督等の諸將軍も亦幕僚を従へて轡を並べてゐる。又その後方には戸山學校、近衛聯隊の各音楽隊が並び、場の中央近くには淺田中將の率ゐる近衛師團、閑院宮載仁親王殿下の統べ給ふ第一師團、西島中將の率ゐる第二師團、松長中將の率ゐる第三師團以下第十二師團に至るまでの各部隊無慮五萬、隊伍堂々と整列して大元帥陛下の御到着を今や遅しと待ち奉る。

この時天皇旗が燦然として式場入口の朝風に翻れば、突如として音楽隊の一角より壯麗そのものゝ君か代の樂の音が湧き起つた。この時正に鳳輦は御到着されたのである。時に午前九時二十分。大元帥陛下に於かせられては寺内陸軍大臣以下文武百官の奉迎を受けさせられつゝ式場内に入御されたが、この時大山諸兵指揮官の指揮刀が一閃したと見るや『氣を付け』の號令下り、この時再び啣曉たる『君か代』の喇叭の吹奏起り、諸兵一齊に捧げ鉢の禮を行へば、この時大元帥陛下に於かせられては肅々として鳳輦を諸兵の前へ進ませられた。こゝに曠古の閱兵の式は開始されたのである。鳳輦に續いて皇太子殿下並びに皇族方の御馬車連り、各供奉員の列の中には伊藤統監も扈從し奉つてゐる。かくて感激極

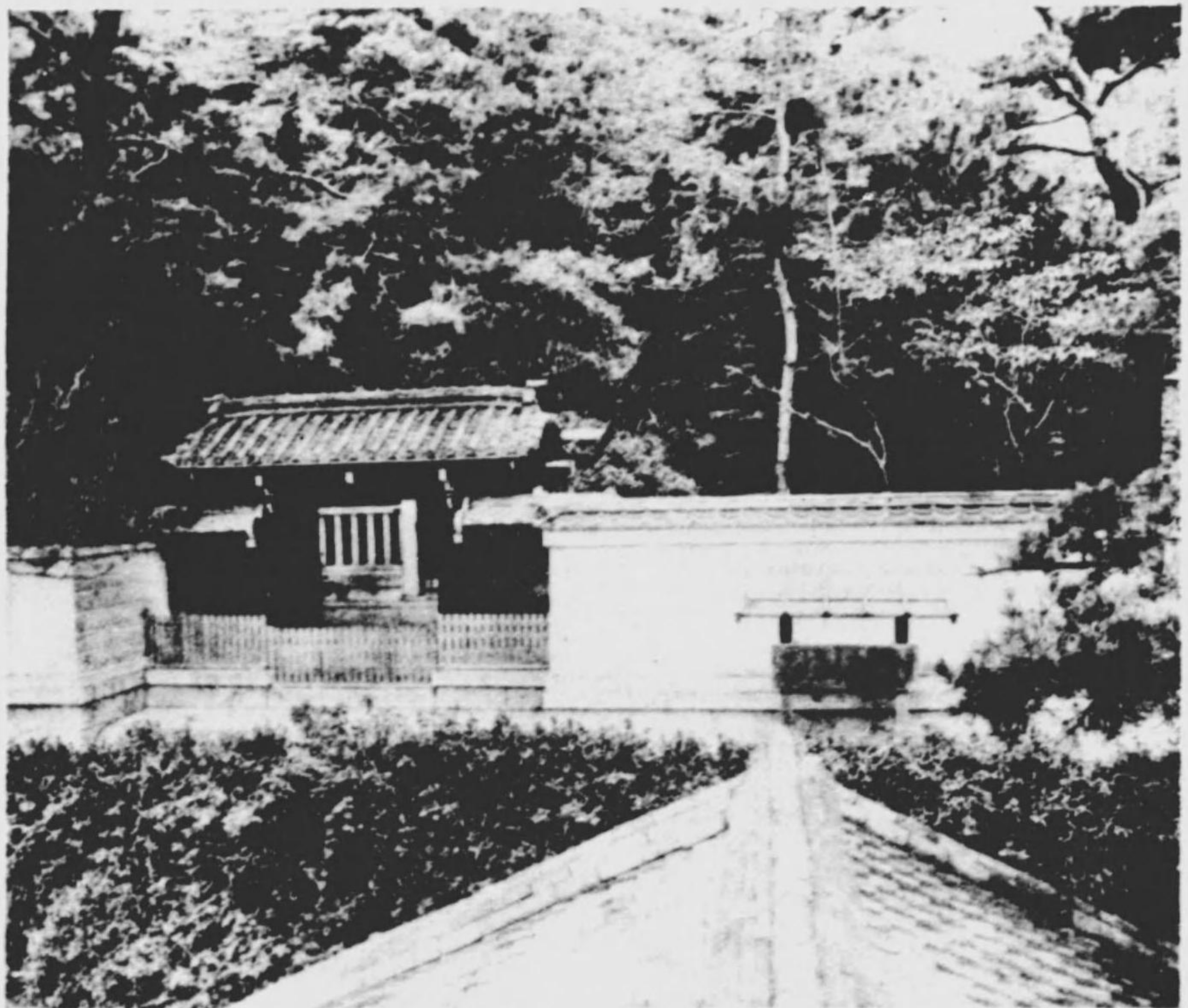
下の各宮妃殿下に於かせられては何れも御正装を召されて鳳輦に從ひ給ふ。次に宮内大臣、花房次官、戸田式部長官、蜂須賀式部官、米田侍從、岡侍醫局長以下供奉員の馬車連り、近衛の儀仗兵前後を御警護申上げ、午前八時三十分といふに宮城を御出門遊され、第一公式鹵簿は二重橋より馬場先門、凱旋道路を経て青山練兵場に進み給へば、この時各御沿道に堵列して奉迎する幾十萬の赤子は天地も砕けよと萬歳を奉唱し奉る。中に顔も擧げ得ず泣き崩れてゐる幾人もの奉迎者の姿を認めることが出来たけれど、これは恐らく名譽の戦死を遂げた遺族達であつたかも知れない。この時日比谷公園内の野砲一中隊及び品川沖の軍艦より打出す百一發の祝砲は殷々として天地を揺して鳴り出した。

この時一方當日の晴れの式場たる青山練兵場は如何と見るや、既に朝の暗いうちからこの日の盛儀を一生一度の思ひ出に拜觀しようといふ生命がけの群衆で立錐の餘地もなかつた。遙か彼方、金色の菊花の御紋章燦然たるは申上げるまでもなく玉座であらう。それに續く幾種かの天幕は國務大臣、各國公使館員を初め文武百官、貴衆兩院議員、名譽職將校家族等の陪觀席だらう。この時陸軍大學校側の式場入口には、つい最近まで滿洲の野にあつて赫々たる武勳を樹てた元滿洲軍總指揮官であつてこの日の諸兵指揮官たる大山元帥が悠然として數多の幕僚を従へて馬上に跨つてゐるのが見える。又

る閱兵の御儀が終はらせらるゝや、大元帥陛下には鳳輦より下り立たせられて玉座に入らせられ、御休憩中凱旋將軍及國務大臣外國使臣等に謁を賜ひ、これより記念すべき凱旋大觀兵の分列式に移つたのである。

先づ大山諸兵指揮官が恭々しく御前に馬を進め、最敬禮を行つて諸隊の前面に立つと見るや、指揮刀一閃、『分列前へ』の號令が一下した。同時に諸隊は一整に行進を起せば啣曉たる軍樂の響は場内を壓し、歩武堂々として玉座の前に進めば『頭右へ』の號令と共に各隊は順次最敬禮を行ひつゝ、一隊又一隊と大波の打寄せるが如く續く。おゝ見よ、われらが勇士の顔を。日に灼け眉を爛かしたあの勇壯なる一人々々の大和魂に凝つた顔を見よ。而してあの聯隊旗を。中には千々に寸斷されて原型を全く止めぬ軍旗もある。或ひは旗竿のみ僅かに残せる聯隊旗もある。いかに戦ひが猛烈であつたかといふことを一つとして物語らぬものはない。この時長くも大元帥陛下には御感深く在しますものゝ如く、聯隊旗に對しては一々舉手の禮を遊し給うたのである。かくて騎兵砲兵の勇しき行進轉回の運動あつて式を終り、大元帥陛下に於かせられては大山元帥以下凱旋各將校を玉座の前に召させられ、玉音いと朗かに優渥なる勅語を賜ひ、これに對して大山元帥が謹んで奉答文を捧げ、こゝに全く曠古未嘗有の大觀兵式は終了を告げ、零時十分、大元帥陛下には君か代奏樂裡に御機嫌





安 天 德 皇 阿 彌 陀 寺 陵

五  
月

麗しく還幸相成つたのである。  
この日二重橋と凱旋道路の間には戦利品の大砲数千門を陳列し、廣く一般の參觀に供したが、大元帥陛下に於かせられてはこの間を御通過遊される際仔細に御見聞あらせられ、侍従武官を召して種々御下問あせられた由である。尙ほ式後各部隊は青山通りを三宅坂、半藏門、竹橋に出で、それから濠端に沿つて和田倉門より凱旋道路に入り、二重橋前で萬歳を三唱した後、第一中學内の凱旋門を経て順次解散したが、これ亦非常な盛觀を極めた。この日は如何にも大觀兵式當日にふさわしき上天氣で、やゝ花曇りしたうらゝかなこの一日、大東京は全く文字通り歡呼の聲に沸き返つてしまつたのである。



# 五月

サツキ（早月）異名に芒種、夏至、仲夏、茂林、蔚林、阜月、鶉月、橋月、月見ぬ月、早苗月等がある。  
 外國の May は古代ローマでは第三番目の月で女神 Minerva からとつたものである。  
 英國の中世頃には五月一日は大公休日で木や花で飾る競技が行はれ、ナイポール（May-day）の壯麗なものが樹てられたものである。

## 五月の御陵式年祭（二六一頁）

安徳天皇、後白河天皇、中御門天皇、仁明天皇、後鳥羽天皇、後一條天皇、  
 開化天皇、用明天皇、元正天皇、欽明天皇、櫻町天皇、  
 後柏原天皇、後冷泉天皇

## 五月々訓 朋友相信し（二六四頁）

- ①大伴部博麻友のために働く
- ②菅公に對する三善清行の友清
- ③西行友の死を悼みて出家す
- ④加藤清正幸長を救ふ
- ⑤新井白石友に職を譲る
- ⑥西郷隆盛と僧月照

## 五月の衛生と運動（二六八頁）

トラホーム 日ぼし 五月の運動

### 五月の日訓及び行事と歴史

日	一	二	三	四	五	六	日
	もろともに たすけかはして むつびあふ 友ぞ世にたつ 力なるべき						
		宮中行事	學校行事	今日の歴史	民間行事		頁
				日本赤十字社の起り………二七〇 明治十年	メーデー………二七二		
				九連城占領………二七三 明治三十七年	結城神社祭………二七三		
				・明治四十四年名古屋市鎮 舞公園に於て中央線全通 式を行ふ			



日	二	三	四	五
<p>戦の いとまある日は ますらをも 都の友のうへや いふらむ</p> <p>安徳天皇阿彌 陀寺陵 壽永四年崩御</p>	<p>わたつみの 波の上にも へだてなく 親しむ友は ある世なりけり</p> <p>後白河天皇法 住寺陵 建久三年崩御</p>	<p>友をおひ ともにおはれて 若駒の おもしろげにも 遊ぶのべかな</p>	<p>つぎ／＼に あがるを見れば 雲の上に 入りしひばりや 友をよぶらむ</p>	
<p>風土記を上らしむ 和銅六年 明治元年大阪府を置く</p>	<p>加藤清正京城に入る 弘安六年北條時宗、北條 兼時を播磨に遣して外寇 防備を嚴にせしむ 和銅六年畿内七道諸國郡 郷の名を二字とし其風土 記を作らしむ</p>	<p>和田義盛前濱に戦死す 建保元年(六十七才) 明治十四年東京九段靖國 神社境内に遊就館成る 明治二十八年近衛師團基 隆を占領す</p>	<p>勤王の神菊池武時 菊池神社祭</p>	
<p>八十八夜 沼名前神社</p>	<p>水若酢神社祭 大物忌神社祭</p>	<p>砥鹿神社祭</p>	<p>端午の節句 兒童愛護週 大國魂神社祭 菊池神社祭 多度神社祭 南宮神社祭</p>	
<p>二五二</p>	<p>二五三</p>	<p>二五四</p>	<p>二五五</p>	

日	六	七	八	九
<p>さま／＼の ことにあひにし 老人の 昔がたりぞ 身にはしみける</p>	<p>使して とほせてをみむ 山里に すめる老人 さびしからむを</p>	<p>すなごりは 子等にゆづりて 蘆の屋に 網すく翁 あはれおいたり</p>	<p>老人も そみさかえつゝ 咲きにほふ 花の木陰に 遊ぶ存かな</p>	
<p>金ヶ崎の落城 明治二十年東京錦洲紡績 會社を設立す 明治三十二年商館築港工 事なる</p>	<p>高松城の水攻め 天正十年 享保十五年本居宣長伊勢 松坂に生る 明治二十一年文部省始め て博士號を授く 明治八年千島樺太交換條 約調印成る</p>	<p>大阪夏の陣 元和元年 明治三十七年北海道小樽 を焼く 元弘三年新田義貞兵を上 野國生品社前に擧ぐ</p>	<p>秀吉九州を平定す 天正十五年 安閑二年諸國に屯倉を置 く、凡そ二十六屯倉なり 明治二十二年會計検査院 法公布</p>	
<p>立夏 金崎宮祭 白山比咩神社祭</p>	<p>名和神社祭</p>	<p>大阪夏の陣</p>	<p>秀吉九州を平定す</p>	
<p>二六〇</p>	<p>二六一</p>	<p>二六二</p>	<p>二六三</p>	



日 十	日 一 十	日 二 十	日 三 十
<p>ほどく／＼に たつべき道も あるものを 老いにけりとて 身をなかこちそ</p> <p>中御門天皇月 輪陵 元文二年崩御 仁明天皇深草 陵 嘉祥三年崩御</p>	<p>うまごにや たすけられつゝ いでつらん われを迎へて たてる老人</p>	<p>たらちねの みおやのましゝ 故郷の 都はことに こひしかりけり</p>	<p>とほつおやの 定めましつる 山城の たひらの都 とはにあらすな</p>
<p>三國干渉遼東還附 小學校の設立 元和元年徳川家康諸大名 を二條城に引見す</p> <p>露國皇太子大津に傷つく 明治二十四年 持統天皇八年金光明經百 部を諸國に頒つ 元祿六年五月申江戸の人 口を調査す凡そ三十五萬 三千壹百八十二人といふ</p> <p>俱利伽羅峠の戦 壽永二年 慶應三年幕府令して外國 人の劇場及刺店に入る を許す 弘長元年僧日蓮を伊豆に 流す</p> <p>松平定信卒す 文政十二年(七十二才)</p> <p>明治四十五年子爵谷干城 薨す、年七十五 寛文十二年徳川光圀常陸 水戸に彰考館を設立す</p>	<p>三國干渉遼東還附 小學校の設立 元和元年徳川家康諸大名 を二條城に引見す</p> <p>露國皇太子大津に傷つく 明治二十四年 持統天皇八年金光明經百 部を諸國に頒つ 元祿六年五月申江戸の人 口を調査す凡そ三十五萬 三千壹百八十二人といふ</p> <p>俱利伽羅峠の戦 壽永二年 慶應三年幕府令して外國 人の劇場及刺店に入る を許す 弘長元年僧日蓮を伊豆に 流す</p> <p>松平定信卒す 文政十二年(七十二才)</p> <p>明治四十五年子爵谷干城 薨す、年七十五 寛文十二年徳川光圀常陸 水戸に彰考館を設立す</p>	<p>三國干渉遼東還附 小學校の設立 元和元年徳川家康諸大名 を二條城に引見す</p> <p>露國皇太子大津に傷つく 明治二十四年 持統天皇八年金光明經百 部を諸國に頒つ 元祿六年五月申江戸の人 口を調査す凡そ三十五萬 三千壹百八十二人といふ</p> <p>俱利伽羅峠の戦 壽永二年 慶應三年幕府令して外國 人の劇場及刺店に入る を許す 弘長元年僧日蓮を伊豆に 流す</p> <p>松平定信卒す 文政十二年(七十二才)</p> <p>明治四十五年子爵谷干城 薨す、年七十五 寛文十二年徳川光圀常陸 水戸に彰考館を設立す</p>	<p>三國干渉遼東還附 小學校の設立 元和元年徳川家康諸大名 を二條城に引見す</p> <p>露國皇太子大津に傷つく 明治二十四年 持統天皇八年金光明經百 部を諸國に頒つ 元祿六年五月申江戸の人 口を調査す凡そ三十五萬 三千壹百八十二人といふ</p> <p>俱利伽羅峠の戦 壽永二年 慶應三年幕府令して外國 人の劇場及刺店に入る を許す 弘長元年僧日蓮を伊豆に 流す</p> <p>松平定信卒す 文政十二年(七十二才)</p> <p>明治四十五年子爵谷干城 薨す、年七十五 寛文十二年徳川光圀常陸 水戸に彰考館を設立す</p>

日 七 十	日 六 十	日 五 十	日 四 十
<p>老人の かたりしことを さらにまた 思ひぞいづる ふる里にきて</p>	<p>守る人の 住むばかりなる 故郷の あきのゆふべや さびしがるらむ</p>	<p>山城の みやこいかにと 春秋の 花に紅葉に おもひやりつゝ</p>	<p>わがために 汲みつときゝし 祐の井の 水はいまなほ なつかしきかな</p> <p>神宮神御衣祭</p>
<p>蜂須賀小六正勝卒す 天正十三年(六十一才) 天應元年始めて中宮職を 置く 明治二十三年府縣制部制 を公布し地方の自治權漸 く確立す</p> <p>波上宮祭</p>	<p>楠公父子櫻井の別れ 鳥井強右衛門の最期 明治四十五年南極探検隊 長白瀬中尉一行東京に 歸着す</p> <p>賀茂別雷神社祭</p>	<p>承久の亂起る 彰義隊の戦ひ 明治三十三年清國北京附 近に於て義和團の匪徒蜂 起し耶蘇教徒七十二名を 殺害す</p> <p>夏場所始る 賀茂別雷神社祭</p>	<p>榊原康政卒す 慶長十二年(五十九才) 大久保利通暗殺さる 明治十一年(四十八才)</p> <p>出雲大社祭 彌彦神社祭</p>











## 五月の御陵式年祭

### 二 日 (皇紀一八四〇年即位)

安徳天皇(八十一代)阿彌陀寺陵(山口縣下關市)壽永四年三月二十四日陽曆五月二日に長門の國禰ノ浦の合戦で二位禰尼が天皇を抱き奉り海中に投じ崩御遊された。時に御年八歳にましました。建久二年朝廷に於かせられてはこゝに御堂を建て、天皇の靈を弔はせられた。この堂はいつ頃よりか天皇の御木像を安置し奉り、又障子には二位尼を初め局内侍及平家の一門の像を描き次ぎの廊には天皇の御誕から御入水までの平家の盛衰源平の合戦の有様などを書いてあつたといふ。この堂は今は無いが後の山には檀ノ浦で入水した人々の塔がある。

### 三 日 (皇紀一八一五年即位)

後白河天皇(七十七代)法住寺陵(京都市下京三十三間堂廻町)建久三年三月十三日陽曆にて五月三日に六條西洞院宮に崩御、御歳六十六歳。その夜御入棺、十五日法住寺の法華經堂に葬り奉つた。その御儀式は御生前の如く八葉車で密

かに渡御遊され、近習の公卿以下は徒歩で供奉し、法華堂の下に土を掘つて安置し、石の幸櫃に納め奉つたといふ。この日は重日であつたが三ヶ日の間に葬れとの御遺詔があつたのでこれによつたものである。今の法華堂は三間半四方、軒の高さは十二尺で、内に天皇の尊像を安置してあるが、文明十三年の記録によると、應仁の亂で東山の東西南北の神社佛閣悉く焼亡したのにこの影堂だけは無事で尊像を拜することが出来たとある。陵の周圍は塀で正面は高麗門であるがその周圍は九十間ある。

### 十 日 (皇紀二三六九年即位)

中御門天皇(百十四代)月輪陵(京都市下京區今熊野町)元文二年四月十日陽曆にて五月十日崩御、御歳三十七歳。五日御入棺、五月八日泉涌寺に葬り奉る。光榮公記に「御車龕前堂に至り御龕を移し終つて法中の作法等あり御龕山頭に昇らしめ給ふ。白幕を垂れて後人々難散」とある。これ即ち御火屋の御葬式であるが實は御土葬である、陵は他の御陵の如く高さ十八尺の九重の御石塔である。



仁明天皇(五十四代)皇紀一四九三年即位、深草陵(京都府紀伊郡深草村)嘉祥三年三月二十一日陽曆にて五月十日に清涼殿に崩御、御歳四十一歳。二十二日裝束司、山作司、養役夫司、治路司を任じ、二十五日深草の山陵に葬り奉つた、御葬送の禮は皆儉約に従ひ、綾羅錦繡の類皆白帛を以つてこれに代へ、鼓吹方相の儀は悉く停止せしめた。これは皆御遺詔に基き奉つたものである。四月十三日山陵に樹木を列栽し、間を一丈とし行をなさしめた。陵は今丘の形をなさず、長方形に小溝を廻らし、周圍百三十間ある。

十九日 (皇紀二〇四三年即位)

後龜山天皇(九十九代)嵯峨小倉陵(京都府葛野郡嵯峨村)應永三十一年四月十二日陽曆にて五月十九日に崩御、御歳七十五歳。陵は元福田寺の西にある。御墓は五輪の石塔で四隅に小五輪塔、小寶篋院塔がある。

二十一日 (皇紀一六七六年即位)

後一條天皇(六十八代)菩提園院陵(京都府上京區上吉田町)長元九年四月十七日陽曆にて五月二十一日に清涼殿に崩御、御年二十九歳。五月十九日神樂岡の東面淨土寺の西原で火葬に附し奉り、御骨は暫く淨土寺に置き、後又御葬所に建てられた菩提樹院の三昧堂に移された。即ち今の陵がこれ

で園墳であるが後冷泉天皇の中宮の菩提院陵も同域内にある。

開化天皇(第九代)皇紀五〇四年即位、春日率川坂上陵(奈良市油坂町)即位六十年四月九日陽曆にて五月二十一日に御崩御、年百十一歳。十月春日率川上陵に葬り奉つた。陵は小さい前方後圓の御塚で、前後の徑五十四間、前方の幅二十九間、高さ二十餘尺、周圍に小溝が廻らしてある。

二十三日 (皇紀一二四五年即位)

用明天皇(三十一代)河内磯長原陵(大阪府南河内郡磯長村)即位二年四月九日陽曆にて五月二十三日に大殿に崩す、御歳四十八歳。七月磐余池上陵(大和磯長郡安部村邊か)に葬り奉り、推古天皇の元年九月(六年後)今の陵に改葬せられた。陵は南面に築いた方墳で御塚の根で東西三十五間、南北三十二間、高さ三十六尺、四圍二百二十二間、推古天皇陵と略御同形御同大で濠があり、その外に土手が廻してある。

二十六日 (皇紀一三七五年即位)

元正天皇(四十四代)奈良山西陵(奈良縣奈良市奈良坂町)天平二十年四月二十一日陽曆にて五月二十六日に寢殿に崩御、御歳六十九歳。二十二日御裝束司、山作司、養役司を

二十八日 (皇紀二二九五年即位)

櫻町天皇(百十五代)月輪陵(京都府紀伊郡伏見町)寛延三年四月二十三日陽曆にて五月二十八日に櫻町の仙洞御所に崩御、御歳三十一歳。五月三日御入棺、十八日泉涌寺に葬り奉つた。他陵と同じく十八尺五重の御石塔である。

後柏原天皇(百四代)皇紀二一六〇年即位、深草陵(京都府紀伊郡深草村)大永六年四月七日陽曆にて五月二十八日に小御所に崩御、御歳六十三歳。十一日御入棺、五月三日泉涌寺にて御火葬、四日源宰相中将が御骨を肩にかけ深草に收め奉つた。この時衆僧が請ひ取つてこれを收め奉つたので宰相中将は最後まで見奉らなかつたさうである。

後冷泉天皇(七十代)皇紀一七〇五年即位、圓教寺陵(京都府葛野郡花園村大字谷口)治暦四年四月十九日陽曆にて五月二十八日に高陽院に崩御、御歳四十四歳。船岡の西北の原で火葬し奉り、御骨は仁和寺の圓教寺に安んじ奉つたとはいふ。

置き、左右京、四畿内及び諸國に勅して哀を擧げしむること三日、二十八日佐保山陵に火葬し奉つた。この日天下悉く素服せしめられ、天平勝寶二年十月二十八日(二年の後)奈良山陵に改葬し奉つた。この時も亦天下素服して哀を擧げた。陵型は不規則で明瞭でない。

欽明天皇(二十九代)皇紀一一九九年即位、檜隈阪合陵(奈良縣高市郡坂合村)即位三十二年四月十五日陽曆にて五月二十六日に内寢に崩御、御歳六十三歳。五月河内古市に墜し、九月大和國檜隈阪合陵に葬り奉り、皇太夫人堅鹽媛を合葬し奉つた。推古天皇二十八年十月砂磧を以つて陵上を葺き、域外には土を積み山を成し、氏毎に科して大柱を山の上に立て、又今昔物語には石の鬼形共を廻りの池の邊に立つとある。陵は今三段に築いた前方後圓の大塚であつて三尺餘りの厚さに砂磧を葺き滿たし、前後の徑は七十六間、後圓の徑は四十間、前方の徑五十九間、後圓の高さ三十八尺、四圍の濠の外には堤の跡らしいものが残つてゐる。元祿年中池田といふ田から石像四軀を掘り出したがその面貌形體異様で、一石二面或ひは四面を現し、その容貌男或は女で皆その陰部を出してゐる。これが今昔物語にいふところの鬼形であらう。今この石人は陵前の吉備姫の王の御墓前に置かれてゐる。又先年田の中から大柱の根らしいものを掘出したことがある。



原で火葬し奉り、御骨は仁和寺の圓教寺に安んじ奉つたと

もいふ。

## 五月々訓 朋友相信し

### 大伴部博麻友のために働く

博麻は齊明天皇の御代筑紫の國から招來された一兵卒であつた。齊明天皇は一三三二年即ち天皇の七年親ら舟師を率ゐて三韓を鎮定させ給うた。その時從軍し大いに新羅と唐の聯合軍と戦つたが不幸にして唐軍のため虜となり彼の地に送られた。此の時同じ運命にあつた友に土師富村、水老、筑紫薩夜麻、弓削元實兒等の四人があつた。それ等の人は數年彼の地にあつて憂目を見て居たが少しの費用もなく、如何にしても祖國日本に歸國することが出来ない状態であつた。博麻は苦慮した結果、自分が奴隸に身を賣つて少しの旅費をつくり四人の友を歸國させようと決心して友に言つた。「もし君達が歸れる様になつたところで、私は歸國の準備が出来ない。だから一緒に歸れる見込はどうしても立たない。一層私を奴隸に賣つて少しも早く歸り、唐の情勢を知らせてくれ給へ。」と、富村等四人は博麻の友情と、祖國を思ふ忠誠に感じて、

泣く泣く博麻を賣つてやつと旅費を調へ、無事に歸朝し、唐の情勢を報告することが出来た。それから三十年といふ永い年月を、博麻は彼の地に於て牛馬の様に使役されて苦しい日を送つてゐたが、持統天皇の四年新羅の使と共に還つて來た。從軍當時の青年博麻の姿は白髮の老人となつて三十餘年の苦役を物語つてゐた。此の事を聞召された天皇は詔書を賜はり又多くの賞を賜うた。この詔を日本書紀持統天皇の條に、「大伴部博麻に詔して曰く、齊明天皇の七年に百濟を救ふ役に於て、汝、唐の軍のため虜はれ、天智天皇の三年におよびて、土師、水、筑紫、弓削(名略)の四人、唐人の計ふ所を奏良さむと思欲へども、衣根無きに緣りて、達くこと能はざることを憂ふ。是には博麻、土師等に謂りて曰く、我れ汝と共に本朝に還向かむと欲ふも、衣根無きに緣りて俱に去くこと能はず、願はくは我が身を賣りて、以て衣食に充てよ。富村等は博麻が計の任に天朝に通くことを得たり、汝、獨り他界にひさしく滞ること、今三十年になりぬ。朕水厥の朝を尊び國

を愛ひて、己を賣りて、忠を顯はすことを嘉とす。故水務大肆(後の從六位下)併せて、純五匹、綿一十屯、布三十端、稻一千束、水田四町を賜ふ。其の水田は曾孫に乃至せ。三族(父母、兄弟、妻子)の課役を免じ以て其の功を顯さむ。」とあるが誰かその友情と其の祖國愛の壯烈に感激せざる者があらうか。而も奈良朝以前の文化の低い時に於てはなほさらの事である。

### 菅公に對する三善清行の友情

三善清行は菅原道真と共に醍醐天皇に仕へた文章博士である。此の頃藤原氏以外の人で重い職にあつたのは菅原道真一人であつた。道真は學問深く、時の大臣時平より二十六歳も歳上である故経験も多く、天皇及び宇多上皇の信任は益々加はつてゐたから藤原氏の人々は道真を憎んでゐた。だが道真の信用は増すのみで遂に天皇は道真に「天下の政は卿宜しく専ら之を奏決すべし」とまでおぼせられた。そこで左大臣時平は何とかして道真を亡きものにせんと思つたが、忠誠無二の道真には此の過失もない。時平は天皇の御弟齋世親王の妃が道重の娘であつたことを悪用して、「道真は陛下を廢して齋世親王を御位に即ける野心がある」と讒言した。十七歳と云ふお若い天皇は時平の言葉に欺かれ、急に道真を九州太宰權帥となさつた。道真は延喜元年正月庭前の梅に一首の歌を

殘し罪なくして配所の月を見なければならなかつた。此の時の事である。無道の時平は罪無き道真を筑紫の果に追ひやつたのみでなく、其門下生も皆放逐せんとした。そこで三善清行は友情に堪へずしては時平を諫めていつた。「道真は累代の儒家である故其の門人弟子は諸役人の半數を占めてゐる。若し菅原家に學んだ者を放逐したなら恐らく善人を失ふであらう。門人等は道真と共に惡逆を謀つたものではない。只學を習つたまでであつて、どうして謀の事を知りませう。若しこれ等の人を遷謫したなら怨も亦多いことであらう。願はくは寛宥にして陰徳の大なることを伏して望む。どうぞ示すに仁厚を以てせられたい。放逐の由を聞いて人々皆悲み哭し安んずる所を知らない。若し此の人を失ひなば文の事は衰微するであらう。請ふ恩宥の旨を傳へて以て才子の心を繋げ」と。暴舉に出でんとした時平も、此の三善清行の諫に依つて遂思ひ止まり諸生は此の大難をのがれることが出来た。誠に友情厚き清行の行爲は賞して餘りある美談である。

### 西行友の死を悼みて出家す

西行法師は出家後の法名で、それ以前の名は佐藤義清と云ひ、鎮守府將軍藤原秀郷十世の孫である。代々武を以て著はれ義清(西行)も勇敢で射を善くして、鳥羽上皇に仕へ左兵衛



尉に任ぜられ、又和歌に長じてゐたので上皇は深く其の才を愛し寵遇甚だ厚かつた。

義清(西行)嘗て友人憲康と鳥羽殿より還り又明日も同じく参殿しようとの約束し、約の如く憲康の邸へ行くと、憲康は昨夜急死したとの事で家人は皆悲歎にくれてゐた。昨日まで相共に語り相共に参殿した友が今朝は早語るに由なき黄泉の客となつてゐる。あまりのはかなさに義清の悲歎やるかたなく、遂に出家し佛道を修行しようとの意を決して官を辭した。上皇は其の才を惜みて之を許さなかつた。しかし義清は嬉々として戯むれる不憚な愛兒の愛も世の總てのものをも打ち捨て、警石の如き決心を以て出家成道に志し嵯峨に往つて僧となつた。時に二十三歳。それより關東西海に往つて僧となつた。時に二十三歳。それより關東西海に往つて僧となつた。多くの凌辱も多くの苦行も敢て意にせず吟詠しつゝ四方を周遊し、建久元年二月七十三歳を一期として亡くなつた。

### 加藤清正幸長を救ふ

太閤秀吉が十三萬の軍兵を以て朝鮮に出師した戦功も、沈惟敏等の不法に依つて破れた時のことである。慶長二年再度の出兵に加藤清正が蔚山に籠城と云ふことになつた。大明と朝鮮との軍は此の事を聞き百萬の兵を以て攻め破らんとして旗鼓堂々と南下した。時は十二月、我に不利で彼に有利な冬季の戦である。専ら清正の蔚山攻圍を計畫し、十二月二十二日

揚鎬等の一隊は一舉に蔚山を攻落すべき命を受け、高策等の一隊は蔚山と釜山間の海陸兩路を絶つて蔚山を孤立せしむる様にとの命を持つて進軍した。二十二日淺野幸長等は翌日蔚山に入城の豫定で彦陽に宿泊した。その時のことである。明の中央軍高策の軍は淺野幸長の屯營を襲撃し、幸長等は敵の攻圍を受け苦戦に陥つたが危くも蔚山に駆けつけて救はれたものゝ、敵は翌二十三日も四日も五日も猛烈に攻撃してやまなかつた。此時は清正は蔚山の南方機張に居つて、幸長等苦戦の知らせを受けた。幸長を見殺しにしてなるものか」と直ちに六具をかため小舟にて手勢を提げて機張を出發し海上を蔚山に向ひ、二十六日猛威を振ふ敵勢を物ともせず威風堂々と進んだ。敵は清正の姿に驚き、敢て抵抗せず、安々と城中に入り幸長を救ふことが出来た。城兵は地獄で佛に合ふ心地で喜び合つた。

### 新井白石友に職を讓る

新井白石は三歳で文字を寫し、六歳で詩を暗誦し、八歳で書三千字夜三千字を習ひ、十三歳の頃は父の代筆をなし武藝も十一歳より始め人に秀でゐた。

二十一歳の時或る事で藩主から放逐され赤貧洗ふ如き生活の中にもよく勉強した。その頃一大富豪河村瑞軒は白石の人物を聞き「天下の大學者たるべき人也」として孫女の夫に迎へ

ようとして黄金三千兩で求めた地を與へて持參金として申込んだが白石は人のお蔭で出世したくないと潔く御断りした。

二十六歳の時大堀田正俊に仕へたが堀田の殺された後致仕し三十五歳の頃木下順庵の門人となつて教を受けた。此の頃加賀の前田侯が學者を求めて來たので、順庵は白石を推薦することにした。所が同門の岡島石梁は加賀の生れであつたので此の事を聞き、白石に「我が老母は加賀にゐて、拙者の歸國を待ち詫びてゐる。若し先生の推薦によつて加賀侯に仕へることが出来るならば親子の日頃の願が達せられるのだが讓つて下さるまいか」と頼み込むと、白石は快諾して順庵に事情を告げ、「私の仕へるのは加賀侯には限らない。私に代つて岡島を御推薦下さい」と願出づると順庵は其の友情に深く感じて岡島を加賀侯に推薦した。私は支那の管飽の交を論ずる前に此の二人の交を喧傳したいと思ふ。これより二年後順庵の推薦により將軍綱吉の甥綱豊(後の家宣)に仕へることになつた。これより或は宮家創立に、或は朝鮮使節の改善、或は悪貨改鑄等政治上の功績は偉大なものであつた。又藩翰譜など多くの著書を殘して六十九歳で亡くなつた。

### 西郷隆盛と僧月照

西郷隆盛は鹿兒島に生れ、安政元年藩主島津齊彬が江戸に参觀する時、軽い身分ではあつたが藩主に隨行した時、藩政

や國事に關する意見を述べ大いに信用され島津藩で御用にたつのは隆盛一人だ」とまで云はれた。齊彬歿後は身命を獻げて皇室、國家のためにつくすべく決心して江戸と京都の間を往來し、改革に苦心をこらした。當時京都清水寺の住職に月照といふ僧がをつた。尊王の志を懐いて公卿と交り、諸藩の志士と交つて尊王攘夷派の一人として活動してゐた。隆盛も此の月照と親交を結んで事を謀つてゐた。即ち井伊大老排斥の運動も其の一つであつた。

だが一方幕府に於ては反對派捕縛を始めた。隆盛もその一人であつたがそれよりも月照は一層危険な身の上であつたので公卿近衛忠熙は隆盛に月照を保護させて奈良に隠れさせ、安政五年九月十日夜月照を駕籠にのせて京都を出發させた。追手ははや月照の眞近にせまつた。隆盛は大刀に手をかけてよらば一刀兩断に斬り棄てんの威勢を示せば捕卒は姿を消しやつと危難を免れた。だが捕卒は四方に行き渡つてゐるので奈良も安全地帯でない。隆盛は月照を筑前の勤王家に託し、再び迎に來るまで待たれよと言殘して薩摩に歸つた。歸藩して見ると勤王論者齊彬逝去の後であつたから、井伊大老も薩摩を恐れず反對派捕縛に手を下して以前とは形勢一變し勤王を説く者を壓迫した。筑前にゐる月照を又復幕府の捕卒が探索してゐることを知り、勤王家國臣と重助を供に薩摩に逃れた。安政五年十一月八日鹿兒島につき隆盛と再會したが、



時はすでに捕卒の手は薩摩に延びてゐた。そこで藩主島津家でも此の際月照を保護したならば幕府の嫌疑を増すのみである。隆盛は考へ、内命を隆盛に傳へて日向に逃れさせることにした。隆盛は考へた、假令日向に逃れても幕府の捕卒から逃れ通すことは困難だ。此の上は志を同じうする月照と共に此の世を辭する外はない。死を覚悟した隆盛はすべての準備をととのへ月照を訪ねて、藩命により日向に出発すべきことを告げた。それと氣のついた月照も快く夜半重助と平野を召連れて四人は旅出した。月は皎々と輝いてゐる、宛ら一點の私心もない勤王論者の兩人の心中を物語るかの様な明月であつた。準備の酒肴を取り出し隆盛は月照を船の一方に招きて事情を話し二人共決心を確めた。この時月照は、

曇なき心の月も薩摩湯

沖の波間にやがて入りぬる

大君の爲めには何か惜しからん

薩摩の瀬戸に身は沈むとも

## 五月の衛生と運動

若葉が茂り出すとぼつ／＼目を赤くした兒童を見かけるやうになる。目に青葉山ほととぎす初鯉』ではなくて『トラホ

二六八

の辭世を隆盛に示すと、これを見て打肯いた。そして月照は身を淨め西方に禮拜し兩人は相抱き合つて海中に身を沈めた。水音に驚いてこのことを知つた平野と重助は百方手をつくして救ひ上げ介抱したが月照は終に蘇へらなかつた。不思議や隆盛はやつと息を吹返したがなか／＼正氣付かず「月照」と幾度呼んだか知れない。やつと正氣になつた時懐中にしてをつた月照の辭世を見て、月照が死んで自分が助かつたことを知ると、すぐ月照を追うて自殺しかねまじき様子に看護の者は百方手をつくして注意した。目を經るに従つて友人などが「月照は亡くなつて君が蘇生したのは、國家に盡すべき活動が天が君に欲したからだ。天命に従つて素志を貫徹すべきだ」と諭したから隆盛も今は亡き月照の分まで活動して皇國のため盡すが彼に對する道である」と考へて自殺を思ひ止まつた。

其の後隆盛は東奔西走身を忘れて國家のために盡した事は人の知る所である。

「ム」『目ぼしかな』である。そこで今月はトラホームと目ぼしについて一應の講話を試みたいと思ふ。

### トラホーム

トラホームはわが國に非常に多い病氣で従つて小學兒童の間などにも非常に蔓延してゐる病氣であるが、餘りに多いに慣れ、且發病當初は苦痛もないのでこの病氣の恐ろしさを眞に悟らぬものが多いのである。しかしこれは實に恐るべき病氣で、一旦罹つたとなると中々全治しにくい病氣で、而も後には逆睫毛が生え、黒眼を絶えず摩擦するのでそのため非常に視力を減じ、殊に恐るべきは黒眼にパンヌスといふ病變を起し易いことである。**症状** トラホームが重症になると、透明であるべき眼球に濁濁を呈して来て、丁度硝子のやうになつてしまふ。又角膜潰瘍といつて黒眼に傷が出来、遂には失明する者も多いのである。トラホームの傳染はいふまでもなく微菌からで、この微菌は患者の眼脂の中に含まれてゐるのである。この病菌は患者の手から玩具、學用品、手拭などに附着してこれに觸れた健康の子供に傳染するのである。トラホームの起り始めは極めて緩慢で、自覺症がないから自分でも氣が付かずにあるものであるが、やがて、子供は眩しがるやうになり、眼脂が出て眼瞼が腫れて来るが、この頃早く治療せぬと取代しのつかぬこととなる。治療は専門醫の範圍に屬することだからこゝには省く。**豫防法** 先づ學校とか戸外とか、子供が歸つて來たら必ず指先を消毒させること。これだけは各家庭及學校で必ず實行させて置きたいと思ふ。これと同時に眼を

擦らない習慣を早くからつけて貰ひたいと思ふ。それから朝の洗顔の時必ず清水で洗眼させるやうにして貰ひたい。これは僅かなことであるがトラホーム豫防上非常に有効なものである。又不幸にして患者を出した時には手拭、洗面器等は必ず別にして混用せぬやうに注意すべきである。

### 目ぼし(フリクテン性結膜炎)

目ぼしとは醫學上の名前をフリクテン性結膜炎といつて眼瞼と眼球との間にある薄膜に出来る小さな腫物のことをいふのであるが、この結膜炎は腺病質の子供が胃され易い病氣であつて一名腺病性血膜炎ともいふ。従つて田舎の子供より都會の子供に多いわけであるが、又一面腺病質の體質の子供ばかりが胃されるといふわけではなく、春秋の氣候の變化する時、麻疹のあと、砂塵や風や塵の刺激を受けた後でも出来ることがある。**症状** 最初に黒眼と白眼との間あたりに灰白色の點狀の小さな腫物が出来ることがもなく遺瘍となる。この時子供は眩しがつて頻りと涙を流すが重症になると角膜の縁に沿つて連続的に出来ることがあるから早期に手當しなければならぬ。**手當法** 先づ體質的に根本的に改造を加へることが先決問題であつて、常に身體を強壯にすることに心掛ける必要がある。腺病質の體格さへ改造すればこの病氣には絶対に罹からずすむのである。又常に眼を大切にし、一旦胃されたなら硼酸水等で洗滌し眼球



の疲労を療すやうにすることが必要である。

### 五月の運動

青葉は醫學的にいつても、感情に爽快な気分を興へる點からいつてもこの月も亦努めて外氣の中に出て新鮮の空氣を思ふ存分取入れるべきである。先づこの月の運動界はなんといつても夏場所の大相撲だらう。夏場所には春場所と違つて一種いふにはれぬ壯快味が漂ふものである。又この月は端午の節句の書入れ月で月の五月を中心に全國に亘つて兒童愛護週間が催される。『先づ健康』は『先づ兒童から』の標語に置き代へて大いに運動を奨励して第二の國民の健康の増進を圖りたいものである。釣道樂の人は三日（昭和十年）の八十八夜を中心に青ギス釣りに天狗の鼻の高さくらべをし、少し凝つたところでは月の

十日から長良川の鵜飼の走りを味ふのも悪くはないだらうし、一家團欒して一日の行樂を樂まうとするならつじ、藤、牡丹、菖蒲の觀賞などが好時期である。又園藝の好きな人は夏咲き、秋咲き（朝顔、夕顔は初旬、大菊は下旬頃挿秧、アルターナンセラ、ゼラニウム、ダリア、石竹等の挿木、種下しは好季）の種子や球根の植付を忘れてはなるまい。

つじの名所（東京附近）目比谷、村山貯水池、井ノ頭公園、百草園、上州館林、赤城山

菖蒲の名所（同）堀切、吉野園、玉川遊園地、植物園、花月園

藤の名所（同）龜戸天神（粕壁）牛島

牡丹の名所（同）吉野園、松戸高等園藝學校

## 五月の行事と歴史

一 日

### 日本赤十字社の起り（明治十年）

『火砲の響き遠ざかり』

あとには虫の聲絶えて、……』といふ古き赤十字の歌を聞く時、私達はなんともしぬやさしき感情に襲はれる。この赤

十字がわが國に初めて起されたのは、明治十年の西南の役の時であつた。當時はまだ赤十字社とはいはず『博愛社』といつてゐたが、その名こそ異れその仕事に於ては赤十字社の働きと同じことだつたのである。これ以前に既に萬國赤十字社條約は紀元千八百六十四年（わが國の元治元年）にスイスのゼネヴァに於て締結されてゐたので、わが國の博愛社も赤十

字社と改稱して明治十九年にこれに正式加入したのである。この記念すべき日に當つて赤十字社の始祖ナイチンゲールのことを思ひ出すことは尤もなことであらうと思ふ。ナイチンゲール（詳しくは英國人ウイリアム・ヨシユア・ナイチンゲールの末女ナイチンゲール嬢）は伊太利のフロレンスに生れ二十歳で巴里の看護婦學校に學び、クリミア戦争の時招かれて従軍し、誠心誠意を盡して看護の任に當つた。當時傷病兵は嬢の姿を天使の降臨として仰いだといふことである。當時傷病兵中死ぬものは百分中の四十二だつたけれども嬢が赴任して来て以來百分の二に減少したといふことである。如何に嬢の機手が偉大な能力を發揮したかといふことはこの一事を以つてしても判るであらう。この時英國政府は嬢の動功に酬いるため七萬二千鎊を贈つたが嬢はこの金を全部病院建設のため投じてしまつた。今日では世界何處の國にも赤十字社の設けのない國はなく、常に國境を越えて國際愛のうるはしき使徒となつてゐるが殊に昭和九年秋東京に於て萬國赤十字社大會が開かれて、一大交驛が交されたことは讀者の記憶に新なるところであらう。

### メーデー

メーデー（May Day）は五月一日行はれ

る労働祭の意味で、これは西暦千八百八十六年（明治十八年）以來萬國の労働者が國際的に示威運動を催す日で、この起りはアメリカに於ける八時間労働問題で米國

各労働團體はその前年八時間労働制實施の目的を達成すべく全國労働者が一齊に要求を出し、若し拒絶された場合には總罷業を執行すべく翌年即ち千八百八十六年五月一日に全國的大示威運動を試み遂に成功した記念日である。日本では大正九年大戦後の大恐慌が襲來した年の五月一日上野公園で催されたのを初めとして今日では社會的行事の一つに數へられるやうになつたが近年は餘り盛んではない。

### 九連城占領（明治三十七年）

日露戦争當時わが軍が

敵の要害九連城を占領したのは明治三十七年の今月今日のことである。九連城は名だゝる天險で、露軍は常にこの天險を根據地としてわが軍を悩ましてゐたので、わが軍は一日も早くこの地を占領せねばならなかつた。即ちわが軍は先づ第十二師團を右翼となして太房樓に向はしめ、第二師團を以つて左翼として安東縣に向はしめ、一方中央軍として近衛師團を蛤膜塘に進出せしめ、全軍の總豫備軍は遼陽街道を前進して三面挾撃の作戰計畫を樹てた。四月三十七日先づ野砲第二聯隊及び砲兵聯隊は未明を期して豫定陣地に就き、戦機を熟するのを待つてゐるうち午前十時四十分敵は先づわが歩兵斥候に巨砲を浴せかけた。こゝに壯烈な一大砲戦は開始されたのであるが午前十一時十分といふに敵はわが有坂砲の威力に沈黙したのでわが軍は猛烈なる突撃を開始した。この時敵は再び



八門の砲を一齐に開いて九星島方面にあつた架橋點を目がけて盛んに發砲したのでわが近衛師團の砲兵は義州の東方よりこれに應戰し、瞬く間にこれを沈黙せしめた。次いで午後零時三十分、敵は再び發砲を開始したがこれ亦約一時間で閉息せしめてしまつた。この間に於てわが軍の鴨綠江の架橋工事には進捗し、午後八時を以つて完了するや諸隊は續々として虎山方面の高地に進出し、就中細谷司令官の率ゐる分遣隊は鴨綠江を遡江して敵の砲兵隊に猛射を浴せかけて凱歌を奏して引揚げた。明れば五月一日、いよ／＼總攻撃は開始され、黒木大将の率ゐる第一軍は未明より攻撃を開始し、遂に九連城を陥れ、世界第一の強兵と稱へられる露軍の堅壘を突破した。この日九連城頭は未明から彼我の交戦物凄く、午前七時五分楡樹溝の西北の高地に陣した敵の砲兵先づ沈黙したのでこの機を逸せず各師團は一齊に突撃を開始し、八時過ぎより九連城及び馬楡溝の北方一帯に亘る高地を早くも占領し、その他敵壘七ヶ所を陥れて凱歌を擧げて敵の本城へ突入するや直ちに敵を追撃して三面から挾撃し、一方砲兵陣地を突撃して砲二十門を分捕り、軍師團長ザリスリツヂ及び師團長カシタリンスキーは共に負傷して命辛々敗兵と共に鳳凰城方面に向つて潰走し、こゝに全く九連城は皇軍の手に歸したのである。この戦ひに於けるわが軍の損害は死傷約一千、敵軍はこれに倍する二千の損害を蒙つたのであつた。

### 結城神社

三重縣伊勢國津市八幡町鎮座、結城宗廣の靈を祭り、結城親光以下殉難戦死者を配祀してある。當社の創始は宗廣の卒去後後の人がその墓側に小祠を建て、結城明神と號して春秋の祭典を修めたのに起因する。文政七年藩主藤堂氏が社祠を改築し、墳墓を修理した。明治天皇に於ては特別にその功績を追思遊され、明治十五年別格官幣社に列せられた。例祭(五月一日)當日東遊を行ふ。

### 二 日

### 風土記を上らしむ

(和銅六年 紀一三七三年)

現在残存して

雲風土記、播摩風土記、常陸風土記、肥前風土記、豊後風土記等であるが、この時は畿内七道の諸國に命じて各郡下の産物、地味、山川及び往古からいひ傳へられる物語等を選述して上らしめられたのである。いふまでもなくわが國の地理、歴史をある體裁を整へて記録した初めであるが、これを初めて諸國の司達に命じ給うたのが今を距る千二百年前元明天皇の和銅六年今月今日のことである。

### 八十八夜

八十八夜は大抵毎年五月二日に相當するがつまり立春(二月三日)の翌日から八十八日目に當る日がそれで、この日のことを別名忘れ霜とも

いひこの日を境に霜が降らなくなるのでかくいふのである。農家ではこの日を境として收穫をなし、又茶摘みが盛んになるのもこれからである。

### 沼名前神社

廣島縣備後國沼隈郡沼町後地鎮座。綿津見ノ神を祀り、素盞鳴ノ命を配祀する。

創始は神功皇后が征韓の日、御船をこの浦に碇泊遊された時輓を奉りて神靈とし、舟玉を祀り給うたことに起るといふ。延喜式内の大社であつて、社地は古くは渡之辻にあつたが慶長年中後地麻之谷に遷し、貞享二年更に今の地に遷し奉り明治四年國幣小社に列した。相殿神は額祇園社と稱し、又疫隅宮と唱へ、悪疫除の證符として赤い紙幟を出す。祭事は五月二日の例祭の外に、特殊神事に節分祝祭(一に創替神事)御弓神事(一月六日)六月初祭(六月四日より十八日まで)等がある。

### 三 日

### 加藤清正京城に入る

(文祿元年 紀二二五二年)

太閤秀吉が

軍を動かした時わが鬼將軍加藤清正は第一軍の大將を承つてゐた。この時小西行長は第二軍を率ゐて早くも釜山に上陸し進んで東萊を占領してをつた。清正は釜山に着いて行長が既に東萊を占領したといふことを聞いて遽かに兵を避けて別路

慶州指して進んだがこの時清正の兵は疾風迅雷の如く進んで先づ金州城を占領し、この他數多の小城を駒の蹄に蹴散らして早くも漢江の邊に到つた。敵兵は大いに驚いて力を盡して防ぎ戦つたが遂に圍を捨て、走つたので清正は決河破竹の勢で漢江を渡り遂に京城の南大門の下まで攻め寄せた。時文祿三年の今月今日のことであつた。この時城内には既に小西行長の兵があり、噂するところによると行長は昨日京城に攻め入り、韓王は既に皇子と宮妃とを伴つて逃げてしまつたので城内には敵兵の影すらもないといふことだつたので清正は心中の不快を押隠すことが出来なかつた。そこで負けぬ氣の清正は、「よし、行長が空城を得て先陣を誇らうとするなら自分はどこまでも李王を追つてこれを擒にして彼の行長の鼻柱を挫かすにはおかぬぞ」といふので休息する邊もなく平壤に向つて韓王を追つて進んで行つた。

### 水若酢神社

島根縣隱岐國隱地郡五箇村郡大町鎮座

水若酢ノ命を祭り、延喜式内の名神大社である。明治四年國幣中社に列した。祭神の系統は明かでないが、或ひは隱岐國造の祖神を祭るともいふ。隱岐神明帳に正四位上水若酢明神とあり。神社叢書に「當社は、當國の一ノ宮なるべし、此處を一ノ宮村といふ、さるに、一宮記には知夫郡由良姫神社といへり、姫神社、實に一ノ宮ならん今、里人だにしらぬ小社となれるも怪しからずや、夫に反して、



當社の盛に坐しませる、一宮にあらずして何せんや、よく考ふべし」とある。

### 大物忌神社

山形縣羽後國飽海郡鳥海山鎮座、祭神大物忌ノ神、一説には倉稻ノ魂神を祀るといひ、又大山祇ノ神を祀るとも云ふ。延喜式内の名神大社で、又本國の一ノ宮である。本社はかの三山（月山、湯殿山、羽黒山）と共に古來から遠近の尊崇厚く、久しく修験者の尊信するところであつた。神位は從五位上勳五等から累進して元慶二年勳三等に、同四年從二位に上り給うた。貞觀四年官社に預り、神封は天慶二年二戸を増し、本封に合せて四戸となつた。正平十三年北畠顯信が朝廷の復興、奥羽兩國の靜謐を當社に誓請し、又慶長年中最上義光は神領を寄せ、元和年中以後酒井氏がしばしば寄進した。元文元年正一位の位記並に勅額を賜つたといふ。明治四年官幣中社に列した。攝社に稻尾神社、城輪神社、小物忌神社（縣社）の三社がある。口之宮（拜殿）は同郡吹浦村と蕨岡村との兩所にあつて、例祭は吹浦では五月八日、蕨岡では五月三日で隔年に執行する。特殊神事に、物忌祭（一に初申祭といふ。陰曆正月、十一月の第三寅日より一週間）管粥神事（一月五日）御濱出神事（陰曆六月十四日）以上は吹浦に於て行はれ、種子蒔神事（一月七日）御弓神事（四月三日）宵宮神事（例祭前日）齋館開（十月二十八、九日）物忌籠（陰曆十月初卯より酉日まで）以上

蕨岡で行はれる。

鳥海山は山容が富士山に似てゐるので秋田富士の稱あり、海面を抜くこと七千尺、四時白雪を頂いてゐる。頂は數峰に分れ、東南を行者嶽と稱へ、天武天皇白鳳年中に行者役ノ小角が來た處だといふ。東を七高山といひ、虫穴の巖がある。此を荒神嶽といひ、即ち本社のある處である。西を稻倉嶽（稻村嶽）といひ西南を笠ヶ嶽といふ。山中に二湖あり、西の鳥ノ海といひ周圍一里、山の名はこの湖から取つたものである。東の弦卷ノ池といひ周圍一里弱、山上から眺望すれば連山波濤の如く、東海の旭日を拜することが出来る。西は蒼海渺茫として眼下の飛鳥呼ばば將に應へんとする趣がある。往昔この山上から飛んだのでこの名があるといふ。誠に類々稀な靈山で、參詣の人が絶えることがない。登山口に三つあり、本郡蕨岡よりするものを表口といひ、由利郡矢島よりするものを裏口といひ、小瀧よりするものを脇口といふ。大物忌神社の所在については古來より諸説があり、就中明治四年別格の際遷座説（上古は鳥海山上に祀つたものを中古吹浦に遷座したといふ説）を正確なものとして吹浦を以て國幣中社大物忌神社と仰出されたのに對して蕨岡は之に對して異議を挟み訴願を提出した。そこで明治十八年有栖川神道總裁宮の御仲裁により、吹浦の國幣中社を取消し、改めて鳥海山上の社殿を大物忌神社本殿と定めらるゝに至つた。而して兩

村を各々口之宮（拜殿の義）と稱せしめられ、兩宮隔年に奉幣をなし、祭日は古來兩宮異れるものがあるのでこの際このまゝ認められた。本殿に於ては祭儀を行はないことに決した。蓋七千二百尺の高山であつて、登山期は僅に七、八、九の三ヶ月に過ぎず、加之社殿狹隘、晴雨の定めなく、到底日を期して登山することが出来ないからである。

### 四 日

### 和田義盛前濱に戦死す

（建保元年 紀一八七三年）

和田義盛は三浦

義明の孫で義宗の子である。義盛は以前小太郎といひ和田の庄にゐたので和田姓を冒したのである。治承元年に源頼朝が石橋山に戦ふや義盛は叔父の義澄と共に頼朝を援けようとして馳せ参じたが、頼朝が敗れたといふ報せを受けて途中から引歸さうとするその又途中で島山重忠と出遭つてこゝに闘らずも、一戦を交へることゝなつた。ところがこの時義盛は島山に散々に打負かされて唯一の頼みとする衣笠城も陥られたので一方の血路を開いて海に浮び、安房の國に遁れようとした。一方この時頼朝も亦石橋山から命辛々逃げ出して真鶴の岬から小舟に乗つて安房の國へ遁れようとする途中、實に遇然のことから海上で義盛と落ち合ふことが出来た。そこで共

國を平げることが出来たのだが、義盛はこの時早速重く用ひられて侍所別當となつた。その後義經に従つて木曾義仲を滅し、次いで平家を一ノ谷に破つて功を樹て、更に範頼に従つて、西國に赴き、後義經に従つて櫛ノ浦に平家を滅して數々の功を樹てた。文治五年に頼朝に従つて奥羽の藤原泰衡を攻め、この時泰衡の庶兄の西木戸國衡を射て仆した。建久元年には頼朝が特に朝廷にお願ひして右衛門尉に任せられたがこの時結城光朝、梶原景時等の讒訴に會つたが許された。建保元年に平泉親衡が北條氏を滅さうとして兵を擧げた時義盛の子の義直、義胤がこれに参加して捉へられたが、この時父の義盛は上總にあつて鎌倉の騒ぎを聞き、大いに驚いて急ぎ歸つて二人の罪を赦されんことを願つたが許されなかつた。この頃頼朝は既に薨じて實朝が職を襲ぎ、北條義時が威を専らにしてゐた。その後義直は赦されたが義胤は首謀者の罪を以つて奥州に流され、義時がその邸宅を奪つてしまつた。こゝに義盛は奮然として怒り、遂に北條氏を滅さんことを決心し廣く同志を集めて時を窺つてゐた。幕府では義盛の穩かならぬ計畫を聞いて橋公氏をして懇々として諭さしめるところがあつたが數日ならずして遂に兵を擧げてしまつた。そこで義時は急を聞いて幕府に入つたので義盛は進んで幕府を圍み、門を破つて營中に入つたがこの時邸中から火焰が起り、瞬く間に幕府の建物が火焰の底に吞まれようとしたので、義時は



實朝を毒じて難を脱れ、その子の泰時をして防ぎ戦はしめた。激戦は暮より朝に及んだが遂に勝負は決しなかつたが、義盛の軍先づ疲れて前濱に退いた。泰時の軍は義盛を追つて前濱に迫り、こゝに最後の戦を華々しく交したが、義盛の軍破れ、大將義盛初め一族悉く戦死してしまつた。この時義盛は六十七歳であつたが、一族の中の三浦義村兄弟は義盛に従はなかつたので罪から脱れることが出来たといふことである。

### 砥鹿神社

愛知縣三河國寶飯郡一宮村一宮鎮座、大己貴神を祭る。延喜式内の明神大社で、又當國の一ノ宮である。もと本宮山の頂にあつたが、後、神託によつて此の地に遷座あらせられたものであるといふ。東海道名所圖繪に『文武帝御惱みによつて、大寶年中草鹿砥公宣卿煙巖山（鳳來寺）勅使の時、神託あつて公宣卿を以て當社の御神を祀らしめた』といふことがある。今の神主草鹿砥氏はその後裔であるといふ。神階は嘉祥三年從五位下に至り給ひし以來、仁壽元年、貞觀六年、同十二年の加階を経て、同十八年從四位上に進み給ひし由史に見え、國內神明帳には正一位砥鹿大明神と見えてゐる。徳川氏に至り慶長七年朱印百石を寄せ、翌八年更に朱印二十石を奥宮へ寄進した。猶例祭毎に當國の領主吉田氏が代官を代拜せしめ臨時の祈願には領主自ら參向する例であつたといふ。明治四年國幣社に列し攝社

奉つた。この時天皇に於かせられては非常におよろこびになり、親しく錦旗を賜うて武時の忠節を勵し給うた。この時北條英時は鎮西探題として博多にあつた。英時は武時が遙かに召に應じて天皇の許に馳せ参じたことを聞いて武時を懐柔しようとして召したが武時は斷乎としてこれを拒け、少貳貞經大友貞宗に通じて兵を出して共に英時を討んことを圖つたが貞宗は英時の勢に怖れをなして武時の求めに應じなかつた。この時貞經も亦天皇の軍が都にあつて屢々破れ給ふことを聞いて危惧し、武時の使者の首を斬つて英時に贈つたので武時は大いに怒り、手兵僅かに百五十騎を率ゐて英時と一戦を交へんとし出發した。この時武時の軍が楠田神社の前を通り過ぎようとした途端、突然武時の馬が前へ進まなくなつてしまつた。武時大いに怒つて叫んでいふには、『天皇の御爲に一戦を交へんとするの何故わが馬を止むるや。』といつて矢庭に一矢を發つて神社を射た。すると不思議にも馬が歩み出したので武時は鎧を蹴立て、遮二無二英時の陣營に躍り込み、あはや英時を追詰めて詰腹切らせようとした利那、無念にも大友少貳等が英時の危急を聞いて新手を以つて征め寄せて來たので、さすがの武時も衆寡敵せず、遂に恨を吞んで華々しい討死を遂げてしまつた。この時年四十二、一族武重、武士武光、武政、武朝等も勤王のために悉く討死したのである。武時の勤王の如きは、永く青史にその名を止めて、懦夫を立

に二宮社、三宮社がある。本宮山は本社を距ること二里半、高さ二千六百尺の山上に奥宮を祭つてある。例祭は五月四日に行はれ、神輿渡御、流鏑馬式等がある。當社の境内で假面、風車を賣つてゐるがこれは夏病を免るといつて買ふものが多し。一月三日の田植祭は、社前に田の形を作つて、巫女が耕作、耨時、收穫等の所作をなし、神歌を歌ふ。一月十五日の粥占は奥宮に於て行はれ、當年の作物の豊凶を占ふ。陰曆一月十五日その頒布式を行ふが當日は參詣のため前日より登山する者が多く、山上は人を以て埋る。その他寶印祭（一月六日）火舞祭（二月七日）等がある。

### 五 日

#### 勤王の神菊池武時

（菊池神社祭）

今日は勤王

以下その一族を祭る菊池神社の御祭典である。かういふ日を特に選んで兒童に日本精神を鼓吹したら一層その効果は顯著ではあるまいか。（菊池神社に對する詳しい解説は今日の後段にある。参照されたい。）

菊池武時は幼名を二郎といつてその父は隆盛といふ人である。古く藤原氏の出で、元弘三年に後醍醐天皇が船上山に行幸しまして廣く諸國へ詔を下して勤王の士を募り給ふや、武時は逸早く勤王を唱へて窈かに行宮に使を遣して詔を奉じ

たしめるであらう。

#### 端午の節句

けふは端午のお節句である。折からの五月風に翻翻として鬨る鯉幟、さては五色の吹流しに鍾馗様の幟、なんといふ勇しい尙武日本の年中行事だらう。三月三日の優雅な雛祭と相對照してその妙味はいふばかりもない。さて五月五日の端午の節句はいふまでもなく五節句の中の一つで、端午の外に重五、五五ともいはれて、元來五月の初の午の日を祝ふので古くは五月五日とは限られてゐなかつた。端午の節句の起原については古來いろいろの説があるけれど、やはり初めは支那の國に起つて、それがわが國に傳つて來たものらしい。端午の節句には節物として粽を供する習慣が古くからあるが、この粽と節句とは何か深い關係があるらしい。或ひはこの粽の起原が端午の節句の起原ではあるまいかと思はれる節がある。といふのは、日本歳事記といふ本の中に次のやうな一節がある。『高辛子の悪子が五月五日の日に舟で海を渡らうとした時俄かに暴風が吹き起つて舟が覆り、悪子は浪に吞まれて水神と化し、その後永く人を惱ましてゐた。或る人が五色の糸で粽を作つて海中に投げ入れると水神は五色の蛟龍と化してこれより人を惱ま

さなくなつた。』といふことが出てゐるが、これとよく似た傳説はこの他にもあるが、何か疫除の呪ひと結びついたものではあるまいか。（三月三日の除日のやうに）



端午の節句がわが國に傳來した年代については遺憾ながらはつきりしないが、續日本記の十七に、『天平十九年五月庚辰天皇南苑に出御あり、騎射走馬を見給ふ。是日、太上天皇（聖武天皇）詔を下して、昔は五日の節、常に菖蒲を用ひて幔となしたるに此の事を停む、今より後は菖蒲の幔に非ざれば宮中に入る勿れ。』とあるのより見てもこの時より以前に古く行れてゐたことが判る。又推古天皇の朝には日藥獵といふことを行はせられて、藥草を摘み蓄めて百草を以つて戯れられたことがあり、特に聖德太子は獸獵を藥獵に代へられて推古天皇の十九年五月菟田野で行はれたといふことである。次に端午の節句の節物について若干の説明を加へることゝしよう。

**菖蒲** 古くからこの日は菖蒲を以つて屋根を飾り菖蒲鬘を作つて頭に戴き、又菖蒲を枕にして菖蒲酒を飲み、或は浴場に入れて菖蒲湯を浴びる等いろ／＼のことに用ひられたがこれは皆菖蒲が藥草であることから家の内や體内の邪氣を拂ふことに用ひられたものであるが、一面菖蒲の音が尙武、捷武に通ずるので珍重されたものらしい。

**武者人形** 神武天皇、應神天皇、坂田の金時など多く武人の方々の人形を床の間に飾るが、これは菖蒲人形が變化したもので、古くは戸外に飾つたものが武者人形に變化すると共に屋内に移つたものである。

識の現れだなど、説く人もあるが、これは又端午の節句の唯物理觀的見方で一寸面白いことは面白いがあまり確實な根據のある説とは思へない。

**柏餅** 氣節向きの菓子で青葉の薫がぶん／＼と鼻を打つ若柏の葉で包んだ柏葉餅は五月の節句になくはならないものであるが別に直接的な因縁關係はない。たゞ季節のものとして三月三日の草餅同様供へるものだが、その起原を考へて見ると、われ／＼の祖先は遠い昔恐くこのやうに日常の食物を潤葉の上に盛つて食べたものではあるまいか。その純眞素朴さが今日まで残つてゐるといふことは實になんともいはいれぬ床しい氣持がするではないか。

**兒童愛護週間** (五月五日を中) 五月五日を中心として一週間全國の乳幼児死亡率の遞減を圖り次代の國民の健全なる發達に資せんとする一の國民運動である。財團法人中央社會事業協會が内務省、文部省並に各廳道府縣の協力を得て『強く、正しく、愛らしく』の標語の下に各種の催を行ふのであるが、この日小學校に於ても一般社會と相呼應してこの日にふさわしい催をしたならば一層有効であらうと思ふ。

**大國魂神社** 東京府武蔵國北多摩郡府中町鎮座、大國魂神を祭る。景行天皇御宇四十一年武蔵國大國魂神の神勅によつて初めて鎮祭した。孝德天皇御宇

**鐘馗** 一種の魔除けであつて、辭林を見ると次のやうに出てゐる『支那にて疫病の神を驅るといふ神、其の像は眼太く髻多く黒き冠を戴き長き靴を穿ち、抜劍して鬼をつかふ。我國にては是を五月幟に描き又は五月人形に作りなす。唐の玄宗がわらはやみに犯されたとき大鬼小鬼を驅ると夢みたりしかば、其狀を吳道子に描かして、これを鐘馗と呼びしに創まるといひ、又同じく玄宗の夢に、藍袍を着けたる鬼あらはれて、臣は終南山の進士鐘馗にて、よく天下のわらはやみを除くといひたりしかば其狀を吳道子に描かしめしに創るといふ。一説に唐の前六朝頃に、已に其像は描かれたりともいへり』とある。

**鯉幟** 鯉幟が立てられるやうになつたのは元祿から享保の頃であつて、この起原にはいろ／＼の説があるが、元來鯉といふ魚は非常に縁起のよい魚で、昔から『鯉の瀧上り』とかいはれて男子の出世になぞらへたのでそれでこの日鯉を立て、初子の立身出世を祝ふのだなど、いふ説もあるが、又一方には神功皇后の三韓征伐に由來するといふ説もある。それはどういふ説かといふと、神功皇后が朝鮮海峡をお渡りになる時、龍神が鯉と化して湖の干満を守護し奉つたといふのである。そこで五月幟には必ず神功皇后と武内宿禰とはつきものであるといふ説を立てるものもある。さうかと思ふと、鯉幟や五月人形を戸外に立てたのは武家に對する町人の反抗意

この地に國府を置かれ、當社を以て國衙の齋場となし一國の祭務を總轄するところに充てられ、依つて武藏總社と稱した。また國內六所の神社(一ノ宮小野神社、二ノ宮河内神社、三ノ宮氷川神社、四ノ宮秩父神社、五ノ宮金佐奈神社、六ノ宮杉山神社)を配祀せられたので六所宮ともいふ。源賴朝が兵を擧げて當國に入るや先づ本社に詣で、神馬を引き、上矢を奉つたので漸く著名となつた。この後足利、北條の諸氏亦神領を寄進した。徳川幕府を江戸に開くに及んで先規によつて神地五百石を寄せ、社殿を造營した。明治維新の後、勅祭社に任ぜられ、次いで十八年官幣小社に列せられた。例祭の當夜(五月五日)本營及び一ノ宮より七ノ宮までの神輿八基の神幸あり、翌未明に及んで還幸する。この間全町内全戸消燈して暗黒とするが、府中の提灯祭(暗黒祭)といふのは是である。その他神事式(二月節分、十二月三十一日)競馬(五月三日)李子祭(七月二十日)相撲式(八月一日)等の神事が多い。當社の神は松を忌み給ふにより、古來境内に松を生じないといふ。

**菊池神社** 熊本縣肥後國菊池郡隈府町隈府鎮座、祭武光の二柱は大正十二年三月加列)本社の創始は明治元年、菊池氏の養祖武時の王事に盡瘁したことを嘉せられ、熊本藩に命じて祭らしめ給ひしに起る。明治八年縣社に列し、十一



年別格官幣社に列した。次いで武重以下殉難の將士二十五人を配祀した。社蔵の國寶に菊池能運像と傳ふるもの一幅ある外に、千本槍を所蔵してゐる。祭祀は五月五日の例祭の外特殊神事に櫻花祭があつて四月十七日に行はれる。この夜鷹替神事とて金製、銀製の他百點の當鷹を出して「替へませう」との聲、喧しく、境内雑沓を極める。祭神の末裔菊池忠氏が華族に列し、初めて官司に補せられた。

### 多度神社

津日子ノ命を祀る。延喜式内の名神大社で俗に北伊勢大神宮と稱せられる。社傳によれば、この神の多度山鎮座は遠く神代にあり、社殿の造營創建は雄略天皇の御宇であるといふ。神階は延暦元年從五位下に叙し、爾來累進して貞觀五年正二位を奉りし由史に見えてゐる。降つて建仁元年從一位に進められ、又寛仁元年には一代一度の大奉幣に預つた。永祿、天正の交、兵火にかゝつたことがあつたが慶長年間桑名の城主本多忠勝が之を再興した。爾來桑名藩主累代の崇敬するこゝろとなつた。慶應三年造營したものが即ち現今の社殿である。例祭は五月五日で、神事中流鏑馬式最も有名で、所蔵の寶物中に神宮寺伽藍縁起並資財帳（紙本墨書）一卷、銅鏡三十面は國寶に編入され、その他聖武天皇宸筆の勅額、神鈴、古鏡等數多ある。境内の別宮一目連神社は天津日子根命の御子天目一箇命（一名天之比久之命）を祀る。

雨を祈つて効験が著しいといふので參詣するものが多い、明治六年縣社に列し、大正四年國幣大社に昇格した。

### 南宮神社

岐阜縣美濃國不破郡宮代村鎮座、祭神金山比古ノ神、延喜式内の明神大社で、又當國の一ノ宮である。創始は天武天皇の御宇にあるといふ。社傳にいふ、神武天皇御即位の後、不破郡府中村の地に祀つたものを崇神天皇の御宇五年十一月上申日當中山の麓に遷座し奉り、舊社より西南に當るので南宮と稱すといふ。神階は永和三年從五位下に叙し、貞觀十五年正二位に陞る。その後康年年中に靈験があつて正一位に預けられた山美濃明細記に見えてゐる。社領は寛文の頃四百五石を有してゐた。明治四年國幣中社に列せられ、祭祀は五月五日の例祭の外、田植神事（五月四日）鎮座祭（十月十七日）等あり、南宮山は一に美濃の御山といひ、村の西南に連亘し、當社の奥社はその山腹にある。

### 六

### 日

### 立夏（五月六日前後）

一年二十四期の一つで大抵五月六日前後で、この日からいよいよ夏に入り日まじに暑くなつてゆく。

### 金ヶ崎の落城（五月六日金ヶ崎宮祭典）

金ヶ崎宮は天筒山の一角

が敦賀灣に突出して金ヶ崎をなしてゐる巖上に鎮座ましまし、社地は延元の當時の金ヶ崎城の趾である。御祭神は申上げるまでもなく後醍醐天皇の皇子尊良親王、恒良親王の御二方を奉祀するものであつて、右方の攝社に尊良親王に殉じ奉つた藤原行房、新田義顯、氣比氏治の三卿を合祀した緝掛神社がある。今日はその金ヶ崎宮の御例祭日に當るので、暫く延元の昔に遡つて宮達の御最期の有様を偲び奉りたいと思ふ。

延元元年十月、足利尊氏は叡山にまします後醍醐天皇に降伏を請ひ奉つたので、天皇には尊氏に深き謀があるとも知らしめし給はず京都に還幸しました。この時天皇には新田義貞等は東宮恒良親王及び一宮中務卿尊良親王を奉じて暫く北國の地に往きて謀を廻すやうに命じ給うた。そこで義貞は兩親王を奉じて越前國に赴いたが、この時親王方の御一行が近江國木芽峠に差蒐つた時大雪が降つて、そのため親王方は道を失ひ糧食も絶えて士卒の大半は凍死、或は餓死してしまつた。兩親王初め奉り義貞等は道なき山中に迷ふこと三日漸く敦賀に到着することか出来たのであつた。この時氣比宮司氣比彌三郎大夫氏治、河島維頼等は兵三百を以つて親王を迎へ奉り、東宮と一宮とを金ヶ崎城に迎へ奉つた。義貞は暫くこの城に停つて北國の諸將を招き集めようとしたが時恰も嚴冬の交であつたので馳せ參するものもなかつた。

明れば延元二年三月、尊氏は再び叛旗を翻し奉り、北國路

に兵を派して金ヶ崎を攻め奉つた。この時の寄手の大將は高師泰、仁木頼章、今川頼貞、細川頼房、壺谷高貞等の六萬餘騎、先づ越前表から雪崩を打つて攻め寄せ、城は瞬く間に敵の重圍に陥つてしまつた。この時味方は小勢である上に城内の糧食もつきかけ、唯一の頼りとする袖山城の援兵も來ないので、義貞は遂に意を決して洞院實世等と共に密かに城を抜け出して袖山の城に赴いた。

延元二年三月六日、敵兵は遂に總攻撃を開始し、雪崩を打つて城に攻め入れれば、味方の兵は或は討れ或は自ら命を絶つて隣りに城を枕に討死してしまつた。この時官軍の大將新田義顯先づ切腹して相果つれば一宮に於かせられても續いて御自害をなし給うた。これを拜した味方の殘兵行房初め三百餘人の勇士達は、庭上に居並んで互ひに刺違へて宮の御跡を慕ひ奉つた。この時最も壯烈な働きをしてその名を後世に止めたのは氣比氏治の長子大宮司齊治であつた。この時齊治は未だ十五歳の少年であつたが天晴水練の達人だつたので、城危しと見るや東宮恒良親王を一艘の小舟に乗せ奉り、自ら船の纜を口に咬へて海上三十町を泳ぎ切つて蕪木浦まで落し參らせ、この地の漁人に託し奉ると再び海上を泳ぎ戻つて遂に他の勇士達と共に腹掻切つて自害して果てたのであつた。ところが東宮には御運拙くも夜が明けると共に賊兵に捕へられ四月十三日といふに足利直義のために毒殺され給ひ、未だ



十五歳の御若さを以つて遂に御他界遊されたのであつた。

### 金崎宮

福井縣越前國敦賀郡敦賀町泉鎮座、尊良親王恒良親王の靈を祭る。明治二十三年創建、次いで官幣中社に列した。初め尊良親王の功績を御追念あらせられ、吉野神宮創立の時合祀の議があつたが、親王薨去の地、金崎の城址に祀り、由つてその地名を以つて宮號とせられたものである。恒良親王は同二十五年合祀し奉つたものである。同二十六年社殿の造宮が成つた。攝社には藤原行房等親王麾下の殉難將士の靈を祀る。例祭は毎年五月六日を以つて行はれ、十月二十日の御船遊、管絃祭等が有名である。

### 白山比咩神社

石川縣加賀國石川郡河内村三宮鎮座、祭神三座、菊理媛ノ神、伊弉諾ノ尊、伊弉冊ノ尊、延喜式内の明神大社で、又當國の一ノ宮である。もと白山の絶頂にあつたが、道路險阻で登拜に困難だったので後今の地に一社を設けた。仁壽三年從三位を奉り、貞觀元年正三位に進んだ。白山記には正一位と見えてゐる。後年神威著しく世に見はれ、山上、山下に亘つて幾多の攝、末社があり、俗に三所七社といふ。中世本社に隸屬した衆徒は延曆寺(初めは園城寺)の管下に屬し、神殿佛閣四十餘宇、衆徒三千人、横暴にして屢々兵を弄し、勢ひ大いに振つたことがあつたが維新の爲神佛の混淆を禁ずるに及んで社僧を廢された。明治四年國幣中社に列し、大正三年中社に昇格した。當

社には神祇の記録古器類等夥しくあつたが本願寺僧の掠奪にあひ今僅かに存するもの、中神皇正統記は北畠親房撰の書で世に白山本と稱されるもの、莊嚴講中舊録は戰國時代當社の盛衰を知るに缺くべからざるもの、共に比類なき珍本である。その他白山記、三宮古記、黒漆螺鈿鞍一背、劍(銘吉光)一口、太刀(銘長光)一口、皆國寶の指定を受けてゐる。例祭は毎年五月六日で、この日、梅ヶ香祭といつて、梅杖を献ずる古式を行ふ。又鎮花祭といつて(四月二十七日)餽能を献供する儀を行ふ。

(白山奥宮) 白山連峰の絶頂、御前岳にある。もと白山本宮又妙理天權現と稱し、禪定本營ともいつた。養老三年、僧泰澄の開くところといふ。天長九年山脚の三國(飛騨、美濃、長瀧)寺、加賀中宮寺、越前平泉寺)各神宮寺を創建したが、中宮寺の徒多く尾添村にをり、白山を總轄したので後、頂上の祭祀は尾添村の掌るところとなり、柴田勝家が越前を領するに及び平泉寺が漸く盛んとなり終に白山及び白山々麓を越前領と唱ふるやうになつた。明暦元年嶺上の神祠が大破したので加賀藩主前田氏が修葺しようとしたところ神祠は越前の疆内だといふので兩國山麓の諸村が瀕りに争つて解けず、因つて寛文八年收めて公領とし、兩來郡名を付せず越前、加賀、白山麓と呼ぶやうになつた。明治五年太政官令によつて白山及び山麓の村邑を加賀に編入し七年山上の神祠を白山比咩神社の

本社とし、更に奥宮となした。毎年七月十八日の閉山より九月一日の閉山まで本社神職が出て祭儀を營む。白山は高さ八千六尺餘尺、山容秀麗、上に瀧あり池あり奇巖あり怪鳥あり陰險にして容易に登山出来ず。登口に五つあつて白峰村市ノ瀬から登る者最も多く奥ノ院まで約三里八丁あるといふ。

### 七日

### 高松城の水攻め(天正十年夏五月)

天正十年夏五月、豊臣秀吉は織田信長の命によつて高松城を圍んだ。この時城中には城主清水長左衛門宗治を初めその兄の月清入道難波傳兵衛廣高、與力には林三郎左衛門、鳥越左衛兵、松田左衛門等を初めとして毛利方よりの檢使末近左衛門尉家國等五千餘人が籠城してゐた。

この時秀吉は高松城水攻めの計畫を樹て、先づ總軍を龍王山の南立田山、鼓山、甲山の麓數ヶ所に屯させ、自らは本陣を赤濱山の東方蛭ヶ鼻に置き、新に降参した者二千餘人を百人づゝに別ち、これに奉行一人を付け二十組を作り、一依につき何程といふ貨銀を拂つて百姓達を使つて土俵數十萬俵を瞬く間に作り上げてしまつた。

一方陣中に召し連れた大工辻大八、多門林右衛門の兩名に命じて大井川、乳吸山の水の高さと高松城の高さとを見積ら

せた上、下數十二間、馬踏六間、高さ三間の堤を七十五間築かせ、これに件の土俵を据ゑて水を防ぎ止める工夫をした。この時使用した土俵の数は驚く勿れ百五十九萬三千七百五十俵あつたといふ。かくて水受方には杭を所狭きまでに打たせ草を植ゑ蛇籠を備へ、やがて足部川の水を引入れたけれども何しろ堤の廣さ一里餘もあることだから一日や二日で満水とならうとも思へず、漸く三日目に満水したといふことである。

この時城中にあつては不圖したことだから林三郎と長沼元之丞とが争論を起して醜い同士討を演ずるなどのがあり、一方水は益々その勢力を加へて數日ならずして高松城は水浸になつてしまふのではあるまいかとさへ思はれた。かゝる加へて唯一の頼みとしてゐる後詰の援兵も來らず、城中の兵糧もいよゝ残り僅かになつたので、城主清水長左衛門宗治は覺悟を定め、使者を秀吉の陣中に遣していふには『某獨り自害して相果るから、どうか城中の男女悉くを助命ありたし。』と述べさせたのでさすがの秀吉も大いに感動して清水の申出を快く許すこととした。

やがてその日となれば宗治は多くの家人に水の暇を告げ兄の月清入道並びに檢使末近の家來難波傳兵衛の三人小舟に打乗つて敵陣真近く漕ぎ寄せて來たかと思ふや、やをら刀を引抜いて、



河船を止めて遭ふ瀬の浪枕

浮世の夢を見習し

驚かぬ身ぞはかなき

と聲張上げて歌ひながら一さし舞ひ終ると、やがて腹十文字に振切つて自害して相果てた。

### 名和神社

鳥取縣伯耆國西伯郡名和村名和鎮座、祭神名和長年、本社は初め氏殿神社と稱し、承應、明暦の頃、長年の遺臣等相謀つて名和氏の邸地に一祠を建て、その遺靈を鎮祭したものに起る。延寶五年鳥取藩祖池田綱清、祠宇の荆棘中に埋没してゐるのを慨いて修理を加へたが、後池田慶徳が祖志を繼いで新に祠畔に碑を建て特に之を表彰し、祭日には藩吏を遣はして奉齋せしめた。明治七年縣社に列して名和長重以下四十二名の將士を配祀し、神號を名和神社と改め、十一年別格官幣社に昇格した。毎年五月七日を以て例祭日とする。祭神の裔名和長恭氏が明治十一年宮司に補せられ、次いで男爵を授けられた。

### 八 日

### 大阪夏の陣

(元和元年 紀二二七五年)

元和元年三月豊臣秀頼は青木一重を使とし、淀君も亦大藏卿、正榮尼の二人を駿府に遣し、家康の駿府還城の祝賀の言葉述べせると共に、去冬の戦ひに畿内の收穫

が皆無のため大阪城は士卒の給養にまで差支へてゐるのでこの際應分の援助をして貰ひたいといふことを申出た。その時家康は快く大阪方の請ひを容れ、その上大藏卿、正榮尼の兩名を甘言を以つて名古屋に止めて歸さず、一方秀忠に命じてたといひ大阪から如何やうの懇願があらうとも承諾してはならないと嚴命した。青木一重は家康にそのやうな策略あらうとも思はず、江戸に赴いて右の趣を傳へると家康の言葉とは正反對に悉く峻拒されてしまつた上、更に大阪城中に數多の浪人を養ふとは何事であるかと嚴しい詰問に遭つた。事實その時大阪方にあつては數多の浪人を養ひ、冬の陣に次ぐに更に最後の戦を交へようとする用意をさく／＼怠りなかつたのである。この時城中にある浪人十五萬と傳へられてゐる。一方家康も亦近く大阪方が再び兵を擧げることとは薄々感付いてゐたので豫め伊井直孝に命じて京都を守護警衛せしめ、藤堂高虎をして淀城、伏見城を守らしめ、池田利隆をして尼ヶ崎城を固めて遙かに應ぜしめ、その上京都所司代板倉勝重をして大阪方の動勢を巨細となく探らせてゐた。勝重は家康の命を含み、小幡景憲を大阪城に間者として放つたが、景憲は大野治房に近づいて再擧の謀議を手取る如く探知し、一々勝重に報告して來たので勝重はこれを將軍秀忠に洩すところなく復命してゐたのであつた。それとは知らぬ大阪方は、今度の家康の態度にいよ／＼憤慨して大勢は時を移さず兵を擧ぐべきことに

傾いたのだが、この時一代の智者幸村は一策を献じて曰く、『急に京都を襲つて天子を擁し奉つて天下に號令するに如かず。』といつた。この時後藤基次、長曾我部盛親、木村重成等は皆幸村の説に従つたが治房父子のみは敵の間者小幡景憲の甘言に乗ぜられてこれに反對し、遂に城に籠つて關東軍を引受けるといふ最も拙悪な作戦に一決してしまつたことは是非もない次第である。景憲の密告によつていよ／＼大阪方擧兵の急報が勝重を通じて江戸に齎らされるや、時を移さず家康は諸軍を率ゐて駿府を發し、次いで將軍秀忠も亦江戸を發した。十八日家康京都に至り、二月一日秀忠は伏見に至つた。こゝに於て家康は諸軍に各々部署を命じ、先づ東軍、山陽、山陰の諸軍は和泉、河内の二道より進み、大和、伊勢、美濃の諸軍は大和口より進み、その總督には少將輝忠、伊達政宗を任じ、先鋒を水野勝重承り、井伊直孝、藤堂高虎は同じく中軍の先鋒を勤め、榊原康勝、松平康重の兩名は二陣を承るこゝとなつた。こゝにいよ／＼大阪夏の陣の幕は切つて落され大阪軍の將大野治房先づ奈良郡山に向つて兵を進め、戰將に醜ならんとするに先立つて城將筒井定慶城を捨て、走り、治房も亦櫻井の一戦に敗れ、先鋒塙直次戦死し、治房は旗を捲いて城中に逃げ歸つて來た。五日家康は京都を發して男山に本陣を構へ、秀忠も亦伏見を發して角南に陣を敷いた。この時西軍は幸村、基次及び毛利勝永、薄田兼相、渡邊尙等が平

野に陣し、木村重成は若江に、長曾我部盛近は矢尾に陣を構へてゐた。基次は進んで兼相と合して片山に勝成の軍を破つた。この時東軍の將直寄が來り援け本田忠政、松平忠明、片倉景綱等も亦大擧して來援して三方より挾撃したので基次の兵悉く討死し、基次も亦遂に戦死してしまつた。一方薄田軍人も亦奮戦して死んだが、この時味方の報を聞いた治房は急ぎ馳せ參じたがこれ亦忠政、忠明等の挾撃に會つて脆くも敗退した。この時幸村も亦基次、治房の敗戦を聞いて素破味方の一大事なりと馳せ來り、伊達の兵を譽田の東岡に誘ひ出して大いに破つて大勢を盛返した。この頃東軍の先鋒は川口を發して道明寺に赴かうとしたが、盛近が矢尾に伏兵を設けてこれを破り高刑良勝を殺し、木村重成も亦井伊直孝と若江に戦つてその前隊を破つた。しかしこの時重成は槍を振つて敵兵三十餘人を倒したが己も亦その場に壯烈な討死を遂げてしまつた。直孝は高虎と共に兵を合せて盛親を撃つた。盛親は破れて幸村と共に城に入つたがこの時既に日が暮れて咫尺を辨じなかつた。この夜家康は進んで千塚に陣し、秀忠は道明寺に陣し、戦は一時止んだ。

翌七日、東軍は部署を定めて少將忠直を左軍の先鋒とし、前田利光を右軍の先鋒として一舉に屠らんとする作戦を樹てた。即ち右軍は秀忠これを率ゐ、左軍は家康親ら率ゐて破竹の勢を以つて押寄せた。この時幸村、尙、大谷吉之丞等は茶



白山に陣し、森勝水、竹田永應等はその左天王寺の南に陣し、治長その東に陣し、郡長列は牙旗を執つてその後であり、大野治房は御宿政友と岡山に陣し、津川左近は金瓢の馬印を執つてその後を控へ、かくて東西相呼應して騎虎の勢を以つて進んだ。この時家康は敵の陣立の甚だ堅固なのを見て治長の質子の治徳をして書を送らしめた。この時治長は茶白山に幸村を訪れてゐたが幸村は治長に向つていふには、『速やかに秀頼公の御出陣を促して貰ひたい。君公が御出陣あれば士氣十倍し、思ふ存分東軍を蹴散らすことが出来るであらう。』といつた。この時治長の子治徳が家康の書を齎して来たので披いて見ると、意外にも『秀頼が出陣すれば城内の反軍が兵を擧げるであらう。』といふ旨が認めてあつたので、さすがの治長も狐疑逡巡し、遂に秀頼の出陣を止めてしまつた。このやうなことで兩軍はこの日も折角の好機を逸してしまつたのである。

明れば遂に八日、この日東軍の先鋒大いに進み、時々鯨波を擧げて西軍の威嚇を試みた。この時幸村は歎聲を發していふには、『あゝ秀頼公の御出陣は何んといふ遅きことであるぞ。治長も亦何を狐疑逡巡してゐるのだらうか。戦機は既に失した。この上は潔く一戦を交へて戦場の露と消えるまでだ。』といつて勝水、永應等をして本多、小笠原に當らしめる一方、自らは勇しくも秀忠の本陣を激しく衝いた。勝水、永應等は東

軍の本多忠朝、小笠原秀政を破つて兩將を倒し、幸村も亦進んで家康の本陣を脅かすこと屢々であつたが身に數多の傷を負ひ、この日遂に勇しき戦死を遂げてしまつた。この時東軍の右翼は岡山に迫り、治房これを破つて進んで秀忠の本營に迫つた。勝水、永應等も亦家康の麾下に迫り七隊長は勝水の後を承けて井伊、藤堂の軍を破り、安藤直次と戦つて退いた。この日兩軍入亂れて必死の猛襲を繰返へすこと數なく、ために攝河泉の野は一時黒煙と砂塵のため濛々として覆はれてしまつた。この時西軍の勢極めて盛んで、東軍は稍々ともすると浮足立たうとした。機を見るに敏なる家康は時判れりとなして城中の淀君にあて、使者を遣し、進んで和を講すべく申送つた。淀君は家康の使者を迎へると、先づ治長を城中に召したので治長は旗を捲いて城中に退いた。この時誰いふとなく西軍の陣中に、『素破城中に異變が突發した』といふ噂が立つたので遽かに色めき立つた際に乘じて東軍はこの時とばかり總攻撃を開始し、兩軍を壓迫して忠直先づ大阪城京口門まで攻め寄せてしまつた。この時城中に内應するものがあつて火を放つたので忠直も亦兵に命じて樓を初め城中に火を放ちそれを合圖に東軍は歎聲を擧げて城中に雪崩を打つて突入した。この時秀頼は千席院にあつたが、城遂に陥ると見るや良列が牙旗と飄箆の馬標とを奉還して先づ自害して果てた。次いで治長は秀頼と淀君とを櫛倉の中に移し、一方秀頼の妻が

千姫(秀忠の女)を家康の許に送つていふには、『大阪城の重臣悉く自殺するから秀頼と淀君の命を助けて貰ひたい。』と願つたので家康は井伊直孝、安藤重信を遣して櫛倉を守らせることとしたがこの時直孝と信重とは相談して銃を倉中目算けて放つた。いふまでもなく秀頼に自害せよと勸告したのである。この時秀頼は慨然といふには、『我命を享けて太閤の子として生れたがこゝに至るも運命といふべきである。』といつて靜かに自裁して相果てしまつた。この時年僅かに二十三歳。淀君は秀頼自害の有様を見て身も世もあらず泣き崩れたが今はこれまでと覺悟したのであらう、氏家、行廣を促して遂に己の命を斷たしめてしまつた。時に三十九歳。續て行廣、勝永、守久、左近、永應等二十餘人の人々も亦潔く自害して秀頼の跡を追うたのである。この時眞田大助は倉の中に坐して食せざること一晝夜に亘つたが、これ亦秀頼が薨すると共に自刃して相果てたといふことである。あゝ豊臣は遂に滅んだ。榮枯盛衰は世の習ひとはいふものゝ、大阪夏の陣秀頼の最期を聞いてこの人のために一掬の涙を惜しむ人はよもあるまい。

九 日

秀吉九州を平定す(天正十五年(皇紀二二四七年) 昨日は大阪城落城の悲哀)

深き歴史を見、今日は又秀吉の九州平定の歴史を聞く。歴史といふものは何んといふ面白いものであらうか。さて後陽成天皇が即位まします頃には豊臣の天下統一の大事業も略々完成し、依然として關白の顯職に留つてゐたがこの頃未だ九州の島津義久が朝廷に對し奉つて臣下の禮を執らなかつたのでこゝに秀吉は二十萬の大兵を率ゐて島津義久追討に向つて出發した。時に天正十五年三月のことであつた。この時秀吉の先鋒秀長が先づ耳川城に迫つて島津家久を走らせ、秀吉は進んで豊前に入り、馬岳に陣を構へた。この時秋月種實は島津を援けて岩石城に據つたので秀吉は少將秀勝及び前田利家、蒲生氏郷等に命じて岩石城を屠らしめ、秀吉は海路八代に入り、五月進んで千代河に至り、本營を太平寺に設けて伊東祐兵に兵五萬を授け日向路より入らしめ、龍造寺政家に同じく五萬人を授けて大隅口より入らしめた。秀吉の大軍兩道より並び進んで鹿兒島を衝くと聞いた島津義久は既に運盡き命傾いたことを自覺して伊集院忠棟を秀吉の本營に遣して罪を持つことにしたが、この時秀吉は、『薩摩の島津家は遠く源氏の大将頼朝から出てゐる名家であるからこれを滅すことは本意でない』といつて義久の罪を赦したので義久も亦大いに感激し、髪を剃り僧服を着して太平寺の本營に向向いて行つて秀吉に謁してその罪を謝したので、秀吉は義弘を島津家の後嗣とし、薩摩、大隅、日向の三國を與へて永く島津家を全うさ



せることにしたのである。

十日

三國干渉遼東還附(明治二十八年)

端なくも明治三十七八年

の日露大戦の原因を作つたのは明治二十八年の三國干渉の横暴の手であつた。遼東半島こそはわが忠勇無双の勇士達が、二ヶ年間に亘る清國との抗争の結果、眞に血と肉とによつて購つた新領土である。それを今回三國たる露獨佛の横暴なる干渉によつて無念の涙を吞んで再び清國の手に還付しなければならぬこととなつた。思へば當時國を擧げて如何に悲憤の涙に咽んだか想像して餘りある事だらう。それはさて措いて、事の経緯は次の如くであつた。

明治二十八年五月二日、時の内閣書記官長伊東巳代治は新たに辦理大臣に任命されて日清講和條約の批准を行ふべく八重山艦に搭乘して宇品を發し、五日旅順に寄港して大總督彰仁親王殿下及び川上中將に會見し、種々重要事件について打合せを濟せた上六日夜横濱丸に移乗して七日芝罘に到着し同日五時半上陸して無事ビーネ・ホテルに入つた。そして清國側の全權大臣伍廷芳及び聯芳等の要人と會見して會議を續行したのであるが、越えて十日如何なる理由に基くか清國側は俄然態度を一變し、批准交換の期日を暫く猶豫して貰ひたい

といふことを申出た。この時伊東辦理大臣は事の餘りに唐突なのに吃驚したが、これはつぎ裏面に何者かの使唆があることを直覺して、最早かくなる上は一刻の猶豫もなす難しとあつて同日正午を期して最後の回答をなすべきことを通告した。そして附言して曰く『もしその期を過る時は帝國は再び砲火を開いて北京を衝くから豫め承知して置いて貰ひたい。』と威嚇したのでさすがの清國も畏縮して無事批准の交換を終つたのであるが、この前後といふもの露、獨、佛の軍艦數十隻は或は演習と稱し、或は砲臺と稱して巨砲を放つて盛んに示威運動を行ひ、伊東辦理大臣の一行を切齒扼腕せしめた。

これより先日清の國交風雲急を告げるや露、英兩國は各自の利益を擁護する立場から種々斡旋調停を誂みたがいよいよ兩軍戦を交へ皇軍が意外の大捷を博し、しかも遼東半島はわが國の永久占領と定るや東洋に野心を有する各國は一大事となし、早くも露國は獨佛二國を誘つてこゝに三國聯合して不當の干渉をなすこととなつた。一方明治二十八年四月二十三日の午後のことであつた。獨逸公使グートシユミツトは先づわが外務省を訪問して干渉の口火を切り、次いで露國公使ヒトローウオ佛國公使アルマン相ついで來訪し、干渉の一々について陳情するところがあつた。この突然の大事件は直ちに電報となつて廣島の大本營に達するや、長くも大元帥陛下を

初め奉り伊藤總理大臣その他の驚愕一方ならず、この時陸奥外相は病床にあつたが病を冒して廣島に急行し、こゝに悲痛なる御前會議は開かれたのである。この時露國の東洋艦隊三十餘隻を初め獨佛艦隊は支那海を遊弋して頻りに示威運動を行ひ、いざといはゞ發砲もしかねまじき勢ひ物凄く、われに對して甚しい侮辱を與へたのであつたがいかんせんわが國は支那と戦つて瘡痍未だ新しく、この上到底三國を相手に戦ふ力もなかつたので遂に無念の涙を吞んで三國の異議を容るゝの已むなきに立至つたのである。明治二十八年五月十日、明治天皇に於かせられては聲淚共に下る遼東半島還付の詔勅を下し賜つた。

朕曩ニ清國皇帝ノ請ニ依リ全權辦理大臣ヲ命シ其ノ簡派スル所ノ使臣ト會商シ兩國講和ノ條約ヲ結訂セシメタリ然ルニ露西亞獨逸帝國及法朗西共和國ノ政府ハ日本帝國カ遼東半島ノ讓地ヲ永久ノ所領トスルヲ以テ東洋永遠ノ平和ニ利アラストナシ交々朕カ政府ニ懇懇スルニ其ノ地域ノ保有ヲ永久ニスル勿ラムコトヲ以テシタリ願フニ朕カ恒ニ平和ニ脊々タルヲ以テシテ竟ニ清國ト兵ヲ交フルニ至リシモノ洵ニ東洋平和ヲシテ永遠ニ鞏固ナラシムトスルノ目的ニ外ナラス而シテ三國政府ノ友誼ヲ以テ切憚スル所其ノ意亦茲ニ存ス朕平和ノ爲ニ計ル素ヨリ之ヲ容ルルニ吝ナラサルナルノミナラス更ニ事端ヲ

滋クシ事局ヲ難シ治平ノ回復ヲ遲滯セシメ以テ民生ノ疾苦ヲ醸シ國運ノ伸張ヲ沮ムハ眞ニ朕カ意ニ非ス且清國ハ講和條約ノ訂結ニ依リ既ニ淪盟ヲ悔ユルノ誠ヲ政シ我交戰ノ理及目的ヲシテ天下ニ炳焉タラシム今ニ於テ大局ニ顧ミ寛洪以テ事ヲ處スルモ帝國ノ光榮ト威嚴トニ於テ毀損スル所アルヲ見ス朕ハ乃チ友邦ノ忠言ヲ容レ朕カ政府ニ命シテ三國政府ニ照覆スルニ其意ヲ以テセシメタリ若シ夫レ半島讓地ノ還付ニ關スル一切ノ措置ハ朕特ニ政府ヲシテ清國政府ト商定スル所アラシムトス今ヤ講和條約既ニ批准交換ヲ了シ兩國ノ和親舊ニ復シ局外ノ列國亦斯ニ交誼ノ厚ヲ加フ百僚臣庶其レ能ク朕カ意ヲ體シ深ク時勢ノ大局ニ視微ヲ慎ミ漸ヲ戒メ邦家ノ大計ヲ誤ルコト勿キヲ期セヨ

かくて十一月八日、遼東半島還附條約の批准交換は北京に於て行はれ、こゝにわが幾萬の尊き血と肉とによつてかち得たる遼東半島は再び清國の手に還付されたのである。

小學校の設立(明治五年)

今日こそ小學校に

今日こそ小學校に於ては特に記念すべき日である。明治五年の今月今日こそ、明治政府より學制が發布され、大中小學區等に關する條目が定まり、今日のこの盛大な小學校教育の最初の一石が置かれた日であるからである。



明治四年七月に大學を廢して（三月一日の帝國大學令發布の條参照）文部省が置かれ、大木喬任が文部卿となりその翌年の今日今日學制の發布を見たのである。この日兒童に對して寺小屋時代から今日のこの盛大な小學校に發達するまでの小學校史、併せてわが國近世の教育發達史を説いて聞かせ、皇恩の無窮なること、皇國に生を享けた幸福とを説いて聞かせ一層學業に勵むやう一場の訓話を與へたいものである。

十一日

露國皇太子  
大津に傷つく

（明治二十四年  
皇紀二五五一年）

畏くも明治天

皇の四十五年間

難から御多難の連続と申上げ奉るより他はない。殊に明治十四年五月十一日、時の露國皇太子が大津に傷付かれた時の天皇の御軫念あらせられた御有様を偲び奉ると四十年後の今日に至つても恐懼惜く能はざるものがある。

當時露國皇太子ニコラスはわが國の風物觀察の御名目でギリシャ國王と共に本國を出發、軍艦に搭乘して海路長崎に御到着、それより鹿兒島に寄泊、島津忠義公の饗應を受けられ、更に神戸に上陸、京都の常盤ホテルにお宿を取られて各地御見學の御豫定であつたが、わが國でもこの異國の貴賓に對して各地頗る盛大な歓迎を催したものだつた。皇太子には五月

十一日琵琶湖に清遊を試み、その足で大津縣廳内議事堂に立ち寄つて午餐を喫し、それから京都に向ふべく出發された途中、沿道の警戒に當つてゐた滋賀縣巡査津田三藏は氣でも狂つたのか殿下の御一行が差寛ると見るや警戒線から躍り出て矢庭に帯剣を抜くや俾上の殿下に斬り付けて頭部に重傷を負はせてしまつた。一方土方宮内大臣は右の急報に接するや事の餘りに重大なのに驚愕措くところを知らず、直ちに參内して、明治天皇に事の次第を執奏申上げるや、日頃御沈着にまします陛下も、この時許りはいたく御驚愕遊され、取り敢へず北白川宮能久親王殿下を御名代として御見舞ひに御差遣遊された。次いで高木池田の兩侍醫を急行せしめられたが更に深夜に至つて伊藤博文侯を召させ給ひて、種々御下問あらせ給うたが御軫念の餘り遂に十二日早朝遽かに宮城御出門、供奉員及び伊藤侯等を隨へさせられて京都に向け行幸遊された。この日七條驛に御降車あらせられた陛下には天顔殊の他勝れさせ給はず、直ちに常盤ホテルなるニコラス殿下を見舞ひ給ひ、翌十三日には遽かに歸國を仰せ出だされたニコラス殿下を神戸まで御見送りあらせられ給うたが、この御手厚き御見舞ひにニコラス殿下も悪感情を去り、和氣霽々たる中に出航されたのであるが、當時の露國公使の如きは大いに憤慨して數隻の軍艦を神戸に回航せしめいざといへば發砲もしかねまじき有様であつた。

明治天皇四十五年間の御治世中には數々恐懼申上げなければならぬ事件があるが、この大津事件の如きは殊に恐懼の極みであつた。犯人三藏はその後皇室に對する不敬罪として終身懲役の判決をいひ渡された。

十二日

俱利伽羅峠の戦

（壽永二年  
紀一八四三年）

木曾冠者義仲は

先づ信濃國を打從へ、次いで越後に攻め入つて、城資長を打破り、瞬く間に北陸諸道を平けてしまつた。一方東國にあつては源頼朝が伊豆の國に起つて幾何もなく關八州を打靡かして勢力日増しに盛んとなつたので、こゝに平氏は泰平の夢も貪つてゐられなくなつた。そこで治承四年の四月十七日には平維盛が畿内、東海、東山、北陸、山陽、西海の兵大半を驅り集め、維盛、通盛、知度、行盛、經正、清房等の諸將と兵十萬餘騎を從へて北陸道指して攻め下つた。平軍は進んで燈城を陥れ、次いで越前國河上城を蹂躪し、餘勢を驅つて長畝城を破り、加賀に亂入し篠原城を屠つた。この時木曾勢は越中國磐野まで退いてこゝに平家の大軍を迎へ撃つたがこの時初めて勝つことが出来た。一方義仲は樋口兼光を越中越後に遣して兵を募らせたが集る者多く五萬に達したが義仲は再々平地の戦に敗戦を喫してゐるので、今度は敵を山岳地に誘

つて一舉にして屠らんとし、先づ敵を磯波の險に誘ひ、次いで俱利伽羅の北麓に要撃しようといふ計畫の下に磯波の大手は自ら督し、搦手は股肱の臣樋口兼光を大將に任じた。義仲のこの作戦は果せる哉圖星に當つて敵は次第に俱利伽羅峠を指して押寄せて来る。この時義仲は磯波山黒坂の北麓一帯に陣し、平軍は俱利伽羅、猿の馬場、塔の橋より黒坂口に進み、山下に向つて北面して陣を構へた。兩軍終日秘術を盡して戦ふうちに日が暮れて夜半に至つたので、この時義仲は馬の背を叩いて時期到來せりと叫びつゝ、豫ねて用意した數百頭の猛牛の角に炬火と劍とを結びつけてこれを敵陣目算けて追込んだので何狀たまるべき、猛牛の叫びは山谷に響いて物凄く、陣中は遽かに亂れて上を下への大騒動、木曾勢はこの期を逸するなとばかり先づ樋口兼光は三千餘騎を從へて搦手に廻り、義仲は根井小彌太、今井四郎、小室太郎、巴等一騎當千の士を從へて北黒坂、南黒坂一帯から揉みに揉んで敵陣の眞ツ只中に躍り込んだ。何しろ木曾勢にとつては故郷も同様の山中のことであるからどんな小徑でも心得てゐるに引かへ、平家の軍勢は土地不案内の上に関夜に加ふるに猛牛のため散々脅かされてゐることゝ忽ち木曾勢のために散散らされて谷に陥つて死ぬもの、甲冑刀劍に自ら傷いて倒るゝもの數知れなかつたが、この時の谷の中心にある千歳瀧といふ瀑布は士卒の兵のため埋つてしまつたといふこと



である。さしもの平家も俱利伽羅峠の一戦には散々な敗北を喫し遂に木曾に名を成さしむる端緒を與へてしまつたのである。

### 常磐神社

茨城縣常陸國水戸市常盤鎮座、祭神二座 徳川光圀、徳川齊昭を祀る。本社の創祀は明治六年土地の人が二卿の功徳を仰慕し官に請うて社殿を建替したのに基く。明治十五年縣社より進んで別格官幣社に列し、十六年三月奉告祭を行つた。例祭は毎年五月十二日、社藏の大脇指（銘備前長船住長義貞治）一口は國寶に指定されてゐる。神樂殿内に烈公が造つたと傳へられる太鼓を置いてあるが、徑四尺五寸、胴に公の自筆の銘（震天動地云々）が刻んである。又神樂殿の北方に公の鑄造にかゝる白砲があり、境内の攝社鎮靈社は水戸藩士並に茨城縣人中維新以後の殉國者を鎮祭するところである。

### 十三日

### 松平定信卒す

（文政十二年 皇紀二四八九年） 松平定信は幼名を賢丸といひ字は貞卿、又は旭峯と號し、致仕して後樂翁といつた。世に白河少將又はたそがれの少將といふのはこの人のことである。定信は陸奥國白川の城主で、寶曆八年十二月二十七日江戸の田安邸内に田安宗武の第三子として生れた。安永三年十一月幕命

を講じ、北海は屢々不穩の警報を傳へ、英國船も亦長崎に於て狼藉の事などあつたので、定信は海防の一日も忽せにすべからざるを思ひ、寛政五年三月沿海の諸藩に命じて警備を嚴にせしめ、同月又自ら豆相房總の地を巡視したが、七月二十三日遂に輔佐並びに老中の役を免ぜられた。この時左近衛權少將に進み、溜間世班の恩命を拜した。次いで文化七年命によつて房總の沿岸に砲臺を築き、翌年又増築する所があり、九年四月致仕し、家を嫡子定永に譲つて樂翁と號した。文政十二年五月十三日年七十二で歿し、江戸の靈岸寺に葬つた。定信は管に政體に通じたのみでなく、幼少の頃より文學を好み著書も少くない。又文章を好くし、和歌に巧みであつた。嘗つて忘住所戀といふ題で、「心あてに見し夕がほの花ちりて尋ねてぞ迷ふたそがれの花」と詠んだが、この歌が世に傳つてさてこそたそがれの少將と稱んだものであるといふ。

### 十四日

### 神宮神御衣祭

毎年五月と十月の十四日神衣（神の御召物）を皇大神宮並に別宮にまします荒祭宮に供進せらるゝ御祭であり、この御祭は一日の織始祭から尙ほ供進の儀まで幾段ものお祭りがある。太古、天照大神、齋服殿にまして神御衣を織らせ給ひ、またかの天の岩戸にこもりまし、時天羽種雄ノ神、天柵織姫ノ神、神御衣を

によつて松平定邦の髡養子となり、四年閏十二月從五位下上總介に叙任され、天明三年十月封を襲いで越中守と稱した。十二月從四位下に進み、七年六月老中首座に任じ、侍從となつた。この時田沼意次の弊政の後を承けて紀綱頗る紊れてゐたのみならず、連年凶作天災が相繼いで起り、國民が塗炭の苦しみを嘗めてゐた際であつた上に、將軍家齊が新たに立つて年なほ幼少であつたので、定信は家齊を助けて鋭意治を圖つて所謂寛政の改革に着手した。これより先天明八年正月に京都に大火があつて皇居も仙洞御所も類火に罹つて焼失したのでこの時定信は内裏造營の總裁を命ぜられ、記録史傳等に據つて専ら古制に基いて結構を營み、寛政二年の秋に至つて完成したがその宏壯輪奐の美は昔日の比ではなかつた。この頃又光格天皇が閑院宮より入り給ひて大統を繼がせ給うたので天皇に於せられては御生父典仁親王に太上天皇の尊號を上らんとこの御内意があり、この旨幕府に諭し給ひしところ定信はこれを拒み奉つた。定信が敬慮を拒み奉りしについては、當時家齊は一橋治齊を大御所としてこれを西丸に迎へんとするの意があつたので、もし尊號の事が行はれたならば大御所の事も併せ行ふべからざるに立ち至るので定信はこれを愛へて拒み奉つたといふ説が古くから行はれてゐるが、これに對してはいろ／＼の説がある。ところが定信はこれがために家齊と感情の衝突を招いた。この頃會々露國は頻りに侵略の策

織りませし故事に出で、垂仁天皇の朝奉獻の御衣を奉繼せしめられし事に出で由來斷續あつたが、明治三十三年舊儀に復せしめられたといふ由緒深い御儀である。神御衣は神服織、神麻績と申す和袴と荒妙の二種を供進し參らせる趣で、奉織は古儀により神服部、麻績連達之を奉仕する。織殿は今三重縣多氣郡東熱部村大字大垣内に神服織機殿を、同じく飯南郡機殿村大字井口中に神麻績機殿を奉建してある神宮所管の機殿神社が是である。

### 榊原康政卒す

（慶長十一年 皇紀三二六六年） 榊原康政は幼名を

といつた。永祿三年徳川家康に初めて見參し、その近侍となり、六年上野城の戦に名を顯し、その後首服を加へし時、家康の偏諱を賜つて康政と稱した。十一年三河國堀川城を攻めて殊勳を顯はしたのをはじめとして遠江の天方、大居、光明、高天神、近江の姉川、駿河の田中等の戦ひに従ひ、勳功頗る多かつた。天正十二年家康が豊臣秀吉と事を構へるや、長久手の戦ひに先陣し、前田蟹江等の諸城を陥れ、十月家康が軍を還す際には小牧山に停つて上方勢に對抗してをつたが既に家康が秀吉と和睦して上洛する際にはこれに従ひ、十一月從五位下に叙し式部大輔に任ぜられた。徳川の家臣で叙任されたものは康政を以つて始めとする。十八年小田原北條滅び家康が關八州を領するに及んで上野館林を賜つて十萬石を食ん



だ。文祿元年世子秀忠附を命ぜられ、慶長五年上杉景勝征討の時秀忠の先鋒として東下したが途中で石田三成等の擧兵の事を聞いて更に秀忠を奉じて西上した。この時眞田昌幸が上田城に據つてこれを遮らんとするや、本田正信は昌幸と戦ふことの不利なることを論じ、秀忠に勸めて間道を経て軍を進めたけれども、康政はもし昌幸が城を出て来たなら一蹴し去らんといつて手兵を率ゐて上田城の眞近くまで押して行つたが昌幸は遂に城を出て来なかつた。ところが秀忠の軍はこのため關ヶ原の戦に合はなかつたので、家康の機嫌甚だ宜しくなく、父子相見ざること數日に及んだ。康政は深くこれを憂へて深夜家康を訪うて密に諫めたので、家康の怒も解けて二十九日伏見城に於て秀忠と對面した。この時秀忠は康政の斡旋を非常によろこんで、自ら筆を執つて、わが家のあらん限りは子々孫々に至るまで忘る事はあるまじといふ書狀を賜つたさうである。十一年五月十四日年五十九で卒した。康政は剛勇にして武略に富み、本田忠勝、酒井忠次、井伊直政等と共に徳川の四天王といはれた人である。

**大久保利通暗殺さる** (明治十一年 皇紀二五三八年) 通は幼名を

正助といひ、後一藏と改め甲東と號した。大久保公の墓碑銘の大意に曰く、『鹿兒島藩士にして、明治維新の際大いに畫策する所あり、將軍慶喜にすゝめて政權を返上せしめ、又諸藩

をして藩藉を奉還せしめて郡縣の基を建つ、歐米を巡廻して歸て内務卿に任ず、征韓論起るに及び其非を論じ遂に止む、西南の役後、朝廷金帛を給ひて之を賞す、明治十一年五月十四日、島田一郎等の爲に東京紀尾井町にて害せらる、年四十八、正二位右大臣を贈り、青山墓地に葬る。』とある。即ち明治十一年の今日は大久保公が麹町紀尾井坂に於て島田一郎等に暗殺された日である。次にその日の大略を述べることにする。

明治十一年五月十三日、何者とも知れぬ者から一通の斬奸狀が時の内務卿たる大久保公の邸に舞ひ込んだ。聞いて見ると『近日中に其許を殺害するから宜しく戒心あつて然るべし。』といふ物凄しい文句が認めてあつたが剛膽不敵の大久保公は一笑に附して意にも介してゐなかつたやうである。明けて十四日、この朝六時半頃であらうか小倉の袴を穿いた一人の書生體の男が大久保邸の玄關口へやつて来て、『内務卿は今日参内になられますか。』と尋ねたので取次の者が何氣なく、『はい参内になられます。』と答へると件の書生體の男は掻き消す如く姿を晦してしまつた。一方大久保公はこの日もいつもの如く午前八時二十分過ぎ頃裏裏ヶ關の邸を出て二頭立の馬車に乗つて紀尾井町一番地先に差蒐つた。あの邊は今でこそ賑かな通りであるが、その頃は右は北白川宮邸で左は壬生の邸で、殊に壬生の邸は見渡す限りの桑畑で、その上草が茫

茫と生い茂つて見るからに物淋しい場所であつた。公の乗つた馬車は赤坂門を左に折れてこの壬生の邸の横に差掛つた時その行手に當つて淺黄木綿の袴を着て、小倉の袴を穿いた書生體の男が左手に撫子の花束を持つて聲高く詩吟をしながら徘徊してゐたが、公の馬車が近寄ると見るや件の青年はつかつかと馬車に近寄り、撫子の花束を車中に投げ込んだかと思ふと、いきなり前に廻つて左側の馬の前脚をさつと撫ぎ倒した。と又一人の青年が物陰から飛び出して来て右側の馬の前額部に二太刀許り浴せかけたので二頭の馬はその場に打倒れてしまつた。この時馬丁は二人の壯漢を取押へようとするやこの時又も壬生邸の横角の共同便所の陰から突然一發の拳銃の音が響いたかと思ふと、これを合圖に四名の壯漢が現れて先づ馬丁の芳藏をたゞ一刀の下に斬殺し、續いて大久保公を馬車の中から引出して滅多斬にして遂に暗殺してしまつた。この時の犯人は都合六名で、首魁は石川縣士族の島田一郎といふものであつたが、一同直ちに自首して出で、間もなく斬罪に處せられたのである。

**出雲大社**

島根縣出雲國簸川郡杵築町杵築東鎮座、古くは出雲大神宮石峯之會宮、嚴神之宮、天日柄宮(天ノ日隅宮)出雲ノ宮、杵築ノ宮、杵築大社などともいひ、一に又杵築神社ともいふ。祭神は大己貴ノ命で、後五座を配祀した。天之御中主ノ神、高御産巢日ノ神、神産

巢日ノ神、宇麻志阿斯呵備日古遲ノ神、天之常立ノ神の五神である。延喜式内の名神大社で、又當國一ノ宮である。神位は仁壽元年從三位を加へられ、貞觀九年には正二位に上つた。神領は上古の事は判らないが、出雲風土記に、意宇、秋鹿、楯縫、出雲等も舊都の神戶、何れも熊野加武呂乃命(國幣大社熊野神社)と大穴持命(當大社)との二柱に依さし奉る由見えてゐる。蓋上古はこの二社は密接な關係があり神戶も亦共同だつたことが知れるだらう。天年神護元年に封戸六十一戸を加へ、鎌倉時代には所謂十二村及七浦の神領を定めて、大社の祿地とした。戰國時代一旦武士に奪はれたのを、毛利元就が再び舊に復したが、天正十九年豊臣秀吉が朝鮮征伐の時七村三浦を没入し、五村二浦(その高二千石)とその他の祭田並びに杵築鷲山を寄せて兩國造(千家、北島)に領せしめ、外に杵築町屋敷下屋敷鹽濱等を付したが、寛文十五年松平氏出雲を領するに至り、兩國造大社祭田修理料燈明料本願分別火分として都合二千七百三十石の寄付狀を下した。本社の創建は遠く神代にあり、天神命詔して天之御舍を多藝志之小濱に構へしむといふのが是である。これ實に本社の起源であると共に、又わが國神殿の嚆矢である。その構造は日本書紀、出雲風土記等にも特に記してある通りに、一に天孫の宮殿に擬し、柱を高大にし板を廣厚にし、千尋栲繩を以て百八十紐にしたものであつて宏壯雄大を極めたものであると



いふ。所謂大社造りであつて、その特殊の様式は神社建築史上に特筆されてゐる。齊明天皇の御宇以後神代の制を改め正殿式と改められ後世更に假殿式を用ひられる。

造宮の制は社傳には上古三十二丈、中古は十六丈、その後八丈となるとあり、而してその高さ八丈のものを正殿式といひ、八丈に満たないものを假殿式といふ。又その建造法を金輪造營といひ、大木を寄せ合せて金輪で緊束したと傳へられる。今の社殿は鬱蒼たる八雲山を負うて建てられ、神域、四圍の藩籬、長さ三百五十間、東西各三面に各一門を設けてあるので七門口の稱がある。南に面する門を正門とし、入口に毛利氏奉獻の青銅の大鳥居が建つてゐる。大鳥居の内が即ち宏潤なる神庭で、正面に拜殿あり、殿の後ろの石階を上げれば八足門に出る。左右に廻廊があり、廻廊に接して東に觀察樓があり、廻廊より連つて更に東西北に瑞垣あり、本殿及び内廊の玉垣を圍繞する。八足門を入つて更に進むと樓門の前面玉垣内の中央にあるのが即ち天ノ日隅宮である。明治七年の造營にかゝり、地勢より千木まで實測七丈九尺、柱は今地勢の上に立つけれどもその創始の時にあつては掘立のもので所謂底津磐根に宮柱の太きを建て、高天原に千木の高く聳えたるのであつたといふ。今特別保護建造物に指定されてゐる。攝末社には御向社、築紫社、天前社、門神社、素鷲社、氏社十九社、祭社、祓社、涼社、命主社、阿式社、御嶽社、乙見社、

大歳社、離宮下社、稻荷社、出雲井社、湊社、鷲社、杵那都岐社等あり。古來大社の祭祀は多くはたゞ黙禱するのみで祝詞を奏することが極めて少い。故に國造家に傳る祝詞は彼の有名な神賀詞の外には甚だ稀だといふ。年中の祭事は七十餘回、飛馬神事、三月會、九月會、身逃神事、瓜刺祭、神在祭、新嘗祭、神饌調理、御箸供進、御饌井祭、神殿神樂、巫女神樂等がその主なるものである。明治年四月十五日官幣大社に列し、毎年この日を以て例祭日と定め、勅使を發遣して祭祀を行はしめ給ふ。社藏の寶物は寶物館に陳列され、種々の寶物を陳列してあるが、就中秀頼寄進の糸卷太刀（銘忠光）一口、螺鈿蒔繪符合は國寶に指定されてゐる。

### 御上神社

滋賀縣近江國野州郡三上村三上鎮座、天社傳には孝靈天皇六年、三上の山頂に出現あり御上祝これを祀るといふ。祭神天御影ノ命は天津彦根ノ命の御子であつて御上祝の祖である。古代御上祝の部曲がこの地にあつて夙にその祖神を奉祀したものに起る。古來鍛冶の祖として崇められ延喜式内の名神大社であつて月次、新嘗の兩祭に預つた。神封は平城天皇の大同年に近江の地二百石を充て奉り、神位は清和天皇貞觀元年に従五位下より従五位上に進められ、累進して同十七年には從三位に昇り給ふ。國主佐々木氏、六角氏等の崇信代々厚く、屢々社殿改造のことがあつた。社領

は建久元年源頼朝が三千餘貫の地を寄せ、後建武三年足利尊氏が改めて一百町を寄附し、豊臣秀次に至り更に改めて四町九段を寄進した。明治九年十月郷社に列し、大正二年十一月郷社に昇り、大正十三年二月十一日更に官幣中社に進列した。本殿拜殿樓門は今特別保護建造物に指定され、寶物の木造狗犬は國寶の指定を受けてゐる。

### 彌彦神社

新潟縣越後國西蒲原郡彌彦村鎮座、彌彦名帳考證には、大屋彦ノ命とある。延喜式内の明神大社で又當國の一ノ宮である。明治四年國幣中社に列した。天香山ノ命は初め紀ノ國に住し、高倉下ノ命と申し給ふ。神武天皇の時、越後國平定の勅を受け、彌彦山の麓末水浦（今の野積）に着き給ひ、妖賊を討平し、民に漁鹽耕種の方法を教へ、専ら國土の經營に勤め給うた。これによつて神裔長くこの國を領知し、餘烈久しきに及び、國人皆その徳に悦服したといふ。崇神天皇の朝、神殿初めて成り、和銅四年神地四至を定められ、且同年より養老三年に亘つて佐渡國より宮材を引き神殿及び攝末社の造替へあり、後三十三年毎に更新の例となつた。神階は承和九年從五位を授け、貞觀三年從四位下を加へ奉り、その後醍醐天皇の御宇正一位大明神の勅額を賜つた。慶平五年源義家、大いに社殿を修理し祭田若干を寄せた。慶長二十年高田城主越後少將忠輝高五百石を寄せ、徳川家光更

に高五百石の朱印地を寄せ、代々相繼いで維新に及ぶ。社殿は寶曆四年改造の神殿、幣殿、拜殿、隨身門、神馬舎等頗る宏壯を極めたものであつたが、明治四年類火に遭つて建物全部災上するに至つた。爾來専ら再建の事に従ひ、本殿の位置を舊本殿の西南約二丁の山麓に移して大正二年六月地鎮祭、同四年五月上棟祭、同五年十月竣工、その二十一日に遷宮祭を執行した。その建造物は本殿、拜殿、祝詞舎、拜殿、神饌所、瑞垣、玉垣、荒垣、三ノ鳥居、社務所、伺候所攝末社、舞殿、樂舎、神符授與所、石廊下、拜觀所、勅使館手水舎、繪馬殿、倉庫、披樓、社號標、制禮臺及び消火栓、運動場等で總工費三十一萬餘圓に及んだ。就中防火の設備については民家に隣接する敷地の周圍に防火林を造成し、又本殿裏、拜觀所裏、社務所裏、二ノ鳥居側の四ヶ所に貯水池を設け、本殿水槽上にはガソリン・ポンプ二臺を設備し、且別に四馬力ガソリン・ポンプ一臺を社務所裏に設備し、隨時隨所に置いて使用することを得しめたる等諸般に亘つて盡さざる所なしといふ。攝社に武吳、船山、草薙、今山、勝、乙字の六社あり、これを六王子といふ。末社に八所、三十二所、十柱（この社殿は特別保護建造物である）火宮住吉（上下）諏訪の諸社あり。恒例の神事中、例祭（五月十四日）の外、祇園會陰曆六月十四日）獻鳥神事（正月三日夜）等があり、太々神樂は彌彦治天皇親拜記念祭（九月十六日）等があり、太々神樂は彌彦



舞と稱し、本社獨得のものであつて十二番の舞樂あり、傳來古く且優雅である。當社の施設には見るべきもの多く、社殿内在郷軍人會の總會（三月十日は陸軍記念日）積善組合、巡回文庫閣覽所等最も地方の教化に効果ありといふ社頭の神木権は、昔天香山ノ命が紀州より携へ降り給へる杖を地に刺して誓へて宣ふには「この樹必ず蘇生りて榮えん、且後世天下に事ある時は必ず異變あらん」とあつたさうである。古幹は既に枯れ、今あるものは二本あるが、幹圍一丈二尺、松は茂つて廣さ三丈六尺に及んだが、社殿災上の際猛火に包まれ、たけれども異状なく、今も尙生々としていよ／＼神徳の顯著なことを物語つてゐる。

## 十 五 日

### 承久の亂起る（承久三年）

（承久三年）

後鳥羽天皇に於か  
せられては早くより  
源頼朝が天下の兵權を握つて朝廷を疎かにし奉るを怒り給うてをられたが、頼朝薨じ頼家、實朝相踵いで薨するやその後を北條氏が專斷し、京都より藤原頼經を迎へて征東大將軍に擁立したので天皇の御憤りいよ／＼激しく遂に位を土御門天皇にお譲り遊されて太上天皇となり給うた。然るに天皇は順徳天皇の御聰明なるを愛し給ひ土御門天皇をして位を譲らしめ給ひ共に謀つて事を擧げんと思召されたので、密に御心を

後鳥羽天皇に於か

せられては早くより

武士に傾け給ひ、北面の外に西面の武士をも加へさせ、關東御調伏の事なども行はせ給うた。一年上皇には熊野に行幸ましました折、信濃住人仁科盛遠父子を召して新たに西面の武士に加へ給うたが、このことが鎌倉に洩れるや北條義時は大いに怒つて盛遠の所領二ヶ所を沒收してしまつた。この時上皇には義時に對して速かに盛遠に所領の地を返還すべきことをお命じになつたけれども義時は上皇の御意を奉じなかつた。又この頃上皇の御寵愛遊される白拍子に鶴菊といふものがあつたが、上皇はこの鶴菊に攝津國長江、倉橋の土地を賜つたが地頭は白菊を侮つて無禮の振舞があつたので鶴菊の訴によつて上皇は再び義時に對して速かに地頭を罷免すべき旨仰せ出されたがその時も亦御意に従ひ奉らなかつた。こゝに於て上皇はいよ／＼義時追討の御決心を御固め遊され、遽に兵を集め給うたのであつた。

この時順徳天皇は位を遽かに仲恭天皇に譲り給ひ、後鳥羽上皇を一院又は本院と申上げ、土御門上皇を中院と申上げ、順徳天皇を新院と申上げ奉つた。一院後鳥羽上皇に於かせられては新院即ち順徳天皇と關東追討の軍事を議し給ふや、中院に於かせられては徳大寺公繼と共に時期尙早を以つて諫め奉つたけれども後鳥羽上皇に於かせられてはこれを御用ひ遊ばされなかつた。この時京都に關東の御家人三浦義胤が大番で在京してをたつたが、この義胤はその一族三浦義盛が北條氏

### 夏場所始る（五月中旬より十一日間）

この日頃より夏場所が始る。青嵐

にとり／＼と鳴り響く櫓太鼓の音は好角家の血を涌かせずにはおかぬだらう。詳しくは一月春場所の項を参照ありたい。

### 葵 祭

加茂の葵祭といつて古來有名だが、今日はその葵祭の當日に當るので一通り説明をして置かう。

葵祭は正しくは加茂祭、或はミアレ、或は男山八幡宮の祭に對して北祭ともたゞ單にマツリともいふ。葵祭といふのは祭日の當日葵の葉を供奉員の衣冠に附し、又社前を飾り、車廂にかけるのである。いふまでもなく加茂神社の御祭典でその儀式の盛大さは古來有名であるが今日でも尙東西を通じて随一なるものである。古への祭儀は先づ祭の前の午の日又は未の日を卜して齋王の御輦があり、宮中に於ては前驅の人々を定め、又數日して御輦の地を遷定し、又數日の後に至つて初めて輦を修める。この日天皇は南殿に出御せしめし、齋王の前驅の馬及び御乘車用の牛を見給ふ。この時齋王は齋院より車に駕し、鴨の河原に臨んで御輦があり、

に滅された時から北條氏に深く街むところがあつたので、この時既に任期は満ちてゐたのであつたが鎌倉に歸らないで後鳥羽上皇の召に應じて先づ京都守護職伊賀利官光季を殺した。こゝに於て上皇に於せられては院宣を諸國に下し勤王の士を廣く召し給うた。時に承久三年五月のことであつた。一方北條義時は京都よりの報せを受けるや直ちに弟時房、その子の泰時、朝時及び足利義氏、三浦義村、武田信光、結城朝光等を將とし、兵十九萬を率ひて東海道、東山道、北陸道の三道より都を指して攻め上らせた。この時官軍は秀康、胤義等の總軍僅かに一萬七千餘騎に過ぎなかつた。六月に入り遂に戦は初つたが、官軍到るところに破れ、賊軍は遂に京都に亂入してしまつた。三上皇は難を延曆寺に避け給ひ、俄かに義時の官爵を復し、この度のことは叙慮にあらず公卿の謀であると宣はせられたけれども、時房、泰時は義時の命によつて一院を隱岐に、新院を佐渡に、中院を阿波の國に還し奉りこの他一院の第三皇子雅仁親王を但馬に、第四皇子頼仁親王を備前に流し奉り、源有雅、藤原光親、藤原守行、藤原範茂、藤原信能等の北面の武士等を悉く殺し、これで亂は全く平いのである。初め亂が起るや、泰時將に鎌倉を發せんとして父の義時に向つていふには「もし車駕が御親征あつた時には如何いたしたらよろしうございませう。」と聞いた。この問にはさすがの義時も即答しかねたが、沈思黙考暫くあつ



その後六衛府をして戒厳せしめる。これを警固といふ。この日天皇には祭に供するところの女騎料の馬を見給ふ。祭日には朝廷より奉幣使以下を發し、齋王に供進せしめられる。齋王は下社より上社に参向されるが、社に至れば齋王先づ馬を下り、社頭の幄に入つて清服を着し、更に腰輿に駕して進み社に近づいて初めて歩行し、社前の殿につき給ふ。使も亦座についで壽詞奉幣あり、翌日齋王は神館を出で、齋院に還り給ふ。宮中にては使者を召され、宴を賜ひ祿を給す。この日初めて警固の陣を解く。この祭の如く奉幣使の行列が盛んであつて車服を飾る祭は少く、上下擧つて見物し道路は人を以つて埋り往來することさへ困難であつたといふ。だから往々にして喧嘩騒動が持上り、ために朝廷に於かせられては屢々令を發して奢侈に亘るを禁じ給ひ、争鬭を止めしめ給うたが、中々行渡らなかつたといふことである。

彰義隊の戦ひ (明治元年 皇紀二五二八年)

明治元年の今月の今日は上野に彰義隊

の戦ひがあつた日である。明治維新の大業成ると同時に、徳川慶喜は江戸城を奉還し、ひたすら恭順の意を表し奉つたが幕臣の中には却つてこれをよろこばず、中にも上野寛永寺に本據を置く彰義隊の勢最も盛んであつた。彼等の目的とするところは輪王寺の宮を擁し奉り一旗擧げんとするにあつた。一方執事院もこれと協力を誓ひ會津藩も遠く應援してこ

れに呼應するところがあつたので彰義隊はいよ／＼勢ひ盛んとなつた。こゝに於て江戸鎮撫の任を帯べる官軍は、他の藩士と區別するため袖に片錦を附けて官軍であることを明瞭にすることゝした。

これより先、總督宮より徳川家に命じて彰義隊の解散を命じ給うたが頑として聞かなかつたので、更に勝安房をして諭さしめたが同じく聞き容れなかつたので、遂に征討の軍を起すことゝなつたのである。官軍の總參謀軍務官大村益次郎諸軍を率ゐて四方より東叡山を圍んだ。時に明治元年五月十五日のことであつた。この日拂曉より降りみ降らずみの五月雨の空模様で、江戸市民の戦々兢兢たる中にいよ／＼戦の火蓋は切つて落された。彰義隊の陣立如何と見れば、山内の諸坊に屯する總勢三千五百人、先づ黒門口を固めたのは彰義萬字の二隊、鹿兒島、熊本の兵がこれに當り、神木、浩氣の二隊は穴稻荷門に備へて岡山、柳河、名古屋、佐土原の兵が當り、下寺通の山門は遊撃、純忠、精忠の二隊がこれを守り徳島、彦根、新發田の兵がこれに當り、谷中門は彰義、歩兵旭、萬字、松石の四隊これを守り、岡山、兵がこれに當つた。又特に黒門口は一山の咽喉とて山王山に巨砲を据ゑて官軍に當ることゝなつた。

らぬ修羅場を現出したのであるが、先づ黒門口破られ、次いで穴稻荷門口、谷中門も破られ、瞬く間に山内は官軍の占領するところとなつてしまつたので、こゝに輪王寺宮は奥羽を指して落延び給ひ、山内の諸兵悉く遺走し、遂に官軍側に凱歌が擧つた、時に正午。この時の戦にさしも結構壯麗を誇つた東叡山寛永寺も清水堂を残す外全部烏有に歸してしまつたのである。

賀茂御祖神社

京都府山城國愛宕郡下鴨村下鴨鎮座 祭神二座、玉依姫ノ命(東殿)鴨建角

身ノ命(西殿)を祭る。俗に下鴨社(古來上鴨を賀茂と書き下鴨を鴨と書くのが例である)といひ、糺ノ森にあり、賀茂別雷神社と並べ稱して賀茂神社といひ兩社であつて一社の如く、行幸、奉幣、祭祀等皆同一に於てせられる。兩社共延喜式内の名神大社で四度の官幣に預り、又廿二社の一に數へられ、本國一ノ宮である。古來伊勢神宮に亞いで朝家の御尊崇篤く、殊に桓武天皇實都以來玉城鎮社として西松尾社を猛靈と稱すると並べて、東、本社嚴神と崇め給ひしより益々繁昌に赴いた。兩社の神階は延暦三年從二位に叙し、十三年遷都の故を以つて正一位勳一等を授け、大同二年正一位を授け奉つた。社領は公私の寄進積んで數十ヶ國に亘り、百餘の莊園あり、近く徳川時代に至つても尙上社は二千五百餘石、下社は五百餘石を有してをた。桓武天皇が初めて行幸あらせら

れて以來、行幸御幸行啓等の事史上に屢々見え、圓融天皇以後は、男山行幸毎に必ず本社にも行幸あり、これを兩社行幸と稱し、白河天皇勅して毎年四月中ノ申ノ日を式日と定められ、久しき間の恒例であつた。又近世孝明天皇が攘夷御祈念のため臨時の行幸あつたことは有名な事である。賀茂齋院は嵯峨天皇の朝初めてこれを置き、皇女有智子内親王を以て奉仕せしめ給ひ、爾後歴朝登極の初め必ず皇女或は皇女孫を遣はし給ひしが、後鳥羽天皇皇女禮子内親王以後廢絶した。明治四年官幣大社に列した。本社に社殿中今特別保護建造物に指定せられてゐるものは次の建物である。

- 本殿、幣殿、祝祠屋、東西廊、東西御料理屋、東西廻廊、東西樂屋、四脚中門、預り屋、西唐門、透舞舞殿、細殿、橋殿、樓門、神服殿、供御所、大炊所

本社に攝社に河合、比良木、三井、日吉、貴布禰(以上境内)賀茂波爾、御影(以上境外)の七社があり、末社靈應社以下二十三社があり。例祭(五月十五日)は御兩社併せて之を賀茂祭(別項参照)と稱し、特に勅使の發遣があり、下社を先にし、上社を後にするのを例とする。その他神事中に御粥祭(五月十四日)更衣祭(五月立夏の日十二月立冬の日)御蔭祭(五月十三日)夏越祭(立秋の前日)能樂奉納(十一月初旬)等が有名である。



### 賀茂別雷神社

京都府山城國愛宕郡上賀茂鎮座、加茂別雷ノ神を祀り上賀茂社といふ。下鴨にある賀茂御祖神社と共に古來祭儀皆同日であつて、社地こそ隔つてをれ殆んど一社の如く、二社を併せて賀茂神社といふ。故にその事等は凡て賀茂御祖神社の項に收めた。明治四年官幣大社に列した。本社の本殿は寛永五年の建造に係り今特別保護建造物の指定を受けてをるものは次の建物である。

本殿、權殿、透廊、祝詞屋、神詞屋、直會所、樂所、御籍屋、本殿權殿取合廊、舞中門、本殿東渡廊下取合廊、東西供御所、東渡廊西渡廊、四脚中門、唐門、幣殿忌子殿取合廊、忌子殿、高倉殿、廊門、北神饌所、舞殿、土屋、樂屋拜殿外幣殿

本社神酒殿のあと古例によつて大嘗祭供用の白酒、黒酒の醸造所に充てられるので有名である。攝末社には片山御子神社、大田神社若宮社、奈良社、賀茂山口神社、久我神社、須波神社、新宮社(以上攝社)等があり、古昔は祭儀年中七十餘度と稱したが、多くは廢典に歸し、現時御戸開元且神饌奉獻(一月一日)卯杖献進(一月七日)御棚會(一月十五日)御戸開弼御神事弼杖献進(一月十五日)燃燈祭(舊正月朔子)土解祭(四月三日)御掃除神事(五月十二日)御阿禮所神事(五月十二日夜)競馬式(五月五日)加茂祭(五月十五日)

田植神事(六月十日)重陽神事(九月九日)安曇川水鉦献供(十月一日)御戸開掃除神事(十二月十四日)御戸開相嘗祭(十二月十五日)等を存してゐる。

### 十 六 日

#### 楠公父子櫻井の別れ

(延元元年五月二十一日の説あり) 楠公父

の驛で最後の別れを交したの今は今を距る凡そ六百年以前の今日の今日のことである。楠公父子二代に互る精忠こそは、正に百世の下懦夫を立たしめるに足りる物語であるが、別けて櫻井驛の別れこそは、いつの世に至つてもわが日本人が涙を絞つて止まぬ物語であらう。

時に延元元年五月半ばの頃であつた。楠正成に對して逆賊尊氏を兵庫の濱に討てとの勅命が下つた。この時正成秘かに思ふやう。『この度の戦こそ定めし最後の御奉公であらう。ついでは一子正行に面會し、わが亡き後くれぐれも君の御爲に精忠を勵み奉るやう、懇ろの訓戒こそなされ。』と、さては櫻井驛に向ひて行つたのである。この時正行僅かに十一歳、久々の父との對面にやれ嬉しやと思つたのも東の間のこと、やがて正成は正行に向つて申されるには『そも／＼この度の戦こそは天下の安危の分るゝところである。賊は名にし負ふ鎮西の荒武者であつて、しかも新手にして大勢である。味方

は數次の戦ひに疲れてゐる小勢を以つて戦ふのであるから、勝利の程は到底覺束ない。よし正成が生きて還るとも今の有様を眺むれば味方の武士は日に減じて傾く御運の末と見奉る。今や正成が生きてき唯一の道は死して忠義の鑑を後の世に示し、廣く勤王の士の志を勵ます外にはない。父は既に討死とこそ覺悟を定めたれば、汝を見ることもこれが最後であらう。さはいへ正成亡き後は世は尊氏の世となりて、又君の御爲に盡す人も無いであらう。汝はたとひ幼くとも父の訓へを心に秘めて人となりなば、わが志を繼いで勤王の士を催し命のあらん程は賊を討つて復讐を安じ奉れ。尊氏或は利を以つて誘ふことがあらうかも知れないけれども、必ず應ずること勿れ。一族郎黨をよく扶持し、和田恩地の徒と闘つて所領の民を能く治め、學を修め道を辨へかりそめにも父の忠義の名を汚すこと勿れ。父はこれより兵庫の濱へ赴けば、やがては戦場の露と消えようけれども、魂はこの世に止つて君の御護りとなり、兼ては汝が成人して御奉公する日待つであらう。いざ、立ち歸れ。これこそ父の記念なるぞ。』といつて菊作りの短刀を取出して渡せば、折から鎧の袖に時雨かゝつたのは木の下露か、それとも別れを惜しむ涙の露であつたであらうか。

この時正行は滴なす涙をはふり落しつゝ、『なんといふ情けなき仰せでござりませう。正行たとひ幼少なりとも父の御伴

仕つて、潔く君の御爲に討死しようといふ覺悟でござりました。どうぞ兵庫の濱へお連れなされて下さいませ。』と鎧の袖

に取纏つて泣き崩れ、ば、正成は一段と聲勵していふには、『汝幼くとも早や十一歳なり。正成が子ならばこれ程の道理が辨へらぬわけはないであらう。父の教へは生きてわが菩提を弔へといふのではない。父の志を繼いで主上に仕へ奉れと申すのだ。そも／＼生は難く死は易し、死ぬことばかりが何で忠義であらうか。死しての忠は生きて盡す忠に劣るといふ豫ての教へを忘れたのか。さやうの心掛では將來物の役にはよもたないであらう。』と厳しき言葉の中にも君を思ひわが子を思ふ情愛籠めて懇々と諭したので、幼き正行の心にも殊に最後の一言が徹したのか、涙ながらに記念の短刀押し戴きつゝ露けき袖を打拂ひつゝさらばとばかりに立上り、後振り返へりつゝ、河内の國の母の許へと立戻つて行つた。

さる程に、兵庫の一戦に華々しい最期を遂げた正成は、變り果てた首級となつて正行の許へ届けられた。さすがの正行も父の最後の訓へを忘れたのか、あはや腹掻切つて亡き父の跡を追はうとしたところを母に押し止められ、涙ながらの教訓に再び思ひかへして成人の日を待つことゝなつたのである。

#### 鳥井強右衛門の最期

(天正三年、皇) 甲斐の武

萬七千の大軍を率ゐて長篠城を圍んだのは天正三年五月のこと



とであつた。この時奥平信昌は僅か五百の手兵を以つて城を守つてゐたが、城の圍みがますます厳しくなると共に城中の食糧缺乏して今は早や敵を眼前に餓死するより他なくなつてしまつた。この時鳥井強右衛門勝商は自ら重圍を脱して織田徳川に至急援兵を乞はんことを申出た。即ち十五日夜のこと強右衛門は密に城を脱け出して岩代川の本流と支流との合する深淵に潜り入り、辛くも重圍を脱して使命を完全に果しその夜のうちに暗に紛れて城中に還らうとするところを、途中不幸にも武田の軍兵のため發見されて捉へられてしまつた。武田の軍兵共は強右衛門に厳しい糾明を加へて詮議したところ、大膽不敵の強右衛門は呵々大笑していふには、『織田、徳川方に内通したのさ。今に武田の軍勢は木ッ葉微塵に蹴散かされようよ。』と空嘯いたので驚いたのは武田の軍兵共であつた。一人の武士が矢庭に斬殺さうとしたところ、側にあつた一人の大將がこれを押し止め、『かくなる上は殺しても詮なきこと。こりや強右衛門、わしのいふこと聞けばお前を重く須ひてやらうがどうぢや。つまり城に向つて、援兵は來ないと叫ぶのぢや。もしわしの命令に従はんと磔の刑に處するが返答はどうぢや。』と詰寄ると、暫く思案してゐた勝商は何んと思つたのか、『よろしうございます。御命令に従ひませう。』と快き返事をしたので喜んだのは武田方の軍兵であつた。早速勝商を高手籠手に警めて城の濠際に連れ出すと『さ

あ、約束に基いて叫べ。』と捉し立てると、やをら、城に向き直つた勝商、『鳥井強右衛門勝商、正に使命をお果し申した。織田、徳川の援兵は程なく参るでござらう。』と大音聲擧げて叫んだので、驚いたのは武田の軍兵共であつた。忽ち強右衛門を押捕へて最前の約束通り磔の刑に處してしまつたのであるが、この時勝商の内通によつて驚いた濱松の援兵は時を移さず馳せ参じ、瞬く間に武田の軍勢は蹴散らされ、その月の二十日に城の圍みは全く解けたのであつた。

十七日

蜂須賀小六正勝卒す

（天正十三年 皇紀二三四五年） 姓は清和源氏、足利

泰氏より出た人である。泰氏の長男斯波氏の孫足代高経が足利尊氏を助けて管領となつた。更にその七世の孫正昭が尾張國海東郡蜂須賀村二百貫目の土地を領してゐたので初めて蜂須賀姓を名乗つたものである。その子小六正利は初め齋藤道三に仕へ、後織田信長に仕へた。その子の正勝と孫の宗正父子も亦信長に仕へ、秀吉の旗下に屬して屢々功を樹て、播摩その他の地八千石を賜り、天正十三年四國を征めた時の功を以つて阿波國を賜り、徳島城にまつた。慶長五年關ヶ原の役起るや家康に従つて行長を破り、元和元年正月至鎮松平の號を賜つた。五月大阪役の功を以つて淡路七萬石を加賜され前

封と併せて二十五萬六千石となつたが天正十五年六十一歳で歿した。

波上宮

沖繩縣琉球國那覇區若狹町鎮座、速玉男ノ命伊弉册ノ尊、事解男ノ尊を祀る。土俗波上權現と稱し、那覇西北の海岸斷崖の上にある。土俗の傳説にいふには昔崎山の里主が釣魚を好み海岸に出て一つの石を得た。その日漁獲が甚だ多かつたので里主は喜んでその石を持ち歸り、後祈ると必ず靈驗があつた。そこでこの石は必ず靈石だらうと波上に至つて之を安置した。この時神託あつて曰く、『我はこれ日本熊野權現なり、汝に縁あり。こゝに社して永く國家を鎮護せん。』とあつたので里主が王に白して社殿を營んだのが波上宮の初めであるといふ。沖繩縣には官社と稱して縣より社費の補助を受くるものが八社あるが、波上宮、識名宮、末吉宮、八幡宮、天久宮、沖之宮、普天宮、天妃宮、就中波上宮は衆庶の尊崇最も篤く、位置も亦縣廳所在地の附近にあるので明治二十三年特に勅して官幣小社に列せしめた。例祭は毎年五月十七日で、當日は奥武山、湯原等に神幸の儀あり、數百人の供奉行列は琉球稀に見る壯觀であるといふ。當宮所藏の銅鐘（顯徳三年の銘あり）一口は國寶に指定せられてゐる。

十八日

五稜郭陥る

（明治二年 皇紀二五二九年） 明治維新の際朝廷に於かせられては徳川氏

の軍艦を悉く沒收されたが、この時榎本武揚等は朝廷に哀訴し奉つて開陽、回天外數隻の軍艦を賜つた。ところが明治元年八月、武揚等は新政府に不平を懐く徒を語らつて奥羽諸藩を應援しようとして松平太郎と軍艦開陽、回天十一隻を率ゐて品川沖を發し、仙臺に向つた。この時海上が大いに暴れて上總沖で一艦は沈没し、一艦は吹き流されて漂着したが、この時既に若松城は陥り、奥羽の諸藩も亦相踵いで官軍に降つたので、首魁大島圭介等も今は全く袋の鼠となり、寒風澤に走つて武揚等の軍艦に搭じ、一路北海道に向つて遁れたのであつた。武揚等は先づ函館を襲撃して守備兵を走らせ、次いで龜田の五稜郭を攻め取つてこゝを根據地として松前城を屠り早くも北海道の大半をその手に收めることに成功した。こゝに於て朝廷に於せられては明治二年三月水陸相應じて武揚等を征討あらせられたがこの年の四月先づ江刺城を奪取し、更に松前城を攻めたがこの時官軍の參謀黒田清輝は武揚に向つて降伏を勧めたので遂に前非を謝して軍門に降つた。時に明治二年五月十八日のことであつた。

十九日



桶狭間の戦ひ (永祿三年 紀三三〇年)

桶狭間の戦ひは永祿三年正月織田信長

が今川義元を征めたことから始る。この時は義元は大いに怒つて先づ信長に先んじようとして四萬の兵を率ゐて尾張に向つた。これより先信長は今川氏に備へるため、鷺津以下の砦を各所に築き、諸將を置いて守らせてゐたが、これらの諸砦は義元のために脆くも蹴散されてしまつた。この時信長は諸將を清洲城に集めて會議を開いたが、老臣林通勝は信長を諫めていふには、『衆寡敵せず退いて城を守るに如かず』といつたので信長は大いに怒り直ちに馬を驅つて出陣したがこの時従ふ者僅に六騎に過ぎなかつた。信長は悠々として熱田神宮に詣で、戰捷を祈り、遂に桶狭間に至つて義元の軍と對陣した。この時信長の旗下に集る者二千、信長兵を勵して曰く、『この一戦に於いて名もなき者の甲首を取るも賞しないが、獨り義元の首級を擧げたものは將士同功として厚く賞するであらう。』といつたので、將士は戰はざるに勇躍して既に敵を呑むの概があつた。

義元は香掛を去つて大高に向ひ、桶狭間の北方田樂狭間に休憩中附近の神官と僧侶が酒肴を携へて來て義元の將士を轆つた。この時又鷺津の丸根から敵將の首級三個を送つて來たので義元は喜びの餘り、大いに祝杯を擧げて酔ひつづれてしまつた。この日午近い頃信長の兵は既に義元の陣營眞近まで

忍んで來てゐた。この時一天俄かに猛き曇つて大暴風雨捲き起り一時に山も人も暗の中に呑み込んでしまつた。信長好機到れりとなし、味方の將士を勵しつゝ槍先鋭く義元の陣中に斬り込めば、不意を喰つた敵の軍兵共は右往左往に逃げ逃ふ。中には味方と知らず醜い同士討を演ずるあはて者さへあつた。この時、信長の家臣の服部小平太といふものが槍を抜いて義元の側に潜び寄り、頃合ひを見圖つてえいつと許り突き掛れば、さすがは今川義元である。いきなり刀を抜くと見事に小平太の槍諸共膝頭深く突き倒したので小平太はその場に倒れてしまつた。その隙に義元は遁れんとすればすかさず毛利秀高が潜び寄つて物の見事に義元を倒し、遂にその首級を擧げてしまつたのである。この時義元の名だゝる諸將悉く討死し、遂に信長に天下に呼號する機會を與へたのである。世にこれを桶狭間の戦といふ。

新井白石卒す (享保十年 紀三三八年)

新井白石は名を君美、字は在中、又は

濟美ともいひ、幼名勘解由、後白石と號した。白石は江戸の人であつて、明暦三年二月十一日生れた。三歳の頃から早くも大字を書き、六歳の時書を読んだといふ。七歳の時芝居を見て一つも忘れるところがあつた。十歳の時常に君侯の側近にあつてその贈答の文書は大抵これを代筆したといふ。長ずるに及んで器資宏偉、自らいふに『大丈夫生れて封侯たらず

んば死して閻羅王となるべし。』といつてゐたといふ。久留里侯土屋利直が卒するや父と共に致仕して江戸に出て苦學した。この頃江戸の富商河村瑞賢が自分の孫娘と娶し白石に學資を贈つて勉強させようとした時白石は言下に辭退していふには、『余聞く、昔潭上に小蛇あり、人その腮を微傷す。俄にして大龍のこの邊に死せるあり。これ即ち先に傷付くところの小蛇なり。その痕一尺に餘れりと。翁今娶すに孫女を以つてせんとす。これ小蛇を傷るなり。後來余家を興す日、その痕豈小ならんや。』といつて従はなかつたといふ。天和二年には堀田正俊に仕へたが志を得ず、去つて木下順庵の門に學んだ。元祿六年甲府家宣の召に應じて儒官となり、大いに用ひられた。同年正月には上書して皇子、皇女の剃髮遊さるゝ制を廢し、古制に復せんことを請うたので家宣は白石の説に従つて京都に上奏し、皇子秀宮を以つて閑院宮と稱し、料田千石を上つた。直仁親王がこの時の秀宮に在します。又この年の十一月には命を奉じて羅馬人を糾問し西洋紀聞三卷を著した。同七年には武家諸法度を頒ち、正徳元年十月には朝鮮使節の禮を正し、その功によつて従五位下筑後守に叙せられ祿五百石を賜り舊領と共に千石となつた。三年家宣薨するや遺命によつて間部詮房と共に幼將軍家繼を輔け、天下の號令一つとして白石の手から出ないものはなかつた。この時漸く白石の聲望を嫉む者が出て來たが、家繼が夭折して吉宗が紀州

から入つて將軍職を繼ぐや遂に斥けられて野に下つた。この時白石も亦當世に意なしといつて以後固く門を閉ちて日夜典籍を見ることを以つて唯一の樂しみとしてゐたが、享保十年三月十九日六十九歳を以つて遂に歿した。白石の残した功績は實に偉大であるが、中にも貨幣鑄造の監察官を設けて惡幣を改め、或は勘定奉行荻原重秀の奸惡を退け、その他風俗を改め銅版を鑄造して經籍を天下に弘めんとした等頗る見るべきものがあつた。著書も亦三百種の多きに達し、藩翰譜、讀史餘論、古史通、西洋紀聞、折焚柴の記、西洋圖説等最も世に行はれてゐる。

二十日

應仁の亂起る (應仁元年 紀三二七年)

後土御門天皇の寛正五年十一月足利義

政は三十になつても子がなかつたので、弟の淨土寺門主義隆を還俗せしめて義視と稱し、將軍の職を譲らうとした。この時細川勝元が執事だつた。六年十一月に至つて夫人の富子が義尙を生んだが、義政はわが子の義尙を僧とするに忍びず、山名持豊に頼んで義尙を授けさせることとした。持豊は當時多くの所領を持ち、その父の時照と共に天下の樞機に參與して絶大な勢力を持つて細川勝元と拮抗してゐたが、剃髮して宗全と號することとなつた。細川勝元は宗全の娘を買つて妻



としてゐたが子がなかつたので宗全の子の是豊を嗣子として養つてゐたが間もなく一子を儲けたので是豊を廢嫡してしまつたので實父の持豊は心中甚だ不愉快に堪へられなかつた。この頃勝元は赤松氏の邑を復したので宗全は義尚を立て、執事となし、漸く勝元を傾けんとする志を懐くやうになつた。

これより先畠山政長、同義就の兄弟が河内の國に於て戦つたが、この時勝元は政長を援けて義就を吉野に走らせた。一方宗全は義就を助けて京都に入らしめたが、この時管領斯波氏に嗣子なくよんどころなく義敏を迎へて嗣子に立てたが一族の中には頗る不平を懐く者が多かつたので幕府の奏者貞親によつて義敏を廢して義廉を立てんことを請うた。義廉は即ち宗全の女婿である。ところが貞親は義敏の妹を妾としてゐたので又幕府に願つて義敏を立てたがこの時義貞は義親を讒して義廉を援くる者は義親であるといつてこれを暗殺しようとした。これを聞いた勝元、持豊は大いに怒つて貞親、義敏を攻めたので兩名は都を捨て、出奔してしまつた。こゝに於て京都に始めて兵亂が起り、續いて近畿の土豪も群り起つたのである。

應仁元年正月、宗全は政長を退けて義廉を管領とし、悉く勝元の黨を追はんとした。こゝに於て畠山氏の政長、義就の兩黨は互ひに兵を出して京都に戦つた。義政は兩人に雌雄を決せんことを命じた。勝元は政長を吉野に遣れしめ、十萬の

兵を集めて室町の第を守らしめた。この時政長、義敏、京極持清、武田國信、赤松政則等は勝元に屬した。一方宗全も亦兵を集めること九萬、教幸、教清及び斯波義廉、畠山義就、義純、六角高頼、一色義直等悉く宗全に屬した。この時都の西に陣を構へ、勝元は東に陣を敷きこれより永く花の都は戦塵の巷と化してしまつたのである。

中央がかくの如き有様なので地方も亦大いに亂れ、諸國の守護地頭も兩黨に別れて互ひに争ひ朝廷に對して貢を納めず幕府の號令も亦行はれないやうな有様であつた。一方京師に於ては東西兩軍市内に戦ひ、邸宅寺院に放火して焰の絶えぬ日とてなかつた。この時義政は義親をして兩軍を討せようとしたけれども夫人富子がこれを妨げて討せず、勝元は又貞親を幕府に入れて探偵とした。ついで義親先づ伊勢に走り、勝元は遂に太上天皇を室町の第に迎へ奉つた。この時大内、河野の二氏來つて宗全を援けたので、勝元は上皇に迫つて宗全追討の院宣を賜つた。宗全は義親を軍中に招いて頼勢の挽回を圖らうとしたがこの時義政は義親を追つて遂に義尚を嗣子に定めた。宗全も亦小倉宮の王孫を奉じて南朝方の遺臣を誘つて西軍の利を圖らうとした。

かくの如くして兩軍戦ふことを實に數年、文明二年少貳教頼が對馬より歸つて曾つて失つた領地を回復しようとして大内政弘を周防の國に走らせ續いて同四年義統が東軍に降るや

小倉宮は遂に行方を晦してしまつた。同五年三月先づ持豊が病んで薨じ、ついで五月勝元も亦卒した。この年十二月義政はその子義尚に職を譲つて致仕し、政長が管領となり間もなく義純に譲つた。九年十一月西軍先づ軍を解いて信濃に歸り次いで東軍も亦陣を解いてこゝに初めて天日を仰ぐことが出来た。京師戰場となること實に十一年。内裏を初め天龍、相國寺を初め公卿の第宅別荘悉く燒失し、又貴重なる書籍寶物等も悉く灰燼に歸してしまつた。

二十一日

日本書紀成る

(養老四年 皇紀一三八〇年)

朝廷に於かせられ

命じて古事を撰述して上らしめたが、更に朝廷の正史として内外に示さん御目的によつて、考證該博、文章整備せるもの編纂の必要を認め給ひ、元正天皇に於かせられては一品舍人親王及び太安麻呂に新たに日本書紀の編纂を命じ給ひ、養老四年五月編纂の大業を終つて天皇に上つた。

日本書紀は三十卷十五冊あつて、神武天皇より持統天皇に至る迄の史實を漢文にて編年體に記述した正史であり、第一第二の兩卷は神代記であつて本文の外に別に諸家の傳説を收め、第三卷以下は神武天皇より持統天皇に及んでゐる。古事記と共に國寶的聖典であるといふまでもない。

二十二日

新田義貞鎌倉に入る

(元弘三年 皇紀一九九三年)

新田義貞

高時の輩下となり勤王方に對して弓を引いたこともあるが、大義名分の大道を知るに敏なる義貞は遂に意を決して東國に馳せ下り、元弘三年五月八日卯の刻を以つて遂に生品神社の社前に於て勤王の大旗を翻し、先づ百六十騎を率ひて笠懸野に向つた。これを傳へ聞いた甲斐、信濃、越後の諸源氏これに和し、續いて上總、常陸、武藏の諸黨來り加り、瞬く間に二十萬騎の大軍を擁するに至つた。北條高時はこれを聞いて大いに驚き、直ちに兵十萬を率ひて義貞を討たせることゝした。義貞も亦高時の軍が鎌倉を發すると聞くや時を移さず小手差原より進んで武藏の分倍河原に先づ鎌倉軍と一戦を交へてこれを破り、續いて關戸に陣した。この時義貞の軍勢五十萬と註された。義貞は兵を三手に別つて鎌倉の本城目指して押しに押しして攻め寄せた。時に元弘三年五月十八日のことであつた。二十一日夜半義貞は選りによつた手兵二萬を率ひて鎌倉極樂寺坂に至り、夜明を待つたが何しろこの地は北に高き山を背負ひ、道は僅か一人通れるか通れぬか判らぬ切通しである上に南は稻村ヶ崎の沙頭狭きところには所狭きまで逆茂木を張り渡し、沖には幾多の軍船を浮べて要害堅固判



らぬ隈とてなかつたので、さすがの義貞も退くより他に方法とてなかつたけれども、この時義貞何思ひけん、稻村ヶ崎の岸頭高く立ち上るや、豫ねて携へて来た寶劍を海に投じてこの潮引かせ給へと水神に祈つた。と見るや靈驗忽ち現れて潮が引き始めたので好機逸するなとばかり全軍揉みに揉んで稻村ヶ崎の干潟を渡つて鎌倉に雪崩込み、こゝを先途と攻めかけ攻めかけ戦つたので、さすがの北條氏も悉く討死し、高時自刃して果てれば家の子郎黨われ遅れじと自害して果て、しまつた。この時高時に殉じたもの八百餘人、泉下に恩を報じたもの實に五千人に上つたといふ。時に元弘三年五月二十二日のことであつた。

二十三日

坂上田村麿薨す

(弘仁二年 山城國宇治郡粟田に將軍塚といふ)

のがあるが、これぞ征夷東大將軍坂上田村麿の墳墓である。坂上田村麿は刈田麿の子で、延暦年中從五位下に叙し、近衛將監となり、内匠助を兼ね近衛少將に進み、越後守を兼ねてゐた。時に桓武天皇に於かせられては蝦夷の國を征せんとするの御志あり、即ち田村麿にこの大任を命じ給うたのであつた。田村麿は畏みて勅を拜し、百濟俊哲と共に東海道に赴き、次いで征夷副使となり、大將軍大伴弟麿に従つて蝦夷を

討ち、功によつて從四位下に進み、木工頭を兼ね、陸奥出羽按察使に任じ、鎮守將軍を兼ね、幾干もなくして征夷大將軍を拜した。二十年奥羽と蝦夷が再び叛いたので、これを平け凱旋すると同時に從三位に陞つた。翌年陸奥膽澤城を築き、二十二年又同國志波城を築いた。二十三年再び征夷大將軍となり、明年參議に任じ、大同元年中納言に移り、中衛大將軍を兼ねた。二年中衛府を改めて右近衛府とするや田村麿はその大將となり、更に侍從兵部卿を兼ね、正三位に進んだ。弘仁元年嵯峨上皇に於かせられては平城天皇と不和と生じ、藤原藥子の變が起つた時田村麿は上皇の軍を美濃路に遮り奉る等幾多の軍功を樹てたが弘仁二年五月年五十四歳で粟田の別業に薨じた。この時天皇には特に從二位を贈り、山城國宇治郡粟田に水陸田三町を賜つて墓地となし、その屍を棺中に立たしめ、平安城に向つてこれを葬り、甲冑、刀劍、弓箭、繡藍を併せ納めたといふことである。爾來大將が出征する際には必ず墓前に詣で、戰捷を祈る例であつたといふ。日常佩いたところの劍は御府に収めて坂上資劍と名付け、天皇又その像に替して深く哀惜し給うたといふことである。田村麿は身長五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、身の重さ二百一斤、これを輕んずれば六十四斤となり、眼は蒼牟の如く、鬚髯は金線に似てゐたといふことである。

二十四日

昭憲皇太后御大葬

(大正三年 神去りまし)

昭憲皇太后に於かせられては越えて二十四日、代々木の齋場殿に於て悲しきおほみはふりの御儀を擧げさせ給ひ、翌二十五日、桃山の塋域深く神領り給うたのである。詳しくは四月十一日の項を参照されたい。

二十五日

湊川の合戦

楠正成討死す

(延元元年 櫻井の驛の露茂)

であつた。越えて二十五日、遂に湊川の合戦の幕は切つて落され、大將楠正成初め一族十三人枕を並べて護國の鬼と化したのは今から凡そ六百年以前の今日の今日のことであつた。延元元年正月、足利尊氏は京都の一戦に敗れて九州に走つたが、同三月菊池武敏を多々良濱に破つてからといふもの威勢遽かに西國を覆ひ、四月大兵を擁し、諸將を率ゐて太宰府を發し、五月一日安藝國嚴島に着し更に兵船を整へて大舉して東上して来た。備前國鞆ノ津より直義をして陸路東上せしめ、自ら兵船を率ゐて兵庫に向つた。この時後醍醐天皇は楠

正成、新田義貞をしてこれを防がしめ給うた。この時脇屋義助は五千餘騎を以つて經島に、大館氏明は三千餘騎を以つて燈籠堂に、楠正成は他の勢を交へずして七百餘騎、湊川の西に控へて陸路の兵を迎へ、義貞は總軍を統べ、諸將の命を司つてその勢二萬五千騎。和田御崎に帷幄を打つて控へてゐた。この時義貞と正成の陣遠く距て、兵庫の船着にはこれを支へるものがなかつたので賊軍六十餘艘はこの隙を目覓けて上陸してしまつた。この時正成は湊川に陣して直義の軍に當り、弟正季と共に奮戦大いに努めたが直義の勢五十萬餘騎正成の七百餘騎に懸け磨けられて須磨の上野の方に退いた。この時大將直義は乗馬を射られて自由を失ひ、將に討れようとした時藥師堂某といふものが馬前に立塞つて身代となつて討死したので直義は纔かに遁れることが出来た。尊氏は陸路の軍の急を見て、吉良、石堂、高、上杉等の六千餘騎を送つて授けしめた。正成兄弟亦これに當り、三時間程の間に十六回までも戦つたので次第に兵を失つて僅かに七十騎を殘すのみとなつた。正成猶も屈せず、寡兵を提げて大敵に當り、身に數創を蒙つて今は既に戦ふ力も失せたので、湊川の北のところに人家に入つて鎧を脱して身體を檢べて見ると切創凡そ十一ヶ所、從者七十二人も亦數創を受けざるはなかつた。こゝに於て正成は弟正季を顧みて「われ等今日死なば魂を何處に託さんとするか。」といへば、正季莞爾として微笑んで曰く「願



くば七度人間と生れて賊を滅さん。」と答へた。正成深く打肯きつゝ「さらば。」といつて遂に兄弟刺違へて華々しき最期を遂げたのである。この時正成に従ふ一族郎黨六十餘人、悉く自盡して護國の鬼と化した。時に五月二十五日（一説には二十九日とあり）のことであつた。天皇に於かせられては正成の戦死を御追悼あらせらるゝこと深く、正三位近衛中將を贈り給うたが、義貞も亦尊氏と戦つて兵庫の濱に破れ、遂に京都に逃げ還つたが、天皇には叡山に難を遁れ給ひ、次いで吉野に幸あらせ給うた。六月尊氏は京都に入り、光明天皇を擁立して兵馬の權を掌握し、遂に室町幕府の基礎を固めてしまつたのである。昭和十年の今日今日は全国的に楠公六百年祭が盛大に舉行された。

## 二十六日

### 頼政扇の芝の最期（治承四年）

（紀一八四〇年）

源頼政は頼

當り、性英敏にして武略あり、保元の亂には源義朝、平清盛等と共に後白河法皇の召に應じて崇徳上皇の軍を破つて功を樹てたが頼政一人さしたる恩賞にも與らなかつたので心中不平の念の絶ゆることなく、漸く平家に對して快からざる感情を懷くに至つた。治承三年右大臣平重盛が薨するや、弟宗盛等の横暴甚しく、就中頼政の子の仲綱が大いに侮辱されたの

で、頼政はこゝに平家に對して兵を擧げるの決心を固めるに至つた。

これより先以仁王に於かせられては皇儲に洩れ給ひ深く御不平を懷かせ給ふことを聞き知つてゐた頼政は宮を説き奉つて諸國に敬在する源氏の宗徒に對して院宣を賜ひ、相呼應して平家を追討しようといふ計畫を樹てたのであつたが事に先立つて忽ち謀が洩れてしまつた。時に治承四年五月十五日のことであつた。この時頼政は近衛河原の自分の邸に火を放ち、嫡子仲綱、二男兼綱、藏人仲家初め一族郎黨三百餘人を引具して宮を奉じて三井寺に入り、北叡、南都に牒状を送つて兵を集めようとしたけれども叡山が應じなかつたので三井寺の衆徒を合せて總勢千五百を以つて宇治に走り、こゝに平家の大軍を引受けて最後の戦を試みようとした。寄手の大將左兵衛督知盛、頭中將重衡、藤原守忠度、總勢二萬八千と註せられた。頼政はこゝを先途と戦つたが衆寡遂に敵せず、一族郎黨悉く討死し、頼政も亦深傷を負うて今は既に戦ふ力も盡きたので、よろめく足を引締めてつゝやうやく平等院の扇の芝まで辿りつき、

埋木の花咲くこともなかりしを

といふ辭世の和歌一首を残して、七十五年を最後に靈腹掻き切つて衰れた最期を遂げてしまつた。この時宮にも流矢に

當り給うて光明山の麓に御痛ましき御最期を遂げられたのであつた。

## 二十七日

### 海軍記念日（明治三十八年）

（皇紀二五六五年）

日本海大海戦の記念日である。大提督東郷元帥逝いて今やなし。しかし今やわが國は内外共一大非常時に際會してゐるのである。少くとも明治三十七八年戦役當時に比しても劣らぬ非常時である。日本國民たる者、殊に今日は上下三千年の歴史を回想して日本精神の發揚に努力しなければならぬ時である。この時に當つて日本海の大戦の時、東郷元帥によつて旗艦三笠の楯頭高く掲げられた『皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ。』の信誼こそ、最も意味深く考へられなければならないであらう。

### 日本海大海戦（明治三十八年）

（皇紀二五六五年）

日露の國交斷絶するや、旅順港に本據を構へてゐた敵の第一太平洋艦隊は東郷大將の率ゐるわが艦隊に壓迫され、前後數回に亘つて大打撃を蒙ると共に、一方浦鹽にある敵艦隊の技隊も孤立無援の状態に陥つたので、露國政府は直ちにロジエストウエンスキー中將を擧げて提督となし、バルチック艦隊を以つて太平洋第二艦隊を編成して遠

く日本海に廻航せしめたのであつた。この時わが聯合艦隊は日本海上にあつて敵影の現るゝを今や遅しと待つてゐた。時に明治三十八年五月二十七日、遠來の敵艦は遂にわが視野の中に入つて來た。こゝに前古未曾有の日本海大海戦の幕は切つて落されたのだが、この前後の情況は『天祐と神助に因り我聯合艦隊は』といふ冒頭の一句に始る例の有名なる公報に躍如として躍つてゐるので、繁雜なる説明に代ゆるに右の公報の一文を以つてすることとする。

天祐と神助に因り我聯合艦隊は五月二十七八兩日敵の第二第三艦隊と日本海に戦うて遂に殆んど之を撃滅することを得たり、初めは敵艦隊の南洋に出現するや上命に基き當隊は豫め之れを近海に迎撃するの計畫を定め、朝鮮海峡に全力を集中して除々敵の北上を待ちしが敵は一時安南海岸に寄泊したる後漸次北上行し來りしを以つて其我近海に到達する數日前より豫定の如く數隻の哨艦を南方警戒線上に配備し各戦列部隊は一切の戦備を整へ直に出動し得る姿を持して各其根據地に泊在せり。果然廿七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は敵艦は二〇三地點に見ゆ、敵は東水道に向ふもの如しと警報し、全軍勇躍出て發動し各部隊は豫定の部署に準じて敵對行動を開始せり。午前七時、内報警戒線の左翼哨艦たりし和泉亦敵艦隊を



發見して敵既に宇久島の北西二十五海里の地點に達し、北東に航進するを報じ巡洋艦(片岡中將指揮)東郷(正治)戦隊續いて出羽戦隊も午前十時、十一時の交登岐、對島の間にて敵と接觸し、爾後沖の島附近に至るまで此等の諸隊は時々敵の砲撃を受けしも終始能く之と接觸を保持し詳に時々刻々の敵情を電報せしかば此日海上濠氣深く展望五海里以外に及ばざりしも數十海里を隔つる敵影恰も眼界に映するが如く、未だ敵を見ざる前既に敵の戦列部隊は其第二、第三艦隊の全力にして特務艦船約七隻を伴ふこと、敵の陣形は二列縦陣にして其の主力は右翼列の先頭に占位し、特務艦船は後尾に續行せること、又敵の速力は約十二節にして尙北東に航進せること等を知り東郷は之に依り我主力を以て午後二時頃沖の島附近に強敵を迎へ先其左翼は列先頭より撃破せんとする心算を立るを得たり。

主力隊(主戦艦隊「東郷大將直率」裝甲巡洋艦隊「上村中將直率」)瓜生戦隊及び各驅逐隊は正午頃既に沖の島北方約十海里に達し、敵の左側に出んが爲め更に西方に針路を執りしが午後一時三十分頃出羽戦隊巡洋艦隊及東郷(正路)戦隊等も敵と接觸を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し同時四十五分に至り正に我左舷南方數海里に初て敵影を發見せり。

共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縱陣を形成して我と並航の姿勢を執り其左翼列の先頭たりしロシアピアの如きは須臾にして撃破せられ大火災を起して艦列より脱せり。

此の時に當り裝甲巡洋艦も既に悉く主力艦隊の後方に列し我全隊の掩撃砲火は射距離の短縮と共に益々顯著なる効果を呈し敵の旗艦クニヤージスワロフ、二番艦皇帝アレキサンドル三世も大火災に罹り艦列を離れ敵の陣形愈々亂れ後續の諸艦も亦火災に罹れるもの多く其の艦煙西に響きて忽ち海上一面を蔽ひ濠氣と共に全く艦影を包み主力艦隊の如きは爲に一時射撃を中止せるの狀況なり。又我軍に於ても各船多少の損害を被り、淺間の如きは後部水線近く三弾を受けて舵機を損じ且浸水甚しく一時止むを得ず列外に落伍せしが應援修理して再び艦列に入れり、之れ午後二時四十五分前後に於ける彼我主力の戦況にして勝敗は既に此間に決せり、我主力艦隊は如此敵を南方に壓迫し煙霧の中敵影を發見する毎に緩徐に之を砲撃しつゝ午前三時頃には既に敵の前路に出で約南東に向針しありしが敵は俄に北方に向首し我後尾を回りに北走せんとするが如きを以て主力艦隊は急に左十六點に一齊回頭し日進を嚮導として北西に向ひ甲裝巡洋艦隊も其頭跡を過ぎたる後正面を變じて之に續き再び敵を南方

敵は豫期の如く其右翼列の先頭にボロチノ型戦艦四隻の主力戦隊を置きロシアピア、シツイベリキー、ナワン・ナヒモフより成る一隊左翼列の先頭に占位しニコライ一世外海防三隻より成る一隊之に次ぎゼムチユーク、イズムルードの二艦は兩列の間に介在して前方を警戒せるものゝ如く、尙其後方濠氣の中にオレグ、アウロラ以下二三等巡洋艦の一隊ドミトリドスコイ、ウラジミルモーマフ其他特務艦船等數渾に有り連綿續航するを仄に認むるを得たり。

是に於て全軍に戦闘開始を令し同時五十五分視界内に在る我が全艦隊に對し『皇國興廢此の一戦に在り各員一層奮勵努力せよ』の信號を掲揚せり、而して主戦艦隊は少時南西に向首し敵と反航通過すると見しが午後二時五分急に東に折れ其の正面を變じて斜に敵の先頭を壓迫し、裝甲巡洋艦隊も續航し其後に連り出羽艦隊、瓜生艦隊、巡洋艦隊及東郷(正路)艦隊は豫定戰策に準じ孰も南下して敵の後尾を衝けり、之を當日戦闘開始の際に於ける彼我の對勢とす、主力隊の戦況……敵の先頭部隊は主戦艦隊の壓迫を受け稍や其右舷に轉舵し午後二時八分彼より砲火を開始せしが、我は暫く之に耐へて射距離六千米に及びて猛烈に敵の兩先頭艦に砲火を集中せり、敵は之が爲め益々東南に撃壓せらるゝものゝ如く、其左右兩列

に撃壓し之を猛射し午後三時七分敵艦ゼムチユークは裝甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも遂に我砲火に因り多大の損害を被り既に戦闘力を失ひたるオスラビヤも同時十分沈没し孤立せるクニヤージスワロフは益々大破して其一橋二煙突を失ひ全艦煙焔に包まれて操縦する能はず、混亂せる兩餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ、又其針路を東方に採れり。

此間壯烈の事蹟として特記すべきは千早及廣瀬(順太郎)驅逐隊が午後三時四十分頃鈴木(貫太郎)驅逐隊が午後四時四十五分頃敵の廢艦スワロフに對し勇敢なる水雷攻撃を決行したることにて前者の奏効は確實ならざりしも後者より發せし一水雷は敵艦の左舷部に命中し須臾にして艦體十度許り傾斜するを見たり、此兩回の襲撃中廣瀬驅逐隊の不知火及び鈴木驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射せられ共に一弾をうけて一時危殆に陥りしも幸にして遂に無事なることを得たり。

午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せしにや漸次南方に向つて遁走する者の如く、依て我主力艦隊は裝甲巡洋艦を先頭とし之を追撃せしが少時にして遂に敵影を煙霧の中に失し南下すること約八海里、行く行く我右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下特務艦船を緩射し午後五時三十分主力艦隊は再び針路を北方に



執りて敵の主力を索め装甲巡洋艦隊は南西方に折れて敵の巡洋艦に迫り、爾後日没に至るまで此兩艦隊は分離して各別の行動を執り又相見ざる能はざりし。

主戦艦隊は午後五時四十分頃其左方近距離に在りし敵の特務艦ウラルに一撃を加へて直ちに之を撃破し尙ほ北方に索敵し進航せる際左舷首に當り敵主力の殘艦約六隻が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見し直に近づきて之と並航戦を開始し、漸時敵の前方に出で其先頭を撃破せしかば敵は初め北東の進路を採りしも次第に西方に屈折し遂には北西に向針するに至れり、此並航戦は午後六時より日没迄連続し敵は大破の餘其砲力減少せるに反し我沈着なる射撃は益す其威力を逞うしアレキサンドル三世と見えたる敵艦は早く列外に出で、後方に落伍し先頭に占位せしボロチノ型戦艦は午後六時四十分頃より大炎を起し七時二十二分に至り俄然爆煙に包れて瞬時に沈没せり、蓋火災の彈藥庫に及びしならんか。

又當時南方に在る敵の巡洋艦を北方に追撃しつゝありし装甲巡洋艦の諸艦は已に傾斜して進退の自由ならざるボロチノ型戦艦一隻が午後七時七分敵艦ナヒモフの側に來り遂に顛覆沈没せるを目撃せり、後日捕虜の言に依り之れ即ちアレキサンドル三世にして主力艦隊の見たるものはボロチノなりしを知るを得たり、此時夕陽已に盡き我

が驅逐水雷艇隊は東南北の三面より漸次に敵に迫り已に襲撃準備の姿勢を執れるを以つて主力艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日没(午後七時二十分)と共に東方に變針し同時に本職は龍田をして全軍を北航して明朝對馬島に集合すべしと傳令せしめ茲に當日の實戦を終了せり。(以下略)

二十八日

曾我兄弟 父の讐を討つ

(建久四年 紀一八五三年)

河津三郎伊東祐泰がこれも一族の中工藤祐經にふ

とした怨を買つて赤澤山の狩倉に討れたのは兄の一萬が五歳弟の宮王が三歳の年のことだつた。その後祐泰の妻は曾我祐信に再婚したがこの時一萬も宮王も祐經に養はれることとなつた。程なく祖父の伊東祐親は頼朝に滅され、兄弟に取つては父の讐たる祐經は頼朝に仕へて勢力中々熾んであつたが、祐泰の孤兒の一萬と宮王とが成人して父の讐を報いんことを怖れて、曾つて頼朝が伊豆に潜んでゐた頃兄弟の祖父の祐親の娘に孕した事を祐親が怒つて淵に沈めて殺し、頼朝をも亦殺さうと圖つたことがあることを口實にして、一萬と宮王とを鎌倉由井ヶ濱に於て殺さうとしたが、和田義盛、畠山重忠、梶原景季等のため幸にも救ひ出されることが出来た。この時

兄の一萬は十三歳、繼父の姓の曾我姓を襲いで曾我十郎祐成と改めた。弟の宮王は十一歳、箱根権現の別當行實の許に送られて僧となることとなつたが宮王はどうしても僧となることを承知しなかつた。しかし、鎌倉の詮議も厳しいので、遂に行實の許に入つて髪を下したけれども一日として父の讐を忘れることなく、夜に入つて密かに武術の道に勵んでゐた。

宮王が箱根に來て早や六年、丁度宮王が十七歳の時のことであつた。頼朝箱根権現參詣の折、曾我祐經もその伴をしてやつて來たので好機ござんなれとたゞ一思ひに刺さうとしたけれど遂にその隙を得なかつた。この年行實は宮王に警戒させようとしたところ、宮王は僧となることを嫌つて山を降つて曾我の母の許へ逃げ歸つて來たが、この時母は怒つて家に入れなかつた。そこで宮王は兄の祐成と相携へて父の生前の友なる北條時政の許に至り、自分達の心の中の苦しみを訴へたので、時政も大いに同情して曾我五郎時致といふ名前を與へて將來を勵した。これより兄弟は大磯、黄瀬川さては三浦等に出て屢々祐經を覘つたが遂にその機會を掴むことが出来なかつた。しかし十八年の積る苦辛は酬はれて兄弟の本望を達する日は遂に來た。時は建久四年夏五月、頼朝は諸將を富士の麓に集めて一大狩倉を催すこととなつたのである。この時曾我祐經も勿論頼朝に扈從してゆくに相違ない。そこで兄弟は喜び勇んで曾我の里の母の許に立ち歸り、よそながら最後

の暇乞を告げようとすると母も共に打喜んで弟時致の勘當を許し、兄弟に千鳥の狩衣を贈つてその行を勵した。

かくて傳手を求めて狩場へ潜び込んだ兄弟は日夜祐經を覗つたけれども遂に機會に恵まれず、早や狩倉も終りに近づかうとしたので兄弟の焦躁は只事でなかつた。ある夜の事、幸に大雷雨があつて外は眞の間であつた。兄弟は秘に語り合つていふには「今宵を外して本望を達する日はあるまい。天地に誓つて今宵こそ積る怨を晴さでおくべきか。」といつて諸所の木戸々々を夜警に化けて通り過ぎ難なく祐經の寢所へ來て見ると豈圖らんや部屋の主は藻抜の葎であつたので、兄弟は天を仰いで歎いてゐると、折よくこゝを通りかゝつたのが畠山重忠の家來本田某といふものであつたが、知らぬ振りして兄弟を祐經の寢所に導いてやつた。この夜祐經は吉備の神官の和藤内と共に遊女を招いて酒宴を開き、そのまゝそこに酔ひ伏してしまつたのであつた。兄弟は遂に父の讐工藤祐經に廻り會つたので、天にも昇る如き心地したのであつたけれど、酒に食べ酔うてゐる人を斬るは死人を斬るにも等しいといつて先づ十郎が枕を蹴ると祐經がばと許りに起上るを、河津祐泰が遺兒、祐成、時致父の仇を報ずるため推参したり、いざ尋常に勝負いたせ。」と叫ぶや否や左右から一時に斬下してただ一討に討取つてしまつた。この時和藤内も漸く目を覺し、大聲に叫びながら逃げて行くのを後ろからたゞ一刀の下に斬



伏せてしまった。この時狩場の中は大騒動となり、陣屋々々から物の具取つて兄弟を召捕らうとして飛び出して来たので、兄弟も止むを得ず暫くの間は火花を散らして斬結んだが、十郎祐成は遂に仁田四郎に組伏せられ、弟時致は頼朝の寢所の近くまで斬込んだが遂に捕へられて斬られてしまった。この時兄の祐成は二十二歳、弟の時致は二十歳であつた。

二十九日

源三位頼政の鶴退治

(仁平二年 紀一八二年)

仁平の昔

天皇に於かせられては、不思議な御病に罹らせ給うた。これより先、天皇には未だ御十五歳の平治二年の春頃より、毎夜の如く物に驚えさせ給うたので、有司の人達は南都や北嶺の高僧に禱せられたが一向に効験が現れなかつた。それが近頃一層はげしく互らせられ、御惱は未の刻より寅の刻に及び、最後には絶え入る許り御苦しみ遊されるのであつた。その頃洛中の人々誰いふとなく、帝の御惱みの時刻に至ると東三條の森の方より黒雲一叢飛び来ると見るや、御殿の空一帯を覆うてしまふといふことであつた。すはこそ、確に物の怪の仕業に相違ないと宮中の人々は色めき立つたが、進んで退治しようといふものもなかつた。この時當時源氏の武士の中で殊に弓矢の響高い石川左衛門尉義廉が召されたけれども義廉は何

故か御辭退申してお受け致さなかつた。そこでいろ／＼詮議の末兵庫頭源頼政がその選に入ることゝなつた。頼政は御召を受けるに家来の隼太と共に早速宮中に伺候し、決心の程を眉宇に瀝してこの大役をお引受け申上げたのである。去る程に漸く日も暮れて未の刻より寅の刻に至れば、果せる哉三條の彼方より一叢の黒雲起ると見るや、忽ちにして御殿の屋根を覆うてしまつた。頼政きつと膝を据ゑてこれなる黒雲を睨まへると、何者か怪しき姿のものが黒雲の中にうごめいてゐるので、頼政暫く眼をつむつて、「南無八幡大菩薩、頼政が武運守らせ給へ。」と念じ終るや弓取直して満月の如く引絞り、へうと放てば確に手應があつた。手應ありしぞ、油断すなと將に二の矢を番へようとする時堂と地響打つて一個の怪物が庭上に落ちて来たので、家来の隼太がすかさず躍りかゝつてとどめを刺した。この時殿中から手に／＼炬火かゝげた侍達が走り出て調べて見ると、こはいかに、世にも不思議な怪物であつた。先づその形は小牛程もあらうか、頭は猿、手足は虎、尾は蛇で、見るからに恐しき怪物であつた。この時恐しき一夜はほの／＼と明け渡り、爽かな初夏の朝日が禁庭の若葉を輝かせた。この時階の上に立つた徳大寺左大臣實頼卿は頼政の手柄を思はず讃へて、  
ほと／＼すなをば雲井にあぐるかな  
と上の句を口詠むと、頼政畏つて、

弓はり月のいるにまかせて

と見事に下の句をつけた。上皇に於かせられても天皇に於かせられても御感斜ならず、實頼公をして頼政に師子王の劍を賜り、昇殿を許され、怪物には鶴といふ名を付けてうづつ船に乗せて遠く海の彼方に流したといふことである。

三十日

北清事變起る

(明治三十三年 皇紀二五六〇年)

日清戦役後に至る

果せる哉諸列強は露骨な野心の手を延し、英國は威海衛を、獨逸は膠州灣を、佛國は廣州灣を、露國は遼東一帯から滿洲に於ける地域を占有し、益々その觸手を延ばさうと日もこれ足らざる有様だつたので、清國の心ある人達は漸く排外思想に目覺めるやうになり、遂に義和團といふ一派が起つて猛烈な排外運動を開始した。これが即ち北清事變である。この時列國は協同して出兵し、各自國の居留民の保護に當ることゝなつたので、わが國に於ても福島陸軍中將、山口陸軍中將等に第五師團を率ゐて討伐に加らしめたが、彼の地に到るや到處に列強環視の下に於て勇敢なる行動を執り、列國の絶讃を受けるところとなつたのである。

三十一日

梶原平左景時

(正治二年 紀一八六〇年)

梶原景時は五郎景

るまで二枚舌を以つて誣れた人で、甚だ面白くない人物であつた。どの書物を見ても『材武狡猾隱匿口癖あり』など、好しからざる文字を以つて傳へられてゐる。さて治承四年に源頼朝が兵を起すや、景時は大庭景親に従つて石橋山に攻めたがこの時頼朝は破れて土肥の山中に姿を隠した。景時はその在所を知つてゐながら景親に知らないといつた。これがそもそも景時の『隱匿口癖』の歴史に現れた始めであるが頼朝にとつては再生の恩人であつた。頼朝がそろ／＼關東に名を賣り出すや景時は早速君臣の禮を取つて降つたが頼朝も亦舊恩があることゝて景時を厚く用ひた。壽永三年には頼朝に従つて一ノ谷に平家を討ち諸將と共に生田森に奮戦したが所謂梶原の二度駈とはこの時のことである。

文治元年義經に従つて平家を鎮西に討つことゝなつたが、この時彼は一生に一度の失敗を演じて全軍の物笑ひを招いてしまつた。といふのは、舟を出すなら進退兩つながらに用ふることの出来る逆櫓を設けたら宜しいと、よせばよいのに手振り身振りまでして自家の側見を誇つたのでさてこそよい物笑ひの種を蒔いてしまつたのであつた。しかしこの時ばかりはさすがの梶原も餘程癪に觸つたと見えて義經の旗下を脱し(一説には義經に追はれたとある)頼朝の軍に従つてともか





淳和天皇 大野原西嶺上陵

# 六月

くも平家追討の大任を終へて鎌倉に歸るや、三月功によつて近畿總捕使となつたがこの頃から漸く頼朝に向つて義経を讒言し始めた。頼朝は遂に梶原の言を容れて義経を捕へさせようとしたが、梶原は身の暗さに恥ぢたのか遂に辭退してしまつた。これからの梶原の半生は讒言の反覆である。面白いから次に表にして見よう。

文治三年九月畠山重忠を讒す、成らず

正治二年頼朝薨じ頼家立つや結城氏を讒す、成らず

正治二年正月、終に讒言が祟つて鎌倉を脱して京都に逃げようとした。その途中頼家が比企能員等をして追撃せしめた。

しかし遂に梶原最期の日が來た。この時梶原等は駿河の清見潟を過ぎ、一度は蘆原、飯田の諸氏と戦つてこれを破つて駿河の狐ヶ崎に至つたがこの時この地の土豪吉香小次郎友兼のために遮られ、遂に庵原の山中に自殺して果てしまつたのである。時に正治二年五月のことであつた。彼の生涯も亦數奇を極めたものであつた。(一説には正月とも云ふ)



# 六月

ミナヅキ(水無月)又はトコナツ(常夏)異名に林鐘、小暑、大暑、季夏、瓜期、且月、遷月、朔月、陽水、風待月、鳴神月等がある。  
 外國の Junias は Juno (ジュピターの娘) から来たといはれてゐる。古いラテン語では六月は第四番目の月に當り、三十日とされてゐたが暦のジュリアン改正によつて二十八日となり、その後シーザーが一日を附加して三十日にしたものださうである。

## 六月の御陵式年祭 (三三一頁)

顯宗天皇、聖武天皇、三條天皇、淳和天皇  
 後三條天皇、醍醐天皇、仲恭天皇

## 六月々訓 恭儉己を持し (三三三頁)

①藤原鎌足 ④豊臣秀吉、松下嘉兵衛の僕となる  
 ②義家、匡房、學ぶ ⑤貝原益軒の撰  
 ③北條泰時御堂に上らず ⑥謙謙の人 杉浦重剛

## 六月の衛生と運動 (三三六頁)

疫 痢 赤痢 六月の運動

## 六月の日訓及び行事と歴史

日	日訓 (明治天皇製)	宮中行事	學校行事	今日の歴史	民間行事	頁
一	おのが身は かへりみずして ともすれば 人のうへのみ いふ世なりけり		更衣	林大頭卒す 享保十七年(八十九才) 文久三年長藩米國軍艦ツ イヨミンク號を下關に撃 つ 明治十九年東京郵便局を 開く	田植 丹生川上神社祭 貴船神社祭 東照宮祭	三三六 三三九 三四〇 三四〇



日 二	日 三	日 四	日 五
世の中の 人の司と なる人の 身のおこなひよ たゞしからなむ	小山田の 畔のほそ道 細けれど ゆづりあひてぞ しづは通へる	民草の うへやすかれと いのる世に 思はぬことの おこりけるかな	曉の ねざめしづかに 思ふかな わがまつりごと いかゞあらんと
顯宗天皇傍丘 磐丘南陵 即位三年崩御	神宮月次祭幣 帛發遣	鶴商豫防デ	
本能寺の溝の深さ幾尺 天正十年 永祿五年六角義賢、三好 長慶と和す 明治四十五年東京國技館 成る	ペルリ浦賀に來る 嘉永六年 慶應二年征長軍先鋒大阪 を發す 大正九年沿海州派遣軍尼 港を占領す	傳教大師入寂す 弘仁十三年(五十六才) 明治十二年東京招魂社を 靖國神社と改め別格官幣 社とす 長崎、函館、神奈川を 開港す 安政六年 昭和九年元帥東郷平八郎 の國葬あり	本多正信卒す 元和二年(七十九才) 享保元年繪師尾形光琳歿 す、年五十六 文久三年高杉晋作奇兵隊 を組織す
三三	三三	三四	三五

日 九	日 八	日 七	日 六
いく薬 もとめんよりも 常に身の やしなひ草を つめよとぞおもふ	きずなきは すくなかりけり 世の中に もてはやさるゝ 玉といへども	世に廣く しらるゝまゝに 人みなの つゝしむべきは おのが身にして	駒にのる わざはいくばく 進むとも つまづくことを かへりみよかし
		聖武天皇佐保 山南陵 天平勝寶八年崩御	
小早川隆景卒す 慶長二年(六十五才) 安政六年六月中、生糸を 始めて外人に賣る 明治四十三年臺灣製糖會 社設立す	鴨長明歿す 建保四年(六十三才) 安政二年和蘭幕府に觀光 丸を寄贈す 大正十三年東京青山賣場 にて無名志士の國民葬を行ふ	光明皇后薨す 天平寶字四年(六十才) 慶應三年六月中、安政二 分判、天保二朱金の通用 を禁す 大正十三年印度詩聖タゴ ール來朝入京す	本多正信卒す 元和二年(七十九才) 享保元年繪師尾形光琳歿 す、年五十六 文久三年高杉晋作奇兵隊 を組織す
三六	三七	三八	三九



日 十	日 一 十	日 二 十	日 三 十
<p>ちよろづの 民の心を をさむるも</p> <p>いつくしみこそ 基なりけれ</p>	<p>いにしへの ふみ見るたびに 思ふかな</p> <p>おのがをさむる 國はいかにと</p>	<p>世の中を おもふたびに 思ふかな</p> <p>わがあやまちの ありやいかにと</p>	<p>よむふみの うへに涙を おとしけり</p> <p>昔の御代の あとをしのびて</p>
	三條天皇北山 陵 寛仁元年崩御		
時の記念日			
<p>日佛協約成る 明治四十年</p> <p>文龜元年閏六月大内義興 追討の勅を下す 明治六年府縣に令し目安 箱を廢す</p>	<p>僧觀賢入寂す 延長三年</p> <p>永正十年六月申伊萬里燒 を始む</p> <p>明治四十四年仁川築港起 工式を行ふ</p>	<p>蘇我父子誅に伏す 皇極帝四年</p> <p>慶長十五年豊臣秀頼父志 を繼ぎ方廣寺大佛の工事 を起す</p> <p>明治四十四年南朝を吉野 朝と改む</p>	<p>山崎の合戦 天正十年</p> <p>安政四年露使北蝦夷に上 陸北邊境界の協定を求む</p> <p>元和元年閏六月幕府一國 一城の制を布く</p>
時の記念日	梅雨		
三三九	三三〇		三二五

日 十	日 一 十	日 二 十	日 三 十
<p>やすからむ 世をこそいのれ 天つ神</p> <p>くにつ社に 幣をたむけて</p>	<p>はるかにも あふがぬ日なし わが國の しづめとたてる</p> <p>伊勢のかみ垣</p>	<p>わが心 およばぬ國の はてまでも</p> <p>よるひる神は 守りますらむ</p>	<p>かみかぜの 伊勢の内外の みやばしら</p> <p>動かぬ國の しづめにぞたつ</p>
	淳和天皇大原 野西嶺上陵 承和七年崩御		神宮月次祭奉幣
大化の改新 大化元年	<p>河村瑞軒歿す 元祿十三年(八十三才)</p> <p>近藤守重歿す 文政十二年(五十才)</p> <p>永正十七年閏六月幕府金 一萬匹を獻じ即位の資と なす</p>	<p>常陸丸の殉難 明治三十七年</p> <p>安政六年幕府英國と交易 本條約を定む</p> <p>寶永二年國學者北村季吟 歿す、年八十二才</p>	<p>文久三年桂小五郎等翠紅 館に會し車駕大和行幸を 奏請せんとす</p> <p>萬延元年日葡通商條約を 締結す</p>
		<p>札幌神社祭 八坂神社祭 日枝神社祭</p>	<p>嚴島神社祭</p>
三三三	三二七	三二六	三二九



日 一 十 二	日 十 二	日 九 十	日 八 十
<p>ちはやぶる 神のまもり よりてこそ わが葦原の くにはやすけれ</p>	<p>若むせる いはねの松の 萬代も うごきなき世は 神ぞもるらむ</p>	<p>ちはやぶる 神の御代より うけつげる 國をおろそかに 守るべしやは</p>	<p>天てらす 神のみいつを 仰ぐかな ひらけゆく世に あふにつけても</p>
<p>後三條天皇圓 宗寺陵 延久五年崩御</p>	<p>綾靖天皇桃花 鳥田丘上陵 即位三十三年崩御</p>		
<p>林 子 平 歿 す 寛政五年(五十六才) 天 平 勝 寶 八 年 正 倉 院 を 創 立 す 慶 應 二 年 幕 府 白 耳 義 と 通 商 假 條 約 を 結 ぶ</p>	<p>德 川 吉 宗 薨 す 寶 曆 元 年(六十九才) 初 め て 地 方 長 官 會 議 を 開 く 明 治 八 年 寛 文 六 年 江 戸 に 辻 番 所 を 置 く</p>	<p>藤原道長右大臣となる 長徳元年 天正十二年聖武帝國毎に 法華經十部を寫し七重の 塔を造らしむ 安政五年幕府ハリスと日 米通商條約に調印す</p>	<p>尼將軍北條政子 嘉祿元年歿(六十九才) 昭和三年東京國際美術協 會創立す 大正三年東京教育博物館 を開設す</p>
<p>熱田神宮祭</p>			
三六	三五	三四	三三

日 五 十 二	日 四 十 二	日 三 十 二	日 二 十 二
<p>すめ神に はつほさゝげて 國民と 共に年ある 秋を祝はむ</p>	<p>神路山 みねのまさかき この秋は 手づからをりて 捧げまつらむ</p>	<p>千早ぶる 神のひらきし 敷島の 道は榮えむ 萬代までに</p>	<p>ちはやぶる 神路の山に てる月の ひかりぞ國の かゞみなりける</p>
<p>皇太后陛下御 降誕 仲恭天皇九條 文曆元年崩御</p>			
<p>皇太后陛下御降誕 明治十七年</p>	<p>陶工加藤民吉 文化四年 大正三年追濱飛行場で山 田大尉昇空八千二百五十 尺の世界記録を作る</p>	<p>井上お通逝く 元文二年(三十九才) 永祿十二年山中幸盛尼子 勝久擧兵す</p>	<p>綾 靖 天 皇 享保七年幕府六論衍義大 意を手習指南の教材とす 明治四十年東北帝大設立 す</p>
<p>明治十九年日本藥局法制 定す 明治二十九年六月中東洋 汽船株式會社創立す</p>			
三六	三五	三四	三三



日九十二	日八十二	日七十二	日六十二
<p>梓弓 やしまの外も 波風の しづかなる世を わがいのるかな</p>	<p>豊年の 新嘗祭 ことなくて つかふる今日ぞ うれしかりける</p>	<p>八束穂の たりほのはつほ 新嘗に さ上げまつると 刈りはじむらむ</p>	<p>神垣に 使を立て 豊年の 秋の初穂を 捧げつるかな</p>
<p>島津家久の驍勇 天正十五年 元治元年天皇勅を下し長 藩士の入京を禁ず 明治二年九段招魂社建つ</p>	<p>姉川の合戦 元龜元年 大正八年巴里ヴェルサイ ユ宮殿にて聯合國對獨講 和條約に調印す</p>	<p>高山彦九郎自叙す 寛政五年(四十四才) 文明十五年足利義政銀閣 寺に移る 昭和六年中村大尉滿洲に て虐殺さる</p>	<p>其角雨を祈る 元祿六年 明治三十三年帝國博物館 を帝室博物館と改稱す</p>

日十三			
<p>我國に しげりあひけり 外國の 草木の苗も おほしたつれば</p>			
<p>参勤交代の制を定む 寛永十二年 大正二年所深飛行場にて 第一回飛行將校卒業式を 舉行す</p>			



## 六月の御陵式年祭

### 三 日 (皇紀一四五年即位)

顯宗天皇(二十三代)傍丘磐坏丘南陵(奈良縣北葛城郡下田村)即位三年四月二十五日陽曆にて六月三日八鈞宮に崩御、御歳三十八歳。仁賢天皇の六年十月(翌年)大和國葛下郡のこの陵に葬り奉る。扶桑略記によると、陵は高さ三丈、東西二丁、南北三丁とある。今の陵は元寺跡であつたのを、陵と推定されて高田驛の北にあつたものをこゝに御移轉申上げたものである。

### 七 日 (皇紀一三八四年即位)

聖武天皇(四十五代)佐保山南陵(奈良縣奈良市法連寺)天  
平勝寶八年五月三日陽曆にて六月七日寢殿に崩御、御歳五十六歳。四日不破鈴鹿愛發を固め、御装束司、山作司、造方相司、養役夫司を任じ、二十日佐保山陵に葬り奉つた。御葬儀は佛式によらせ給うたやうである。後久安五年、興福寺の僧がこの陵を掘り壊ち奉つたことがあり、又足利の末世松永氏がこの陵に城を築き、陵形が甚しく破損した。

又近年まで陵内に眉間寺といふ寺もあつた。  
今の御陵の形状や規模が昔のまゝでないことは勿論である。

### 十一 日 (皇紀一六七一年即位)

三條天皇(六十七代)北山陵(京都市衣笠大北山)寛仁元年五月九日陽曆にて六月十一日三條殿に崩御、御歳四十二歳。二日船岡の岩陰に大葬し奉り、御骨を北山の小寺の中に埋め奉る。今の御陵は小回墳である。

### 十五 日 (皇紀一四八三年即位)

淳和天皇(五十三代)大原野西嶺上陵(京都市乙訓郡大原野村)承和七年五月六日、皇子に勅して「斂葬は薄きに従ひ追福の事は儉約を須ひ、國忌荷前を停め山陵を起さざらしむ」と仰せられたので中納言藤原吉野が諫奏して嵯峨上皇の御裁決を待つことゝなつた。同月八日陽曆にて六月十五日天皇遂に淳和院に崩御せられた。御歳五十五歳。人を近江、伊勢、美濃に遣して三關(不破、愛發、鈴鹿)を固め



しめ、裝束司、山作司、養役夫司、作路司を任じ絹五百疋、細布百端、調布千端、商布二千反、錢五百貫、錢八十挺、銀二百口、白米百斛、黒米百斛を御葬料に充て、五畿内及び近江、丹波等の國吏一千五百人を發して御葬所に供した。十三日山城國乙訓郡物集村に火葬し、御骨は御遺詔によつて大原野西嶺上に散布し、國忌、荷前、陵戸等のごとは御遺詔に従つて御停止あらせられた。元陵上には圓く小石を積み圍んだ塚が東西に五つ並んであつて、さすがに風雨に任せることが出来なかつたのであらう。今はこの小石の上も土で覆ひ奉つてある。今陵の周圍二百四十二間三分ある。

二十日 (皇紀八〇〇年即位)

綏靖天皇(二代) 桃花鳥田丘上陵(奈良縣高市郡白樺村) 天皇即位三十三年五月十日陽曆にて六月二十日崩御、御歳八十四歳。翌年十月倭の桃花鳥田丘上陵に葬り奉る。陵は高さ十尺、徑九間餘の圓墳で周圍百九十九間である。

六月々訓 恭儉己を持し

藤原鎌足

僧越な行ひを敢てした。數多の人と生活を共にしてゐる社會にあつて、つゝしみを忘れ、ば人の信用を失ひ、やがては世の秩序を破る。蘇我氏の此の行爲は、蘇我氏倒伐の機をいやが上に熟させ、英明なる中大兄皇子と、膽力と智慧、それに恭儉の徳の所有者藤原鎌足の出現によつて、蘇我氏は全く亡ぼされてしまつた。

鎌足は蘇我氏倒伐以來二十年朝廷につかへて大功を立てたが彼の一生を貫くものは恭儉の美であつた。

かつて鎌足の病篤くなつた時のことである。天智天皇は藤原家に幸し親ら其の患を問はせ給うた。天皇は病ひの篤きを御心配遊ばされ、よく朝廷につかへたおほめの御言葉を賜つた上「若し須きことあらば便ち聞ゆべし」とおほせ給うた。鎌足深く天皇の御詔を喜び「臣既に不敏、當に復何をか云はん。但し其の葬事宜しく用輕易なるべし。生きては則ち軍國に務むることなく、死して則ち何ぞ敢て重ねて難まむ」と答へ奉つた。鎌足の忠誠大功は人皆知るところなるに少しも功にほこることなく、御寵遇の手厚きを恐懼し奉るは誠に美德といふべきである。

義家、匡房に學ぶ

勇にして智、智にして仁、あつばれ名将の譽高い義家は、其の功に誇ることなく、其の智に誇ることなく、一面誠に恭

二十一日 (皇紀一七二八年即位)

後三條天皇(七十一代) 圓宗寺陵(京都府葛野郡花園村) 延久五年五月七日陽曆で六月二十一日高房朝臣大炊門の第に崩す。御歳四十歳。十七日遺詔を奏することがあつて、この日神樂岡の南の原に火葬し奉り、御骨は中納言源資綱が頸に懸け奉つて禪林寺に安置し、六月二十二日圓宗寺で七七日の御法事を修せられた。御骨は御三方(後朱雀、御冷泉、後三條の三天皇)とも皆後には仁和寺山に納め奉つたので陵は何れも圓墳で一つの兆域にましまし、御息居は御三方別々にあるが御拜所の門は一つである。

二十五日 (皇紀一八八一年即位)

仲恭天皇(八十五代) 九條陵(京都府紀伊郡深草村) 文曆元年五月二十日陽曆にて六月二十五日崩御。御歳十七歳。同二十三日御葬送があつた。陵は今圓墳で周圍百四十五間ある。

つゝしみを忘れた蘇我蝦夷、入鹿父子は他に對等なる勢力者のないのを幸とし、あらんかぎりの無道、出来るかぎりの

敬の念の深い武士であつた。

義家が父賴義に従ひ前九年の役に列し大いに戦功を立て、京都に凱旋した時のことである。關白藤原賴道の家に向り大いに奥羽鎮定の戦況を談じて居ると、物陰で聞いて居た大江匡房が「義家は名将たる才あれども、惜しいかな兵法を知らず」と歎じた。義家の家來は無禮なることを云ふものかな、大いに匡房を怒しめたいと思ふ念から、斯様々と義家に告げた。

義家は二十代の血氣盛りの若者である。そして今や義家の武勳は衆人の認めるところである。家來は義家の爲に匡房の過言、無禮を怒つて居る。常人であつたら如何であらうか。然るに義家は「もつとももの事なり」と禮を致して其の門人となつたといふ有名な話がある。かく功に誇らず、智に誇らぬい恭敬なる義家の美點は、部下に對しては仁となつて現はれた。功ある者には涙を以て其の功を謝し、常に家來の者共を愛し尊敬したので義家の人望は益々高く、後年の源氏興隆の根源を作つた。

北條泰時御堂に上らず

北條泰時は義時の長子であるが、父の如く峻疎なところや權謀術數などを亂用するところはなかつた。聰明、無慾、寛厚、謙讓などの美點と共に溢る、ばかりの温情を有つてゐ



た。今左に泰時の謙讓であつた一例を東鏡によつて記してみよう。

かつて泰時將軍頼經の屋敷の宿直に出た時、近習の者が筵を差出した。すると泰時は將軍に對して無禮なりと云つて敷かなかつた。又頼朝の忌日に法華堂へ詣でた。石段の下に敷皮をひろげて頼朝の靈前に跪いて三拜した。通りかゝつた鶴ヶ岡別當尊範が頻りと堂に上ることを勧めたが、泰時は「自分は頼朝公の生前に堂に上つたことがなかつた。今公の歿後だからと云つて昔の禮を忘れんや」と云つて聽き入れなかつたといふことである。將軍頼經は幼少で、義時なき後の泰時は完全に天下の實權者であつたのに、禮節をかくも重じた點は、誠に得がたき美點といふべきである。

### 豊臣秀吉、松下嘉兵衛の僕となる

秀吉が尾張の國中村の故郷を勃々たる野心を抱いて立出たのは彼が十六歳の時であつた。彼は僅かな金の中から木綿針を買ひ、それを賣つて食物、草鞋の代を得、鳴海から遠江の曳馬河に出た。こゝで久能の城下松下嘉兵衛の行列に逢ひ、ふとした縁で召出されて其の僕となつた。嘉兵衛につかへて彼が如何に忠勤であつたか、大関素生記に「加兵衛手もとにて使ふに彼是一つとして加兵衛が心に不叶と云ふ事なし。後は加兵衛の取入取出しを申し

付る。先より居たる小姓共是をねたみ云々」とある。後こゝを去つて信長に使へた。信長は性頗る短氣で部下に對して非常に苛酷であつたが、此の信長につかへて嘗て一度も其の意にたがひたることなしといふことである。彼は信長につかへても亦恭敬其の誠を致し、己れを引きしめて勝手氣まゝな振舞をせず忠實につかへたものである。太閤記に「ある時信長公未明に打出で給ふに、馬に乗りいさめる者あり、誰ぞと宣へば木下藤吉郎秀吉とぞ名乗ける。その後程經て鴨鷹の鳥曉かた出でさせ給ひつゝ誰か有ぞと尋ねさせられけるに藤吉郎是に候と答奉る。敬、上盡臣職者は必ず公庭に際なしと聞しが、近年藤吉郎が勤め實に左も有るぞかしと、御惑の御氣さし始て有けり。如此勤め行き漸日を累ね月を經しかば直に御用を奉る程に成にけり」とある。

### 貝原益軒の謙讓

益軒は筑前の人、明暦三年京都に遊び、山崎闇齋、木下順庵に學び日夜刻苦勉勵、遂に當時の有名な學者の一人となり

謙遜博識を以て知らるゝに至つた。

益軒或年京都から歸らうとして船路を取つたことがあつた。船中へ乗寄せた數名は互に談じ互に興じ、大いによみやまの話に目を重ねた。其の時船中の一人の青年があたりに人なきが如き態度で、大いに物知り顔に經書の講義をした。益軒は全く字を知らない様な顔をして始終其の講義を傾聴して居たがやがて船もつき各々姓名を告げて別れた。この時益軒が、私は筑前の貝原久兵衛ですと名のと、先の青年は船中で恭しく黙つて聞いてゐたあの人が有名な貝原益軒先生であるのを知り、大いに恥ぢ入り名前も告げずに立去つたといふことである。

益軒は性誠に謙遜で、人に對して傲り高ぶることなく、常に己れの心を引きしめ修養に志した人である。病弱だつた益軒がよく養生をして八十五歳の長命を保つた話、養生訓を始め先生の著書に教訓物の多い點によつても知ることが出来る。

### 謙讓の人杉浦重剛

勳二等旭日重光章を賜はつた杉浦重剛は安政二年三月江州膳所の城下に生れて、大正十三年七十歳で歿した。彼は六歳の時藩の學校遊義堂に入學し、こゝで六年學び、其の後漢籍、蘭學等を學び、大學南校に入つて英學を修めた。さうし

て二十二歳の時英國に留學を命ぜられ、歸朝後は大いに國家のためにつくした人である。彼は其の性つゝしみ深く、後進の黨陶につくし其の感化も甚大であつた。

明治十四年に文部省御用掛となり、後大學豫備門長、東京英學校創設（後の日本中學）するなど教育界に裨益するところ多く、明治二十一年には雑誌日本人を發行し、當時歐米化の盛なる風潮に反對し、大に國粹主義を主張して國民の自覺をうながした。同年文部省參事官兼專門局長となり、三十年には國學院學監となり、三十五年には近衛公の依頼にて東亞同文書院長となつた。

大正三年には學識多き人の中より學徳兼備の人として選出され、東宮御學問所御用掛を仰付けられ、倫理科を擔當し至誠一貫以て御進講の重任を果した。同七年には良子女王殿下御學問所の御用掛を仰付けられ、倫理を擔任し其の任を果した。高潔そのものゝ氏は電車に乗れば事故などのため豫定の時間に參殿致し兼ねることを恐れて、始終遠路を徒歩で參殿したとの事である。



## 六月の衛生と運動

六月といへば先づ梅雨期に入るが、この季節は最も胃腸傷害を起し易いので注意せねばならない。先づ梅雨に入る前に一般に屋内から屋外にかけて徹底的に大掃除を行ひ、殊に井戸水を使用してゐる家庭にあつては飲用水の消毒をして置かなければならない。飲料水の最も簡単な検査法は、先づ井戸水を透明の硝子器に入れて少量の三盆白砂糖を投じて二三日日光に當て、置くと濁るのは不良水であるから早速適當の淨化方法を講ぜねばならない。

又この月の小兒病中最も恐ろしいのは疫痢であつて、この恐るべき小兒病のため毎年可憐な生命を奪はれる不幸の小兒の數は何萬であるか判らない。次にこの病に對する一般の知識及び豫防法について述べることにする。

### 疫痢

疫痢は勿論細菌の傳染から起る病氣であるが季節的には夏から秋にかけて流行し、三歳から六歳まで位の小兒を好んで胃すものである。直接の原因としては不消化物を食べたとか、或は過食、寝冷等であるからこの點を大いに注意監督を怠らないやうにして貰ひたい。**症状** 疫痢の潜伏

期は數時間から數日間であつて、この間子供は平常と變りなく遊んでゐるが、突然氣分の嫌意を訴へ、やがて一二回軟便をし、腹が痛んで来て一二度嘔吐を催し、頭痛を感じ、しきりとあくびをして一見だるさうに見えて来る。これが疫痢の起り始めで、次に來るのは突然四十度にも達する發熱である。この時皮膚は蒼白となり、手足は氷のやうに冷え、脈搏も非常に早くなつて眼球が吊上り、全身に痙攣が起り意識も潤濁して來て昏々と眠つてばかりゐるやうになる。かういふ

状態は極めて重症の方で、輕症のになるとうつら／＼と眠つてゐるが、やがて昏睡又は嗜眠状態に陥つてしまふものである。そして粘液の多い下痢便を出し、時々嘔吐を催して來て遂にはコーヒー残渣のやうなものを吐くやうになる。

疫痢は一寸赤痢に似たやうな症状であるが、しかし赤痢と異なるところは疫痢の場合の下痢便は黄色、又は綠色の粘液便で、血液は全く混つてゐない。混つてゐても極く少量である。便の回数も一晝夜僅かに四五回に過ぎず、それも赤痢特有のしぶりがなからこの點でも疫痢と赤痢の區別はつくものである。疫痢は實に急速に子供の生命を奪ふものであつて

重症になると發病後二三日間で生命を奪ふものであるから、三歳から六歳位までの愛兒を持つ家庭では殊に注意せねばならない。**手當法** 先づ疫痢らしいと直覺したら直ちに醫師の來診を求めたか又は患者を病院に連れて行かねばならないが、それまでの手當としてはヒマシ油一〇グラムから二〇グラム位稍々多過ぎ目に服用させること、次に瀉腸して排便すること、それから前にいつたやうに手足等が冷えてゐるので湯たんぽを入れて温め、水枕、氷嚢等で頭部を冷し、醫師の來るのを待つやうにすべきである。**豫防法** 不消化物、暴飲暴食不熟の果物等を食べさせないやうにすること。疫痢も亦赤痢と同じやうに法定傳染病の一つであるから早速届け出る必要があることを言ひ添へて置く。

### 赤痢

赤痢は赤痢菌が消化器管に送られた時起る傳染病で、小兒は特に二歳から五歳までの間に胃され易い病氣である。時季はやはり夏から秋にかけて多い。**症状** 赤痢の潜伏期は數時間乃至一週間で幼兒の場合には突然三十九度から四十度位の高熱を發し、次いで下痢、嘔吐、痙攣などの症状を伴ふものである。糞便は最初は硝子のやうな粘液便が出て、その後多量の膿汁、膜片などを混じた悪臭ある便を排泄する。排便時には激しい疼痛を訴へ、腹部がゴーンと鳴つてしかもしぶるものであつて、回数も如きも一晝夜に四十回から五十回に及び、それ以上にも及ぶことさへ

ある。又口の渴きを訴へること多く、湯茶を非常にほしがらものである。その割合には小水が出ない。舌には厚い白苔が出來、腹部は次第に落窪んで左の下腹部を抑へると非常に痛がるものである。**手當法** 赤痢は法定傳染病の一つであるから赤痢と診斷が下つたなら傳染病院に隔離されるから、自宅での手當法はこゝに省略するがもし赤痢の疑ひのある場合は一刻も早く腸内に滯つてゐる便を排泄させるやうにすることは必要なことであるが、これも不完全な自宅治療では往々にして取代へしのつかぬ結果を招くことがあるから速かに熱練せる醫師を招聘すべきである。**豫防法** 一、患者及保菌者を隔離すること。二、赤痢と確定しなくとも少々怪しいと思つたら糞便及び尿の完全なる消毒を行ふこと。三、家庭の健康及び食餌に注意すること。以上の三つを守りさへすれば赤痢は恐るゝに足らぬものであるが、實際は中々その通り行ふことは困難であるから一層の注意が必要である。

### 六月の運動

この月中旬以降になるとそろ／＼各所のプールや海水浴場も開放されるがまだなんといつても時期が早い。戶外運動はこのところ一しきり休憩の状態であるが、登山家などは各地の地圖を案じて七月の登山期を夢みてゐることだらう。一日には先づ鮎漁が解禁される。前夜の三十一日から既に好漁家は好漁場目算けて殺到し徹夜するのが毎年の例である。又この月の二十五日には



白馬岳の山開があるが、先づ夏山の先驅であらう。

鮎漁解禁日案内

- 多摩川 春六月一日
- 秋川 秋十一月十六日
- 相模川 秋十一月十六日
- 桂川 春六月一日
- 酒匂川 春六月一日
- 荒川 春六月一日
- 槻川 一部に限り六月二十一日
- 入間川 一部に限り六月二十一日

- 天龍川 春六月一日
- 興津川 秋十一月二十一日
- 富士川 春六月一日
- 狩野川 秋十一月十六日
- 名栗川 春六月一日
- 富士川 秋十一月十六日
- 養老川 春六月一日
- 鑄川 春六月一日
- 鳥川 春六月一日
- 利根川 春六月一日

六月の行事と歴史

田植

日本は農本國で農を以て立國の基本とし、昔は百姓のことをオホミタカラとも稱した程で、従つて田植は古來から非常に尊ぶ行事であり、畏くも今上陛下におかせられては立國の大本御獎勵の恩召から近年赤阪離宮内に水田をお設けになり親しく挿秧遊さるゝとのことである。田植の神事としては古來伊勢神宮以下大小の神社に此の

祭儀のない神社は殆どないといつてもよい。就中大阪の官幣大社住吉神社の御田植式(六月十四日)伊勢神宮の伊雜宮御田植行事(六月二十四日)の如き古來著名な御祭である。  
水口祭 ミナグチマツリといひ農事、主として稻作を始めるに當つて田の水口に幣を立て神酒を備へて田植をお祭りする行事をいひ、また田祭ともいつてゐる。俗に「サナモリ」「サナブリ」「サナボリ」ともいふ。別にお祭はせずとも田植一段落の後の骨折休みに一日乃至二日の「植滿」或は「馬

「鍬洗」として祝ひ休みをする地方が多い。神社に於る祭事では、鳥根縣安濃郡川合村鎮座物部神社(國幣小社)の水口祭(六月一日)など最も聞えてゐる。

更衣

更衣は昔は四月一日(舊曆)に宮中の御装束祭を初めとして夏に移るための更衣があつたさうで、御装束のみならず、疊、建具、小道具の類までお更めになつたといふことである。この月からお巡さんのズボンが白くなり、學生、生徒のズボンや帽子も白くなる。

林大學頭信篤歿す

(享保十七年)

林大學頭は

ひ字は直民、鳳岡又は整字と號した。林春齋の二子で、幼い頃から大志を懷いてあらゆる經書を通讀し、好んで詩を詠んだといふことである。學問は兄の春信から承け、春信が歿したあとはその代りとなつて諸學生に講義を施した。信篤は非常に謙遜な人で、兄の春信も亦聰明の上に博識を以つて天下に鳴つてゐたので、信篤は兄の春信と名聲を争ふことを恐れて春信の生前には一切口を緘して語らなかつたが兄春信の歿後は俄然態度を一變し、事毎に性來の天才を發揮したので周囲の人々は舌を捲いて驚いたといふ。この頃父に従つて本朝通鑑を編纂し、延寶八年父の後を襲ぎ、貞享四年二月には大藏卿法印となり、弘文院學士の號を賜つた。時の將軍徳川綱吉は非常に學問を好み、一方大いに文教を興さうといふ際で

あつたから元祿四年には鳳岡に命じて髪を蓄へしめ、從五位下大學頭に叙した。これより以前には幕府の儒官は剃髪して僧侶同様の身分であつたが、鳳岡に至つて初めて士藩に列し、小性組番頭に准ぜらるゝこととなつた。次いで享保四年大内記と改め、明年致仕して野に下つたが十七年六月一日歿した。(一説には五月とあり)この時年八十九歳であつた。  
鳳岡は人となり豪俊雄邁であつて加ふるに博學多識、家綱、綱吉、家宣、家繼、吉宗の五代に歴任したけれど綱吉、吉宗の二代に殊に重く用ひられた。家宣、家繼の時新井白石が信任を蒙つて政權を壟斷したので鳳岡と意見が合はなかつたので屢々致仕を願ひ出たが許されなかつた。しかしこれは自己の私情のためではなかつた。林家といふ名望ある家學の事前白石と争ふことを好まなかつたのである。

丹生川上神社

奈良縣大和國吉野郡川上村(上社)

小川村(中社)丹生村長谷(下社)顯座、祭神三座、上社高麗神、中社岡象女神、下社間靈神。延喜式内の明神大社で、四度の官幣及び祈雨祭に預り、又二十二社の一に斑する。天武天皇の御宇天皇三年初めて祠を建てて祀つた。神宜あり、曰く「入境を隔てたる深山に我を祭らば天下に甘雨を降らせ霖雨を止めん」と。即ち大和神社の別社としてこの地に社を設け爾來旱霖ある毎に必ず祭祀を行ひ、歴世絶ゆることなく、號して雨師ノ神と申し奉る。止雨



には白馬を奉ることを例とし、後世或は白馬に代へて赤馬を以てしたこともある。神階は弘仁九年從五位下を奉り、天慶元年正三位に陞り、寛平九年從二位に上り給うた。明治四年官幣大社に列した。上社のある處は吉野川の上流、下社のある處は丹生川の上流で相距ること九里餘、附近に瀑布多く、山槽溪谷の美に富んでゐる。中社はもと郷社丹生川神社であつたけれども、大正十一年十月、當社の中社と定められた。例祭は上社は十月八日、中社は十月十六日、下社は六月一日と定められ、祈年、新嘗の兩祭は毎年中社に於て執行される。

### 貴船神社

京都府山城國愛宕郡鞍馬村貴船鎮座、間ノ神を祭る。或ひは間象女ノ神を祭るともいふ。延喜式内の明神大社で、四度の官幣に預り又二十二社の一に班してゐる。古來丹生川上神社と南北相並んで祈雨祈晴に靈驗あるので朝廷の奉幣が絶えなことがない。民間でも亦その神庇を蒙ることが多かつた。神階は弘仁九年從五位下を奉り、累進して貞觀十五年正四位下に至り給ひしことが國史に見えてゐる。その後しばしば加階あつて保延六年正一位を授け奉つた。明治四年官幣中社に列した。社殿は下ノ社奥ノ社の二社あり、相距ること六七町、奥ノ社邊は殊に幽邃であつて、老樹が枝を交へてゐる。社の西邊に大岩船といつて、石を積んで船形をなしたものがあり、この他神境の内外

に奇勝が少くない。雨乞瀧、鼓ヶ瀧、龍王瀧、不動瀧、龍ヶ瀧及び鏡石、瑩石、菘東岩、足洗岩等がある。

### 東照宮

栃木縣下野國上都賀郡日光町鎮座、徳川家康の靈を祀り、相殿に豊臣秀吉、源頼朝を配祀し一に東照大権現といふ。元和二年徳川家康が薨するや、遺體は駿河の久能山に葬つたけれども、秀忠が遺命に従つてこの地に廟所を設け、社殿を造宮した。即ち靈柩を久能山から奉じて日光山奥ノ院の廣塔に納め、正一位の神階を授け、神像を正殿に奉祀した。寛永元年に至つて將軍家光大いに廟宇を修理し、十三年に至つて竣成した。現社殿が之であつて、結構の壯麗、建築の華美、海内無雙といはれる。幕府に於ては親藩を初めとして内は各藩より外は朝鮮、琉球、オランダ等に至るまで饗うて土工、器財を献じ、幕府が支出した金額のみでも百萬兩に上つたといふから、その總工費は驚くべき巨額を要したことが知れるだらう。後光明天皇特に宮號を賜ひて東照宮といふ。爾來日光久能兩社を初め、諸國に祀る東照權現社は一様に東照宮と稱することゝなつたのである。正保三年家光の奏請によつて、大祭の日は日光例幣使といつて毎年朝廷から奉幣使を遣はさるゝ例であつた。將軍の社參は元和三年二代將軍秀忠に始まり、爾來相次いで十二代將軍家慶に至つた。その儀衛の嚴重なること實に當代の盛典であつた。明治六年別格官幣社に列し、六月一日を以て例祭日とする。

神輿渡御の儀は俗に百物揃行列と稱し、例祭の翌日及び十月十七日に行はれる。境内の布置、社殿の結構について概観すれば、境外大手道より進み、石階を上れば大鳥居が正面に屹立してゐる。黒田筑前守長政の寄進する所であつて、筑前國に於て巨石を削り南海を経て運送したものである。この鳥居に掲げてある東照大権現と大書した扁額は後水尾天皇宸筆の勅額である。その左方に極彩色の五重の塔がある。高さ十丈五尺酒井讃岐守忠勝の献進するところのもので、文化十二年焼亡の後再建したものである。石階を上れば段上に表門、仁王門がある。銅葺朱塗の建物で、左右切妻流破風造で左右に銅葺葺總赤塗の彫堀が廻してある。東西百二十餘間、門を入れば敷き詰めた參道の石階は三折して中段の下に至る。右に上神庫、中神庫、下神庫が並んでゐる。校倉造朱塗銅葺、鍍金金物、花鳥草木の極彩色である。神階は白木の流造である。境内に殿堂が多い中に白木造はこの一軒に限られるといふ。西北に水舎(唐破風造)がある。輪藏(重層寶形造)あり、石階を登り中段を過ぎると右に鐘樓があり、左に鼓樓がある。鼓樓の西に本地堂があるが之は神佛混淆時代の遺物である。天井に長さ八間の龍を描き鳴龍の稱がある。その上段正面が即ち陽明門で、東照大権現の額は後水尾天皇の宸翰であるため一名勅額門ともいふ。兩妻入母屋、四方軒唐破風造、麒麟、雲龍、唐獅子、聖賢、仙客等の彫刻奇を極め、功

を盡したものである。天井に描いてある二龍は探幽守信の筆に成るものだといふ。陽明門に連つて東廻廊、西廻廊がある。門を入れば西方に神輿舎があり、舎内に三神輿を藏してある。東方に神樂殿あり、これに對して上社務所、護摩堂がある。正面の門を唐門といひ、四方唐破風造で二脚門、異獸あり、天人、仙客、七賢人、七福神等の彫刻がある。この門の結構はすべて異國の名木木地彫で、細工の精緻なる驚くべきものが多い。拜殿、本殿の周圍を瑞垣を以て廻らし、延長八十間ある。拜殿、石間、本殿は連結された一字の殿堂で、所謂權現造である。東廻廊に潜門があり、これを出れば奥社入口の門があり、坂下門といふ。石階あり、一級毎に一枚石を用ひ、左右に彫抜の石欄を列ね、曲折二町餘で奥社(寶塔)に達する、即ち東照公の墳墓である。當宮の境内坪数は四萬千七百坪、東は境外所有地を通じて稻荷川に臨み南は輪王寺と界し、西北は二荒山神社の境内と接してゐる。建物は寶塔の外五十六棟、その内以上順次述べて來た右の大鳥居初め拜殿、本殿まで合せて二十餘ヶ所は悉く特別保護建造物に編入されてゐる。



筆寫にかゝり、繪は狩野探幽の筆に成る。助眞、國宗、一文、行光、吉房、久國の名刀六口は是亦國寶である。圖書に徳川實記五百二十冊、寛政重修諸家譜千五百二十冊等がある。

二 日

本能寺の溝の深さ幾尺 (天正十年 皇)

一世の英雄織田

信長が本能寺に滅んだのは今から凡そ三百年前の天正十年六月二日のことであつた。頼山陽は一詩を賦して曰く、

本能寺溝深幾尺。我就大事在今夕。鞭撻在手交鎌食。四檐梅雨天如墨。

老阪西去備中道。揚鞭指東天猶早。我敵正在本能寺。敵在備中汝能備。

と。これより先羽柴秀吉は備中に赴いて毛利諸城を陥れ高松城を水攻めにし將に陥れんとするやこの時毛利氏は大兵を提げて後詰の陣立物々しく秀吉に迫つて来た。しかし遠謀深慮に富む毛利輝元は對手が何しろ作戦の妙を得てゐる秀吉のことだから遽かに討つてかゝらうともしなかつた。一方秀吉は秀吉で毛利の大軍に仕掛けるには何しろ兵が手薄だつたので待機の姿勢を取り、使を信長の許に派して急ぎ援兵を出ださんことを乞うた。この時信長は安土の城にあつて秀吉

の使を受けると大いに喜んで信長親ら援兵を率ゐて中國に赴かんといつた。即ち惟任日向守光秀、細川越中守忠興、池田三左衛門信輝、中川清兵衛清秀等の諸將を先鋒とし、各々その領國に歸つて出征の準備をなすことを命じ、性急な信長は單身京都に入つて本能寺に館を定め、嫡子の信忠は二條城に屯した。

これより先森蘭丸等は光秀が叛旗を翻すことを知つてゐたので、早く光秀を滅さんことを信長に奨めたがこの時剛勝な信長は呵々大笑していふには、「何を光秀しきことが」といつて中國出征に先立つて領地を奪ひ、剩へ甚しい面罵を加へていふには、「おのれもし舊領地が欲しいなら、中國に赴いて戦功を樹てよ。その上で改めて領國を定めてやらう。」といつた。この時光秀は煮えくりかへる胸を抑へて坂本城に歸つたがどうしてこの憤を抑へることが出来よう。そこで彼は近親諸將を集めて密議を重ね、遂に決意して京都に入つた。

六月一日、光秀は龜山を出發して道を東にとり老阪を越えたのでこの時諸將は初めて不審を懷き、何故に道を變へるのかと光秀に聞いた。光秀は笑つて曰く「軍容を信長公に見せようがために廻り道をするのだ。」と。二日、未だ夜が明けないうちに京都に入つた。この時光秀は大聲疾呼して曰く「敵は本能寺にあり、進め！」とこの時諸將は初めて光秀の意中を知つたのだつた。

一方信長は本能寺の一室にあつて遽かに起る人馬の響きを聞き、すは何事ならんと森蘭丸をして偵察せしめた。蘭丸は素早く門に登つて小手を翳して見ると正しく旗は桔梗の紋所である。光秀謀叛仕つてござる。」と信長に注進に及べば、信長は怒髪天を衝いて槍おつとつて立ち上り、「何事ぞ、光秀風情の者共が、突いて突いて突き捲つてくれん。」と怒號したけれども手兵僅かに數十人、衆寡敵せず遂に本能寺に火を放つて自燬してしまつた。この時信長は四十九歳であつた。本能寺陥ると見るや光秀は更に二條城に向ひ、嫡子の信忠をも攻め殺してしまつた。

三 日

ペルリ浦賀に来る (嘉永六年 皇)

相州浦賀の沖に黒船が来て鎮

國泰平の夢圓かなわが國の上下を驚したのは嘉永六年の今日の今日のことである。この時來航したアメリカの軍艦は四隻、率ゐて來たのは合衆國水師提督ペルリであつた。ペルリは浦賀に來るや時の浦賀奉行戸田伊豆守氏榮に向つていふには、「わが合衆國政府は特に自分を使節として貴國に派遣して通商貿易の事を協議せしむるのである。どうか貴國の責任ある人に面會して然るべく協議したいと思ふから何分にも轉旋方を頼む。」といつた。そこで伊豆守は直ちにこの旨幕府の諸閣

老に報告したところ、閣老達は寢耳に水のペルリの申込みに色を失ひ、どういふ處置を取つてよいのか一向に判らなかつた。この時老中の阿部正弘がいふには「副將軍水戸侯は豫てから國防に心を懐し、且つ世界の大勢に通曉してゐられるから、先づ水戸侯の意見を徴して見るのがよいだらう。」といふので、早速使を水戸に出して至急出府方を懇願した。さてこの時の水戸侯の意見は「目下天下の形勢を察するに、米國の要求は到底許し難きところであるから、須く諸地方海岸の防備を嚴重にして宜しく彼と一戦を交ふる準備をこそ固むべきである。」といふ強硬論だつたので、幕府としては結局藪を突いて蛇を出してしまつたも同様のことになつてしまつた。なぜかといふとこの時幕府としては積極的に外船を打撃ふなどといふ勇氣はなかつたのである。そこで幕府の執つた態度といふものは實に姑息彌縫の一時脱れの態度であつて、先づ浦賀の久里濱に外賓引接所を設け、浦賀奉行戸田伊豆守並びに大學守林建をしてペルリを引見せしめ、改めて次のやうな返事したのであつた。「貴國が要求されるところは實に重大なことである。殊にわが國は從來他國との交通貿易を嚴禁し、獨立を維持して來た國であるから國民も亦外國との通商貿易を喜ばず、のみならず昨今將軍が病氣で引籠つてゐるからかうした大事を議することも出来ない。今回はこのまゝ引取つて來年長崎へ來て然るべき返事を待つよう。」といつたの



で、ペルリもこの交渉は早急には運ばないと見て取つたものか、では明年再び来るからその節は何分の確答がして貰ひたい。といふので軍艦を率ゐて一旦引揚げて行つた。これがペルリ第一回の來航である。

四 日

神宮月次祭幣帛發遣

神宮月次祭とは長くも伊勢神宮に勅使が参向して幣帛、神饌を奉り、國家人民の上を守護し給ふ御神威に報賽御禮)あらせらるゝ年々定例のお祭りである。

このお祭は毎年六月と十二月の各十七日(豊受宮は其の前日)の十六日に大祭を以て奉仕されるのであるが、此の十六十七日の大祭に奉るべき幣帛を前以て宮内省でお整へ申して置いて前記の如く勅使をお立てになつて参向せしめられるのである。即ちこの幣帛を奉るべき勅使の御發遣が六月も十二月もこの四日である。

齟齬豫防デ

『齟を守りませう』『齟は健康の第一線』といふ標語の下に齟齬撲滅運動を行ふ日である。この催は昭和三年六月四日日本齒科醫師會主催し、内務省、文部省、陸軍省後援の下に全國一齊に催されてから年中行事となつたものである。六月四日が選ばれたのは六四が齟齬に通ずるからであるさうである。

傳教大師入寂す (弘仁十三年)

最澄、傳教大師は父を百枝といつて内外の學に通じてゐた人であるが、この人の祖先は應神天皇の御代漢の國から歸化した人であつた。

傳教大師はいふまでもなくわが國天台宗の開祖であつて、神護景雲元年八月誕生した。十八の時早くも得度し、二十歳で具足戒を受けた。その後南都に到つて昔僧鑑真が彼地から將來した三大部を日夜閱讀して天台の釋義の精妙なるに悦服し、この教へを弘通しようといふ志を樹て、延暦七年叡山に根本中堂を建立し、十三年に供養會を修した。この時桓武天皇には行幸遊され、その後勅額を賜はつて、延暦寺と稱することゝなつた。十六年には内供奉十禪師に補され、近江國の正税を分つて寺費として賜つた。二十一年勅許を得て唐に渡り、天台教の蘊奥を極めることゝなり、二十三年海を渡つて入唐し、天台山國清寺に到つて智者大師七世の法孫道遠和尚に遭ひ、一宗の玄旨及菩提戒を受け、又佛隴寺の行滿座主から法要經書を受けた。又越府の龍興寺に赴き、順曉阿闍梨から眞言三部の大法圖樣道具等を授かり、又唐興縣に於て嶺南禪師から北宗一派の禪法を嗣ぎ、二十四年六月に至つて歸朝した。この時將來した經書二百三十部及び道具圖樣等を朝廷に献上したところ天皇の御喜び一入でなかつた。

桓武天皇崩御ましまして後も平城、嵯峨兩天皇の御歸依益々篤く、弘仁四年には宮中に於て初めて後七日の密法を修し、五年には更に法門を宮中に講じ、六年には南都に於て同じく法門を講じ、次いで東國に巡錫したが、十三年六月四日叡山中道院に於て年五十六歳を以つて入寂した。

傳教大師は五十六年の生涯を通じてその徳の及ばざるなく修證の教法を以つて道義を千歳に留めたばかりでなく、一方經國の事情に盡したことも少くなかつた。例へば信濃と美濃の境に廣濟廣極院を建て、驛遞の便を開いたことや、或は彼地から茶を將來して物産を興したことや、又平安遷都の如きにも與つて力があつたといふことである。貞觀八年七月十二日傳教大師の勅號を賜つたがこれがわが國に於ける大師號の初めである。著書亦多く、註法華經、註金光明經の外に數十部ある。

五 日

長崎、函館、神奈川を開港す

(安政六年 紀二五一年)

太平洋の波はわが國を遠く東海の涯に永く鎖國の夢を睡り続けさせてくれたけれども、一方又この鎖國の夢を驚かせたのも他ならぬこの太平洋の波であつた。安政五年六月、米國及露國の艦隊は突如として伊豆の下田に來

り、強硬に開港を迫つて聞かなかつた。この時米佛艦隊は支那と戦つて捷ち、その餘力を驅つて來航したので耐らなない、もし開港を肯んじなければ砲火を開くも辭せざる勢だつたので驚いたのは幕府の閣老達であつた。この時大老井伊直弼は評議して曰く『開港のことは未だ勅許を得てゐないけれどももし彼等のいふ如くなればまことに山々敷大事である。或はわが國も亦支那の如き憂目を見ようとも限らない。そこでこの際のことであるから、朝廷の許を得ないで先づ幕府の一存によつて假條約を結び、その上で善後の處置を講じても遅くはないだらう』といふので、こゝに諸閣老も贊成し大勢は開港に傾いたのであつたがこの時諸藩の大勢は直弼等の説を不可とし、殊に強硬論の筆頭水戸齊昭の如きは峻烈を極めた一書を送つて開港の不可を論じたが、一方その剛腹を以つて鳴る大老井伊直弼は大勢を排して斷乎として長崎、函館、神奈川の三港を開く條約を結び、安政五年六月三日から實施すべきことを約した。こゝに尊王佐幕の兩論天下に沸騰し、井伊直弼は櫻田門に斬らるゝの端を作つたのである。

六 日

本多正信卒す (元和二年)

本多正信は三河の人で父を俊正といつた。幼少の頃から家康に従つてゐたが永祿六年に一向宗の一



揆が起ると家康に背いて酒井忠尚の許に走つた。翌年亂が治ると京都に出て松永久秀の食客となつたがその後三好氏と隙を生ずるや正信は加賀越後の國に遊んだが、この時一向宗の徒が加賀、越後に事を起すや正信は進んでその徒黨に加つたが勢が振はなかつたので再びこゝを去つて各地を放浪して歩いてゐた。その頃大久保忠世は正信の人と爲りを惜んで再び家康に仕へさせようとし正信も亦前非を悔いて心から家康に仕へようとする意志があつたのでこゝに家康の許すところとなり、以後家康の許を離れることがなかつた。時適々家康が信長に謁しようとして京都に出發したが、この時道に本能寺の變を聞いた正信は家康の身邊に萬一のことがあつては問道に兵を伏せて密かに家康を守つたので家康も深く正信の才能を愛し、舊地を與へて優遇することゝした。天正十二年長篠の戦が起るや謀を獻じて大功を樹て、同十七年五月には從五位に叙せられ上野八幡の一萬石を與へられた。家康が將軍の職を秀忠に譲つて駿府に隱退するや正信を江戸の執權とし、その子の正純を駿府の執事とした。こゝに於て父子共に幕府の政に與り權勢一世を傾かせたが、性清廉の正信は加贈の恩命も享けず、その後秀忠も亦屢々祿を與へようとしたが悉く斷つたが、晩年に至つて遂に一萬石を受け、その祿三萬石となつた。元和二年六月七十歳で歿した。正信の如く生涯清廉を以つて誦はれた人も亦珍しい。

七 日

光明皇后薨す

(天平寶字四年 皇紀一四三〇年)

光明皇后は聖武天皇の皇后にましまし

御名を安宿媛仁正皇后と申し奉り、藤原不比等の第二女にまします。御幼少より御聰明に互らせられ、天皇がまだ皇太子にまします頃御歳十六歳を以つて妃となり給うた。天皇が御即位ましますと共に從三位を授け夫人となし給ひ、孝謙天皇及び皇太子を生み給ふや正三位を授けられ天平元年八月皇后の御位に陞り給うた。孝謙天皇が受禪後皇太后となり給ひ、天平寶字四年七月七日御歳六十歳にして崩御ましまし、大和國添上郡佐保村法蓮寺宇佐保山東陵に葬り奉つた。

光明皇后は御殊に御端麗にましまし、御顔より光りが差し給ふ如く拜されたので光明皇后と名付け奉つたものである。御資性御仁慈に富ませ篤く佛教を崇信遊され給うて天皇に勤め奉つて東大寺を建て、諸國に命じて國分寺を起し、又悲田、施藥兩院を置いて天下の飢民病人を救ひ給うた。又先の皇后を供養し奉つて山階寺に西金堂を造り或は金字一切經を手寫して納め給うた。皇后は書をよくし又文に巧みにわたらせられたが、中でも皇后の御徳を傳へ奉る御逸話に次のやうな物語がある。

皇后はある時浴室を作つて浴く民を洗つてやつたならば

功德これが増すものはなからう。」と思召して、浴室を設けて貴賤を問はず浴せしめ給ひ、千人の人の垢を洗はんことを佛にお誓ひ遊した。ところが九百九十九人まで洗はせ給うた時全身腫物に覆はれた見るからに醜い男が入つて來たので、さすがの皇后もこれのみはと思召されて御遠慮遊されようとしたが、それでは折角佛に誓はれたことも無駄になるので御目をつむるやうにして病人の瘡を摺り給うたが、その時病人が

いふには、「私は何んの因果かこのやうな業病にとりつかれてしまつたのでございませうけれど、ある醫師が申しますには誰かこの膿を吸ひ取つてくれる人があればさすがの業病も立ち所に治ると申すのでございませうけれど、世の中といふものは情なきものでございまして今の世にそのやうな情けある人があらうとも思へません。しかし承るところによると、皇后様は世に類稀な御慈悲深い御方と承つてをります。どうぞこの私をこの苦しみからお救ひ下さいませ。」といつて手を合せて伏し拜むのであつた。この時皇后に於かせられては「あゝ憐れなるものよ、世に人は多くあれど、この病人を救つてやるものもないのか。」と思召され、畏くも御口づから病人の顔、軀の膿血を吸はせ給うたのであつた。吸ひ終らせられて、病人に向つておつしやるには、「決してこのことを人に告げるなよ。」と仰せ給へば、不思議や御言葉の終るか終らぬに彼の病人の姿はかき消す如く消え失せて、得ならぬ薫香が室に満ち

八 日

鴨長明歿す

(建保四年 皇紀一八七六年)

方丈記の著者として

名高い鴨長明は京都鴨

社の神官だつたが、幼少の時父母を亡ひ、頼る人となかつたので立身出世の望みさへなかつた。そのためか早くより世を厭ひ、管絃を弄び和歌など詠じて浮世から遠ざかつた生活を送んでゐた。建仁元年後鳥羽上皇に於かせられては長明の和歌の才を賞で給ひ、北面に召して和歌寄人となし給うた。翌二年氏社河合神社の彌宜に缺員が生じたので上皇に於かせられては長明を補缺として就職せしめようとしたが、總官補兼が上訴して自分の子の祐頼をして割込ませてしまつたので長明はすつかり悲觀してしまつた。上皇に於かせられても亦長明の心中を哀れに思召し給ひ、やがて宇治社の彌宜とし給うたが長明の心は快々として樂しまなかつた。それからとい



ふもの一層彼は歴世的な人間になつてしまつて門を固く閉ぢ、世間との交りも絶つてわづかに和歌に心境を託して自ら慰めてゐたが遂に剃髮して僧となり、大原山に引籠つてしまつた。この時長明は五十歳だつた。建曆年中鎌倉に遊び、その後京都に歸つて日野山の麓に住み、時々洛中に出てあちこちと徘徊し、日が暮れば庵に歸つて本など讀んで暮してゐたが、この頃彼の財産とては一軀の佛像と、數卷の書軸と愛玩の琵琶と箏のみであつたといふ。その後後鳥羽上皇に於かせられては和歌所に召し給はんとしたけれども、この時長明は一首の和歌を詠じてお断り申上げたといふことである。長明の和歌は多く古今集、千載集等に載つてゐるが、この他に方丈記を初め瑩玉集、無名鈔、發心集、文字鏡、四季物語、海道記などがあるが、この中で四季物語と無名鈔は疑問の書であるといふ。建保元年十月十三日六十三歳で歿した説が正しいやうだ。

九 日

小早川隆景卒す (慶長二年皇) 小早川隆景は毛利元就の第三子で

吉川元春の弟である。天文十五年十月沼田高山城に入つて竹原の地を併せ持ち、中務少輔又佐衛門佐といつた。父の元就に従つて各地に戦ひ、いつも兄の元春と先陣を争つた。世に毛利の兩川といつて恐れられたものである。元就の歿後は姪

の輝元を輔佐して名を成さしめたものだが、輝元が山陰、山陽の殆んど全部と九州の一角を攻略することが出来たのは隆景の功によるところが大きかつたといふ。天正十年秀吉が信長の命によつて高松城を圍むや隆景は元春と輝元を助けてこれに當つたが、未だ一戦を交へずして秀吉と和を結び、これより兩雄大いに肝膽相照し、永く毛利家の社稷を保つことが出来た。十三年秀吉に従つて南海を攻めてより、或は薩南に小田原に幾多の功を樹て、十六年には輝元に従つて京都に赴き、秀吉より桐の記號と豊臣の姓を賜り、これより秀吉の帷幄に參じて種々畫策を献じた。十九年秀吉の姪金吾秀秋を養つて嗣子としたが、秀吉は秀秋をして輝元の後を襲がしめようとする意志があつたので、隆景は毛利家を奪はれんことを恐れて進んで秀秋を迎へて自分の後繼者とした。文祿元年七月參議となり、二月征韓の役起るや隆景は一萬の水師を率ゐて各地に轉戦し、三年秋明將李如松と碧蹄館に戦つて大いに破り、又晋州の城を陥れた。その功によつて四年從三位に叙し、權中納言に任ぜられ、家を清華に准ぜられたがこの時家督を秀秋に譲つて三原城に隱退し、慶長二年六月九日(十二日の説もあり)年六十五歳で薨じた。

日佛協約成る (明治四十年)

日露戦争に捷つやに伍したわが國は先づ英國と攻守同盟を結び、他の列強も漸く帝國の實力を是認し清國に對する帝國の外交方針を容れ、均等待遇を尊重するため日佛協約なるものを作り彼我全權の間に調印を了した。時に明治四十年六月十日の事であつた。協約文は次のやうなものである。

日本皇帝陛下ノ政府及佛蘭西共和國政府ハ兩國ノ間ニ存存スル友好ノ關係ヲ鞏固ニシ且將來誤解ノ原因ヲ兩國ノ關係ヨリ全然除去セムコトヲ希望シ之ガ爲左ノ協約ヲ締結スルコトニ決定セリ

日本國政府及佛蘭西政府ハ清國ノ獨立及領土保全並ニ清國ニ於テ各國ノ商業臣民又ハ人民ニ對スル均等待遇ノ主義ヲ尊重スルコトニ同意ナルニ依リ且兩締約國カ主權保護權又ハ占有權ヲ有スル領域ニ近邊セル清帝國ノ諸地方ニ於テ秩序及平和事態ノ確保セラル、コトヲ特ニ顧念スルニ依リ兩締約國ノ亞細亞大陸ニ於ケル相互ノ地位並ニ領土權ヲ保持セムカ爲前記諸地方ニ於ケル平和安寧ヲ確保スルノ目的ニ對シ互ニ相支持スルコトヲ約ス

賞して「隆景の才智は小松内府に勝る。」とさへ傳へられたさうである。隆景が薨じた際秀吉は悲しみの餘り「わが邦家の重鎮を失つた。」といつた。隆景は常に信義を重んじ、一度口に出したことは生涯これを守つて節を變じたことがなかつたといふことである。

十 日

時の記念日

日本書紀二十七卷天智天皇十年の條に「夏四月丁卯朔、辛卯置『漏刻』於『新臺』也。」云々とある。史實に基き大正九年財團法人生活改善同盟會調査委員會の決定によつてこの日を時の記念日として同會主催の下に同年六月十日第一回を全國的に催されてより毎年の行事として行はるゝやうになつたものである。當時の曆は勿論太陰曆でこれを太陽曆になほすと丁度六月十日に當る。尙この日生活改善同盟會では天智天皇を奉祀せる近江國滋賀縣膳所町村社石座神社並に近江國野州郡河西村皇小津神社に祭料を上り奉告祭を執行、天智天皇山科御陵前に京都府知事を経て祭料を上り陵前奉告祭を執行するのである。又全國的の催としては時間尊重、定時厲行の宣傳、又時間尊重、定時厲行に關し功績のあつた者に對しては一府縣三名以内の表彰をする他宣傳ビラ、講話による宣傳に大に努むるのである。



(千九百七年六月十日巴里ニ於テ本書ヲ作ル)

十一日

僧觀賢入寂す

(延長三年 皇紀一五八五年) 觀賢は讃岐の人で本姓は奏氏、聖實阿闍梨

の高弟である。延喜十九年醍醐寺の座主となり、當代隨一の高僧といはれた。大和に般若寺を開き、延長三年僧正に陞りその夏六月十一日に入寂した。

承和二年三月、弘法大師が高野山に入寂してから八十五年醍醐天皇の延喜二十一年のこと、ある夜のこと天皇の御夢に弘法大師が來つて御衣を賜らんことを願ひ申し上げた。そこで天皇に於かせられては早速觀賢を使として紫袍一襲を弘法大師に賜らんとし高野山に赴かせ給うた。觀賢は高野山の金剛峯寺に着くや直ちに塔を開いて御衣を弘法大師に着せようとすると、その間濃霧重雲を隔つるやうであつたので觀賢は稽首三拜して恭々しく祈誓を籠めた後目を開いて瞳を凝すと弘法大師の姿が生けるが如く拜されたが、この時大師の鬚や髪が甚だしく延びてゐたので、これを剃つて紫袍を着せ奉つた。この時傍に淳祐といふ侍僧がゐてこの有様をつくづく見てゐたが、觀賢のすることが如何にも附に落ちかねたので恐る／＼問ふと、「お前にはまだ大師の定身を拜むことが出来ないのだ。」答へたら淳祐が非常に慨いたので、觀賢は「で

三五〇

は。」といつて淳祐の手を執つて大師の定身を撫でさせたところが未だ軟くして温氣があり、恰も生きてゐるまゝのやうであつたといふことである。

梅雨

毎年この日あたりから梅雨に入ることゝなつてゐる。梅雨は學問上からいふと南東、北西兩

氣候の衝突に因つて起るものだといふことである。つまり陽曆六月頃は北西の風が止んでそこに來てゐる南東の暖風と同居することゝなり、而も土地が冷いので南東風の水蒸氣が凝縮してこゝに梅雨といふ霖雨を降らすのである。梅雨は大抵立春から百三十五日目に入り、凡そ三十日間にして雷鳴があつてから終ることゝなつてゐて俗に「入りあつて明けなし。」とはこのことである。

十二日

蘇我父子誅に伏す

(皇極帝四年 皇紀一三〇五年)

上古以來蘇我、物部、大

伴の三氏は最も顯れた民族であつて、三氏相率ゐて皇室を輔佐し奉つたものであるが、その後互ひに黨を立て、軋轢し、遂に物部氏は蘇我馬子に滅されるところとなり、大伴氏は次第に勢が衰へて蘇我氏のみ獨り朝廷にあつて勢力を専らにするやうになつた。

これより先敏達天皇崩御ましますや、皇太子が未だ決定し

てゐなかつたので馬子は大兄皇子を立てようとし、物部守屋は穴穗部皇子を立てんとして互ひに争つたが、遂に馬子は大兄皇子を立て、天皇とした。即ち用明天皇に在します。ところが天皇は御在位二年で崩御されましたので、馬子は既戸皇子と圖つて豫ねて皇位を望んでをられた穴穗部皇子を除き奉ると共に守屋を滅してしまつた。又一方に於ては崇峻天皇を密かに除き奉り、敏達天皇の皇后にして馬子の妹が生むところの炊屋媛皇后、即ち推古天皇を立て、神代より曾つてあらざる女帝の例を開く等幾多の大逆罪を冒し奉つたが、推古天皇の三十四年に馬子が薨するやその子の蝦夷が大臣となり父の蝦夷の威を借りて横暴至らざるなく、漸く天下の矍矍を招くやうになつた。三十六年推古天皇が崩御ましますや蝦夷は敏達天皇の御孫田村皇子を立てんとし、蝦夷の叔父境部麻理勢は既戸王子の御子山背大兄王を立てんとして争つたが蝦夷は遂に叔父の麻理勢を殺して田村王子、即ち舒明天皇を擁立申上げた。それからといふもの蝦夷は天皇擁立の功を恃んで威權を専らにし、群臣を恰も家隸の如く自家に出入させ、そのため參朝するものさへ稀になつてしまつた。天皇崩じて舒明天皇の皇后にわたらせられた皇極天皇が立ち給ふや、蝦夷の子入鹿が國政を執つて横威父に過ぎ、僭越の狀言語に絶するものがあつた。先づ祖廟を葛城に建て、八僧舞を奏し、大役を興して父子の壽像を營んで大陵小陵と稱し、猥りに紫

冠を冠り蝦夷の邸宅を宮門といひ己の家を谷宮門と稱するはまだよいとしてその子を王子と稱し或は柵門を邸外に構へ兵庫を作り兵士をして守らしめ、又は城を築き池を穿ち、出入に兵士を従へて天皇の行幸に擬するのみならず、山背王子が威望あると見るやこれを除き奉り、或は皇室直屬の地葛城縣を己が私領となさんとして強請し奉り、或は力を恃んで他の所領の民を苦役し人の土地を奪ひ、横暴實に至らざるなく、こゝに至つて遂に皇威衰へ天皇はいませどいませざるが如く天下の弊もこゝに至つて極まつたといふべきであつた。

この時伊勢の神官に中臣鎌足といふ人があつた。この人の先祖は遠く天兒根命に出で、その八世の孫大鹿島から子々孫々伊勢神宮の祭主となり、鎌足も亦神官であつたが、つら／＼時世を感じて神官を辭し早くより大事に心を潜ませてゐた。鎌足は氣宇廣大、智略非凡の人であつたが、既にして皇弟輕皇子に於かせられては鎌足の才識を愛し給ひ、密かに交はり給うて入鹿誅略の大事を圖り給うた。一方鎌足は中大兄皇子に親しみ奉り、又蘇我石川麻呂、佐伯子麻呂と交を結んで着々として目的に向つて進んで行つた。ところが機會は遂に來た。皇極帝の六月、三韓が朝廷に貢を上る日、即ちこの日を期して事を擧げ、一舉にして入鹿を誅すべくその一々の部署さへ定つた。

その日に至れば、天皇には大極殿に出御ましますし、入鹿も



亦参内して設けの席に着いた。この時鎌足は弓矢をとつて警戒の役に任じ、入鹿が参内すると共に御殿の各御門を固く鎖してしまつた。やがて儀式は開始され、同志の一人石川麻呂が御前に進み出て表文を読むことゝなつたが、石川麻呂は大事を前にして心戦き、その読む聲までが激しく顫へたので入鹿に悟られんことを恐れ、中大兄皇子が進み出て入鹿を斬り次に入鹿の父蝦夷をも誅し、こゝに父子共に遂に誅に服し、年久しく皇室を覆ひ奉つてゐた妖雲も晴れたので、天皇には御位を中大兄皇子にお譲りにならうとしたけれども、鎌足は皇子に御忠告申上げて輕皇子を立て奉ることゝした。即ち孝徳天皇にまします。この後中大兄皇子は皇太子として天皇を輔け奉り、鎌足も亦皇子を輔け奉つて大化の改新の大業實現に急ぐことゝなつたのである。

十三日

山崎の合戦(天正十年皇) 本能寺に於て光秀のた いふ報は逸早く中國にある秀吉の許に齎らされた。この時秀吉は高松城を圍んでゐたが、京都よりの報せを受けるや直ちに毛利氏と和を講じ、宙を飛ぶ如く京都を目覓けて馳せ歸つて來た。攝津尼ヶ崎に着くや先づ大阪より信孝を迎へ兵を合せて京都に入つた。時に六月十一日のことであつた。翌十二

日には秀吉の先鋒は富田及山崎に達し、勢鋭く光秀を衝かうとしたので光秀は大いに驚き、急に軍備を整へて山崎に向つた。この時秀吉の軍一萬、光秀の軍一萬五千と註された。この時光秀の陣は天王山の形勝の地にあり、戦は遂に十三日の早曉を以つて開始された。秀吉は先づ堀秀政、堀尾吉晴に銃手を授けて天王山の敵を討たしめ、秀吉自らは諸將を督して山崎に進んだが、この時早くも秀吉の部將加藤光春は兵を率ゐて山崎の南を廻り、不意に敵の背後に出て追つた。光秀の兵はこれを見望して先づ浮足立つたので、この隙に乗じて中川清秀、高山長房等が突貫して敵陣を激しく衝いて光秀の兵を走らしめ、こゝに天王山の本據を奪ふことに成功した。光秀は叶はずと見て青龍寺に入つたが、こゝをも亦追立てられて阪本城に逃げこんだがこゝにも亦ゐたゝまらず、從士五六騎を連れて伏見を経て小栗柄あたりまで落ち延びて來たが、遂に竹槍を以つて百姓のために刺されてしまつた。秀吉は光秀の首を得ると共に本能寺に梟し、その後遺骸と一つにして栗田口に磔にし、更に兵を送つて阪本城に光任を倒しこゝに全く明智の一族は滅されてしまつたのである。世にいふ明智の三日天下、その善悪は何れとしても今日でも尙人の涙をそゝつて止まぬものがある。

十四日

大化の改新(大化元年皇) わが國に於て初めて年 號を建てたのは孝徳天皇の御宇の大化を以つて初めとする。孝徳記、大化元年六月乙卯の條に、「天皇、皇祖母尊、皇太子、於大槻樹之下、召三集群臣。盟曰、改元豊財重日足姬天皇四年、爲大化元年」とある。これは勿論支那の制度を眞似たものであるけれども、既に早く孝靈天皇の御代に列滴、應神天皇の御代に應至以下多くの年號があつたことが見えてゐる。これらの年號は固より朝廷に於て立てられたものではなく、僧侶等の私に立てたものであるらしい。

同年八月、改新の準備として東國等の國司を戒調し、二年春正月賀正の禮が畢つて後改新の大詔を發し給うた。その一に曰く、古來天皇の子代の民、處々の屯倉及び臣連伴造國造村首等の部曲の民、處々の田莊を停廢し、新に食封を大夫以上賜ふ。その二に曰く、京師を修め、畿内に國司、郡司、關塞、斥候、防人、驛馬、傳馬を置き、及び鈴契を作り、山河を定めよ。凡京に坊毎に長人を置き、戸口を按檢し、奸非を督察することを掌らしめ、且畿内の區域を定め、郡を大中小の三郡に分つ。その三に曰く、戸籍、計帳、班田收授の法を制定す。凡そ五十戸を里とし、里毎に長一人を置き、戸口を按檢し、農桑を課殖し、非違を禁察し、賦役を催驅する事を掌らしむ。凡そ田は長さ三十步、廣さ十二步を段とし、十段を町と爲し、段毎に租稻二束二把、町毎に租稻二十束を出さしむ。その四に曰く、舊賦役を停め、田の調を行ふ。凡そ絹、綿、絲、麻は並に郷土出す所に隨へ、田一町に絹一丈、四町にて疋を成す。長四丈、廣二尺半、綿二丈、二町にて疋を成す。長廣絹に同じ。布四丈、長さ絹綿に同じ。一町にて疋となす。又別に戸別の課を出さしむ。一戸に皆布一丈二尺、凡そ調の副物鹽糞は亦郷土出す所に隨へ、凡そ官長は中馬一匹、凡そ調の副物鹽糞は亦郷土出す所に隨へ、凡そ官長は中馬一匹、凡そ調の副物鹽糞は亦郷土出す所に隨へ、凡そ官長は中馬一



尺とす。又兵は人毎に刀甲弓矢幡鼓を輪し、仕丁は舊三十戸毎に一人なりしを改めて五戸毎に一人とし、采女は少領以上の姉妹及び子女の形容端正なるものを貢せしむ。

以上はこの時に於ける大詔の大意であるが、更に三月には風俗匡正に關する詔があり、越えて三年には七邑十三階の冠を制し、五年改めて十九階を置き、又八省百官を置いた。次いで白雉三年四月には戸籍を造つた。かくの如く大化の改新は大化元年に始つて白雉三年に至つて漸く終りを告げたのであるが事實は永年の積弊にして悉く改つたものばかりでもなかつたやうである。

十 五 日

常陸丸の殉難

(明治三十七年 皇紀二五六四年)

九段牛ヶ淵の常陸丸殉難將士の紀念碑

を仰ぐ度毎に、その壯烈なる殉難當時を回想せざるを得ない。わが運送船常陸丸が近衛後備隊第五、六、七の三中隊の將士千九百十五名とこの他に船員百二十名、馬匹三百二十頭と重要材料を満載して僚船佐渡丸と共に宇品を出航して金州方面に向つたのは明治三十七年六月十四日午後七時のことであつた。常陸丸と佐渡丸は並行して翌十五日午前七時には關門海峡六連島を経て同九時には白島側を通過した。この日海上平穩にして水面は鏡のやうであつたが遺憾なことには空が

曇つて展望の自由がきなかつた。沖ノ島に近づく頃佐渡丸が先となり、常陸丸は少し遅れて進んでゐた。これより先敵艦は瀕りと日本海に出沒してわが沿岸を脅し司令官ベソブラゾラ中將の率ゐる旗艦ロシア號以下の敵艦隊は日本海軍の連絡を絶んとして折柄の濃霧を利用して死物狂ひに暴れ廻つてゐたのである。この時敵艦は和泉丸を撃沈する前に早くも常陸丸、佐渡丸の二隻の影を認めたやうであるが、未だその距離が遠かつたので先づ和泉丸を撃沈してから後この二隻に向つたものであるらしい。

午前八時を過ぎる頃であつた。海上は一面の濃霧に閉ざれて全く展望の自由を缺いてゐたのだが、折しも行手の海上に當つて轟々たる砲聲を聞いたのであつた。常陸丸の乗組員等はわが艦隊の演習だらう位に想像して談笑しつゝ進むうちに突如として一隻の巨艦が濃霧を突破つて前面に現れた。これこそ三本マスト、四本煙突の敵艦クロームボルであつた。この時艦長カンベル(英人)は愕然として色を失ひ、俄かに船首を轉じて後退しようとしたけれども何しろ速力が遅いので逃げ延びることが出来るわけはない。程なくロシア號は右舷にリユーリツク號は左舷に現はれ、各々千米の距離に近づいて來て停船の信號を掲げたのであつた。乗組員一同は今早やこれまでなりと觀念し、將に停船しようとした刹那、敵は無法にも砲門を開いて發砲し、續いて二三十發亂射したが、そ

の中の一發は機關部に命中したので常陸丸は進退の自由を失つて如何ともすることの出来ない状態に陥つてしまつた。この時敵艦は一旦引揚げたが再び襲撃して來た。ロシア號は三百乃至五百米の距離にまで近づいて來て五六十發の砲火を浴びせかけたので全く無防備の常陸丸は何かは以つてたまるべき、機關部は全く破壊され數多の死傷者まで出すに至つた。この時まで船内にあつたわが將士は、この時初めて聯隊長須知中佐の命によつて甲板に上つた。須知中佐は沈痛なる語調を以つて最後の訣別の辭を述べ、一旦船室に入つたが、室内には中隊長尾唐三大尉、橋本省三大尉その他將校十八名と兵三名とがゐるばかりであつた。この時旗手大久保正少尉は聯隊旗を捧げて須知中佐に向つていふには、「小官はこれより聯隊旗を寸断して嘸下してしまひますから、聯隊長はどうか安心して戦死して下さい。」といひも終らぬうちに將に聯隊旗を寸断しようとしたので須知中佐はこれを押止め、「いや、聯隊旗は自分がお守りするから、君は……」といひも終らぬ時敵の一弾飛び來つて居合せた十二名の將士はその場に即死してしまつた。この時長尾大尉は重傷を負ひながらも帶劍を抜いて割腹し、五十七歳の老大隊長山縣俊信少佐は腹一文字に掻き切り橋本少尉は拳銃を以つて壯烈な最期を遂げてしまつた。

聯隊長須知中佐は今早やこれまでなりと覺悟し、聯隊旗

を押截してしばし無念の涙にかき暮れてゐたがやがて火を放つて焼いてしまつた。この時甲板の上はわが將士の屍山を成し、中には銃を構へて發砲するものもあつたが何しろ龍軍に双向ふ蠅螂にも等しいわざであつた。船體は既に傾き、最後の運命は刻々として近付いて來た。この時誰か出すとなく屍山血河の甲板のそちこちより、「打てや懲せや露西亞國」の悲しくも勇しき軍歌の聲が湧き起つた。あゝ敵を眼前にして一矢を酬ゆることも出来なかつた常陸丸將士のこの時の無念の有様は如何ばかりであつたらうか。かくなる上はせめて敵の捕虜となり、おめ／＼辱しめを受けて日本男子の誇りを汚さぬことである。この時誰いふとなく、「いざこれより玄海灘の鬼となつて、永く御國の守りを全うしようではないか。」と哀れ忠勇義烈の勇士達は、われも／＼と甲板から身を躍らせると逆巻く浪の底へと飛び込んだ。この時敵艦は更に近づいて、二百米の近距離から三百餘發の彈丸を浴びかけたので、常陸丸は艦部吃水下に一彈を受けて白煙を揚げつゝ、遂に海底深く沈没してしまつた。時に六月十五日午後二時半、船内に生き残つてゐた將士達は遂に船と運命を共にしてしまつたのである。中にも伍長黒木道太郎以下五十二名はボートに乗り、運を天に任せて海上に漂つてゐたが、十六日拂曉僚船佐渡丸に出會して救助されたが、敵の捕虜となつて辱しめを受けたものは一人もなかつた。



玄海の波荒れて早くも二十有餘年、しかし常陸丸殉難の壯烈談は今に於ても尙記憶に新なるものがある。その時玄海灘の鬼と化した千有餘名の將士達の靈は永く御國を守つて變ることがないだらう。

### 札幌神社

北海道石狩國札幌郡藻岩村圓山鎮座、大國魂ノ神、大己貴ノ神、少名彥名ノ神を祀る。明治二年、神祇官に於て鎮座を行ひ、同年九月御靈代を奉遷し、當時札幌開拓使假廳舎の側に祀を建て、四年五月、今の地に鎮座せられた。初め國幣小社だったが、累進して明治三十二年七月官幣大社に昇格した。本社は北海道開拓の當時その守護神として勅して大國魂ノ神以下國土經營の靈神を創祀せしめ給ひしに基くものであつて、實に北海道全土鎮座の大社である。大正二年十月改築工事竣成を告げ、次いで正遷宮が行はれ、本殿以下社殿、廳舎等全く備つた。就中本殿には皇太神宮四十二年度式年造替の古材を譲り受けてその主要部分に使用したといふことである。

### 八坂神社

京都府山城國京都市下京區清井町鎮座、素盞鳴ノ命を祭り、稻田比賣ノ命、八柱ノ御子ノ神を配祀する。式外社であるけれども、二十二社の中の一社である。創祀は貞觀十八年播磨國廣峯より奉遷したものであつて、元慶年間神殿を建て、祀つた。歴代の御崇敬深く、天慶二年幣帛及び神寶神馬を奉り、天祿元年、初めて御

靈會を行ひ、天延三年、臨時祭を執行した。延久四年、後三條天皇が初めて行幸あり、爾來稻荷神社と並んで行幸、御幸等實に數十回に及んだ。當社はもと祇園威神院と稱したが、明治初年現社號に改め、大正四年官幣中社から大社に昇格した。社殿中、本殿は所謂祇園造で、樓門、末社蛭子社、殿及び石鳥居と共に今特別保護建造物の指定を受けてゐる。社寶の神寶中、木造狛犬(傳雲慶作)一對、紙本着色祇園社繪圖(隆丹筆紙背に天德三年辛未十二月云々とあり)一幅、紙本墨書祇園社務家日記(附紙本墨書社家修記録一冊)七冊また國寶に指定されてゐる。攝社に疫神社、惡王子社(以上境内)冠者殿社(境外)あり、末社に大神宮社、大國主社、稻荷神社、十社、蛭子社、美御前社、日吉社、八幡社、嚴島社、竈神社、風神社、天神社、水神社、太田社、大年社(以上境内)太神宮社、稻荷社(以上境外)あり、祭祀は例祭(六月十五日)の外祇園會、白求祭等最も名高い。

### 日枝神社

東京府武藏國東京市麹町區永田町二丁目鎮座、祭神は大山咋ノ神で、相殿に國常立ノ神、足仲彦ノ尊、伊邪那美ノ神を祭り、山王權現と稱した。その創始は文明十三年(一説に文明十年)上杉定政の臣太田道灌が武藏國川越星野山なる山王權現を江戸城内に移して鎮守としたのに起る。徳川家康が入城の後、本社を以つて産土神と定め、これを紅葉山に移したが、後一般の參拜に便する

ため更に城西半藏門外に奉遷した。今の元山王の地である。明曆三年社殿が炎上したので赤坂溜池の地に移した。現社殿が是である。當社は徳川氏の産土神で、江戸諸社の首班に列し、寛永年中神領六百石を寄せ奉り、將軍宣下及び男子出生の時は社參を行ひ、太刀、神馬を献する例であつた。又例年正月十五日、六月十五日には必ず奉幣せしめたるが如き、その崇敬他社に異なるものがあつた。明治元年帝都を東京に奠め給ふや、勅祭社に準じ、神祇官直支配となつた。次いで五年官幣中社に列し、大正四年天皇即位の禮を挙げ給ふに當り、官幣大社に昇格した。所藏の太刀九口は徳川氏社參の時奉獻したものである。今國寶に指定されてゐる。當社の祭典は山王祭と稱し、もと根津、神田兩社と共に江戸の三大祭と稱せられ、神輿通御の際には左右の小路に柵を結び、士庶の往來を止め且樓上から拜觀するを得ず、市中は山車及び種々の作物を出して頗る壯觀を極めたものである。

### 十六日

### 河村瑞軒歿す

(元禄十三年) 河村瑞軒は名を七元禄十二年九月六日の説あり 兵衛又は十右衛門といひ、後髪を剃つて瑞軒と改め、その後又髪を蓄へて兵太夫といつた。瑞軒は若い頃は車力などして非常に貧しい暮をしてゐたが、ある時大いに志を立て、京都に行つて一旗擧げよ

うと思ひ家財道具を賣拂つて路用の金を作り、東海道五十三次を上つて小田原の宿までやつて来た。この時泊つた宿の主人に諭されて再び江戸に歸つて来たが、品川の驛まで来た時彼は呆然として品川の海を眺めてゐた。この時丁度江戸は盃蘭盆の翌日であつたので海上には夥しい瓜や茄子が流れてゐた。瑞軒はこれを拾つて鹽漬にして賣つたところが意外の好評を博して先づ相當の利益を見ることが出来た。その後幕府の下役人と知つてその人の配下の日儲頭となつたが、人を働かせることが上手な瑞軒は大に信用を博して次第に認められるやうになり、府下に家を建て、又妙な商賣を始めた。先づ浮浪人を驅り集めて来て古草鞋や古草履の捨ててあるのを拾つて來させてこれを左官に賣つて又相當の産をなすことが出来た。その頃江戸に大火があつたが、この時も機を見るに敏な瑞軒は直ちに木曾に走つて材木を買占め、いよいよ以つて巨利を博した。このやうに瑞軒の奇智は到る處に發揮され、遂には數萬金を得て江戸の分限者と謳はれたが元禄十三年六月十六日八十三歳で歿した。瑞軒は地理に明かな人であつて殊に運輸、航海、治水の術に長じてゐた。大阪安治川を改修し、その時の土砂を以つて堤を築いたが、その頃の人は瑞軒山といつて彼の名を讃へたものである。又淀川、長柄、中津の諸川を改修して永く氾濫の憂ひを除き、又その頃奥州との航海は約一ヶ月を費したのに、瑞軒の力によ



つて沈没の憂ひなくしかも僅かに三ヶ月で江戸に到着するこ  
とが出来たやうになつたといふことである。

近藤守重歿す (文政十二年 皇紀二四八九年)

近藤重藏は徳川幕府の臣で、明和八年

江戸に生れた。幼名を岡次郎、通稱を重藏といひ、正齋又は昇天真人と號した。寛政七年に長崎奉行となり、十年蝦夷の地に露人が來寇するや守重は中川勘定奉行の支配に屬して擇捉島に渡り、露人が建てた標柱を撤去してわが國領土の標柱を建てた。守重はこれから心を邊境防備のことに傾けて邊要分界圖を作つたり、又松前を幕府の手に收めて奉行を置いたりしたけれども、文化四年幕府から譴責を蒙つて小普請組に移された。その後書物奉行に任ぜらるゝや楓山文庫中の書物悉くを讀んでしまつた。文政三年執政沼津侯と文庫改築の事に關して意見が合はず、大阪弓矢奉行に移された。この頃から漸く心に不平を懷くやうになり、粗暴の行ひが目立つやうになつた。文政六年再び小普請組となるや邸を府下澁谷に建て、邸内に富士山などを築いて豪華な生活をしてゐたが、この頃家臣の富藏といふものと隣家の農夫と喧嘩し、富藏は怒つて農夫父子を殺したので幕府に於てはその罪を糺し、富藏を八丈島に流し、守重は邸を沒收されて分部左京亮光寧に預けられることゝなつた。時に九年十月のことであつた。ところが左京亮は守重の學才を惜んで、幕府の許を受けた上自

分の采地大溝に連れ歸つて子弟に學問を授けさせたり又藩政を改革させたりなどしてゐたが十二年六月十六日、年五十歳で歿した。墓は今近江國高島郡大溝町瑞雲院にある。萬延元年その罪が赦さるゝや、藩の人が相談して墓標を陶込西善寺に建て、その跡を弔つた。  
守重は當時著名な文人であつて、自家にも數千卷の書物を蓄へ、常に林述齋、市河寬齋、龜田鵬齋、太田南畝等の當時江戸で有名な文人と交りがあつたが、その著書にも、金銀圖録、右文故事、外藩通書外數十種がある。

十七日

神宮月次祭奉幣

神宮月次祭は未だその起源は分らないが、明でないが、畏くも天皇ちきりの聖旨によつて國家民人の上を守護し給ふ神祇に報賽する儀として往古以來神嘗祭と共に三節祭とせられ、最も重んじられて來た大祭である。上古の御代に諸國から奉獻する調物の荷前を以て月毎にお祭が奉仕されたが恐らくは之を以て月次祭の起源とするのではなからうかといはれてゐる。中世になつて益々盛んであつたが應仁の亂以後勅使の参向が中絶してゐたが、明治五年六月に御再興になつて今日に及んでゐる。昔は大御手代にます齋王(只今では齋主宮殿下)が前月の晦日に御禊の儀をなし給うてその月の十七日に内宮のお祭

がお済みになるまで實に二十段に及ぶ御神事が續いたものである。勿論今日でも此の古義に則つて嚴かに奉仕されるのである。神宮月次祭は神嘗祭と並んで國民的祭日として守りた

臺灣始政記念日

明治二十八年六月十七日は臺灣總督府に於て始めて始政式を擧げてより爾來この日を臺灣始政記念日として臺灣神社に於て祭典を行ひ臺灣總督官邸に於て夜會を催すを例とするやうになつた。

版籍奉還の建議許さる

(明治二年 皇紀二五二九年) 新の大業

成るや、同二年正月薩、長、土、肥その他の諸藩は先を争つて版籍奉還を建議した。朝廷に於かせられては種々御協議の上同年六月十七日詔を下して諸藩の版籍奉還を許し給うた。ここに於て先づ天神地祇に告祭し給うて職を置き、前田慶寧、島津忠義以下二百六十餘藩の藩主を以つて悉く知藩事に任じ同時に藩制を改革して府縣の例に倣はしめ、藩の歳入を現在石高の九分の一を以つて知藩事の家祿と定め、餘の悉くは朝廷に收め奉ることゝなつた。

こゝに於て鎌倉幕府創業七百年以來の封建制度は全く改り維新の大業は名實共に成就することゝなつたのである。

嚴島神社

廣島縣安藝國佐伯郡嚴島町鎮座、市杵島姫ノ命、田心姫ノ命、湍津姫ノ命を祀り、天照大神、國常立ノ命、素戔鳴ノ命を配祀する。延喜式内の明神大命で、又本國の一ノ宮である、創建は推古天皇の御宇にあり、宗像ノ神を遷祀せるものであるといふ。この社が初めて史上に現れたのは弘仁二年七月伊都伎島ノ神を名神に列ね四時幣帛に預らしめられた時であるといふ。次いで貞觀元年正五位下より從四位下に陞せ、九年從四位下を加へ天慶三年正四位下を授け奉つた。中世に至つて平氏の本社に對する崇敬の異常だつたことは史上に顯著なところである。清盛が安藝國を去つた後も尙ほ平清盛、平頼盛等が又安藝守として來任し、相次いで崇敬したので一族皆本社に歸敬し、或は法華經、阿彌陀經等を手寫して奉納し、一門公卿の崇信比類なきに至つた。從つて當時京洛名門の士でこの社に詣でるもの漸く多く、承安四年には後白河法皇及び皇后建春門院の御幸あり、治承二年には中宮建禮門院徳子(清盛の女)御懐胎の祈に奉幣せしめ給ひ、清盛はその皇子を産み奉らんことを祈つて日毎に嚴島に詣でたところ、神驗頻りに著るゝを以て社内の内侍巫女をして事ある毎に必ずこれを祈らしめたといふことが平家物語や源平盛衰記に見えてゐる。この後治承四年には高倉上皇は前後兩度の御幸あり、貞應年中火災に罹り、安貞元年平經隆が造宮のことを掌り、嘉禎元年で竣工した。そ



の後文永七年社壇又悉く焼失したが直ちに造宮せられ、毫も舊觀を損ずることがなかつた。弘治元年毛利元就が陶晴賢と戦ふや宮殿既に炎上しようとしたところを吉川元春の力によつて炎上を免れたが、元就深く恐懼して神前を清めんがために同二年廻廊の板を修理し、永祿年中毛利氏又宮殿を改造し、元龜三年に至つて竣工し嚴重な遷宮式を行つた。明治十三年には明治天皇の臨幸を仰ぎ、近くは二十七八年戦役、三十二年の北清事變の際の如き、その地が海陸の要衝に當つてゐるため参拜する者逐次増加し、殊に明治三十七八年戦役に際しては開戦以來参拜者の數無慮數十萬に及んだといふ。本社はその位置嚴島の北面にあり、御笠濱を右に、西ノ松原を左にして西北に面して海中に造り出されてゐる。壯麗な社殿の一隅を連結するため百八間の廻廊を以つてし、先端の廊嘴(火燒前)は展びて江灣の間に及び、正面の海中遙かに大鳥居を望んでゐる。その狀は恰も蜃氣樓の波に漂ふ如く所謂江山樓閣相映するの美觀は、實に日本三景の一として今や遠くその名が海外にも喧傳せらるゝに至つた。明治四十四年國幣中社より進んで官幣中社に列し、攝社に客神社以下六社、末社に門客神社以下五社ある。本社々殿中特別保護建造物に指定せられたものを挙げれば次の如くである。

(建造物)本殿、幣殿、拜殿、左右樂房、廻廊、朝座屋、能舞臺、階珥、能樂屋、平舞臺、高舞臺、左右内侍橋、物

水橋、長橋、反橋、大鳥居、攝社客神社本殿、同幣殿、同拜殿、同祓殿、大國神社本殿、天神社本殿、末社門客神社左殿、同右殿、塔婆、末社荒胡子神社本殿、豊國神社本殿、多寶塔、

所藏の、寶物弓箭、甲冑、刀槍、書畫、金玉、佛像、經卷、樂器、額面類は寶庫寶物館又額殿等に充滿してゐるがその内國寶に指定せられたものを挙げると次の如くである。(國寶)平家納經及願文(平清盛等三十二人筆、長寛二年九月奉納)彩色繪扇、舞樂面、釋迦及諸尊佛像、狛犬、飾馬、平家納經葛卷繪櫃(慶長七年福島正則造進)佛具(傳空海將來)雲龍葛極様平家納經、梅唐草繪文台觀箱(傳大内義隆奉納)法華經入蓮花時繪經、平家納經(平清盛、同願盛筆)小櫻緘甲冑、紺緘甲冑、紺革緘甲冑、藍草肩赤緘甲冑、短刀、飾太刀、太刀、脇指、腰刀、扇、松喰鶴繪小唐櫃、彩色樂器、七絃琴、調度類、扁額、御利物帖等。特殊神事中最も盛なるものを管絃祭といふ。その他年越祭、延年祭、御衣御裁祭、同御成式、同獻上式、鳥廻祭等がある。

十八日

尼將軍北條政子

(嘉祿元年皇紀一八八五年)

尼將軍北條政子は北條時政の長女

で源頼朝の室である。早く母に別れ繼母の手に養はれたが非常に美人の譽れ高い人であつた。永曆年中頼朝は平治の亂のとはしりを受けて伊豆國に流されたが、この時頼朝は伊東祐親の女と通じあはや祐親から殺されようとしたので時政の許に走つた。頼朝が政子と知つたのはこの時である。政子はこの時二十一歳であつた。ところが父の時政は京都勤番として上洛してゐたので政子が頼朝と通じてゐることなどは知らなから、その頃伊豆の目代をしてゐた平兼隆に政子を與へることを約束してしまつた。しかし時政は日頃から頼朝が非凡な男なので政子と通じてゐることを知つても知らぬ風を装つて一旦政子を兼隆の許に嫁がせたが、政子は間もなく頼朝の下に逃げ歸つて来て姿を匿してしまつた。父の時政はこの時にも亦何事も知らぬ風を装つてゐた。その後頼朝が兵を起すや政子は伊豆の湯走山(伊豆山)に匿れてゐたが、頼朝は鎌倉に居を構へると共に政子を迎へ入れて妻としたが間もなく頼家と二女を生んだ。政子は非常に嫉妬心の深い女で、頼朝もこれには常に手古摺つてゐたが、群臣も亦大いに惱まされてゐたやうである。

頼朝が薨すると共に頼家が立つて將軍職を嗣ぎ、政子は髪を剃つて尼となつたが、この頼家が荒淫の人で事毎に香ばしくない行が多かつたので政子は常にこれを戒しめてゐた。しかし頼家の品行は益々荒み、遂に一種の痴呆症の如くなつて

しまつたので、政子は時政と相談して頼家は薨じたと偽奏し奉つて實朝を將軍となし、關東地頭及び總守護職をその子一幡に、關西地頭を實朝としたので一幡の外祖北企能員はその分割を怨んで頼家と圖つて實朝を殺さうとしたので時政は政子と圖つて能員と一幡を殺し、頼家を伊豆國修善寺に幽閉してしまつた。建保六年政子は熊野に詣で京都に至り、從三位に叙せられ、次いで從二位に叙せられた。この時後鳥羽上皇に於かせられては政子に調を賜らうとしたが政子はこれを拒み奉つた。間もなく實朝が頼家の子公曉に弑せらるゝや、頼朝の姪阿野時元が駿河國に兵を擧げたが、政子は義時をしてこれを討しめ、更に朝廷に奏上して冷泉宮又は六條宮を奉じて將軍となさんことを請うたが許されなかつたので左大臣藤原道家の子頼經を迎へて將軍に立てた。この時頼經僅かに二歳であつた。この頃政子は既に尼將軍となり、菅原爲長に命じて貞觀政要を譯さしめて幕府の法則となさしめたりしたが嘉祿元年年六十九歳で遂に歿した。(七月十一日とも云ふ)

政子は一而非難もある人だが、一而又男勝りの女丈夫で、建曆、承久の間にあつてよく軍務を統べ内治を圖つた功も亦少くない。後年北條氏に名を成さしめる基礎を作つた人はこの人であるといつてもよい。

十九日



藤原道長右大臣となる

(長徳元年 皇) 世に藤原道長程

位人臣の榮を極めた人は少いであらう。世に法成寺入道前關白太政大臣といはれる人はこの人である。又その呼び名にもこの他にいろ／＼あつて法成寺關白、法成寺攝政、御堂關白など、呼ばれるのは皆この人のことである。

道長は兼家の五番目の子で、天元三年には早くも從五位下に叙し、逐年累進して永延元年には從三位に陞り、左京大夫を兼ね、翌二年には中納言となり、正曆中納言に轉じ、從二位に叙せられ、左近衛大將を兼ね、更に一條天皇の御母東三條院は道長の姉に在したので、この御縁を以つて天皇に迫り奉つて遂に右大臣を拜した。時に長徳元年六月十九日のことであつた。次いで長徳二年四月には豫ねて事を構へてゐた兄關白道隆の子伊周及びその弟隆家が事に座して配流され、その餘黨悉く追はれるや天下の權は全く道長の手の中に歸し、この年七月遂に左大臣となり、正二位となつた。長保二年道長の女の女御彰子が中宮に立つた。上東門院が即ちこの方である。彰子が後一條、後朱雀の兩帝を生み奉るや道長の權勢頗る榮え、漸く專横の行ひが繁くなつたので天皇にはこれを厭ひ給ひ、偶々中王院の兎裘賦の後に暗に道長を諷する語を書き給うたので道長は大いに怒つてこれを破り奉つた。次いで三條天皇即位しますや、道長の體態漸く盛となり、遂に天

皇擁立の大事にまで容喙し奉るに至つた。即ち長和五年には折から御眼を患はせ給へる三條天皇を廢し奉つて自分の女の彰子の生み奉る孰成親王を立て、後一條天皇となし奉つた。この時道長自ら攝政となり、三宮に准じて年官年爵を賜ひ、明年攝政をその子の頼通に譲り、從一位に叙した。三條上皇崩御しますや道長は皇太子を廢し奉つて女の彰子が生み奉つた敦良親王を皇太子となし、次いで自らは太政大臣となつた。寛仁二年には輦車に駕して宮中に入ること許されたが間もなく太政大臣を辭した。この年十月女の威子が中宮となつた。例の「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることのなしと思へば」といふ歌を詠んだのは、この時の喜ばしさを抑へかねて思はず詠んだ歌である。この時道長は位人臣の榮を極めたのみならず、實にその女は三人まで皇后の位に陞り、四女の嫡子は孰良親王の妃、五女御連殿は廢太子小一條院の妃となり、しかも小一條院に對しては叔父の地位にあり、又後一條天皇及び太子敦良親王には祖父に當るのであつたから道長の聲望が一世を傾け盡したことも想像に難からぬところである。

萬壽四年十一月病篤しと聞くや車駕親臨して親しく慰め給うたが十二月年六十二歳を以つて遂に薨じた。長元元年には國幣大社の例に倣つて荷前及び例幣をその墓に上らしめることとなつた。これより先長徳年中大邸宅の工事を京都大東門

に起し、次いで淨妙寺を木幡に起し、別當、所司を置いて盛大なる佛事を營ました。晩年には更に京極に法成寺を營み、結構の莊麗なること南都の東大寺と其の覇を競はしめ、ために朝廷の公事さへ怠り勝ちであつたが、病革るに及んで法成寺に移り遂にこゝで薨じたのである。

二十日

徳川吉宗薨す

(寶暦元年 皇) 徳川吉宗は幕府第

紀伊光貞の子で、貞享元年十月和歌山城に生れ、寶永六年四月將軍家繼が薨するや五月將軍職を襲いで二の丸に入り、享和元年八月征夷大將軍に任じ、正三位權大納言となり、右大將を兼ね又内大臣となつた。

吉宗將軍となるや、先づ前代よりの奢侈を改めんとし、自ら儉素を以つて身を持ち、又風紀を革新し文武を獎勵する等鏡意幕制の刷新を圖つた。六年八月初めて評定所の前に目安箱を置いて廣く人民の訴へを聞き、時の山田奉行であつた大岡忠相の材を認めてこれを拔擢して江戸町奉行とし、又小石川に養生所を設けて饑寒孤獨貧民に藥を施し、八年には足高の制を設けて人材登用の道を開き、十一年には小金原に一大狩獵を催し、十三年四月には日光社參の盛典を擧げ、十四年二月には弓場始の式を再興し、又屢々隅田川に於て歩卒の游

泳術を聞して騎泳の術を振興し、十五年には府内の消防を四十七組として防火に努める等その治蹟には多々見るべきものがあつた。世に稱してこれを享保治といふ。

吉宗は又常に學術に意を注ぎ、諸家の記録を集めて廢絶した武家の故實舊儀を再興し、享保六年には木下寅亮、室西清等四人を召して論語を講せしめ、或は林信篤父子をして昌平費に廣く學を講せしめ、古書を漁つて舊記を求め、その他天文曆數産業のことに對しても深く意を注ぎ、殊に早く蘭學の尊ぶべきことを知つて宗教書の他洋書の輸入を許し、蘭學物興の機運を作つた。延享四年職を家重に讓つて西の丸に隱居してゐたが寶暦元年六月二十日六十九歳を以つて遂に薨じた。この時朝廷に於かせられては特に生前の功を思召され、正一位太政大臣を御追賜あらせられた。

初めて地方長

官會議を開く

(明治八年 皇) 地方長官會議の詔勅が下つたのは明治八年六月二十日のことであつた。當時天下は征韓問題で國論沸騰し

西郷隆盛はその議が容れられず遂に郷里鹿兒島に走り、又一方には政府の處置は失當なりといふ非難の聲が響々として起るに至つた。こゝに於て板垣退助等は直ちに民選議院を開設すべしと主張し、これに對して木戸孝充等は時期尙早を主張して兩々相下らず、爲に天下は兩論に分れていついかなる不